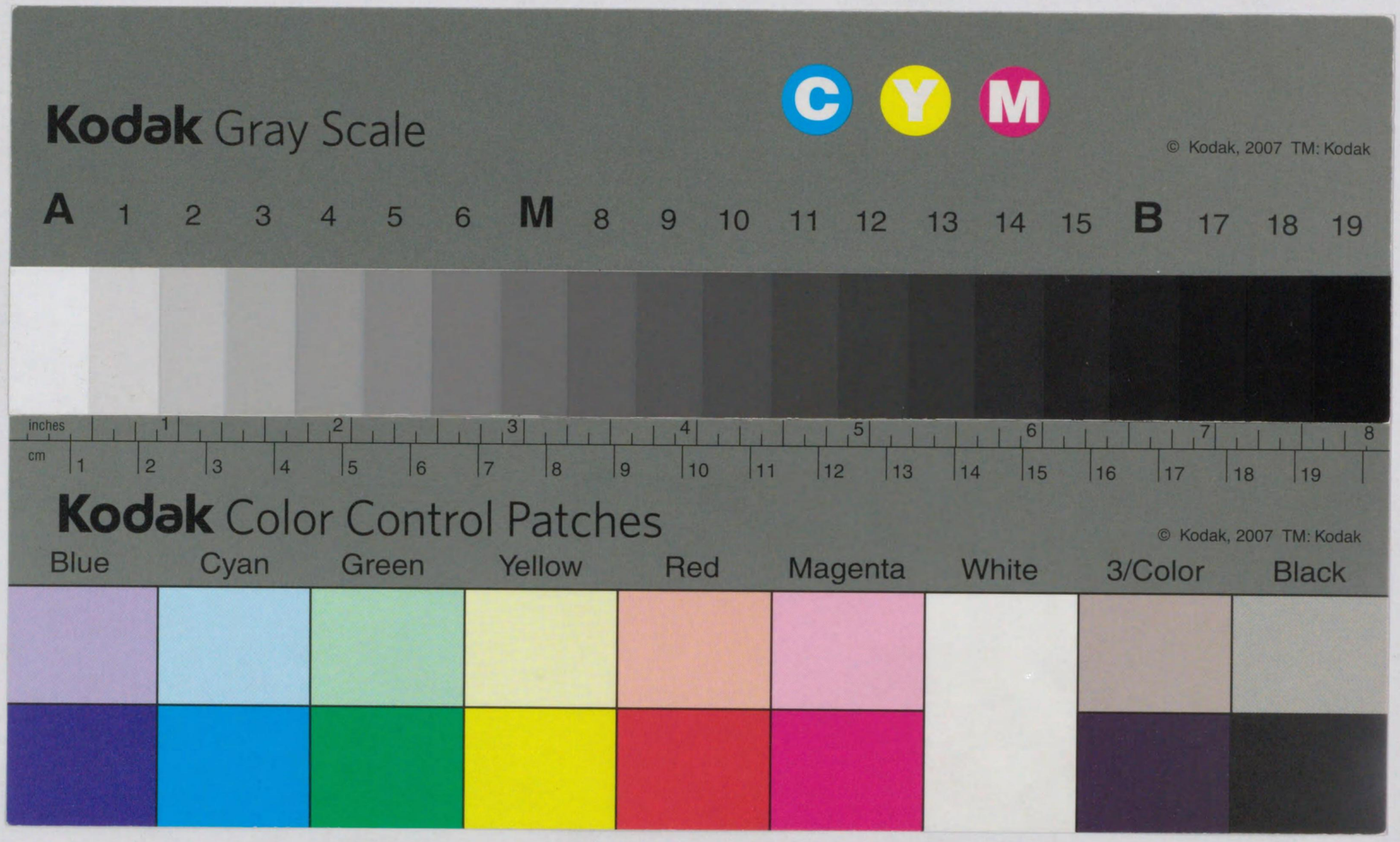


593
8
593-8
12005015267 19

36. 5. 16

224

雄山閣編輯局編

大日本地誌大系

新編相模國風土記稿四

雄山閣版

593-8

大日本地誌大系

新編相模國風土記稿第四册例言

一　本卷には、新編相模國風土記稿全百二十五卷之中、卷之第六十九より卷之第九十二までの二十四卷を收載せり。

一　本卷は印刷の便宜上、明治十一年印行の活字本を底本とし明らかに誤字脱落と認めしものゝ外濫に之を改めず、可及的に原書の風貌を存せん事に努めたり。

一　本卷の印刷に關しては、總て前卷に同じ。

一　本卷の刊行に當りては、堀田璋左右先生より種々有益なる御援助を賜はれり、玆に謹んで謝意を表す。

昭和八年五月二十日

編者識

大日本地誌大系

新編相模國風土記稿第四册略目次

例言

卷之六十九　鎌倉郡卷之一圖說……一

卷之七十　鎌倉郡卷之二山之內庄……一六

卷之七十一　鎌倉郡卷之三山之內庄……三一

卷之七十二　鎌倉郡卷之四山之內庄……四七

卷之七十三　鎌倉郡卷之五山之內庄……五六

卷之七十四　鎌倉郡卷之六山之內庄……七五

卷之七十五　鎌倉郡卷之七山之內庄……九四

卷之七十六　鎌倉郡卷之八山之內庄……一一四

卷之七十七　鎌倉郡卷之九山之內庄……一二九

卷之七十八　鎌倉郡卷之十山之內庄……一四一

卷之七十九　鎌倉郡卷之十一山之內庄……一五八

卷之八十　鎌倉郡卷之十二山之內庄……一七九

卷之八十一　鎌倉郡卷之十三山之內庄……一〇一
卷之八十二　鎌倉郡卷之十四山之內庄……一二一
卷之八十三　鎌倉郡卷之十五山之內庄……一三一
卷之八十四　鎌倉郡卷之十六山之內庄……一四三
卷之八十五　鎌倉郡卷之十七山之內庄……一五三
卷之八十六　鎌倉郡卷之十八山之內庄……一六三
卷之八十七　鎌倉郡卷之十九山之內庄……一七九
卷之八十八　鎌倉郡卷之二十山之內庄……二〇四
卷之八十九　鎌倉郡卷之二十一山之內庄……二二七
卷之九十　鎌倉郡卷之二十二山之內庄……二四四
卷之九十一　鎌倉郡卷之二十三山之內庄……二五五
卷之九十二　鎌倉郡卷之二十四山之內庄……二七三

要目……二八七

大日本地誌大系　新編相模國風土記稿第四册略目次終

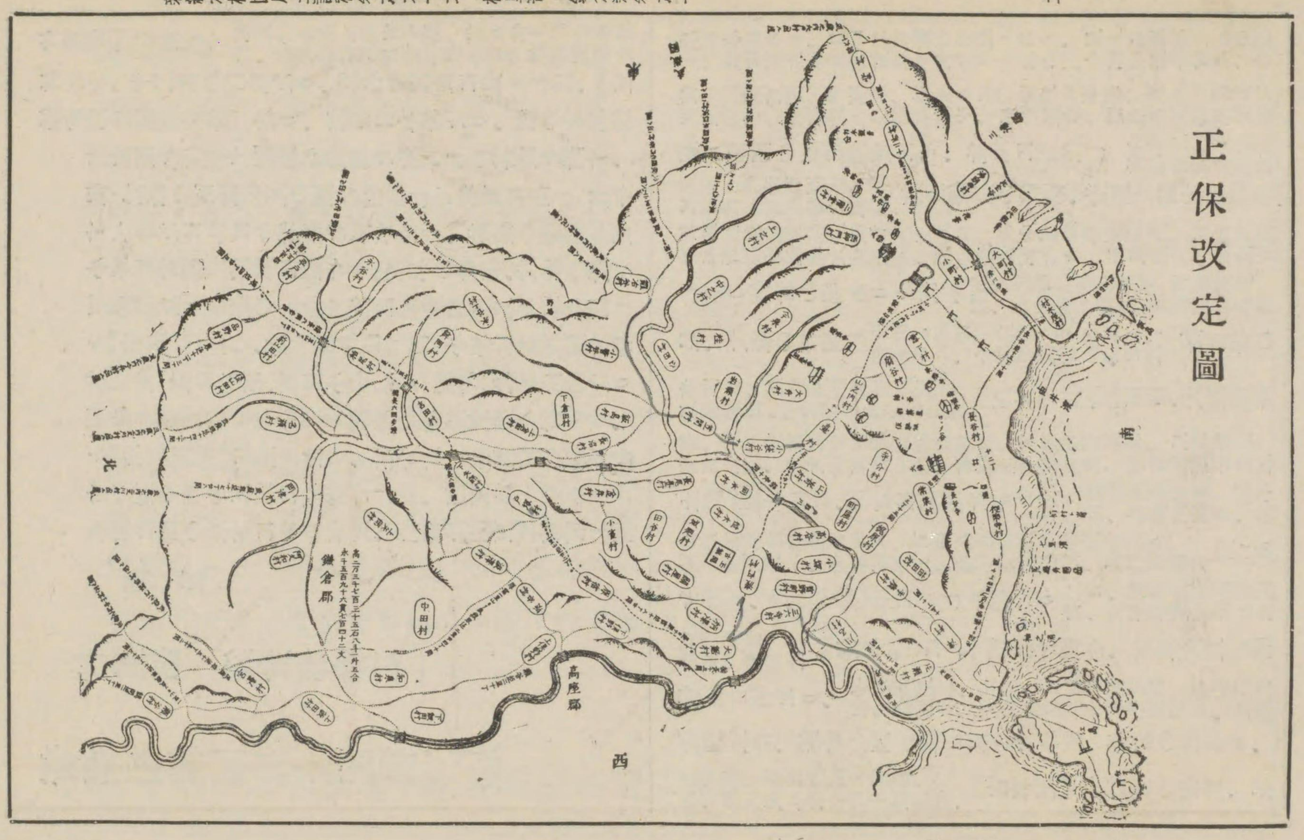
新編相模國風土記稿　卷之六十九

村里部　鎌倉郡卷之一

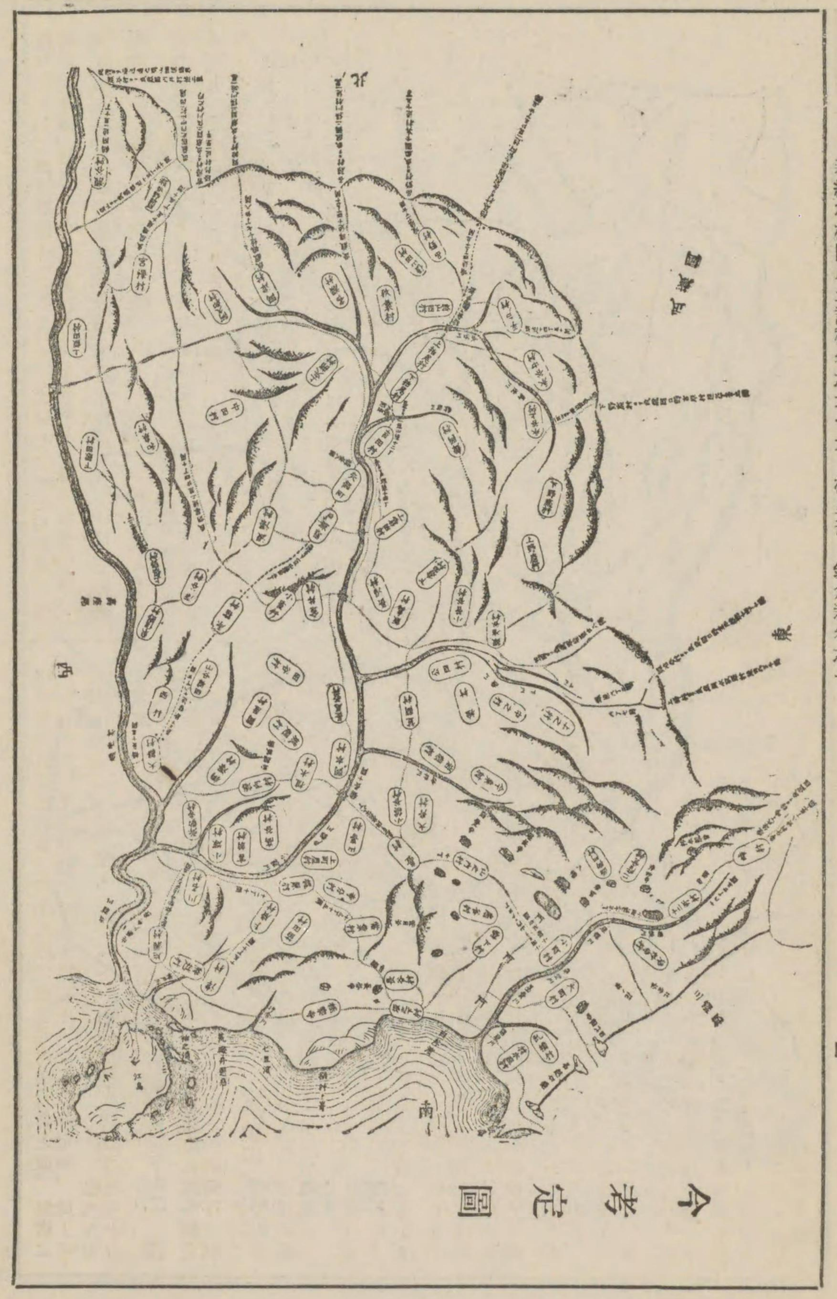
圖說

本郡は國の東方にあるが故、北條氏關東に跨有し國中を東中西の三郡に分稱せし時、卽東郡と唱へしこと【北條役帳】に見えたり、往昔右大將賴朝の鎌府を開きし後元仁元年十二月鎌府四境鬼氣祭を行はる、其四境、東は六浦、南は小壺、西は稻村、北は山內なりと【東鑑】に見ゆ、是に據れば六浦・小坪は當時鎌倉府下の地なりと覺ゆ、今六浦は武藏國久良岐郡に屬し小坪は當國三浦郡に隷せり、郡界の改革、文獻の徵とすべきなければ今考據を得がたし、其後の變遷は正保・元祿の兩度改正の圖を縮寫して卷首に出し、且今考定圖を作りて闔郡の沿革を知らしめ其說を附す、

鎌倉郡は國の東邊に在り、江戸日本橋より、郡の東堺峠村まで、十二里の行程なり、郡名の國史に見えしは、【三代實錄】を始とす（曰、貞觀七年三月廿一日壬寅、相模國鎌倉郡人、太皇太后宮少屬、從八位上村主眞野武、散位從八位上村主秋貞等、改本居、貫河內國大縣郡、）【古事記】景行帝の條に、足鏡別王は、鎌倉の別か祖と見えたれば、鎌倉の地名も、最舊き唱なり、（曰、倭建命、娶山代之玖々麻毛理比賣、生御子足鏡別王、分注して曰鎌倉之別、小津石代之別、漁田之別が祖也、）【倭名鈔】にも、郡名を載せ、加末久良と唱を附す、【萬葉集】中にもしか記せり（曰、天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌其一、鎌倉郡上丁、丸子連多麻呂、又曰可麻久良能美奈能瀨河云々、可麻久良乃美胡之能佐吉云々、）【古風土記】殘本には、鎌倉は屍藏なりと見え（曰、凡號相模者、神倭磐余彥天皇、欲平東夷之時、當大山而有一國、其國之夷背天皇、而有欲放矢之志勢、旣天皇祭之而塗毒箭而自御射、東夷當箭死者、以萬數之、其屍爲山、今之鎌倉山是也、鎌倉者訛也、以爲屍藏而號屍藏也、）【詞林采葉抄】には、大織冠鎌足、大藏の松岡に（按ずるに、今鶴岡後背の山を大藏山と云は、此故なりと云ふ、）鎌を埋めしより鎌倉の唱ありと云ふ（曰、昔大織冠鎌足、有宿願而參詣鹿島之時、宿由井里、夜感靈夢、年來所持之鎌埋大藏松岡、因云鎌倉郡云々、玆以勘大織冠之古埋鎌於此處而後、天智天王八年、改中臣始賜藤原姓、任內大臣以降代々爲皇帝之執柄、至于末代治萬國也、）其後鎌足の後裔、染屋太郎太夫時忠東八箇國の總追捕使にて、此地に居住し（彼孫染屋太郎太夫時忠、自文武天皇御宇、至聖武天皇神龜年中、居住鎌倉、爲東八箇國總追捕使、而鎭東夷、守國家、按ずるに、時忠の事蹟、正史に所見なし、或は東大寺良辨僧正の父なりと云ふ、今郡中長谷村に、時忠が亭蹟あり、且時忠叛逆の寺院もあり、思ふに此地土着の豪


正保改定圖
南
北
西
鎌倉郡

元祿改定圖



族ならんか、總追捕使となると云ふ、又疑なきにしも非ず、今時忠が事蹟、各村土人の口碑に殘るを採錄して後の考據に備ふ、

其後平將軍貞盛の孫上總介直方此に居住し、伊豫守頼義相模守に任じて下向せし時、直方が壻となり、義家を設け鎌倉を讓りしより源家相傳の地たり其後平將軍貞盛孫、上總介直方、以鎌倉爲屋敷、受鎮守府將軍兼伊豫守源頼義、任相模守、下向之時、爲直方之聟、而生八幡太郎義家、讓鎌倉以來、爲源家相傳之地、去治承五年、右幕下奉崇八幡宮於鶴岡也、然鎌倉之將、扶都鄙之政、專武勇以可奉守護帝都也、故天子稟天命、以正王制、將軍承王命、以守將道、然而此代々皆以鎌倉爲基、斯て治承四年、頼朝兵を起すに當り、安達藤九郎盛長、頼朝に申して居を此地に移さん事を述ぶ【東鑑】曰、治承四年九月七日、盛長自千葉歸參申云、當時御居所非指要害地、又非御曩跡、速可令出相模國鎌倉給、常胤相率門客等、爲御迎可參向之由申也、是年十月六日頼朝遂に鎌倉に遷る十月六日、著御于相模國、畠山次郎重忠爲先陣、千葉介常胤候御後、凡扈從軍士不知幾千萬、楚忽之間、未及營作沙汰、以民屋被定御宿、遂に平家を亡し、覇府を開きしより繁榮の地となり文治三年三月筑後權守俊兼を奉行として、鎌倉中の道路を作る文治三年三月十日、梶原平三景時、依讒訴之科、可作鎌倉中道路云々、俊兼奉行之、八月放生會の事により海濱河溝等、主計允行政、筑後權守俊兼、巡視の事を承る八月一日、自今至來十五日、可專放生會の旨、兼日被觸仰、關東庄園等之族、鎌倉中并、近々海濱河溝事、重被廻雜色等、行政俊兼奉行之、四年五月八田右衛門尉知家が家士、懈緩の罪科により知家に課せて、道路を修せしむ日、四年五月廿日、八田右衛門尉知家郎從、庄司太郎、被遣大内夜行番之處、懈緩之由依令風聞、早可召進其身於使廳之趣、今日被仰定綱、此上可造鎌倉中道路之旨、被仰知家云々、建久五年四月、復道路を修造す建久五年四月十日、梶原景時奉行之、建保三年七月結城七郎朝光に命して、鎌倉中諸商賈の戸籍を定む建保三年七月十九日、町人以下鎌倉中諸商人、可定員數之由被仰下、朝光奉行之、承久二年七月晦日風雨尤甚し、人屋顚倒す承久二年七月晦日、自去夜半、雨降、辰剋風雨尤甚、鎌倉中人家、或爲風顚倒、或依水流失、河溝邊卜居之輩、多死亡、近來無比類云々、貞應二年光行が紀行に、其頃の風景繁華を記す、古昔を想像するに足る【海道記】曰、此所の景趣は海あり、山あり、水木たより有、廣きにもあらず、狹にもあらず、街衢のちまたは方々に通ぜり、實に此聚をなし、邨をなす郷里都を論じて望まつめつらしく豪を擇賢を撰ぶ、門榔しきみを並べて地又賑り、おろおろ將軍の貴居を垣間見れば、花堂高く押開て翠簾の色喜氣を含、朱欄妙に構へて、玉砌の礎光を磨く、春に逢る鶯の聲は好客堂上の花に嘲けり、あしたを送る龍蹄は參會門前の市に嘶ゆ、論ぜず本より春日山より出たれば、貴光高く照て萬人皆瞻仰、士風塵を拂ふ、威驗遠く誠て四方悉聞に怖る、何ぞ況や舊水源澄まさりて、清流彌遣跡を潤し、新花榮鮮に發けて、紫藤遙に萬歳を契る、凡座制を帷帳の中に廻て懲肅郡國の間に約めたり、しかのみならず家室は局を忘て夜の戸を推開き、人倫は心を調て誇るとも誇らず、愚政の至り治りて見ゆ、夜の戸ものどけき宿に開くかな、曇らぬ月のさすに任せて、此緣邊に就て、おろおろ歴覽すれば、東南の角一道は舟檝の津、商賣の商人百族賑はひ、東西北の三方は高卑の山、

風の如くに立廻り、嘉禎元年七月水溢の災あり【東鑑】曰、嘉禎元年七月十日、て、所を飭れり、入夜雷鳴甚雨、鎌倉中洪水、人屋之流失、山岡之類毀、不可勝計、仁治元年十一月、鎌倉中警固として籌を燒べき由、令せらる仁治元年十一月廿一日、今日爲鎌倉中警固、辻々可燒籌之由被定、省充保内庄家等、定結番可勤仕之旨、被觸仰保々奉行人等、此頃親行が記せし【東關紀行】に、此地の事を記せり曰、抑鎌倉の初を申せば、故右大將家と聞え給ふ、水の尾の御門の、九の世のはつえを、たけき人にうけたり、去にし治承の末に當りて、義兵を擧て、朝敵を靡すより、恩賞頻に瀧山の跡を繼て、將軍のめしを得たり、營館を此所にしめ、佛神を此砌に崇奉るよりこのかた、今繁昌の地となれり云々、しかのみならず、代々の將軍以下造り副られた寛元三年四月五箇條の禁令を出さる【東鑑】曰、寛元三年四月廿二日、鎌倉中保々奉行人等、令存知可致沙汰條々、今日被定、佐渡前司基綱爲奉行、保司奉行人可存知條々、一不作道事、一差出宅檐於路事、一作町屋漸々狹路事、一造懸小家於溝上事、一不夜行事、右以前五箇條、仰保々奉行、可被禁制也、且相觸之後、七日於立之者、相具保奉行人使者、可被破却之狀、依仰執達如件、寛元三年四月廿二日、佐渡前司殿、武藏守、又曰、廿七日、基綱寫去廿七日御教書、今日相觸保奉行人云々、六月鎌倉中民居、松明を用意し、不虞に備ふべき由觸らる六月七日、鎌倉中民居、每人用意置續松若夜討殺害人等、出來之時者、就聲面々取松明、可奔出之由、被觸仰于保々、清左衛門尉、萬年九郎兵衛尉、等奉行之、寶治元年八月、鎌倉中浪人を退放すべき由沙汰あり寶治元年八月廿日、仰鎌倉中保々注浪人、可退放之由、有其沙汰、二年四月鎌倉中商人の式數を定めらる二年四月廿九日、鎌倉中商人、可定其式數之由、有其沙汰、外記大夫倫長、奉行之、建長二年三月無益の遊民を田舍に追遣り、農業に服せしむ建長二年三月十六日、仰鎌倉中保々奉行人等、注無益輩等之交名、追遣田舍、宜隨農作勤之由云々、四年二月鞍置馬・飛脚等の事により殊に其沙汰を經らる四年二月十日、鎌倉中狹小路之事、無承之旨、鞍置馬常後立之事、飛脚不日出來之時、於田舍立之事、此條々殊誡及御沙汰、保々奉行人等被仰付處也、九月沽酒の禁制を出す九月廿日、鎌倉中所々可禁制沽酒之由、仰保々奉行人等、仍於鎌倉中所々民家、所註之酒壺、三萬七千二百七十四口云々、十月、沽酒禁制殊に其沙汰を經らる十月十六日、沽酒禁制、殊有其沙汰、悉以被破却壺、而一屋一壺被宥之、但可用他事、不可有造酒之儀、若有違犯之輩者、被處非科之由、被定下之、弘長元年二月、家屋の營作出仕の行粧等、其餘九箇條の禁令を示す弘長元年二月廿九日、關東祇候諸人、家屋之營作、出仕之行粧以下事、可令停止過差之由、被定之云々、此外嚴制數箇條也、後藤壹岐前司基政、小野澤左近太夫入道光蓮等、爲奉行、放生會棧敷、可用儉約事、可停止博奕事、鎌倉中橋修理、並在家前々可掃治事、可禁制、棄病者孤子死屍於道路事、念佛者招寄女人以下事、僧徒裹頭横行鎌倉中事、鷹狩神社供祭外、可令停止事、早馬事有變念々時爲聞達也、而近代雖非大事、以早速爲其詮、頗爲人馬之煩、然者自今以後、非殊重事之外、可止急速儀之由、可被仰六波羅矣、長者事、百姓等有其煩、一向被止之處、鎌倉祇候之御家人等、還自今以後、充給日食、可召仕之矣、是當時鎌又可有其愁、倉、車馬の地たりし事識るべきなり、賴朝より相承て三世、威令四方に行はれしかども、老臣北條時政執權の職に任せしより他に與奪せず、子孫其職を襲ぎしかば遂に廢立の事を恣にして、威權おのづから其一門に歸し、九世高時に至り奢侈殊に甚しく、元弘三年五月新田義貞が爲に敗亡に及びけり、斯て足利尊氏再幕府を開き、左兵衛督基氏を關東の管領として鎌倉に置かる、夫より左馬頭氏滿・左兵衛佐滿兼・左兵衛督持氏相繼て管領たり、其頃應安三年九月二十日、大風にて人畜驚散し、壓死の者ありし事【日工集】に見へたり曰、應安三年九月二十日、大風俄作、人畜驚散、相陽城中鎌倉諸谷、無一不破壞摧折者、土人壓死者往々有焉、永德二年五月圓覺寺黃梅院華嚴塔、造畢の事により此地に課役を充らる圓覺寺塔頭、黃梅院文書に據る、彼院の條に引用せり、應永二十一年五月酒壺の別錢、圓覺寺造營の料に附せられし事、又同寺所藏文書に所見あり圓覺寺條に引用せり、其後左馬頭成氏關東の主となるに至り、執事上杉右京亮憲忠と、矛楯に及びしかば寶德四年六月、京都より討手として今川上總介範忠下向あり、成氏是が爲に沒落し、遂に武藏國菖蒲に遁れ、又下總國古河に移る事は淨妙寺村、公方第蹟の條に載す、是よりして扇谷の上杉定政、山內の上杉顯定と數年戰爭の地となれり、文龜の頃宗祇此地に經歷して、其形狀を見聞しこと【終焉記】に記せり曰、鎌倉を一見せし右大將家のその

かみ、又九代の榮も、只目の前のこゝちして、鶴岡の渚の松、雪下の甍は、げに石淸水にも、たち勝るらんとぞ覺へ侍る、山々のたゝずまひ、谷々、島々、いはゞ筆の海も底見へつらん、爰に八九年がこのかた、山ノ內扇ノ谷、鉾楯の事出來て、凡八箇國二方に別れて、道行人もたやすからずとは聞えし云々、斯て後星霜を經て、荒凉たる村落とはなりにけり、天文年間宗牧が紀行に、感慨の詠吟あり【東國紀行】曰、愛阿彌鎌倉より迎ひに來れり、鄕導して昔の跡など問ひ聞く程、暮方に成て着たり云々、幻菴より多田など案內者とて加へられたれば、何方もおぼつかなからず、舊跡の旅寢其感あり云々、蔭山藤太郎來たりて、一座の望の由、內儀申したり、殊に一向若年の執心も、さり難きことにて例の發句、こと問は花や白雲代々の春、三代將軍九代の春も花はかくこそは、圓覺寺の木末、されど鶴岡八幡宮、江島辨盛に見えたる會席なればなり、天社等の靈場、且山川の勝地たれば都下の士庶、時となく群參せり、今東は朝比奈の切通に界し山路を踰れば、武州久良岐郡、六浦に至る、南は由比の海濱、材木座村に限り此村、三浦郡小坪村に隣す、西は極樂寺切通【東鑑】に載する四境の內、西稻村と云へるは、大佛切通長谷村界にあり、を界とし、北は山ノ內村に至れり、其域內、雪下村、谷合四箇村淨妙寺・二階堂・十二所・西御門四村を闔稱してかく唱ふ、小町村・大町村・亂橋・材木座村・長谷村・坂之下村・極樂寺村・扇谷村・山之內村を概して、土俗之を鎌村の十村と云へり、【東鑑】元仁元年の條、載する處の四境と、粗かなへり、さては

此域内、昔時鎌倉府下の地にして、【倭名鈔】國郡部に鎌倉郡中鎌倉郷と載するは蓋此地なるべし、鶴岡の地は所屬の村なく、今因て別に總說を附す、江島辨天社も亦同じ、其後闔郡小田原北條氏足柄下郡、小田原城の條に詳なり、割據の頃は、郡中の地を割て、諸士に附與せし事【小田原役帳】に見え、天正十八年關東御分國の後は御料となり、慶長四年七月彦坂小刑部元正、郡中に證狀を出して仕置を示す鶴岡社人大久保氏藏文書曰、鎌倉中仕置事、至田畑屋鋪等迄、寺社領方田地之儀者、地頭のまゝたるべき事、其年分より田畑之所々之儀者、作人致相談、定之上、年貢難澁により、無沙汰之人者、可爲曲事事、地頭百姓方共、遲々申定相違に而、書付差上候に付而者、折合穿鑿致、急度可申付事、若其上百姓難澁に而、年貢致無沙汰候者、以來爲仕置候間、一類はた物に上げ可申事、彼田畑納所相定之儀者、遲々約束證文可爲次第、附無手形事者、何事もさばきの上云申間鋪、一文一合之儀成共、請取を取可申事、右之條々相定候上者、相違有間鋪者也、仍如件、亥七月廿三日、鎌倉中、彦小刑元正華押、年歴を推考するに、慶長四年なるべし、是より或は麾下の士にも裂賜ひ、其後尙沿革ありて、今は御料、及び松平大和守矩典、大久保佐渡守忠保が封邑麾下の士の采地等なり、地形其四至、東は三浦郡及び武藏國久良岐郡に隣り、南は海に邊し、西は總て高座郡に堺ひ、北は武藏國都筑郡及び橘樹郡にも少しく接せり、東西へ長く大抵四里半許に至り、南北は廣き處に至て、凡三里餘に及び、狹き所にては三十町に足ざる處あり、陸田多く水田少し、用水には專、戸部川の水を引沃ぎ、鶴川・砂押川・境川等の諸流をも灌漑す、されど三分の二は山間の涌泉を引き、溜井を構へ、天水を仰て耕植せり故に旱損の患多し、土性は砂礫錯れる地多く、眞土是に次ぐ、野土糯米土は少し、農間の餘資、海邊の村々は專漁釣をなして江戸に運送し、鶴岡江島等の道側に、連居せる家は參詣の遊客に酒食及び諸物を鬻ぎ、東海道係る處は往來の旅客を休泊し、其他は採薪等を業とす、富饒の戸口は稀なり、村數正保の改に八十一、元祿に至り八村を增加す秋葉村・西村・山谷新田・腰越村・坂之下村・亂橋村を增し、野場を二村に分ち、柏尾村も上下とせり、今又二を增し瀨谷野新田・江島獵師町、九十一村に及べり、高正保の改に、二萬三千七百三十五石八斗一升五合、永千五百九十六貫七百四十二文、元祿に至り、高二萬七千六百四十五石一斗四升五合六抄となる、前に增加すること、三千九百九石三斗三升六夕、永を減ずること二百四拾七貫九百四十一文なり、今又增加して總高凡二萬七千九百八十三石六斗九升餘に及び、永は減じて、凡千三百十三貫四百文餘となれり、此餘寺社除地の分は省けり、海道一條、東海道の大路にて、艮方武州橘樹郡保土ヶ谷宿より、當國本郡平戸・品野二村の境に入り數村平戸・品野・前山田・上柏尾・下柏尾・吉田町・矢部町・戸塚宿・汲澤・深谷・原宿・東俣野・山谷新田・西村、を經て、坤方高座郡藤澤宿に達す、道程三里五町許郡内を通ずる道程なり、以下皆是に倣ふ、幅三間より五間に及ぶ、小往還七條あり、五は鎌倉道と唱へ鶴岡八幡宮へ詣ずる巡路を云へり、其一は東海道藤澤大鋸町より東へ分れ、柄澤村に達し、夫より渡内等の村々を經て山之内村に至る、道程一里半餘幅五尺より二間に及ぶ、是を藤澤宿邊よりの鎌倉道と云ふ、其一は江ノ島道と唱へ、是も大鋸町より東へ折れ、彌勒寺村に達し、川名・片瀨二村を過ぎ江ノ島に至る道程一里半許幅凡三間其一は武州久良岐郡別所村より、當國本郡永谷上村に入り、飯島・笠間・小袋谷三村を經て臺村に至り、前の鎌倉道に合す、道程二里餘幅二間許其一は東海道戸塚宿より東へ分れ、上倉田村より下倉田・長沼・飯島三村を過ぎ笠間村に至り、前路に合す此道筋、笠間村より分れ、巽方公田村に達し、鍛冶谷村、上之村等にて岐路となり、末は武州久良岐郡日野・峯・氷取澤・鎌利屋四村に達す る小徑あり、其一は武州久良岐郡大戸村より、當郡峠村に入り、朝比奈切通より、鎌倉に達す、道程二十町許、幅六尺許、武州金澤より鎌倉への道なり、故に金澤道と稱す、大山道一條、東海道下柏尾村より南折し、上矢部等の村々を經て、上飯田村より高座郡千束村に達す幅二間、是を柏尾通り、大山道と稱す、柏尾村より大山まで、道程七里と云ふ、中原道一條、武州都筑郡川井村より當國に入り、本郡の北隅を斜通し、高座郡上和田村に達す、道程二十八町許幅凡三間許、

○【倭名鈔】所載合郷七　○沼濱　唱を註せず、【東鑑】建仁二年二月の條に故左馬頭義朝が沼濱の舊宅を壞て、今の壽福寺に寄附せし事見ゆ、按ずるに、今郡中其遺名なし、三浦郡沼間村は本郡に接邇し、殊に海邊を距ること遠からず、蓋奴末波麻の唱、いつしか中略して奴末麻と呼しより後世沼間の文字に改書せしものか、郡界も變遷せしなるべし、○鎌倉　加萬久良と註す、今郷名を失すれど、鶴岡を始として其四方近隣十四村の地を概して鎌倉と呼べり、蓋此地なるべし、○埼立　唱を註せず下是に同じ、今郡中に其遺名とおぼしき所だになし、○荏草　草を加也と註せり、されば江加也と唱へしならん、二階堂村荏柄江加良天神は、蓋江加也の轉訛にして其所在の地名を、稱せしならん、○梶原　今梶原村あり、○尺度　是は佐加土と唱へしなるべし、さては本郡の接地、高座郡藤澤宿の坂戸町は正しく其遺名にして後世彼郡中に分隷せしならん、○大島　今郡中に斥すべき地なし、但し是は郷名を云ふにあらず、今の江島を斥せるにて其舊名ならんか、

○今所唱合郷十一　○小坂遠佐可　管する村二十八雪下・西御門・二

階堂・淨妙寺・十二所・大町・小町・亂橋・材木座・長谷・坂之下・極樂寺・扇谷・山之内・峠・大船・臺・山崎・小袋谷・岩瀨・笠間・長沼・上倉田・下倉田・戸塚、是鎌倉七郷の一なり　按ずるに、谷宿・矢部町・常葉・片瀨、七郷の稱は、【鎌倉大草紙】享德四年、上杉長尾亂の條に、鎌倉へ亂入、谷七郷の神社佛閣を追捕して、悉燒拂と見え、【鶴岡社務職次第】に、小坂郷・小林郷・葉山郷・津村郷・村岡郷・長尾郷・矢部郷と列書す、其うち葉山郷は、今三浦郡にあり、郡界變遷して彼郡に隷せし　【保曆間記】に、小坂郡とのせ、永正六年の文書圓覺寺龍隱菴藏、にも小坂郡長尾郷と見ゆれど、こは全く當時の偶記にて、郡名に唱へし證とは云ひ難し、○小林巨波也志　鎌倉七郷の一【鶴岡社務職次第】、小林郷の下に下若宮邊、佐介等と註記せり、にして、鶴岡及び梶原村此郷に屬す【東鑑】治承四年十月の條にこの郷名見えたり、○津村都卒良　管する村五津村・腰越・笛田・手廣・川名【東鑑】建仁二年二月の條に、積良と記せるも此地なり、是も鎌倉七郷の一なり、○村岡卒良遠可　管する村十六原宿・深谷・汲澤・高谷・小塚・宮前・彌勒寺・東俣野・上俣野・柄澤・城廻・關谷・植木・岡本・渡内・山谷新田、其内玉繩領と唱ふるもの六村上の城廻已下六村なりあり、古くは建久二年の文書鶴岡香象院藏に此郷名見えたり、鎌倉七郷の一なり

○長尾奈賀乎　五村を管す長尾臺・飯島・金井・小雀・田谷、鎌倉七郷の一にして正元元年鶴岡八幡宮藏の文書に、長尾郷と載せ、其餘往往所見あり、○矢部也倍　管する村四上矢部・宮澤・中田・和泉、鶴岡八幡宮藏、寶治元年の文書に、谷部郷とあるも當郷を云へるなり、谷部に作るは偶記の訛なるべし、是も鎌倉七郷の一なり、○洲崎寸佐幾　管する村二寺分・町谷、上【太平記】【日工集】等に此郷名見えたり、永祿・天正の際の寺分村條に詳載す併せ見るべし、今は舊に復物には多く須崎に作れり せり、○本郷保武加宇　管する村六上之村・中之村・鍛冶ケ谷・小菅ケ谷・桂・公田、文保元年建武二年等の文書上之村證菩提寺藏　二、山内庄本郷と記す、さては此六村をもて、山内庄の原村と云ふべきなれど、今現に山内村あれば其然否知べからず、○舞岡麻比遠加　舞岡村一村、此郷名を唱ふ、古は前岡と記す、大永七年・天文十八年等の文書松岡東慶寺藏に見ゆ、○野庭能婆　下野庭一村、此郷名を唱ふ按ずるに、今上野庭村、永谷郷を唱ふるは、誤なるべし、天文十八年の文書松岡東慶寺藏に野場と記し、【北條役帳】に野葉に作る、皆當時の偶記なり、○永谷也奈賀　管する村十二永谷上・永谷下・上柏尾・下柏尾・平戸・品濃・前山田・後山田・秋葉・名瀨・阿久和・上野庭、【北條役帳】に、永谷の名初て見ゆ、郷名に唱へしは、古き事にはあらず、

○今所唱合庄三　○山之内也末能宇知　山之内村以下、七十一村是に屬す、【東鑑】治承四年十月の條に、瀧口三郎經俊、山内庄を召放さるとある、是庄名の物に見えたる始なり、○西見爾之美　上俣野村以下九村是に屬す、○深澤不加佐波　上町谷村以下十村是に屬す、深澤の唱は古くよりあり事は津村に詳載す又中古は、南北に分ち唱へし事あり鶴岡社人金子氏藏、建長七年七月の文書に、南深澤之内云々、鶴岡相承院藏、嘉曆三年八月の文書に、北深澤郷内云々と見ゆ、庄名の物に見えたるは、【日工集】貞治元年三月の條に相州北深澤庄云々とあるを、始とや云はん、

○鎌倉山加加滿久良也末　【鎌倉志】には大臣山を云ふと載せたり大臣は山鶴岡廟後の山是なり、按ずるに、當郡の形狀群峰周匝して各秀を競ひたれば鎌倉山と云ふは、たゞ郡中の山嶽を斥て廣く云へるなりけり【名所方角抄】にも全く惣名を云へるならんを、わきて星月夜極樂寺村の屬の向ひなる圓き山を鎌倉山なりと云へるはいかゞなる由記したれば、蚤く此頃も慥なる說はなかりしなり、ともかくも一所を斥る名目にはあらざるなり、されば古人の詠歌に見えたるのみ、正しき記錄等には未所見に及ばず、今【萬葉集】以下の諸集に散見するもの、聊見るに隨て左に採錄す、

相模國歌

タギキコルカマクラヤマノコタルキナ
多伎木許流可麻久良夜麻能許太流木乎、麻都等奈我
イハ、コヒツ、ヤアラン
異波婆古非都追夜安良牟【萬葉集】

かき曇りなとか音せぬ霍公　○藤原實方

鎌倉山に道やまとへる【實方集】　○爲すけ

忘草刈つむはかり成にけり、跡も留めぬ鎌倉の山

【夫木集】　○公　任

われ獨鎌倉山を起ゆけは、星月夜こそうれしかりけれ、堀川百首】　○常　陸

なかめ行心の色そ深からん、鎌倉山の春の花その

【拾玉集】　○慈　鎭

○鎌倉里加末具良能佐登　是も【鎌倉志】に雪ノ下村の邊を云ふならんと、載たれど、さにはあらず、舊くは即鎌倉郷の事にして、治承已來は鎌倉府内の地を斥して云へるなり、是も古人の詠吟に入れり、

民も又にぎはひにけり秋の田を、刈ておさむる鎌倉の里【歌枕名寄】　○藤原實方

宮柱ふとしき立て萬代に、今そ榮えん鎌倉の里【續古今集】　○鎌倉右大臣

昔にもたちこそまされ民の戸の、煙にぎはふ鎌倉の里【夫木集】下同　○藤原基綱

十年あまり五年までも住馴て、なほわすられぬ鎌倉

の里　○宗尊親王

○切通四　極樂寺切通極樂寺村の屬　大佛切通長谷村の屬、朝比奈切通峠村の屬名越切通大町村の屬、　○坂四　假粧坂・龜ヶ谷坂扇ヶ谷村の屬巨福呂坂雪ノ下稻荷坂村の屬稻荷坂十二所村の屬此内稻荷坂を除き、上の切通を合せて、鎌倉七口と稱す、

○瀑布二　音無瀧極樂寺村の屬　不動瀧今泉村不動堂傍にて女男の二瀧あり　○井十六角ノ井或は矢ノ根井とも稱す、材木座村の屬、淨妙寺村にも、同名の井あり、棟立井二階堂村覺園寺境内、甕ノ井加女廼爲○山之内村明月院境内甘露井同村、淨智寺境内鐵ノ井久良加子乃井○雪之下村の屬、泉ノ井・扇ノ井・底脫ノ井以上扇谷村の屬、星月夜井坂之下村の屬大町村長勝寺境内石ノ井是を鎌倉の十井と呼びなせり、○名水五金龍水・不老水以上山之内村建長寺に在り錢洗水扇ヶ谷村の屬日蓮乞水大町村の屬梶原太刀洗水十二所村の屬以上を鎌倉五水と稱す、

○橋十　筋違橋雪ノ下村の屬、下同じ、琵琶橋・夷堂橋大町村の屬下同じ、逆川橋・裁許橋・勝ヶ橋扇ヶ谷村の屬十王堂橋山之内村の屬針磨橋極樂寺村の屬亂橋亂橋村の屬、歌ノ橋二階堂村の屬以上鎌倉の十橋と稱す、

○海　郡南總て海に瀕す、西方高座郡の界、片瀨村より東は、三浦郡界材木座村に至る、緣海の長二里餘に及ぶ、海岸總て荒磯にして船かゝり最あしゝ、海濱に屬する村々は漁業をなす、所獲の魚介多きが中にも、海蝦【本朝土産略記】曰、海蝦出于鎌倉鰹【徒然草】曰、鎌倉の海に、かつをと云ふ魚は、彼さかひに、左右なき物にて、此頃もてなすものなり、それも鎌倉の年寄の申侍しは、此魚おのれらが若かりし世までは、はかばかしき人の前へは、出ること侍らざりき、頭は下部もくはず、きりて捨侍りし物なりと申き、かやうの物も、世の末になれば、上さままでも、入たつかさに、こそ侍れ、等を殊に名産とせり、○由比濱或は由井に作る【東鑑】に、或は前濱とも記せり、坂之下村靈山崎より材木座村飯島に至る迄の海瀨を云ふ坂之下・長谷・材木座三村の地係れり、長凡十八町許、宗祇が【名所方角抄】に、鶴岡の磯邊十八町に大鳥居あり、由比濱と云ふは鳥居のある所なりと載す、往昔由比郷の屬たりしにより、此名あり、此郷名蚤く失せり按ずるに、由比郷のことは、古き唱にして【東鑑】治承四年十月の條に、伊豫守頼義有丹祈之旨、康平六年秋八月、潛勸請石清水、建瑞籬於當國由比郷と載たり、由比若宮の舊跡今大町村の屬、辻町にあり、又【詞林采葉抄】に大織冠鎌足、宿願ありて鹿島參詣の時、由比里に宿せる由記す、　治承四年八月、石橋山の役に源氏の軍既に敗北すと聞て、三浦の輩半途より馳歸る路次、平家の被官、畠山次郎重忠と此海邊に於て合戰せり【東鑑】曰、八月廿四日、三浦輩於由井濱、與畠山次郎重忠數剋挑戰、多々良三郎重春、並郎從石井五郎殞命、又重忠郎從、五十餘輩、梟首之間、重忠退去、【源平盛衰記】曰、畠山次郎は五百餘騎にて、由井濱稻瀨河の耳に陣を取て、赤旗天に耀けると云々、三月鶴岡社頭より此濱に至る迄、直道を造る【東鑑】に見ゆ、事は鶴岡條に載す、壽永元年六月頼朝此濱に出て、壯士等の弓馬を試み、始て牛追物あり【東鑑】曰、六月七日武衛令出由井浦給、壯士等、各施弓馬之藝、先有牛追物、下河邊庄司爲御合手、榛谷四郎・和田太郎・同次郎・三浦十郎・愛甲三郎、爲射手、文治二年閏二月、靜女が腹に出生ありし、義經の幼兒を此浦に棄らる文治二年閏二月廿九日、靜生男子、是豫州息男也、其子若爲女子者、早可給母、於爲男子、今雖在襁褓内、爭不悕畏將來哉、未熟之時斷命條、可宜之由治定、仍今日仰安達三郎、令棄由比浦、三年七月此邊に逍遙ありて小笠懸の儀あり三年七月廿三日、二品逍遙海濱給、於由比浦、小笠懸之後、入御岡崎四郎宅、　建久二年正月、伊豆箱根二所精進として濱邊に出て潮に浴す建久二年正月廿八日、幕下爲二所御精進、出御于由比浦、著水干駕龍毛馬給小早河次郎惟平持御劔、上總介義兼、江間四郎主、已下扈從及五十人、令浴潮給、被著御淨衣、此儀恒例となり、二所參詣の度々、世々の將軍、必爲に浴潮あり四年八月、此地に於て鶴岡放生會流鏑馬の射手を試らる四年八月九日、將軍家令出由井浦給、是所被召具放生會流鏑馬射手也、各被試其射藝、建保元年五月二日和田義盛亂の條に、曉更に及び、義盛兵疲れて爰に退き建保元年五月二日、臨曉更、義盛漸兵盡矢窮、策疲馬遁退于前濱邊、三日復合戰に及び義盛遂に敗亡す、晚に及て海汀に假屋を設け、首級實檢あり三日於由比浦并若宮大路、合戰移時、凶徒敗北之間、相州以行親忠家、被實檢死骸等、構假屋於由比浦汀、取奬義盛以下首、及昏黑之間、各取松明、貞應元年四月、死鴨浪に泛て此濱に寄る、怪異たるにより濱邊に於て、百怪祭を行はる、陰陽道奉仕す貞應元年四月廿六日、近日前濱腰越等浦々、死鴨寄來之間、依彼怪於前濱被行七座百怪祭、國道朝臣、知輔親職忠業、重宗、文元等、奉仕之、元仁元年五月、大魚多く死して波上に浮み、水濱に寄來るにより、人民群をなして是を買ひ、家毎に煎て油を製す、異香閭巷に滿り、人以旱魃の兆とす元仁元年五月十三日、近國浦々大魚、(其名不分明)多死浮波上、寄于三浦崎、六浦前濱之間、充滿鎌倉中、人擧買其、定家々煎之取彼油、異香滿閭巷、士女謂之旱魃之兆、無先規、非直也事、六月祈雨のため、靈所七瀨の祓を行る、當所其一なり、關東に於て此儀を行ふ事、是を始と云ふ六月六日、炎旱涉旬、仍今日爲祈雨被行靈所七瀨御祓、由比濱國道朝臣・金洗澤池知輔朝臣・固瀨河親職・六連忠業・柚河泰貞・杜戸有道・江島龍穴信賢、此御祓關東今度始也、安貞二年三月、賴經始て此濱に出らる、時に犬追物あり安貞二年三月九日、將軍家始有御濱出由井濱、供奉人路次儀、頗省略之、有犬追物、(卌疋)三浦駿河前司召具放生會流鏑馬射手也、各被試其射藝、仁治二年四月、大風により鶴岡大鳥居・内拜殿潮水に流沒し、著岸の船多く破損す仁治二年四月三日、南風、由比浦大鳥居内拜殿、被引潮流失、寶治元年三月、潮水赤色に變す寶治

元年三月十一日、由比濱潮變色、赤而如血、二年九月、黄蝶飛行の怪あり二年九月七日、黄蝶飛行、自由比浦、至于鶴岡宮寺、并右大將家法華堂群亘、建長四年正月、波濤紅色を帶ぶ建長四年正月廿七日未剋、海濱波濤色如紅、就中自由比浦、至和賀江島如此、弘長三年八月十四日、南風烈く樹を倒し、家屋舟船を損壞す、弘長三年八月十四日、自朝天陰雨降、雷鳴數聲、則南風裂雨脚彌甚、午剋大風拔樹、民居大略無全所、由比濱著岸船數十艘破損漂沒、廿七日、復暴風雨船を漂沒し、溺死人若干あり廿七日申剋以後、風雨、入夜大風、由比浦船舶沒、彼死人寄河、彼是不可勝計、元弘三年五月、新田義貞鎌倉攻の時、其弊に乘せんが爲、濱邊の在家に放火す、民屋多く燒亡せり【太平記】曰、さる程に濱面の在家幷稻瀨河の東西に、火を懸たれば折節濱風烈しく吹布て、車輪の如くなる炎、黑煙の中に飛散て、十町二十町が外に燃附事、同時に二十餘箇所なり、應永十七年、新田義宗の男、越後守貞方生虜せられ、此濱邊に於て害せらる【底倉記】曰、新田武藏守義宗の男、越後守貞方朝臣は、兎角して遁れ廻りて、御座しけるが應永十七年千葉介が爲に搜し出され、生捕にせられ、由比カ濱にて切れ玉ひにけり、鎌倉全盛の頃は、士民の居宅櫛比して頗繁榮なりしなり、卽大江景遠・岡崎義實・牧宗親・中澤成綱・飯富宗長・土屋義淸・和田常盛・境常秀・波多野經朝・牧小太郎・長江明義・松葉助宗・阿野四郎等の宅地、此濱邊にありし事、【東鑑】に見えたり、○七里濱之知利賀波末　極樂寺村稻村ヶ崎より、津村腰越村邊に至る瀨海を呼べり、是は其道程、關東道六町を一里とす、七里に及べりとぞ、故に此唱呼あり○袖ヶ浦曾泥賀宇良　極樂寺村稻村ヶ崎邊より、津村・腰越村邊までの海濱、袖の形に似たれば名とす、又足柄下郡小田原邊の海濱をも袖ヶ浦と唱ふ、【東國紀行】には、袖ヶ浦小田原の近邊に有となり、云々と載せたり、○境川佐可比可波○藤澤川・片瀨川附、　郡の西方高座郡界を流る、故に此名あり、北方武州多摩郡相原村より、當國高座郡下鶴間村と本郡瀨谷村との堺に入り、郡界を南流すること四里餘にして、末は片瀨村にて海に入る幅六七間に及ぶ、此水路彌勒寺村邊にては藤澤川と呼び、流末片瀨村に至りては片瀨川と稱す此川名古くより聞えて、【東鑑】にも見えたり、古事の如きは、片瀨村に詳載せり此水を以て、田間に沃ぐ村三瀨谷・上飯田・下飯田あり、○戸部川登邊可波○馬洗川・永谷川・赤關川・柏尾川・小館川附、　源、下野庭村より起り、永谷上村に至り、馬洗川と呼び、上柏尾・下柏尾・名瀨三村にては永谷川、或は赤關川とも稱す、吉田町以下九村矢部町・戸塚宿・上倉田・下倉田・長沼・金井・田谷・飯島・長尾臺、に至りては柏尾川と唱へ、岡本村にて始て此川名を得、流末十一村岡本・笠間・大船・小袋・臺・山崎・植木・高谷・上町屋・宮ノ前・小塚、戸部川と稱す、又小舘川と唱ふる村四ヶ梶原村にて、此川名起る、笛田・寺分・彌勒寺、あり、末は川名・彌勒寺二村の境にて境川に合す幅六尺より末は十間許に及ぶ、此水流を以て田間に沃ぎ、水田を耕植する村許多あり永谷上・永谷中・戸塚宿三ヶ町・長沼・上倉田・下倉田・上柏尾・下柏尾・關谷・岡本・植木・前山田十四村なり、水防堤を設くり高七尺より二丈、○鼬川伊太知可波○新橋川・本郷川附、川名、一に出立に作れるもあり、源、上ノ村上川の下流、隣村鍛冶谷村に至り、河內川と云ふ、又上ノ村下川の下流、公田村にて河內川と合し一流となり、公田・桂・小菅谷三村にて此川名を唱へ笠間・飯島の二村にては新橋川、或は本郷川と呼び、直に二村の堺にて柏尾川に合す幅四間、【兼好家集】に此川名を句の頭にすゑて、旅の心を詠ぜし歌あり曰、相模國いたち川といふ所にて、此所の名を句の頭にすゑ、旅の心を、いかにわかたちにし日よりちりのゐて、風たにねやをはらはさるらん上之村、及び笠間・小菅谷・飯島四村此水を引て田間の用水となす、水防堤あり高五尺六尺　○滑川奈女利加波○座禪川・夷堂川・閻魔川・墨賣川附、　源、峠村より出、十二所村に沃ぎ、淨妙寺・二階堂・西御門・雪ノ下四村に至りては座禪川と稱し、小町・大町の邊にては夷堂川、又は墨賣川と唱へ、亂橋・材木座村等にては閻魔川と云ふ、材木座村西方にて海に入幅三間より六間に至る往昔寄砥左衞門藤綱、此水底に少許の錢を散落せしを、許多の錢を費して取得し事、【太平記】に見えて古今の人美談とす、○阿久和川　源、阿久和村より出、故に此川名を得、岡津・名瀨の二村を流れ、上矢部村の南方にて、柏尾川に合す幅三間四間　岡津・上矢部の二村にては此水を用水とす、○柄澤川加良左波可波　源、原宿村より出、城廻・柄澤二村を流れ、大鋸町に至りて境川に合す幅二間　柄澤村にて用水とす、○砂押川須奈於志可波　源、今泉村不動瀧の下流岩瀨村に來り、此川名を得、大船村に沃ぎて戸部川に合す幅二間、今泉・岩瀨・大船三村此水を以て田間に沃ぐ、○出口川泥久知可波　源、渡內村溜池の餘水、字出口にて一流となり川名を得、彌勒寺村に沃ぎて戸部川に合す幅六尺、渡內村にて用水となす、○舞岡川末比乎加可波　源、舞岡村より流出し、下柏尾村より吉田町に至り、柏尾川に合す幅三間、○名瀨川奈世可波　源、名瀨村より出、上矢部村にて阿久和川に合す幅二間、○丑堰宇之世儀　岡本村東方にて、戸部川を堰入、岡本・植木・關谷三村の用水となし、田間に沃げり、是は寛永二乙丑年六月、始て設けし故、此名ありと云ふ、○渡津　片瀨川にあり、石上渡と稱す、河東片瀨村より河西高座郡鵠沼村に達す事は片瀨村に詳なり、

新編相模國風土記稿卷之六十九　之終

新編相模國風土記稿卷之七十

村里部　鎌倉郡卷之二

山之内庄　鶴岡都留賀遠可一

此地は郡の東にあり、小林郷に屬し【東鑑】治承四年十月十二日の條に、點小林郷之北山構宮廟とあり、又【社務職次第】に、谷都て八幡宮の境内七郷事、小林郷下若宮邊、佐介等と載す、西、御門村・雪下村・山之内村等に接す、故に爰に別にて、古より所屬の村なし載す、江戸より行程十三里、抑此地を鶴岡と唱ふる事は治承四年、源頼朝由比郷鶴岡に鎮座ありし、若宮鶴岡若宮と號す、を爰に移し、舊に依て鶴岡若宮と號す、又建久二年若宮の背後、松ヶ岡【詞林采葉集】曰、昔大織冠鎌足、いまだ鎌子と申せし頃、宿願の事に依、鹿島參詣の時、此由比里に宿し給ひける夜、靈夢を感じ、年來所持し給ひける鎌を今の大藏の松ヶ岡に埋給ひけるより、鎌倉郡と云、按ずるに、當所後背の山を、今も大臣山と稱するは此故なり、に稲荷松岡明神と號す、社ありしを、北方丸山に移し、其蹟に宮祠を建、八幡を勸請し、是をも鶴岡八幡宮と稱す、是より社地を都て鶴岡と唱へ、松ヶ岡の名は稱せざりしにや、【東鑑】等に所見なし、世下て永德應永の頃又松ヶ岡の名著見し松ヶ岡八幡宮別當職、補任の事あり、上宮條に詳載す、の永享年間の物にも見えたり、其後は堙滅して所見なし、此地は當國の名苑にして、【新拾遺集】左衞門督基氏、鶴岡木高き松を吹風の、雲井に響く【夫木集】平泰時、年經たる鶴ヵ岡邊の柳原、青みに萬代の聲けりな春のしるしに、按ずるに、此歌の初句を、年を經るとし、又三の句を、松の葉或、はさし柳とせし物あれど、今此地に柳原と云ふ小名ありて、則泰時が詠歌せし所といへば、【夫木集】を正しとすべし、爲實朝臣、鶴ヵ岡仰く翅のたすけにて、高きに移れ宿の鶯、參議爲相、山路より出てや來つる里近き、鶴ヵ岡邊に啼く郭公、及紀行【北國紀行】曰、鶴岡へまはりぬ、靈木長松つらなりて、森々たるに、玉を琢ける社頭のたゝずまひ、由比濱の華表、遙に霞わたりて誠に妙なり、吹のこす春の霞も沖津洲に、立るや鶴ヵ岡の松風、宗長【東路土產】霜雪を上毛が鶴ヵ岡の松、當社星霜の事なるべし、等に、倭歌・發句等あり、又古此地を雲井ヶ嶺とも唱へし由、【名所方角鈔】に見えたれど若宮八幡なり、曰、鶴岡世には雲井ヵ嶺といへり、社壇西向なり、其唱へを失ふ、

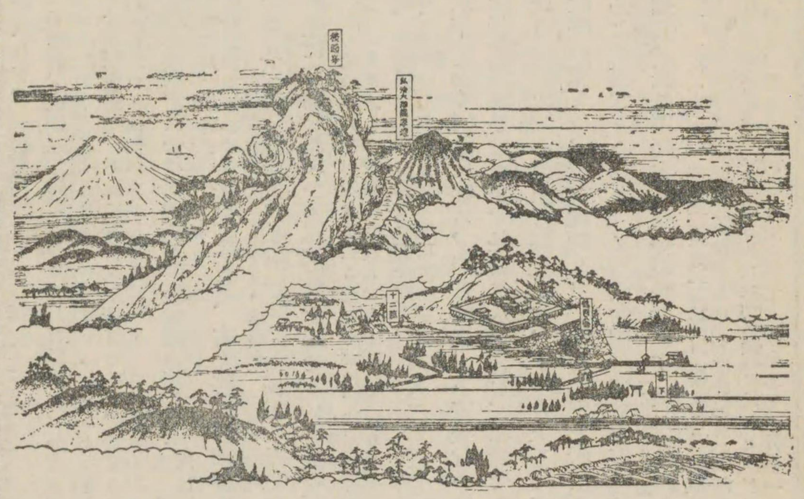
○小名　△柳原　舞殿の邊より藥師堂前までを云、泰時の歌に、鶴岡邊の柳原と見えしは此地なり、

○大臣山　北方にあり、○狻踞峯佐武古保宇　供僧莊嚴院の背後にあり、峯の形獅子に似たり故に名とす、頂上を升仙臺と云文殊を升仙如來と云、獅子の頂なれば名號とす、天明乙巳の建碑高野山鑁長の撰文にて、橘千蔭の書なり、あり、

○鶴岡八幡宮　康平六年八月、伊豫守源頼義、石清水

神を勸請して、瑞籬を當郡由比の郷に建【東鑑】治承四年十月十二日條曰、本社者、後冷泉院御宇、伊豫守源朝臣頼義、奉勅定征伐安倍貞任之時、有丹祈之旨、康平六年秋八月、潛勸請石清水建瑞籬於當國由比郷、原注に今號之下若宮とあり、按ずるに由比宮の舊地は、由比濱大鳥居の東にあり、今に小社を存し社外の末社に屬す永保元年二月、陸奥守源義家修理を加ふ前と同條曰、永保元年二月、陸奥守源朝臣義家、加修理、治承四年十月、右大將頼朝鎌倉に到り、由比の宮を遙拜し七日條曰、先奉遙拜鶴岡八幡宮給、同月、此地を點じて假に宮廟を構へ、由比の宮を遷せり十二日條今の下宮是なり　此後建久二年四月に至る迄の事跡は、皆下宮に係るを以て、彼條に記載し、上下兩社となりし後は其事歷、各關係する所に據て是を分載す、又兩社に通渉せし事實をば、爰に記せり、建久二年三月四日神殿以下、悉く回祿に罹る、四月頼朝、下宮後背の山上に、新に寶殿を營作す、是別に八幡宮を、勸請せしが爲なり【東鑑】廿六日條、今の上宮則是なり、十一月上下兩宮及末社等に至まで、造營成就して、遷宮の儀を行はる廿一日條是より兩宮となれり、又頼朝當國村岡郷富塚の地を寄進し、長日不斷本地供等の料所とす　事は座不冷壇所に詳なり、三年正月頼朝參詣す【東鑑】正月一日條曰、卯剋幕下御參詣鶴岡宮、按ずるに、此後頼朝を始、鎌倉代々將軍及其夫人等、屢參宮ありし事【東鑑】に見えたれど、今是を省き、其年月日のみを爰に註す、建久三年正月十一日世子萬壽、四年正月朔日、五年正月朔日、并に頼朝、七月八日、頼朝・夫人同參、閏八月十五日、頼朝、十一月十五日、頼朝・夫人同參、六年正月十三日、頼朝、十月廿六日、萬壽、十一月朔日、頼朝、正治二年二月廿六日、建仁二年正月九日、九月十八日、以上頼家、十一月廿一日、善哉、三年正月朔日、頼家、二日、一幡、二月四日、元久元年正月五日、二年二月十一日、十七日、以上實朝、十二月十八日、夫人、建永元年正月二日、實朝、二月八日、政子、三月四日、承元元年正月三日、并に實朝、九日、夫人、二年正月十一日、政子、三年正月九日、建暦元年二月廿二日、八月廿七日、二年正月十九日、建保元年正月朔日、二年正月三日、二月廿三日、三年正月朔日、七日、四月朔日、以上實朝、四年正月十三日、實朝・夫人同參、五年正月朔日、廿二日、六年正月十三日、六月廿七日、七月八日、承久元年正月廿七日、以上實朝、安貞二年二月三日、寛喜元年正月十五日、三年正月九日、貞永元年正月朔日、四月十一日、十二日、十四日、十五日、嘉禎元年正月十二日、八月十四日、三年正月十七日、暦仁元年十一月廿九日、延應元年正月十一日、仁治二年正月十四日、以上頼經、十七日、夫人、寛元元年正月十九日、頼經、二月廿三日、夫人、三年二月七日、頼經・頼嗣同參、三月十九日、頼經、四年正月二日、頼嗣、十九日、頼經、寶治二年正月廿日、建長二年正月十六日、三年正月十一日、以上頼嗣、四年四月十四日、十二月十七日、六年正月廿二日、康元元年正月十一日、十一月廿七日、弘長元年正月七日、以上宗尊親王、二月、十一日、正嘉元年二月二日、二年正月十日、文應元年正月十御息所、三年正月七日、文永二年正月七日、并に宗尊親王、三月七日より御息所七ヶ日參籠、三年正月三十日、宗尊親王、弘安四年三月八日、惟康親王等なり、五月、神馬奉納あり【東鑑】五月十二日條曰、幕下令奉神

狩　踞　峯　圖



馬二疋於鶴岡上下宮給、是紀藤太夫、所爲聞食及間、神威嚴重、今更依有御崇重如此、七月、頼朝征夷大將軍に任ぜらる、勅使中原景良・同康定等、其除書を持して當社の廟庭に着す、三浦介義澄をして是を請取らしむ七月廿五日、勅使廳官肥後介中原景良、同康定等參着、所持參征夷大將軍除書也、兩人各著衣冠任例列立于鶴岡廟庭、以使者可進除書之由申之、被遣三浦義澄、義澄相具比企右衛門尉能員、和田三郎宗實、并郎從十人、各著甲冑詣宮寺、請取彼狀則歸參、幕下御束帶豫出御西廊、義澄捧持除書膝行進之、八月夫人政子、平產の祈禱として、神馬を奉らる八月九日、御臺所御產氣、鶴岡、相模國神社佛寺、奉神馬被修誦經、先鶴岡、神馬二疋上下、千葉平次兵衛尉、三浦太郎等相具之、五年十二月、當社奉行の人數を增加す十二月二日、御願寺社、被定置奉行人訖、而今日重有其沙汰、被加人數、鶴岡八幡宮上下、大庭平太景能、藤九郎盛長、右京進季時、圖書允清定、六年八月、上下兩宮の常燈の油、調進の人數を加增し、改て結番を定む八月廿九日、鶴岡上下宮常燈油事、爲大名等役被結番、每月可進之由、日來被定仰之處、間有對桿之間、仍今日加增人數、結番每日也、是則就少爲懈緩也、其內上旬五箇日者、可爲御分、每日可令持參宮寺之由、被書下清常所進、行政奉行之、建仁元年正月奉幣の使を立、神馬を奉納す正月四日、江馬四郎主、爲左近吾御使、奉幣鶴岡宮給、三年正月頼家嫡子一幡、參宮の時託被奉神馬三疋、二日、將軍若君一幡君、御奉幣鶴岡宮、被奉神馬二疋被行御神樂之處、大菩薩託巫女給曰、今年中關東可有宣あり

事、若君不可繼家督、岸上樹其根已枯、人不知之、而特稍綠、十月、世上無爲の報賽として神馬を奉納す十月十四日、鶴岡、并二所以下、諸社被奉神馬、是世上無爲御報賽、十一月當社の奉行人を定む十一月十五日、鎌倉中、寺社奉行事、更被定之、仲業、清定爲執筆、記之、鶴岡八幡宮、江間四郎、和田左衛門尉、清圖書允、元久元年正月、實朝參詣、誦經等あり正月五日、將軍家、始御參鶴岡八幡宮、前後供奉人成墻、朝光持御劍、按ずるに、將軍家の原注に、去年十月廿四日、任右衛門佐と記す、「社務職次第」曰、正月五日、將軍家實朝、始御參宮之時、十萬卷壽命經、大般若經於上下宮御八講二ケ日、并八萬四千塔供二年二月、實朝羽林の拜賀參被行之、導師安樂坊重慶、二月十七日、將軍家、御參鶴岡八幡宮、是令用羽林拜賀あり、相州、駿河守以下、數輩供奉、安達右衛門尉景盛持給、御劍五月、諸士に課して、當社の舞衣を新調せしむ五月十八日、鶴岡宮舞裝束、已爲古物之間、依可被新調、承元三年正月、被充催諸御家人等、清定爲奉行書下之、奉幣あり正月九日、將軍家、於鶴岡八幡宮、有年首御奉幣、御使遠江守親廣、經供養之後、被引施物於供僧民部大夫行光、四年正月、奉幣の使を立、蓋頼朝の時、每年の佳例たりしが、後廢せしを今年再興ありしなり正月一日、相州、爲將軍家御使、令奉幣于鶴岡八幡宮給、右大將家御時、不及日次沙汰、大略以元日、有御奉幣、近年廢而無此儀、今年被興、建保元年五月、和田の亂に依て願書を奉らる五月三日、廣元爲御願書執筆、其奧以御自筆、被加二首歌、即以公氏彼御願書被奉於鶴岡、當此時大學助義清、自甘繩入龜谷、經窟堂前路、欲參旅御所之處、於若宮赤橋砌、流矢之所犯、義清亡命、件箭自北方飛來、是神鏑之由謳歌、六年六月、左大將の拜賀として參宮あり六月二十七日、將軍家任大將御之間、爲御拜賀、參鶴岡宮給、早旦爲行村之奉、觸申可有御拜賀之由、於下向雲客等、申斜有其儀、先出御南面、文章博士仲章朝臣、(東帶)上御簾陰陽少允親職、(東帶)參車寄間、候反閉、陰陽權助忠尙、(東帶)入廊根妻戶勤御秡、伊豫少將實雅寄御車、出御南門西行、行列居飼四人、(二行)御厩舍人四人、(二行)一員一行、府生狛盛光、殿上人、(二行)、御劍、笠持、(十六人)前駈、二行、御車、(檳榔車副二人、牛童一人、持榻)下臈隨身、雜色二十人、御笠雨皮張筵持、(各一人)隨兵、(二行)御調度懸、衛府、(二行)次到宮寺橋砌、稅御駕、仲章朝臣參進上御簾、頼茂朝臣獻御榻、一條少將能繼役御沓、伊豫少將實雅取御裾、大夫判官行村、(東帶)佐々木判官廣綱、(布衣冠)等、候于樓門東西脇、(相對坐床子)隨兵各十人、群居傍、禪定三品、并御臺所、立御車於橋西、令見物給、信濃守行光、右衛門大夫光員、安藝權頭範高、并衛府十人、(各布衣下括)候轅左右、此外御家人、警固宮中路次、右京兆室家以下女房等、構棧敷於馬場邊、凡見物之輩如堵、上下宮御奉幣如例、按ずるに、府生盛光の外二人、殿上人十人、前駈十七人、隨身五人、隨兵十人、調度懸一人、衛府十九人等の交名あり、今略す、七月、直衣始に依て參宮す七月八日、左大將家御直衣始也、仍御參鶴岡宮、午刻出御、前駈并隨兵以下、被用去月二十七日供奉人、但數輩歸洛、行列前駈、殿上人、御車、隨兵、按ずるに、前駈十一人、殿上人三人、隨兵八人の交名あり、今略す、九月、宿直の少輩、僧侶と鬪諍す九月十三日夜、鶴岡宮騷動、因茲關左衛門尉政綱、若狹兵衛尉忠季等、爲御使馳參宮寺、尋子細之處、宿直之輩候廻廊、而兒童若僧等、

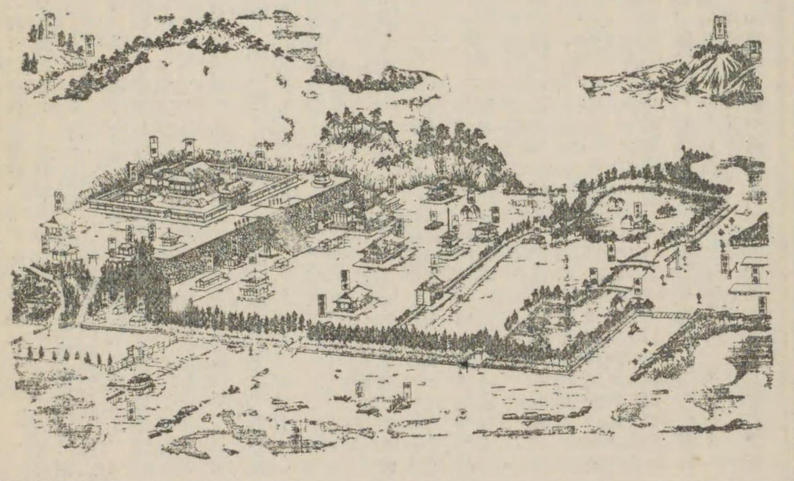
徘徊明月、彼宿直人見無禮之故、起鬪諍爲少生被打擲、金窪兵衛尉行親をして、紀明せしめ、其首たる駒若丸三浦義村の子の出仕を停止す、抑宿直人の事は賴朝の時より社頭の警衛として、近侍の少輩を撰び、夜毎に結番せしめられしが、此鬪諍により而來是を罷らる十四日、以金窪兵衛尉行親爲御使、被糺明其夜宮寺狼藉事、是三浦左衛門尉義村子息駒若丸、(光村是也)位張本云々、謂件宿直人者、右大將家御時敬神之餘、以格勤(號小侍)、等、結番之、毎夜所被警固宮中也、其儀于今不怠之所、逢耻辱之間、向後被停止此事之由被定下、於駒若丸者被止出仕、承久元年正月實朝右大臣拜賀の爲參宮あり、神拜畢て退去の時、石階の邊にて別當公曉の爲に害せらる正月二十七日、將軍家右大臣爲拜賀、御參鶴岡八幡宮、西廻御出、行列先居飼四人、次舍人四人、次一員、將曹菅野景盛、次殿上人、次前駈、笠持、次前駈、次官人、次御車、車副四人、牛童一人、次隨兵、各帯持一人、張弩持一人、傍頭所行、但糸威、今不令持張賛、次雜色二十人皆平禮、次檢非違使、東帯、平麈蒔太刀、舍人一人、火長二人、郎等四人、調度懸、小舍人童各一人、看督長二人、雜色六人、放免五人、次御調度懸、次下臈、御隨身、次公卿、次左衛門大夫光員、路次隨兵一千騎也、令入宮寺樓門御之時、右京兆俄有心神御違例事、讓御劔於仲章朝臣退出給、於神宮寺、御拜脫之後、令歸小野御亭給、及夜陰神拜事終、漸令退出給之處、當宮阿闍梨公曉、竄來于石階之際、取劔奉侵丞相、其後隨兵等、雖馳駕于宮中、無所覽讐敵、按ずるに、將曹菅野景盛の外二人、殿上人十人、前駈十九人、官人二人、隨兵十人、檢非違使調度懸各一人、御隨身六人、公卿五人、光員の外二十九人等の交名あり今略す、【增鏡】曰、古左衛門督の子にて、公曉といふ大とこあり、親の討れにしことを、いかでかやすき心あらん、いかならん時かとのみ思ひわたるに、この內大臣又右大臣にあがりて、大饗などめづらしく、あつまりてをこなふ、京より尊者をはじめ、かんたちめ、殿上人多くとぶらひましけり、さて鎌倉にうつしたてまつれる、八幡の御やしろに、じんばいに、まうつる、いといかめしきひゝきなれば、國々の武士ふしはさらにもいはず、みやこの人々も扈從しけり、たちさはぎのゝしるもの、見る人もおほかる中に、かの大とこ、うちまぎれて、女のまねをして、しろき薄衣ひきをり、おとゞの車よりおるゝほどを、さしのぞくやうにぞ見へける、あやまたずくゞをうちをとしぬ、其程のどよみいみじさ、思ひやりぬべし、か三年八月、武州矢古宇郷を、社領に寄らる、これ承久の亂、靜謐に依てなり【東鑑】曰、八月七日、世上屬無爲、諸社同有奉寄、八幡宮御分、武藏國矢古宇郷、司職五十餘町、按ずるに、此時執權北條義時の寄附狀を、今に藏す、其文に、可令早爲鶴岡八幡宮社領、武藏矢古宇郷事、右以當郷可爲社領之狀、依仰、下知如件、承久三年八月三日、陸奥守平花押、按ずるに、矢古宇は足立郡の屬、貞應二年四月、源光行當社に參詣して倭歌を詠ず【海道記】曰、鶴岡にて、鳩宮にまひらす、朱の玉垣金鏡に映し、白妙の錦幣風にそよめき、銀の鐺は朱檻をみがく、錦のつゞれは花に飄る、しばらく法施奉て、瑞籬に候すれば、神女が歌の曲は、權現垂跡の隱敎にかなひ、僧侶の經の聲は、衆生成道の因緣を伸、彼法性の空の上に、寂光の月老たりと雖も、若宮の林の間に應身の風仰で新なり、雲の上に曇らぬ影を思へども雲より下に曇る月哉、十二月、北條義時神馬を奉納す【東鑑】曰、十二月三日、奥州御亭有光物、仍奉神馬於鶴岡、嘉祿二年十月、上下兩宮修理の事あり【東鑑】脫漏、上下兩社の條に詳なり按ずるに【東鑑】建長四年六月二日の條に、嘉祿元年修理ありし由載せたれば、脫漏に二年とするは誤なるかされど【社務職次第】及【御殿司職次第】等皆嘉祿二年とすれば、未孰れか是なるを知らず、安貞元年十一月神馬奉納あり【東鑑】脫漏曰、十一月廿三日、將軍家赤班瘡出現給、仍今日神馬被奉鶴岡宮、寛喜二年五月、營中に賊入し事に依て、疑殆の輩をして、社頭に參籠せしめ、起證文を書しむ【東鑑】曰、五月六日於侍召集自去夜參候之輩、被糺彈、其中恪勤一人、美女一人、有疑殆分、仍參籠于鶴岡八幡宮、可書進起請文之由、被仰含畢、按ずるに、前寄賊營中に入、仁治二年七月、北條時賴等、百度詣をなす七月六日北條左親衛同武衛等、於鶴岡上下宮、有百度詣、是祖父息災延壽御祈請、三年八月、前河內守源親行も當社に詣ぜし事見ゆ【東關紀行】曰、鶴岡の若宮は、松柏の翠、いよいよ茂く、蘋蘩の備、闕る事なし、陪從を定て、四季の御神樂怠らず、職掌に仰て、八月の放生會行はる、崇神のいつくしみ、本社にかはらずと聞候、寛元二年五月、神馬を奉納あり【東鑑】曰、五月廿九日、爲若君御祈、鶴岡并二所、三島社等、各被進神馬一疋、按ずるに乙若不例に依てなり、寶治元年二月、神殿の扉數刻開かず御供之處、鶴岡八幡宮、欲備御戶數刻不被開、六月當國谷部郷を、社領に寄附せらる、是三浦若狹前司泰村追討の事、平治せしに依てなり六月廿三日、神社佛寺等、有新加御領、鶴岡八幡宮、右大將家法華堂等也、按ずるに、此時將軍賴嗣の寄附狀、今に藏す、其文に、奉寄進鶴岡八幡宮御領事、相模國谷部郷、右雖有謀逆之輩、忽以被誅畢、是則神道加護之所致也、爲敬神所奉寄進如件、寶治元年六月二十日、左少將藤原花押、按ずるに、矢部は當郡の屬、二年九月、黃蝶群飛の怪あり九月七日、黃蝶飛行、自由比浦、至于鶴岡宮寺、并右大將軍家法華堂群亘、建長元年六月、社領桑原郷の役夫工米等、政所の沙汰として辨濟すべきの由、北條左近將監時賴、執事信濃民部入道に下知す社藏文書曰、鶴岡八幡宮領、相模國內桑原郷、役夫工米事、御供用途全事異佗、然者爲政所之沙汰、以他計略可被致其辨候狀、依仰執達如件、建長元年六月三日、信濃民部入道殿、左近將監花押、四年四月、宗尊親王無爲に下向あり、且將軍始たるに依て參宮奉幣神馬を納らる【東鑑】曰、四月十四日、御下向無爲之上、依爲將軍始寅一剋將軍家、始御參鶴岡之八幡宮、御興、相州令供奉給、供奉人公卿殿上人、重時隨兵、檢非違使隨兵、臨期被止之、路次小町大路北行、政所西行、到鳥居南下御、日出以前、御神拜事終還御、御幣神馬可被奉獻之所々、京都十八社、關東鶴岡宮伊豆・箱根及武藏國鷲宮以下、諸國二宮總社、五年二月、社地の櫻花盛なるに依、親王出遊せらる二月三十日、鶴岡林頭櫻花盛也、酉剋將軍家、爲覽彼花俄出御、土御門宰相中將、花山院中將、相州、掃部助實時、右馬助親家等供奉、前右典厩、城

九郎泰盛等追參加、五月、社領修理の爲、假殿に遷座あり　五月廿三日條曰、鶴岡八幡宮破壞之間、被加修理、今日假殿事始也、六月二日條曰、鶴岡八幡宮假殿、立杜上棟事也、嘉祿元年修理之後、歷二十九年云々、八日條曰、鶴岡八幡宮假殿遷宮也、七月六日寅剋、鶴岡遷宮也假殿、七月、本殿上棟十五日、鶴岡八幡宮、八月、正遷宮あり　八月十四日寅剋、鶴岡上下宮、爲正殿遷宮也云々、相州參給、有御神樂、正元元年七月、社領、當國右近將監中原光上、唱宮人曲、長尾郷の内、田屋・金井兩村、課役の事により執權相模守政村より別當大藏卿定雅に下知を傳ふ　社藏文書曰、鶴岡八幡宮領、相模國長尾郷田屋・金目兩村、内田作事、勘合供米分限役、分付下地之外無餘剩之處、或號鶴岡掃地等、駈催百姓、或稱寶藏上葺以下支配所課之間、供料減少之由、就申之、被尋社務訖、如雜掌如月行長等申者、依爲地頭之役、不宛催供僧分領云々、此上不及子細、向後停止社家使亂責、可令領知也、者依仰執達如件、□嘉三年七月十三日、大藏卿僧都御房、相模守華押、按ずるに、田屋・金目共に當郡の屬、今金井に作る、年號嘉字の上靈食す、蓋正嘉なるべし、今年正元と改元あり、文永二年三月、御息所參籠あり　【東鑑】曰、三月七日、御息所自今日七箇日、御參籠鶴岡、入夜御出、御輿、女房東御方、一條局、尼卿局、并下臈三人供奉、先之爲縫殿頭師連奉行、被遣指圖於宮寺、令構御局等、別當僧正催六十餘人匠、終不日之功、以熱田、三島御前横廊四間、爲御局、以西二間、御寢所并御念誦所とす、以東二間、爲御出居、以東廻廊與横廊之中間敷板、爲臺所、以東廊北端、爲東御方局、以其次一間御湯殿、又局後籠軒敷板、爲下口并湯殿、以白幕五帖、曳廻廊北軒爲面道、三年五月、社領武州稻目・神奈川兩郷の役夫工米免除すべきの由、執權北條時宗、武藏の目代に下知す　社藏文書曰、鶴岡八幡宮領、武藏國稻目・神奈川兩郷、役夫工米事、如先下知狀者、云御燈云御供、□□異他之間、被免除彼役了、以他計略可被沙汰、入其分□□早任彼狀、可被下知之狀如件、文永三年五月二日、武藏目代殿、時宗の華押あり、按ずるに稻目・神奈川は、橘樹郡の屬、稻目は上菅生村の小名に存す、弘安三年十一月、社頭回祿に罹り、神躰を御影堂に遷座す　社務記錄曰、十一月十四日、子丑刻上下宮炎上、御殿司頼證律師、奉出上下御正躰、奉渡別當坊御影堂畢、十二月、假殿へ遷宮　十二月三日夜、御遷宮假殿、四年六月、假殿の神扉開かず　六月十五日、假殿八幡宮御寶殿不開、助法印宗辨、帥阿闍梨頼證、欲開之處不開、同十六日、八幡宮へ重寶を自相州被進之間、社務有祈念、其時開畢、八月、上下兩宮落成して正遷宮の儀を行ふ　鶴岡御造營記　九年十一月、武州鹿島田郷を社領に寄附せらる　執權相模守貞時、陸奥守業時、連署狀を出せり　社藏文書曰、征夷大將軍家、寄進武藏國鹿島田郷、右奉仰倡、鶴岡八幡宮者、當鎌倉郡之名區、模石清水之宗祧、建久以來明德惟馨、日居月諸、只恩仰之、是以奉進一村之田園、視着萬歲之春秋、請照丹誠、必垂玄鑒、朝野泰平、州縣豊穣、壹吏安全、黎民愷樂者、依仰寄進如件、弘安九年十一月廿九日、左馬權頭兼相模守平朝臣、陸奥守平朝臣、各華押、按ずるに、鹿島田は橘樹郡の屬、正應元年十一月、永仁元年七月等の文書に據れば、此地は座不冷供料として寄進ありしなり、事は座不冷壇所の條に詳な、永仁四年二月、神殿回祿に罹り　社務記錄曰、二月三日亥刻、當社炎上、御造營記　上下社壇廻廊、及北斗堂、神宮寺等、堂舍不殘一宇、燒失畢、五年落成して遷宮あり　正安三年五月、供田、當國長尾郷田屋村、供料未進により相模守貞時・陸奥守宣時、連署の狀を出せり　相承院文書曰、鶴岡八幡宮寺供僧賢淳僧都、良演律師申、相模國長尾郷田屋村内、供田捌段大、所當米未進事、右壹分、地頭加世孫太郎長親、年々未進之由訴申之處、可遂結解之旨、進陳狀死去畢、仍遂其節可究濟之旨、正安元年六月、被下知于子息等之後、同十月雖下御教書、猶不叙用之□、去年十月以奉行人政連、宗實使者、重下御教書畢、于今延引之條難遁其咎、爰於當社供田者、地頭背下知之時、被付下地於供僧事有先傍例、然則於賢淳分五段三佰歩、良演分貳段參佰歩者、停止地頭之知行、所付供僧也、者依鎌倉殿仰、下知如件、正安三年五月十六日陸奥守平朝臣、相模守平朝臣各華押、按ずるに、田屋村の事は、正元元年の條にも見ゆ、六月、社地に竹降る　神明鏡曰、六月廿日、鶴岡八幡宮、大竹二本降、嘉元二年三月、社領當國弘河郷、供米未進の沙汰ありて、執權相模守師時、右京權大夫時村、連署の狀を下す　相承院文書曰、鶴岡八幡宮供僧良印、與相模國弘河郷地頭、備前入道定證代定覺、相論供米事、右訴陳之趣、子細雖多、於彼米者正安二年以降未進由、良印申之處、自住古直納之間、召進百姓可遂其節旨、定覺所陳申也、爲直納地之條、良印不論申之上、如正安元年十二月三日下知狀、者供米未進事、下地爲地頭進止之上者、爲地頭代之沙汰、召出百姓遂結解、於未進者、可辨償、者依鎌倉殿仰、下知如件、嘉元二年三月十二日、相模守平朝臣、右京權大夫平朝臣、各華押、按ずるに、弘河は大住郡の屬、今廣川に作る、德治元年三月、勢州眞近納所を社領に寄附あり、執權陸奥守宗盛、相模守師時、連署の狀を與ふ　社藏文書曰、伊勢國眞近納所地頭職、三郎次郎左衞門尉女子知行分、五分壹事、爲當社地替不足分、可被至沙汰給之由、被仰下候也、仍執啓如件、嘉元四年三月卅日、進上若宮別當前大僧正御房、陸奥守、相模守、各華押、按ずるに、今年十二月德治と改元、正和元年八月、武州金曾木郷を寄附あり、執權相模守凞時奉れり　寄進鶴岡八幡宮、武藏國金曾木彦三郎重定所領事、右依將軍家仰奉寄如件、正和元年八月十一日、相模守平朝臣華押、金曾木は豊島郡の屬、按ずるに、延文二年の文書に據ば、此時江戸市谷の地も寄附ありしなり、三年七月、社領當國長尾郷田屋・金井兩村課役の事により凞時下知を傳ふ　相承院文書曰、鶴岡八幡宮領、相模國長尾郷田屋・金目兩村内田作事、勘合供米分限役、分付下知之外、無餘剩之處、或號鶴岡掃地等、駈催人夫、或稱寶藏上葺以下支配所課之間、供料減少之由就申、被尋社務訖、如雜掌如月行長等申者、依爲地頭之役、不宛催供僧分領云々、此上不及被推問、向後停止社家使亂責、可令領掌也、者依仰執達如件、正和三年七月十三日、信濃僧都御房、相模守華押、按ずるに、此兩村課役の事、正元元年及正安三年の文書にも見ゆ、十一月、當國長尾郷小雀村、供米未進に依て、凞時下知を傳ふ　鶴岡八幡宮供僧良尋僧都、與佐々木千手丸代忠信、相論相模國長尾郷小雀村年貢事、右彼是所申雖區、良尋則永仁三年以來、未進相續之由訴之、忠信等社家爲直納之地、地頭不相綺之處、閣百姓、地頭未進由、掠申之條、無謂之旨稱之、爰當村者云下地云百姓、地頭進止之條、兩方無異論、

請取供米之外、無社家綺上者、忠信雖遁申哉、且就下地進止懸地頭被裁許者通例也、旁爲地頭沙汰、駈取百姓所帶返抄、可遂結解之狀、依鎌倉殿仰下知如件、正和三年十一月二日、相模守平朝臣華押、按ずるに、長尾・小雀は當郡の屬、四年三月、社頭已下末社に至るまで回祿に烏有す社務記錄曰、三月八日子刻炎上、八幡宮上下、大小社以下無所殘、寶藏遁餘焰、仍御正躰等奉移入之、四月、假殿遷宮、五年十一月、長南孫四郎常行及目良唯道惠圓が所領を、本地供料に充らる、執權左馬權頭高時、武藏守貞顯連署の狀を下せり社藏文書曰、奉寄長南孫四郎常行、并目良唯道惠圓所領事、右爲鶴岡八幡宮本地供料、所被寄進也、者早守先例、可致沙汰之狀、依仰奉寄如件、正和五年十一月廿七日、左馬權頭平朝臣、武藏守平朝臣各華押、

嘉曆三年八月、當國北深澤鄉內、供料未進の沙汰ありて、執權相模守守時下知を傳ふ相承院文書曰、鶴岡八幡宮供僧、大夫法印圓重、與長江彌六左衛門尉政綱相論、相模國北深澤鄉內供料、田壹町五段大、分□米事、以右正和三年以來、政綱致未進之由、圓重訴申の處、如政綱陳狀者、當鄉者自往古、里坪治定之間、供僧等每年遂檢見隨得田、々面作人致直納之條古例也、云田數云作人、政綱不存知之間、給注文可遂進未結解云々、者政綱爲地頭印進止下地、寄事於作人遁申之條、甚無其謂之上、以一問答訴陳可遂問答之旨、圓重依申之、可返進訴狀之由、去六月廿日、以奉行人安威新左衛門尉資脩、并齋藤九郎兵衛尉基連使者、雖成書下于今抑留、無理之所致也、然則於彼供米者、政綱可究濟之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、嘉曆三年八月十二日、相模守平朝臣華押、按ずるに、深澤は當郡の屬、元德二年九月執權右馬權頭茂時相模守守時、連署して社內并近邊、制止の條目を出す、是嘉元元年已來の舊令に據所なり社藏文書曰、鶴岡八幡宮社內并近邊、可加禁制條々、供僧等亂行之事、雪下谷谷在家人居住事、持太刀輩出入社內事、乘輿輩往還社內事、放入牛馬於瑞籬內事、瑞籬外三方堀汙穢事、持魚鳥輩往返社頭事、右條々任嘉元元年九月五日、正和二年五月八日御敎書、因可被加制止之狀依仰執達如件、元德二年九月十三日、前大僧正御房、右馬權頭相模守各華押、建武二年八月三浦若狹守時明、上總國市東郡の內を寄進す奉寄進鶴岡八幡宮上總國市東郡內、年貢用途伍拾貫文事、右旨趣者、爲天下安穩泰平、自身壽福長遠息災康樂、子孫繁昌、奉寄進也狀如件、正慶四年八月十五日、若狹守時明華押、按ずるに、正慶四年は、則建武二年なり、市東は今市原郡中の庄名なり、九月、下總國佐坪一野を寄進あり【社務職次第】曰、九廿八、總州佐坪一野御寄進、社藏文書曰、十月、三浦介高經上總國眞野郡椎津鄉を寄進す寄進鶴岡八幡宮、上總國眞野郡椎津鄉內、田地壹町事、右旦爲天長地久現世安穩子孫繁昌、至于子々孫々於此粁田者、不可致其煩、仍寄進狀如件、建武二年十月廿三日、三浦介平高經、華押、按ずるに、文書の標書に高繼とあり、系圖に據るに、高繼は三浦介時繼の子にして、則若狹守時明の孫なり、椎津は今市原郡の屬、眞野の郡名、未所見なし、【佞名鈔】海上郡の鄉名に、馬野あり、無萬乃と註す、此頃、仁木右京大夫義長、社內に於て兒を殺害す【太平記】曰、仁木右京大夫義長、鶴岡八幡宮にて兒を斬殺して、神殿に血を灑ぎたり、延元二年八月、羽蟻の怪あり社務記錄曰、八月九日於社頭羽蟻多出現、曆應

鶴岡之圖



二年四月、遠州宮口鄉、當國弘河鄉を將軍尊氏寄進す社藏文書曰、奉寄鶴岡八幡宮、遠江國宮口鄉、相模國弘河鄉、備前入道跡地頭職事、右爲天下泰平國土安穩、奉寄之狀如件、曆應二年四月五日、正二位行權大納言源朝臣尊氏、華押、按ずるに、弘河鄉の事は、去る嘉元二年の文書にも見ゆ、宮口は龜玉郡の屬、今庄名及村名に存す、康永元年五月、尊氏の祈願として正躰二面を神殿に納む【社務職次第】曰、五月十九、爲將軍家御願、自京都銀御正躰二面調進、奉開眼供養、卽奉納寶殿也、三年十二月、修理の事始あり社務記錄曰、十二月廿六日當社御修復事始、奉行泉右衛門目部左衛門、山田入道、大工狩衣、引頭淨衣、神主淨衣、小別當鈍色、社家奉行刑部法眼、備前上座、社務出仕妻戶間、役僧貞和元年四月、外遷宮四月六日等□衣兒出世等、供奉了、爲御遷宮等參籠、十一日、假殿洗淨、十二日、上下假殿遷淨、社務勤之、十三日戌刻、御遷宮、委日記在別、其後一七ケ日、陪從御神樂、二年八月、別當賴仲、上下兩宮內陣の神寶を檢閱して此次を以て神躰を拜す八月六日、上下寶殿內陣、御神物等檢知之、校合于目六之處無相違、此次奉并神躰了、佳遇結緣之處隨喜之淚灑襟了、御殿主重契、形部僧都賴智、治部卿僧都、大藏卿法印兼祐等、並小別當神主令參了、兼祐法印執筆而神物等記錄之、按ずるに、【社務職次第】には、曆應四年八月、別當覺助の事となす、三年落成し、十一月正遷宮あり十一月一日、御修理事終、而御遷宮亥刻、按ずるに、御造營記には、正遷宮、觀應二年十二月、尊氏當國吉田鄉を五月十九日とす、を寄附し社藏文書曰、奉寄鶴岡八幡宮、相模國吉田鄉、右爲天下安全武運長久、所奉寄之狀如件、正平六年十二

月廿五日、正二位源朝臣華押、按ずるに、正平六年は、卽觀應二年なり、吉田は當郡の屬、文和元年九月、南波多野庄を寄納す　社藏文書曰、寄進鶴岡八幡宮、相模國南波多野庄內闕所分事、右爲當宮修理料、限永代所寄進之狀如件、觀應三年九月九日、正二位源朝臣華押、按ずるに今年九月文和と改元す、波多野は大住郡の屬、延文二年十二月、社領武州金曾木、市谷等の地江戸淡路守が押領を停止すべき旨、鎌倉管領基氏下知を加ふ　鶴岡八幡宮雜掌任阿申、武藏國金曾木彥三郎、市谷孫四郎等跡事、止江戸淡路守押領、任正和元年八月十一日寄進狀、可被沙汰付社家之狀如件、延文二年十二月廿二日、阿波守殿、基氏の華押あり、三年八月、社領武州鶴見郷より放生會の料を輸致す　文書あり、上宮放生會の條に載す、四年、上下兩宮修理あり　鶴岡御造營記貞治元年十二月、管領基氏制札を出す　莊嚴院文書、鶴岡八幡宮社卤井近所禁制條々、供僧等亂行事、當社谷々在家人居住事、持、太力罪出入社內事、乘、輿罪往還社內等、放入牛馬瑞籬內事、瑞籬外三方堀汚穢事、持魚鳥罪往反社頭事、供僧幷社司社官住所、軍勢等寄樂事、雪下釘貫內乘馬事、右條々固可令停止之、若雖爲一事有違犯輩者爲處罪科、被注申交名之狀如件、貞治元年十二月廿七日、別當僧正御房、佐兵衛督、華押、按ずるに、去る元德二年九月の條目と略同じ、四年七月、武州久良岐郡久友郷の社領、尊氏寄附の旨に任せ、相違なく沙汰すべき由、將軍義詮基氏に演達す　社藏文書曰、鶴岡八幡宮雜掌申、武藏國久良郡久友郷事、故御所一圓御寄附狀分明也、無相違樣可有計御沙汰候謹言、貞治四年七月二十二日左兵衛督義詮、華押、按ずるに　應安元年八月、武州箕田郷內、河連村を寄進す　寄進鶴岡八幡宮武藏國箕田郷地頭職內河連村、除寺社領幷人給地事、右爲天下安全武運長久、所被寄進也、者守先例可被致沙汰之狀、依仰執達如件、應安元年八月廿一日、沙彌華押、按ずるに、河連は足立郡の屬、沙彌は執事上杉民部大輔憲顯入道桂山なり、四年八月、上杉少弼朝房入道道高、同州屈戸郷を寄進す、奉寄進鶴岡八幡宮社、武藏國屈戸郷內、次郎方半分事、右爲所願成就圓滿、奉寄附之狀如件、應安四年八月十五日、沙彌道高華押、按ずるに、屈戸は大里郡の內、六年四月、社領同州久良岐郡久友郷の事に依て、細川武藏守頼之、執事上杉兵部少輔能憲に命を傳ふ　鶴岡八幡宮雜掌申、武藏國久良郡久友郷事、先立就有御吹嘘所被寄也、社家御奉寄之地、無改勤之儀者、被付雜掌候樣、可有其沙汰之狀、依仰執達如件、應安六年四月廿八日上杉兵部少輔入道殿、武藏守華押、永和二年正月、吉良治部大輔治家、同州世田谷郷の內、上絃卷を寄附す　奉寄附鶴岡八幡宮社、武藏國世田谷郷內、上絃卷半分事、右志者爲天下安全、以殊家門繁昌也、仍寄附如件、永和二年正月廿九日、散位治家華押、按ずるに、絃卷は荏原郡の屬、康曆元年閏四月、房州岩井不入計の地を本地供の料とせらる　安房國岩井不入計半分、號大方分事、爲鶴岡八幡宮本地供々料所被預置也、任例可有其沙汰之狀、依仰執達如件、永和五年閏四月十三日、遍照院僧正御房、沙彌、華押、按ずるに、沙彌は上杉安房守憲方入道道合なり、又曰、鶴岡八幡宮本地供料所、安房國岩井不入計、號大方分事、早大井彥太郎相共、莅彼所任願狀之旨、沙汰付下地於遍照院雜掌、可執進請取狀如件、永和五年閏四月十三日、森小四郎所、某華押、按ずるに、茲年三月康曆と改元す、岩井領不入計村は今平郡の屬、十一月、社領武州多摩郡吉富郷、及關戸の地を、別當坊に附與すべきの由下知あり　莊嚴院文書曰、料所武藏國多東郡吉富郷號關戸內、宇都宮彈正小弼入道女子跡事、布施兵庫大夫入道相共莅彼所守預狀之旨、不日沙汰付下知於若宮僧正坊雜掌、可執進請取之狀、依仰執達如件、康曆元年十一月廿日、雜賀民部大夫殿、沙彌、華押、是も上杉道合なり、十二月、管領氏滿房州岩井不入計の寄附狀を出せり　我覺院文書曰、安房國岩井不入計村事、爲鶴岡八幡宮本地供料所、可有管領の狀如件、康曆元年十二月廿三日、遍照院僧正御房、氏滿の花押あり、按ずるに、遍照院の住居なり、二年三月、同所へ制札を渡す　社藏文書曰、禁制八幡本地供料所、安房國岩井不入計事、右於當所甲乙人等、不可濫妨狼藉、若背此旨令違犯者、可處重科之狀如件、康曆二年三月日　華押、永德元年正月、氏滿願書を本地供堂に籠む　鶴岡八幡本地供堂立願事、右所願者、專仰八幡應跡之勝利、殊憑本覺法王之廣化、式祈除厄期退凶徒、欲令聖朝安全武運長久者也、仰請速垂玄應普救蒼生、廼分弊邑寄附靈壇、仍願書如件敬白、康曆三年辛酉正月十七日、左兵衛督源朝臣氏滿敬白、華押、按ずるに、茲年二月永德と改元す、三年正月、社領の地、諸役免除の事を將軍義滿下知す　□□八幡宮領諸役免除事、被經奏聞且所申關東也、可有存知狀如件、永德三年正月十一日、當社別當僧正御房、義滿の花押あり、九月、氏滿武州吉富郷の寄進狀を出せり　寄進鶴岡八幡宮寺、武藏國多西郡吉富郷事、右爲當社上下本地供護摩料所、爲天下安全武運長久、所寄附之狀如件、永德三年九月十四日、左兵衛督源朝臣、華押、但康曆元年寄附ありし地なり、明德三年五月、神殿再建の事あり、十二月外遷宮曰、【鎌倉大草紙】京都より、陸奥出羽兩國を以、鎌倉の御領分たるべしと被仰下、是唯事にあらず、八幡宮の御惠なるべしとて、宮寺の久舗御修理なかりしを、御再建ありける、同十二月廿一日、御正躰假殿へ御遷宮あり、【社務職次第】曰、當社假殿御遷宮事、明德三年壬申十應永元年十二月、落成して正遷宮の式を行はる　正御遷宮、應永元年甲戌十二月十四日、【鎌倉九代記】曰、明德三年五月より若宮の八幡御造營あり、十二月廿一日、既に造畢の功を遂られ御遷宮まします、管領兵庫助憲孝、御名代として其日參向の有さま、漆塗の輿に乘て路次の行粧美々敷ぞ見えたりける、將軍家を始め、棧敷を押並べ家々の紋付たる幕打廻し、見物の貴賤行つどひて、錐を立る地もなし、近國警固の勇士五百餘人、色々の甲冑を帶して、辻小路を固め、小具足に長刀を横たへ、非常を警る武士八十人、供奉の騎馬三百餘人、步立の侍七百餘人、或は代々の重寶を差、或は新調の美麗を用て、弓箭太刀刀、金銀珠玉を鏤凡中間雜色に至る迄、今日をはれと出立本所より若宮まで、二行に列なりて步ませたり、已に黃昏に及びしかば、辻々の大篝、小路小路の松明は、さながら白晝に異ならず、禰宜神主は幣白を大床に擎げ別當社僧は、經の紐を解て、玉の砌に誦奉り、八人の乙女は裳を曳て透廊に舞、五人の神樂男は鼓を合て拜殿に候す、幽燈の影暗く內外の鳴をしづめて、潛に遷宮し奉る云々、按ずるに【九代記】落成を明德三年の事となすは誤れり、此時、上下兩社の鉸

錬舞衣以下を新調す【社務職次第】曰、此時上下宮金物以下御裝束等、悉被新調之、奉行上杉中務入道禪助、委細在別記、五年十二月、管領滿兼、奥州石河庄を寄進す社藏文書曰、寄進鶴岡八幡宮寺、陸奥國石河庄内、石河大寺安藝入道跡事、右爲天下安全武運長久、所寄附之狀如件、應永五年十二月廿五日、左馬頭源朝臣、華押、七年十二月、按ずるに、石川郡の屬に石川庄大寺郷あり、社領武州荏原郡六郷保内原郷の替として、同州入間郡難波田の地を寄附せり寄進鶴岡八幡宮寺、武藏國入東郡内、難波田小三郎入道跡事、右爲同國六郷保内原郷替、所寄附之狀如件、應永七年十二月廿日左馬頭源朝臣、華押、又曰、武藏國入東郡内、難波田小三郎入道跡事、早荏彼所、任御寄附狀之旨、可被沙汰付下地於鶴岡八幡宮雜掌之狀、依仰執達如件、應永七年十二月廿日、兵庫助入道殿、沙彌、花押、按ずるに、八年二月、難波田の上杉中務少輔朝宗入道禪助なり、地を當社雜掌に渡し附らる武藏國入東郡内、難波田小三郎入道跡事、任去年應永七十二廿御執行之旨、荏彼所沙汰付下地鶴岡八幡宮雜掌候畢、仍渡狀如件、應永八年二月廿九日、沙彌、華押、按ずるに、上杉安房守憲定入道長基なり、十一年五月社頭修理の料として、去る六年上野國段別錢を寄附ありしに、他の用途に宛らるゝを以て、今年より二年の間甲州の段別錢を替として寄附し、營作の力を終べきの由、滿兼、奉行上杉禪助に命ず鶴岡八幡宮御修理要脚事、雖寄進應永六年、上野國段別錢、被成他要脚之間、爲彼替甲斐國段別錢五疋宛分、今明二ヶ年、所寄附也、致其沙汰可被終營作之功之狀如件、應永十一年五月十五日、中務少輔入道殿、滿兼の華押あり、十一月落成して正遷宮の式あり【鎌倉大草紙】曰、十一月十四日、鶴岡の八幡宮の御修復も、出來して遷宮あり、奉行は上杉中務少輔入道禪助なり、十八年七月、去る康暦元年寄附ありし、武州吉富郷五村を、長日本地護摩の料所に宛つ座不冷壇に詳なり所、十九年三月、管領持氏武州平井にて社領を寄附す社藏文書曰、寄進鶴岡八幡宮、武藏國平井彦次郎跡事、右爲當社領所寄附也、者早守先例、可被致沙汰之狀如件、應永十九年三月十七日、左兵衛督源朝臣、華押、按ずるに、平井は多摩郡の屬、二十年四月、社領役夫工米の事、先例に任せ免除すべきの旨細川道觀下知を傳ふ鶴岡八幡宮領、關東御分國役夫工米事、先度施行畢處、任先々免除之旨可被止其責之由、所被仰下也、仍執達如件、應永廿年四月廿一日、上杉右衛門佐入道殿、沙彌、華押、按ずるに、沙彌は細川右京大夫滿元入道道觀なり、二十一年八月、佐竹左馬助が僕、社頭に於て狼藉の所行ありしをもて、同人の所領、常州那珂東國井郷を收公して放生會の料に寄附す文書あり、上宮放生會の條下に出す、二十二年五月、社領吉富郷の内、中河原村を割て、最勝王經講讀の料に宛つ下宮に詳なり二十四年正月、持氏上總國周東郡大谷村を寄進す社藏文書曰、奉寄進鶴岡八幡宮、上總國周東郡大谷村、岩松左馬助入道跡事、右爲天下安全武運長久、所奉寄附之狀如件、應永廿四年正月一日、左兵衛督源朝臣華押、按ずるに、大谷は周准郡の屬、周東は今同郡の庄名及郷名に存す、又閏五月、常州北條郡宿郷を寄附す上宮の條に詳なり二十五年五月、社領役夫工米等の諸公事課役、先規に任せ免除せらるゝの旨、細川滿元入道命を傳ふ鶴岡八幡宮領、關東御分國、役夫工米、六所般若會以下、諸公事臨時課役事、任先規被免除畢、可存知其旨之由所被仰下也、仍執達如件、應永廿五年五月十日、當社々務僧都御房、沙彌華押、八月、社頭にて田樂・猿樂等を催す時、供僧等の見物を指揮す莊嚴院文書曰、社頭田樂猿樂以下、供僧中見物棧敷事、西南院八正寺兩御代、被定候之趣、令披露候了、仍任先例、於夏堂可有見物候之由被仰候、但放生會之時者、彼在所社家御見物事候之間、其時者可爲陵王間候、又御所樣御出事候者、彼所可相塞候、然者於中門可有見物候、自然狼藉事候者、八宮下部等、堅可被制禁候、此等趣具以今福四郎左衛門尉、召小別當賢能被仰付了、此由可有御存知候也、恐々謹言、應永廿五年八月九日、謹上執行御房、權少僧都賢深、花押、按ずるに、夏堂は夏籠堂なり、廻廊の内にあり、二十六年九月、社領下總國下河邊庄彦名河關の所務、違亂有べからざるの旨、持氏下知を加ふ社藏文書曰、鶴岡八幡宮領、下總國下河邊庄、彦名河關事於當社者崇敬依異于他、諸役免除之處、動狼藉之輩在之云々、太無謂所詮任往古之例、向後固令停止違亂、可被全關務之狀如件、應永廿六年九月十五日、社務權少僧都御房、持氏の華押あり、按ずるに、彦名は今武州葛飾郡の屬、三十一年十二月、藤原定頼、常州北小栗御厨内、小萩島郷を寄附す奉寄進鶴岡八幡宮、常陸國北小栗御厨内小萩島郷之事、右爲家門繁昌武運長久、所奉寄附之狀如件、應永三十一年十二月廿三日、藤原定頼、華押、按ずるに、今眞壁郡の屬に小栗庄萩島村あり、三十二年六月、持氏武州河越の地を供料に寄附す上宮の條に詳なり永享元年三月、社領武州世田谷郷内絃卷村、課役の事により下知あり鶴岡八幡宮領、武藏國世田谷郷内絃卷村府中六所宮役事、連々致催促云々、太不可然、所詮任先規、可被停止催促之由候也、仍執達如件、正長二年三月十一日、大石石見守殿、前筑前守、前遠江守各華押、按ずるに、玆年永享と改元、二年六月、持氏、上總國周西郷の内を寄進す寄附鶴岡八幡宮、上總國周西郡内大山名上村、同郡濱子田畠、同郡青木村内田畠等、築田河内守寄進之地事、右爲且子孫繁昌且武運長久、所寄附也、然者勤行法華問答講、可被致祈禱精誠之狀如件、正長三年六月廿七日、供僧中、從三位源朝臣、華押、按ずるに、今周准郡の屬に、周西領大山野村及青木村あり、四年正月、武州師岡保内入江郷を以て長日最勝王經の料所に宛つ座不冷壇に詳なり所、十一月、持氏社地及其近邊に於て、禁制の條目を出す、是去る貞治元年・至德三年の舊令に據所なり鶴岡八幡宮社内、并近所禁制條々、供僧等亂行事、當社谷々在家人居住事、持太刀輩出入社内事、乘輿輩往還社内事、放入牛馬於瑞籬内事、瑞籬外三方屎汚穢事、持魚鳥輩往返社頭事、供僧并社司社官住所、軍勢等寄宿事、雪下釘貫内乘馬事、右條々貞治元年十二月廿七日、至德三年十一月十三日被定置之處、近年無沙汰云々、太不可然、於向後者、守此法目可令停止之也、若猶雖爲一事、有違犯輩者、爲處罪科、可被注申交名狀如件、永享四年十一月十五日、別當法印御房、持氏の華押あり、又去る永德二年三月、下知狀の旨に任せ

當社領の地永く改動有まじき由を下知す　鶴岡八幡宮寄進地事、早任永德二年三月六日御判之旨、於向後不可有改動之狀如件、六永享四年十一月十五日、別當法印御房持氏の花押あり、六年三月、持氏當宮に於て上杉左衛門大夫□□を奉行として等身の大勝金剛の像を造立す　於鶴岡大勝金剛尊、等身造立之意趣者、爲武運長久子孫繁榮、現當二世安樂、殊者爲攘呪詛怨敵於未兆、荷關東重任於億年、奉造立之也、永享六年三月十八日、從三位行左兵衛督源朝臣持氏花押、造立之間奉行上杉左衛門大夫、この文書は持氏朱を以て、自書せる物なり、八年五月前信濃守賴胤、下野國佐野庄内、富地郷を寄進し、本地供ノ料所とす　奉寄進鶴岡八幡宮、下野國佐野庄内、富地郷半分事、右爲當社每月本地供七ヶ日之料所、永所奉寄附也、然而祈念意趣者、爲天下安全武運長久以賴胤除病延命壽命長遠子孫繁榮二世所願成就圓滿、奉寄進之狀如件、永享八年五月廿六日、前信濃守賴胤、華押、按ずるに、安蘇郡の屬、佐野庄及富士村あり、十年六月持氏の長子賢王、神前にて元服の儀を調へ義久と號す　是京都鎌倉確執の濫觴なり　【鎌倉九代後記】曰、六月持氏長子、賢王義久、元服の沙汰あり、先例京都にして、元服すといへども、初め義持公嫡子、義量早世、持氏を養子の約あり、既に義持薨去して、弟義教を繼子とす、これによりて持氏義教と不和、義教又鎌倉を亡すべき志あり、此故に持氏先規を飜して、往昔義家の例ありとて、鎌倉鶴岡八幡宮にて、元服の催あり、憲實京都を憚りて、頻に諫言すといへども、承引なく、終に彼寶前にて元服の儀を調ふ、某年三月、社領奥州石川庄の内大寺の地、先年寄進の旨に任せ相違有べからず、及同庄の内山崎村を寄進せし由、　足利滿直　氏滿の次子永享十一年、持氏と同く自殺の文書あり　社藏文書曰、陸奥石川庄之内、大寺之跡事、永安寺殿御時、鶴岡八幡宮御寄進候上者、於向後任先御寄進之旨、可被致其沙汰候、并同庄之内山崎之村事、別而八幡宮奉寄進候、以此等之趣、可然樣被心得、被致御祈禱之精誠候者、目出悅入候、仍彼所共事、暫者被預置當知行之仁等、每事自社家、可被致沙汰候、恐々謹言、三月廿八日、鶴岡社務御坊、滿直華押、按ずるに、永安寺殿は氏滿なり、石川庄大寺は、應永五年十二月、管領滿兼寄進ありし事、既に前に載す、氏滿は同年十一月逝す、嘉吉元年十二月、本地供料、武州師岡保柴關所、元の如く社家知行すべき旨命を傳ふ　鶴岡八幡宮本地護摩公料、武藏國師岡保柴關所事、爲殊御寄進間、難被准自余歟、然者如元社家知行、不可有相違由候也、仍執達如件、嘉吉元年十二月廿六日、當社雜掌、前下野守、花押、文安四年閏二月、社領武州寺尾郷の内澁澤村を、供僧の給分に渡さる　鶴岡八幡宮領、武州寺尾郷内、澁澤村、社役并段錢除之事、右爲給分守先例、可有知行之狀如件、文安四年閏二月廿八日、助阿闍梨御房、某花押、按ずるに、寺尾は橘樹郡の屬、澁澤今は北寺尾村中の小名に存せり、寶德二年十月、管領成氏、社領中の沽脚地を還付す　鶴岡八幡宮領、内沽脚地所之事、爲德政所返付也、早止買得人綺、如元可被全社領之狀如件、寶德二年十月廿九日、若宮別當御房、成氏の華押あり、四年四月、前下野守奉て、一切經以下修理の料所、小田原關所に制札を出す　兩界壇所に詳なり　成氏の時、正月十一日の評定始に、三條を記す、當社は其一也　【鎌倉年中行事】曰、正月十一日御評定始　右筆折紙に、三箇條記之、一箇條は皇太神宮、伊勢之御事也、一箇條は八幡宮、鶴岡之御事也、一箇條は勝長壽院之御事也、此三箇條、油摩の座中に、右筆伺候令披露、判始には、社領一所を寄進あり　御判始に、八幡へ一所御寄進、又每年正月廿日の頃社參　正月廿三日、鶴岡御社參日限雖不相定依爲廿日頃廿余日に如是記之云々、按ずるに、此下供奉の次第、及着服神拜の式等を詳に載せたれど、爰に略す、二月一七日の間、社頭に參籠するを例とす　二月八幡宮に一七日御參籠、社務社家奉行出仕、政所問注所、御所奉行其外宿老中、廻廊に幕打參籠あり、管領出、寛正二年四月、武州の社領、押領人の綺を停止あり　社藏文書曰、鶴岡八幡宮領武州所々事、押領人等注文壹通、封裏所被遣候也、不日退彼綺、可被沙汰付下地於當社雜掌之由也、仍執達如件、寛正二年四月廿六日　長尾尾張守殿、右衛門尉、右馬允、各華押、三年十二月、足利政知、武州東久友の地を寄進あり　奉寄鶴岡八幡宮、相模國東久友半分、松田左衛門尉跡事、右爲當社領所、令寄附之狀如件、寛正三年十二月廿一日、左馬頭源朝臣、華押、按ずるに、久友は貞治四年の文書に、武州久良岐郡に係、今相模國と記するは誤なるべし、且先に將軍尊氏、社領に寄附ありし地なれば、先規に任せ、政知寄附ありしなり、文明十八年、准后道興、社頭に詣て、倭歌を詠ず　【回國雜記】曰、鶴岡八幡宮に參詣し侍れば、傳聞侍りしにもすぐれたる宮立也、誠に信心肝に銘じて尊く覺侍る、抑當社別當祖師、隆辯僧正、經歷年久し、其階弟道瑜准后、號をば大如意寺と云ひ、兩代彼職に補し侍りき、由緒無雙なる事を思出て、神前に奉納の歌　鶴岡邊の松としらなん、又僧萬里が【梅花無盡藏】に當社の詩あり　曰、透千度小路謁鶴岡八幡宮、高門飛橋廻廊曲檻雕玉鏤、巍然不減其昔階除有不蹈之石、石文龜鶴凡眼不得視之、千度壇連七里濱、峥嶸華表奪龍鱗、回廊六十間靈地、風不鳴條宗廟神、長享元年二月、堯慧、當社に詣で詠歌ありし事【北國紀行】に見ゆ　曰、鶴岡へ參ぬ、靈木長松連りて森々たるに、玉を磨ける社頭のたゝずまひ、由比濱の鳥居、遙に霞渡て誠に妙なり、吹殘す春の霞も沖津洲に、立る明應九年五月、僧俊朝の記に社頭頽壞に及びしかば、大勸進を定め、棟別を以て造營を遂べきの由、見えたり　社藏文書曰、抑社頭十餘年無造營、絶破壞言語、依之自物奉行、以瑞提點被定大勸進、不廻時日西小社兩所、神宮寺鐘樓堂之造營□如新造、將又以棟別、可被遂造營之由、被申越之間、往古奉崇敬樣躰無存知哉否、所詮御輿以下之嚴重物共取出、招貴賤參拜、偏是爲令起發恭敬心也、仍自端午至于十一日、諸人之群集立錐無隙而已、明應九庚申五月日、法印俊朝華押、文龜元年、宗長此地に詣る　宗祇臨終記曰、鎌倉を一見せしに、右大將のそのかみ、又九代の榮もたゞ目の前の心ちして、鶴岡のなぎさの松、雪下の甍は實に石清水にも立勝る、永正元年九月、今川上總介氏親、當社に制札を出す　社藏文書曰、制、於鶴岡宮中、□手之軍勢甲乙人等、致濫妨狼藉之事、右有違犯之族者、速可處罪科者也、仍如件、永正元年九月日、氏親の袖判あり　按ずるに、今月廿七日、上杉朝良、武州立河原にて、顯定と

合戰に及ぶ、駿河國主今川氏親兵を遣して、朝良に合力す、故に制札を出せるなり、　大永六年十二月、房州より里見左馬頭義弘、鎌倉に渡海して社地に入て狼藉す、依て北條氏綱兵を出して追討せし事【小田原記】に見えたり　曰、十二月の頃、里見左馬頭義弘、竊に相州鎌倉へ押渡り、社家へ亂入、宮寺の神寶を奪取、佛閣を破り、鶴岡の寶藏を破却すと、聞えければ、氏綱大に驚、里見は源氏にて、八幡宮の氏人也、禮を存せば、寄進をこそ奉るべきに、神罰をも顧ず、かゝる狼藉、前代未聞の惡逆なり、一々に召取て、後世の惡習を懲しめよとて、伊豆相模のはやりをの若者ども、吾先にと打立、鎌倉に馳向て、四方を圍み責ければ、房州勢物取に散て、一所へも不打寄、神罰や當りけん、一方大將、里見左近大夫馬より落て討れければ、義弘早々舟に取乘り引退く、　按ずるに、當社は頼朝再興以來、國中の大社となり、且世々の尊敬淺からず、されば古書、古文書等に載る、當社の事實の採用すべきもの甚繁多にして、數卷に及ばざれば、詳載するを得ず、故に今爰に至て卷を改む、次の卷々又然り、

新編相模國風土記稿卷之七十終

新編相模國風土記稿卷之七十一

村里部　鎌倉郡卷之三

山之内庄　鶴岡二

○鶴岡八幡宮二　當社勸請より後、大永六年迄の事跡は前卷に記せり、天文元年五月、北條左京大夫氏綱社頭再造の企あり【快元記】曰、五月十八日、大道寺藏人佐、笠原越前入道、爲使先社頭古木、又四方之樹共被見調、小別當大弓可被越之由、自氏綱有之子細者、眞里谷恕鑑方、當社造營事被申所、自大弓樣、可領掌由申、不打合實否如何之由、尋可被申云々、六月、大弓小別當被歸、申上事共無別義、造營事、眞谷武田恕鑑方、不被仰出之由御請有之十月五日、古河中田爲使、社頭之用鎌倉中木、鶴岡山算畢、按ずるに、大弓とは、小弓御所、右兵衛佐義明を云ふなり、九月總門の前の樹木倒る　九月五日、無風總門之前之築山際、櫻倒畢午剋、按ずるに櫻は說文に摩田器とあり、樹木の名にあらず、恐くは榎の字を誤りしならん、十月、氏綱社參して經營の事を議す　曰、十月廿二日天晴、午剋大守有社參、御修理之有增在之、即日小田原江遣脚力、笠原越前入道、大草丹後被召上、翌日、彼兩人上倉、社内古木已下之注文、番匠可被入支度共、大途見調了、二年二月、氏綱神主山城守等を上州に遣し、修理の募緣をなさしむ　二月九日、神主山城守、伊豆山我觀房、同宿和泉相連、上野口氏綱、爲使被差遣了、同廿二日歸倉、即少々奉加有之云々、四月、假殿事始　三月十二日、假殿下地被引誘、後大道寺藏人佐、太田兵庫助、後藤左京亮已下、奉行皆以所領役、諸侍間別請取普請、不恥昔者也、四月十一日、御假殿事始、番匠木屋入數十人、即尺木巾廊被結立、造營の料として社地及建長寺等の巨木を伐るべきの議あり　十八日、建長寺大鑑禪師寺、禪居菴之山木爲始、所々木共、同鶴岡之木共百本、可被伐之由有之、此事不可然由申、五月、上棟の儀を行ふ　上棟之儀式、廿九日、如先書之、以大鼓夜之族多之、八頃柱立、午剋上棟、天晴風靜、于鼓鍛冶番匠、勝藤諍論之間、酉剋計迄問答、僉議之番匠雖同座、大工彦左衞門者、屋形爲大工之間、且者且越之儀爲可相叶也、時剋餘移之間、鍛冶番匠同時、太刀折紙取之、　六月、造營の奉行を定む　自十一日、木屋奉行蔭山圖書助・仙波肥前入道・後藤善右衞門尉相定・惣奉行大道寺藏人・太田兵庫助相定、　氏綱判形有之、　十月、吉良氏より材木を調進す　自蒔田吉良殿可被進木、杉田浦雖被着未召上間、以五萬人早々可被召寄由、御使有之、檜木長一丈六尺、木口一尺二寸、うら木長一丈、杉長一丈六尺二寸、木口一尺二寸、此うら木一丈六尺、樅木一丈四尺、木口一尺一寸、按ずるに、杉田は久良岐郡の屬、　十一月、中郡邊放火により暫く造營を止む　十一月十二三日、大磯平塚筋を自武州河越衆被燒畢、中郡少々被燒拂、騷動不斜之間、大工以下閣了、三年閏正月、當國田名にて老槻を伐る　去月初、槻木於田名被伐之、大廿三間計云々、更鋸不屆之由申、按ずるに、田名は高座郡の屬、　二月、奉行の人數を增加し　十八日、昔者大庭平太、宮中奉行萬事取沙汰、今太田兵庫助奉行、然間毎月諸大工下工一料等、彼人躰被仰付、今月、神保入道被加了、又曰、惣奉行大道寺藏人・太田兵庫・岡田石卷勘解由左衞門・狩野左衞門尉・笠原越前・太草丹後、諸士の所領に課して、各造營の用途を出さしむ　所領役、各家老中、去年造營之出錢被仰付、諸侍神之爲奉公未代之龜鏡之間、一點無物惜云々、十一月、造營の事、遲緩すべからざるの旨氏綱下知を加ふ　十一月廿日、大道寺藏人佐、宮中巡見被差越畢、諸奉行被召集、自屋形一札各拜見云々、其一筆云、御造營中寒中候間、無油斷申付可致候、子細猶大道寺可申候、恐々謹言、十一月八日、氏綱　在判　四年六月、上總の眞里谷氏より寄進あり　六日、自眞里谷參、代物五萬四、當社造營被寄進之由、神主小別當切紙有之、奉行衆者大道寺、笠原、岡田、何被越代官畢、八月、氏綱社參して、西門の楹を自ら塗抹す　八月二日、巳剋、國守有社參、及晡時玉繩皈城、西門柱手づから被塗之、偏に依神之崇敬歟、亦者歡喜之餘歟、尊神定可令納受給耳、抑國中人足巳下、多分被入造營了、恐者公方樣、管領東八ケ國、悉被相隨共少分之造營不可思召寄、其故者君指東則臣行西、君臨西則臣又東也、臣者忘君、子者忘親、各貪利耳、剱於神社哉、以神領者授家人豈敬神明哉、爰氏綱、伊豆三島宮根之建立、先亡親之寺剩關東之宗廟、當社如此建立、希代之寄特耳、不祥者不勝德、如申者、定利生吉事可有之歟云々、亡親の傍記に早雲とあり、

良材を上總峯上に採る八月以來上總峯上之地、古木卓山之間、當社の材木被取畢、彼國屬當國即造營之材木等、可自由瑞相之由、諸人申之、天文五年二月廿七日、以國郡人夫、總州峯上材木爲可被引、數千人被差越了、以此次鳥居木可被出山云々、按ずるに、峯上郷は天羽郡の屬、八月、假殿に遷宮あり廿八日、大雨洪水、諸社人失其氣、未剋御遷以新莚雨覆成之、言語道斷之式也、九月、北條彦九郎爲昌、三浦郡大多和村を寄進す社藏文書曰、護摩堂の條に詳なり、六年七月、氏綱氏康先規に任せ、武州足立郡佐々目郷を寄附す武州足立郡之内、佐々目郷之事、任先例早々奉附御神領者也、諸願成就、皆令滿足之所、仍如件、天文六年七月廿三日、雪下院家中、在京大夫氏滿華押、平氏康華押、八年九月、神殿鳴動す【快元記】曰、三日亥刻、御神殿鳴動、番衆驚耳畢、九年四月、始て神前に香錢筐を置四月十六日、神主山城、散錢櫃爲指神前に被置之、自往古當社に此事无之、神社不享非禮義、不可然由申候處、即廿四日、自小田原符を被付、可寄造營之由有之、剩神主歡樂、是即神之祟歟云々、同五月迄煩、以外被得減氣、專以美食如元、病氣廿三日より重而被煩云々八月、大風によりて、社木倒る八月十一日、戌刻大風吹、社頭山之木、并四十本計吹倒、大木之梢吹折社中に充滿、雖然樓門拜殿之上には不懸、九月、氏綱社頭を巡見し、手自洒掃をなす九月廿二日、太守社頭巡見、廿四日、亦太守社頭巡見、廿五日天晴風靜、社頭掃除普請、太守手自被致之間、諸侍無殘人夫二千餘人、宮中充滿以大道寺藏人、御遷宮告文之沙汰有之、廿六日、普請如昨日、氏綱自被致之上悉出來畢、廿八日廿九日、普請同前、晦日、屋形玉繩迄歸路、即小田原江被歸畢、十月、梁牌の書法を議せり十月十三日、從小田原六所大明神之棟札、走湯山之棟札、太田兵庫助所被越畢、是爲本可被爲書之由也、其一書曰、六處之宮、伊豆山之棟札を寫候て如此、院家に爲走舞之名を書付候て可被越候、同神主名乘氏書候て可被越候、爲末代候間、神主も官途を被書度、附而者院家有談合、書可被越候、亦權守藤朝、何之大工にて候哉、鎌倉大工事、奈良大工をば、此方にて可相定候、棟札兩人大工を書て可越、一日自院家給候札之書樣、是願書に書候間、棟札には書間敷候、爲其走湯山の棟札を寫而越候而、如此紙を切候而院家之僧名、亦奉行五人、官途名則を書候而可越、事だにかけ候はずば、少別當死ても不苦候、又諸士、恐々謹言、十月十三日、太田兵庫助殿、氏綱、神馬太刀を奉納す廿日、山中大炊助、小畑源太郎、各神馬太刀等進獻、其外諸侍隨分限有之、廿一日、神輿下宮に移して神事あり、氏綱神馬太刀を納む廿一日己酉、天晴風靜、寅一天傘日、瀬戸神主倩之、亦少別當代々、鳥山之聖道雇之、何も兩人依汚穢、爲代官如此雇之、兩御殿司、社務代等、出仕、奉移、巳刻、赤橋際迄行幸、於下宮神樂相撲、神馬太刀以下、從太守進獻、未刻、經供養行之、三光出現天花降云々、簾中東方棧敷也、天文二年より今年に至り、凡八年にして造營落成し、十一月、正遷宮あり御造營記曰、天文三年より同九年十一月廿一日に至て造畢、正遷宮七ヶ年の内、諸堂末社等迄、昔に復し候由、【鎌倉九代後記】曰、天文九年、北條氏綱等鎌倉鶴岡八幡宮再興し、神宮寺・若宮・辯才天の社白旗の明神鐘樓・物門・廻廊・瑞籬以下、悉造營す、按ずるに、【快元記】に據るに、天文二年起工し、八年にして落成せしなり、御造營記三年の起工とするは謬なり、又按ずるに、【小田原記】に、小弓殿は高家と云、强將なれども氏綱の武勇勝人、謀かしこき故に、天文七年十月七日、高野臺にて討取給ふ、然れ共樣々御立願もありしとかや、其願を果されん爲、又は子孫の武運をも祈らん爲に、鶴岡八幡宮を建立ある、近代亂逆隙なくして、久しく修造なければ、宮々社々の朱の玉垣、朽果て、樓閣多く退轉す、依之氏綱大檀那として、神宮寺・若宮・辨才天の社、白旗の明神・鐘樓・總門・朱の玉垣・石橋を初め、百八十間の廊下まで、金銀を彫、花の椽雲形蕾牙構工成風之功、數日經營事成り、奇麗の粧なりしかども、民の煩もなく、國の弊へもなかりければ、氏綱の御威光、日追月に重りけりとあり、是も又謬なり、九年十一月、氏綱社中の法度を定む曰、【鶴岡記】御社中法度之事、御社中落書仕者、見合可搦捕事、廻廊之内世務道具不可置事、御社内之物、或質物賣買之儀、互に惡黨可爲同前事、廻廊之内、同階橋上下の者、はき物ぬくべき事、廻廊之内江、長道具可致停止事、暮に及南西何方成共、一方可爲閉門事、銀之番、毎日且暮可相改事、御社中總同山迄、落葉かき、其外薪取草苅事可留事、社人中當番、四方緣毎日可掃事、廻廊内幣殿拜殿、無塵樣可爲掃除事、御社中江、牛馬不可放、乘馬出入可被令停止事、右條々不可背之者也、天文九年庚子十一月廿一日、在判、茲年、北條氏康參詣あり【武藏野紀行】曰、過にし庚子の年、宿願の事有て、此宮に詣けるが、やうやう八とせ餘りにや、成ぬらむと覺侍る、十三年六月、氏康社中法度の條目を出す【鶴岡記】曰、鶴岡社中法度之事、掃除は一月に三度可致之、若無沙汰いたし請取之處草生に付ては、請取者奉行可改易事、植木の枝葉に手付る者是あらば、不可入高下からめ取べき事、池之掃除は二月八月、年中兩度爲大普請、鎌倉中人足不撰權門、棟別に申付、草の根をとり速可致之事、掃除すべき在所、請取之小奉行并人足、出所一度相渡候者を末代共に請取に可致之事、作道左右共に掃除すべき事、社頭之土山へかりそめにも人不上事、御社中可修理處、其外目慮之處これあらば、何時も可致披露事、院家中、神主、小別當就御社中之儀、被申事是あらば、其日に可致披露事、順禮往來の者樂書之事、固可停止事、右條々定置處如此、無沙汰者三奉行可爲曲事者也、仍如件、天文十三甲辰六月十二日、氏康華押、奉行大道寺駿河守・蔭山長門守・太田兵庫助、十四年三月、宗牧當社に詣し事、紀行に見ゆ【東國紀行】曰、三月一日、先鶴岡八幡宮參詣、松の木の間の櫻盛にて、石清水臨時の祭、舞人のかさしに思まがへり、近年御遷宮、朱の玉垣より始め、見る目も耀ぐ春の光、僅に昔憂へた り、十月、氏康願書を奉る社藏文書曰、謹奉納願書之事、三年之間、毎月可奉參詣事、萬度可申事、今度駿豆兩國取合、氏康如存可被爲遂本意候、於其上者、右之二ヶ條、急度可奉果行者也、天文乙巳十月十日奉献八幡大菩薩御實殿下、平氏康敬白、按ずるに、茲年今川義元、上杉憲政と一味し、義元は、氏康の持城駿州長久保の城を圍む、兩上杉は武州河越城を責、古川晴氏是に與す、十五年八月、社頭に參詣し、和歌を詠ず【武藏野紀行】曰、鎌倉に詣でける、あなたこなたの古跡をながめ、八幡山より四方の景色を詠め、小磯大磯を見渡せば、をしやかもめの、波に立さはぐを見れば、をし鴨のたつ白浪の磯邊より、海女のみるめを袖にかけばや、大磯の波路を分て行舟は、浮世を渡るたつきなるらん、若宮の御前に參りて、たのみこし身は武士の八幡山、祈る契りは萬代までに、此頃上杉彈正大弼輝虎、衆徒等に書翰を投

じて祈念の事を託す　社藏文書曰、雖未申通候及一翰候、抑今度當國不慮之仕合、雖然至今日手前堅固仁備候條、心易可被存候、就之早々春日山遂本意候樣仁於御神前卦立願被抽誠々祈念偏任置候、其上怨敵退散、武運長久、國下安全之祈、畢竟頼入候、何樣本意之上者、於當國神領可進候、猶重而可令申候、恐々謹言、拾月十日、鎌倉八幡宮衆徒中、景虎華押、按ずるに、【北越軍記】に據に、天文十六年、輝虎兄春景と不和により國中騷亂、同十八年、輝虎府内城に移り、長尾の家督を襲ぐ、蓋此時の事なるべし、十八年九月、門前の地、先規の如く、諸役不入たるべき旨氏康下知す　如先規不入に申付候上、横合非分之儀不可有之候、若背下知輩者、可有披露者也仍如件、天文十八巳酉九月廿九日、鶴岡院家中、氏康華押　永祿元年四月、管領左馬頭義氏、補職の拜賀として參詣せり　【小田原記】曰、四月中旬、關東公方左馬頭義氏朝臣、鶴岡八幡宮へ御參詣あり、供奉の輿十五丁とぞ聞へし、是は氏康御妹の腹に、生れさせ給ひしかば、氏綱の御孫にて御座しける儘、小田原よりも、路次の掃除以下、大道寺に被仰付、北條左衛門大夫・多目周防守・行方彈正・遠山丹波以下、江戸・川崎・神奈川・鎌倉まで、傳馬其外、御供の人々の馳走として、道中を警固す、公方樣は、あじろの輿に召れ、關宿の城主築田中務大輔御太刀を持、一色刑部少輔御沓の役、吉良左兵衛佐御唐笠を仕る、拜賀儀式眞に嚴重也、今年十八歳にならせ給けるとぞ聞えし、【鎌倉九代記】曰、四月左馬頭義氏朝臣、今年十八歳、御家督を受て、啓運祈願の爲、且は補職の拜賀の爲、鶴岡八幡宮に御參詣あり、諸代の御家人等供奉し、小結の扈從布衣の侍、美麗を調へ、二行に列りて御輿の前後左右に渡り、騎馬の武士三百人打込で跡より通る、道の雙方には、棧敷を打、幕を張籏をかけ、貴賤上下群集して見物す、公方は鳥居の本にて御輿より下給ひ、歩行して拜殿に上り、御寶前に差懸りて跪き、祈念の有樣、流石に餘情ありてぞ覺へたる、寶劔一振・卷物一箱・黄金百兩、神馬二疋鞍置てぞ曳れける、御下向道に及て、事故なく喜の眉を開き、關宿の城を立て、古河の古城に入給ふ、扇谷村齋宮所藏文書曰、御社參當日之法事、於上宮御經供養可有執行事、御所樣御社參、當日之御儀式、此分にて御歸路可被成申事、翌日、御臺樣御社參、此時御供可參神樂等可有之候、□□如此相定、院家中神主少別當江、可被申定之由被仰出候、仍如件、三月廿二日、藤山入道殿、後藤右近丞殿、北條氏虎印　按ずるに、此文書は、義氏社參の式を指揮せしなるべし、三年三月、上杉輝虎參詣して管領の拜賀を行ふ　【小田原記】曰、永祿四年三月上杉景虎小田原へ發向す、後に聞えけるは、氏康退治の爲にあらず、管領に成ては代々、若宮へ拜賀ある事なればとて、八幡宮へ參賀す、往昔の先例を尋て、拜賀の儀式を追れける、此拜賀と申すは、往昔の先例を尋て、拜賀の儀式を追れける、此拜賀と申すは、往昔の朝卿治承四年、當宮を建立ありし後、代々の公方管領、京都は程遠ければ、此宮へ參内にことよせて、拜賀ある、當社の御本地は、應神天皇とて仁皇十五代の帝の御廟なれば、禁裏仙洞同御事なれば也、今度も先例の如山内殿に假屋を建、大石・小幡・長尾・白倉等の老臣を前後にうたせ、梶原に代々の如く、太刀を持せんと尋けれども、梶原の家絶たりしかば、太田美濃守が次男、有子細彼家を相續し、號梶原源太、彼に太刀の役を勤させ、行列を調參詣の體ゆゝしく見ゆ、於寶前奏樂、社僧別當神主に沙金を與へ、悦の御酒をすゝめ則下向す、諸士辻々を固、慇懃に禮をなす、【鎌倉九代記】曰、永祿三年三月、上杉景虎小田原に發向し、押を置て鎌倉鶴岡に參詣す、【北越家書】曰、永祿三年三月、謙信公今般夾輔し玉ふ處の尚丸の御方、鎌倉の公方家、數代安全の先規を逐れ、若宮八幡宮拜賀の禮を行るべしと、豫め議決し、且は此序神前に於て、公も關東管領職補任の披露を遂らるべき内存に付て、小田原の攻口をば、關東の武者を以、堅固に是を押へ置れ、當家所屬の軍勢を引拂て、鎌倉打入件の若宮參詣の事、聊其式莫しては如何なりとて、故老の面々申に付、昔時公方家の召れたる、小八葉の車を輦なんとは、爰彼所悉たりしか共、鶴岡に在しを需め出て、持氏卿全盛の頃、竹若と呼れし、牛飼舍人の子孫、松ヶ枝と云童に御車を輦らせらる、御劍は金山の横瀨雅樂助成鑒、御沓は深谷の上杉左兵衛尉憲盛勤む、前久公の御沓は進藤左兵衛尉、御劍は富小路右衛門佐たり、謙信公も威儀を嗅ひ、騎馬にて扈從し玉ふ頃武鷹巢の城主、小幡三河守員政は勇健の士なればとて、佩刀の役に定められしが、如何なる思召や出來けん、太田資正が妾腹の嫡子を、俄に梶原源太と改號、長尾家重代、赤小豆粥の太刀を持しめらる、右梶原源太は、後に美濃守資勝と云り、籠澤采女正履を執る、調度掛は桃井主税助也、渠は奥近習の隊長にして、百發百中の射藝に達す、故を以て擢擧らる、先駈は太田美濃入道、後騎は長野左衛門大夫、其外豫參の諸隊將、越後譜代の侍、或は辻小路を警固し或は次第を逐て部伍に從ふ、鶴岡の社内は不及申、鎌倉中の神社佛閣、軍勢甲乙人込入て、亂妨狼藉せざる樣にと、有司に課せて嚴令を示さる、斯て三月廿三日辰の上刻、八幡宮の社頭に至り、尚丸御方車より下り玉ひて、寶前に跪き再拜恭敬の粧、良に優長なる直衣袴にぞ見えし、則雄劔卷衣沙金等を奉納有て、神馬を牽せらる、別當供僧宮仕等迄、莫大の引出物、今に始めざる、公の大魁、希代の壯觀と謂つべし、公は濱面の華表の許にて、徐々と下り立玉ひ、前管領家の舊臣長尾但馬入道景朴父子・大石源左衛門入道・小幡三河守・白倉左衛門佐を傍近く召連られ、直江・齋藤・本庄・新發田・柿崎・北城・河田・色部以下の舊臣に、前後左右を打圍せ、神前に祇候有て、尚丸御方後背に蹲踞し、在すが如くの拜禮、信心の丹誠を抽らる、其間東國の將士、各渴仰の首を傾け、階前庭上に并び連れて、社僧高らかに卷數を誦し、巫八乙女禰の袖を翻して、清しめたてまつる、此時千葉新助親胤・小山下野守高朝、曩祖の威言を稱して、座位の爭論に及び、公に達して裁判を請ふ、公聞召關東の八家は、朝庭定らるゝ處の高家屋形號を勅免の上は、分限の多少に因す、先代の由緒、古來の家例、尤定格有べきなれども、今陣中舊規を糺すに據なし所詮千葉殿は、東八ヶ國、諸士の上たるべし、小山殿は關八州、諸士の下たるべからずと宣ひければ、兩家納得し、左右の座次、異なる儀なかりし、是公の時に臨て、微妙の捌と云々、【謙信一代記】曰、永祿三年三月中旬、謙信三十一才、相州小田原表に發向云々、於是鎌倉山内に在て、京都より近衛殿下の公達を迎下して、公方と稱して、此を仰ぎ、謙信は管領の職に任ぜり、四月十五日、鶴岡に社參あり、今按ずるに、輝虎の拜賀、諸書皆永祿三年の事とす、然るに【小田原記】のみ、四年とするは誤なり、【北越家書】に據ば、四年三月は輝虎上洛せしなり、　下向の時總門の邊にして、成田下總守長康武州忍城主、が無禮を咎む　【小田原記】曰、忍の城主成田下總守長康、總門にありけるが、管領へ作法無禮なりとて、景虎忿り扇にて長康の額を打、烏帽子を打落す、長康は主從の儀なれば不及力、扇谷の宿に歸り、郎等共を呼申ける、吾代々上杉家の舊臣なれば、指たる恩もなきに、最前に

馳參りぬ、然るに諸人の見る所にて、いやしくも千騎の大將を、扇にて打給ふ物かな、所詮小田原と一味して、此恨を晴さんと其夜に引拂、本國へ歸り玉へば、上杉譜代の人々、誠にあらげなき大將かなとつぶやき皆居城へ引返す、景虎小田原を責んとの計事相違して、鎌倉を引拂上州へ歸りける、按ずるに、【謙信一代記】には長康神前にて、謙信大に怒れりとあり、【北越家書】に曰、關東の新公方尙丸御方、新管領謙信公拜賀の大禮事終り、貴賤親著の咲を含み既に退出の期に至り、東國の武士各列を昔して、乘馬を引付、退去の粧を馳ふ、中に武州忍の城主成田下總守長泰獨り騎馬して、社頭の前邊に在しを、公信と見留玉ひ、姑く殿下の退出を押へられ、毛利丹後守を以て、渠が尾籠を譴責し玉ふ、長泰答て申しけるは、吾家從來下馬無禮とて、大將と一同に下馬し、互に色代仕る、先祖式部大輔助隆、源頼義に相約する流例にして、鎌倉公方代々の間も其舊規更に違變の儀なし、毛頭私の擧動にあらずと、事もなげに返答しければ、公大に怒り玉ひ、何條其助隆は、頼義外戚の叔父たりと聞、然れば禮節左も有なん乎、鎌倉の御營是又頼義の後裔歴然にして、先蹤に應ぜし事餘慶の規模と謂つべし、當時に於ては、長泰既に予が幕下たり、主從の禮儀、豈其旨を辨ざらんや、己を亢て機變を知ず、第一陽明殿御父子へ對し、緩怠至極の體たらく、頗倨伺者と見へたれ、後日に取鎭め沙汰を歴べし、先以速に下馬仕、平伏すべしと、重て宣ひ諭されければ、成田是を聞て、無端とや思ひけん、何となく馬を側へ退去しけるが、諸軍勢退散の紛れに、別府・玉井・小田・坂卷・久下等の旗下、相共に忍をさして馳戻けれ、一番に大石源左衛門入道兵を伏て戸倉へ奔り、二番に千葉新助總州へ退く、是を見て小山・一色・結城・長沼・壬生・毛呂・相馬の人々、皆己が本居へ引返る、四年三月、北條左衛門大夫氏繁、境内及門前地の制札を出す　社藏文書曰、制札、鶴岡并御門前中横合非分之停止事、右違犯之族在之者、註交名急度可有註進之狀仍如件、永祿四年辛酉三月五日、鶴岡御院家中、康成華押、按ずるに〔善九郎〕康成は氏繁が初名なり、又太田美濃守資正、濫妨狼藉の制札を出せり　制札於相州鶴岡八幡宮社内、當手軍勢甲乙人等、濫妨狼藉之事、右至于違犯之輩者、可被處罪科之狀如件、永祿四年辛酉三月廿二日、資正華押、按ずるに、【北越家書】に據に、永祿四年三月、謙信在洛の間、太田三樂齋道譽棟梁として、關東衆、越後勢、小田原城へ押迫南方殆危急に及ぶとあり、七年八月、管領義氏願書を奉らる、此時出せし制札なり、立申願書事、鶴岡八幡宮寺可奉造營事、右今般令歸座上八州靜謐、就中房總至于令本意者可修造也、武運長久成就の所如件、永祿七年甲子八月朔日、元龜元年二月、佛牙舍利右兵衛佐源朝臣義氏、華押、及牛玉を奉納あり　奉納鶴岡八幡宮寺社内佛牙舍利并牛玉者也、右意趣者、武運長久所願成就、如意吉祥仍如件、永祿十三年二月吉日、右兵衛佐源朝臣義氏、華押、茲年元龜と改元す、三年四月、社領の事に依て北條氏繁、下知を傳ふ　香象院文書曰、星野田地自前々八幡領候之處近年百姓被相抱由候、然者自今以後直務被成度由、尤其段屋形樣可申上候、於拙夫神領申聊無沙汰有間敷候、屋形御證文相調候間、先拙夫以一札申入候、意趣傳奏恐々敬白、元龜三年壬申卯月五日、香象院御同宿、北條左衛門大夫氏繁、華押、天正二年閏十一月、北條左京大夫氏政先規の如く、社領武州足立郡佐々目郷を寄附す、是氏政家督を襲ぐ、父氏康、元龜二年十月卒す、の後、更に寄附狀を與へしなり　社藏文書曰、足立郡佐々目郷の事、如先規猶以令寄進候若自今以後、横合非分の儀毛頭も有之者、不及用捨可有披露候、背掟族可處嚴科狀如件、天正二年甲戌閏十一月四日、鶴岡院家中、氏康、華押、是に因て北條氏繁彼地不入たるべき由、院家供僧等に下知し、且制札を與ふ　足立郡佐々目御神領、御繼目の御判形、任先御證文之旨、被遣置候、然者神慮之御事候之間一圓役等不被仰付候、況横合非分一點毛頭不可有之候、若違犯之輩有之者記交名、可被遣置候、可被處嚴科旨、依仰執達如件、天正二年甲戌閏霜月五日、鶴岡御院家中、左衛門大夫氏繁、華押、就繼目之御判形之儀、永々島村在陣、依之申調進覽候、遲々之所、爰計萬端寂寥候間非無沙汰候、樣子委細彼方見聞候、并任存意拙者判形兩通書認進之候、萬吉期後音之時候、恐々敬白、閏十一月五日、御院家中、北條左衛門大夫氏繁、華押、制札、右佐々目郷御神領之間、諸篇不入斷而被仰出候、隨而號荒野、自他郷於當郷木草苅取事、堅被停止旨御意候背此旨輩有之者、一旦及其理、猶令違犯者、搦捕可承候、速遂披露可處嚴科如件、天正二年甲戌閏霜月五日、佐々目郷、左衛門大夫、華押、十四年三月、太田十郎氏房、舊に依て佐々目郷を寄進す　當領足立郡の内佐々目郷の事、如先規奉寄進處不可有相違候、猶以被抽精誠、武運長久之御祈念仕置候、仍如件、天正十四年丙戌三月十一日、雪下御院家中、平氏房、華押、又曰、爲佐々目郷續目之御祝儀、貴翰披閲、卯於御神殿、御祈念卷數、并三種一荷一束三卷送給候、誠以目出度存候、萬吉令期來信之條不能詳候、恐々謹言、卯月六日、鶴岡御院家中御報、十郎氏房、華押、按ずるに、此一通年號は記さゞれど、此時の物なり、九月、北條左京大夫氏直、同所神領相違あらざる由、文書を與へ　武州足立郡佐々目郷御神領之事、如先御證文、不可有相違候、諸願成就皆令滿足之所如件、天正十四年丙戌九月十七日、雪下院家中氏直、華押、且板部岡江雲齋融成奉て彼地に於て、横合非分の事あらば、披露すべき旨を傳ふ、足立郡佐々目郷之事、自今以後横合非分、毛頭も有之者、不及用捨可有披露候、背掟族可處嚴科者也、仍如件、天正十四年丙戌九月十七日、雪下院家中、江雪奉之、虎朱印、雪下院　又氏直、社地門前諸役不入の事を下知す　鶴岡御門前之事、如先御證文可爲不入候、若至于背下知輩者、可有披露者也、仍如件、天正十四年丙戌九月十七日、雪下院家中、氏直、華押、此頃、玉繩城普請の時、當社門前は不入の地たるに依て、人足を課せざる由、城主北條左衛門大夫綱成の狀あり　曰、其地鶴岡御門前不入之事、從小田原參日被申定候儀、拙者存知之事候、隨而當城普請に付て、鎌倉中家別に人足を申付候處奉行人御門前をも相改候に哉、其分可申斷候、猶以從小田原龍越候、神尾平左衛門も令談合可存其旨候、可御心易候、委細者御使に申候、恐々謹言、霜月七日、御院家中御報、北條左衛門大夫綱成、華押、十五年十一月、院家以下諸課役の事、先規に依て免除し、若小田原所用の事は、格別に命ずべき由令す、但是より先足柄城足柄上郡屬、修築の時、人夫を課せしに、院家等訴狀を捧ぐるを以て、免除せし事あり雪下院家中諸役普請之儀、地下並に不致來由候、於向後も可爲如前々候、自然於大途用所者、別而以印判可申出者也、仍如

件、天正十五年丁亥十一月六日、院家中、神主小別當、江雪奉、北條虎印、又曰、去頃足柄御普請人足の儀に付而被捧訴狀候、伊右相談逐一遂披露候、依之向後之儀、以御印判被仰出候、定而可爲御滿足候、委曲期後音候、恐々謹言、霜月六日、御院家中、神主殿小別當、尊答、板入江雪、華押、

十六年三月、北條氏上州館林の内にて社領を寄進す　今度一ケ條、所願之旨有之而祈念之儀、被仰付處、無異儀令成就候依之於館林二千疋之地、永代令寄進候、彌可被抽精誠候也、仍如件、天正十六年戊子三月廿四日、八幡宮院家中、北條氏虎印

十七年十月、大道寺孫九郎直繁願書を奉る　指上願書之事、拙者存詰於成就仁付而者、二腰御太刀、二張御弓、一鎧御武具、三千疋御修理錢、二疋御馬以上、右三年之内に成就に付而者、急度拙者參詣歟不然者以手代、進納可申、猶以御芳情之所奉守旨、仍如件、乙丑十月五日、卯、鎌倉鶴岡八幡宮、大道寺孫九郎平直繁、華押、

又此頃、社地の人夫課役ありしを北條左衛門大夫氏勝私に免除す　芳墨薫披、令得其意候、如蒙仰當地無際限取亂候、然者貴山中人足の儀可指出由、小田原以御印判被相定候處、愚拙以自分可致用捨儀、鹽味不淺候、併御佗言無了簡存間、人足罷出分、拙者於手前申付候、可爲神忠候、恐々謹言、十月八日、鶴岡御院家中、神主小別當、尊答、北左氏勝、華押、

十八年四月豐太閤小田原陣の時、制札を出し禁制　鎌倉八幡宮、軍勢甲乙人等、濫妨狼藉事、放火事、對社家坊中相縣非分課役事、右條々堅令停止之訖、若有違犯ノ輩者、速可被處嚴科者也、天正十八年卯月日、秀吉朱印、七月、凱旋の時當社へ參詣あり　【大三川志】曰、七月十四日、秀吉小田原を發す、鎌倉を一覽せんと、藤澤の驛より鎌倉に入、鶴岡の八幡の祠を拜す、秀吉歸洛の後社頭造營あるべしとて、先假に修理を加ふ、早川主馬首長政・片桐市正直倫等奉て、三浦、鎌倉及武州小机等の村村に課して、人夫及用途を出さしむ　社藏文書曰、鶴岡八幡宮共并門、何も被成御建立候、其内先かりふき事、被仰出候、如前々竹木かや繩人足等罷出、雪下七人、院家中神主小別當、被申次第可立之候、近日御歸陣可被成候條、其以前に急度可相働者也、七月十七日、三浦・小机・鎌倉、地下人中、早主馬首長政、片市正直倫、各華押、小机は都筑・橘樹兩郡の屬、又曰、當社造營事、於御歸洛の上、急度可被仰付候、聊不可有別儀候、猶山中橘内可申候也、天正十八年八月廿二日、十九年五月、東鎌倉鶴岡八幡宮社家神人中、秀吉朱印、

照宮御分國中の材木を以て、當社造營あるべき由秀吉演達す　當社伽藍事、江戸大納言可有造營之旨、被仰聞候、可成其意候、猶增田右衛門・片桐市正・山中橘内可申也、天正十九年五月十四日、鎌倉鶴岡八幡宮社僧中、太閤、朱印、又曰上候鎌倉鶴岡八幡宮造營事、最前如上意直雖可被仰付候、於樣體其方外聞候間、分國中材木被付立、早々被申付尤候、五月十四日　增田右衛門可申付候、猶增田右衛門・山中橘内可申也、

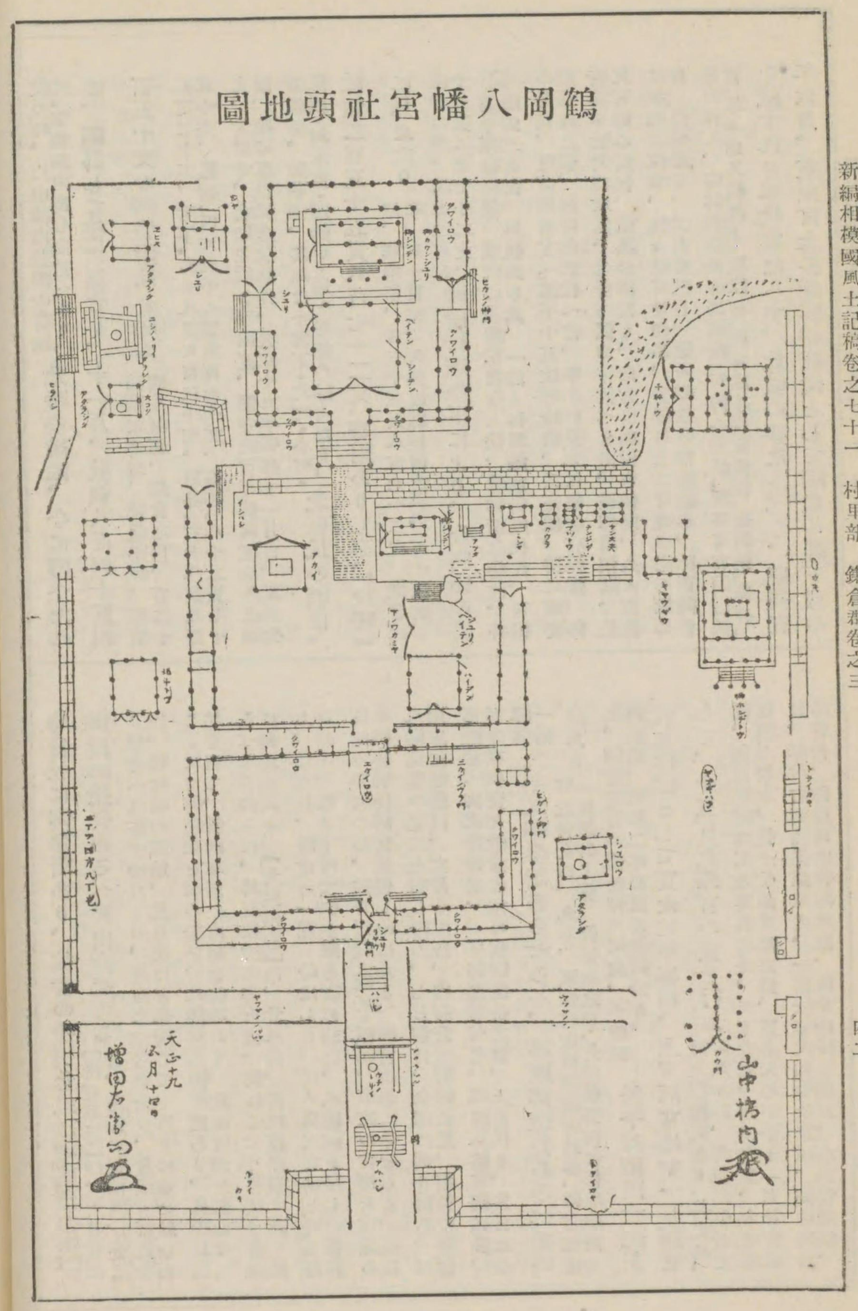
江戸大納言是に依て、社頭悉く修理を加へらる　御造營記曰　天正十八年七月、東照宮樣八幡宮へ、被爲遊御參詣候節、北條氏綱造營の社頭、五十餘年星霜隔、悉及破壞候に付、早速神殿被萱覆被爲仰付、源家累代尊信之社頭故、良材を以、華構御造營被爲有思召候に付、天正十九年五月十四日、增田右衛門・山中橘内へ被仰付社頭地繪圖出來仕候得共、其節未海内靜謐ならざれば、御造營之御止、被爲成御延引云々、按ずるに、朝鮮役の時、山中橘内長俊の書翰に當社修理調し由見へたり、此時の繪圖、今に傳へたれば、縮寫して後に出せり、

十一月、社領八百四十貫四百五十文の御寄附狀を賜ふ　社藏文書曰、寄進鶴岡、相模國小坂郡、鎌倉之内、百二十五貫三十文、雪下、九十八貫八百三十文、扇谷、六十八貫五百五十文、亂橋、四百五十八貫九百七十文、本郷、八十九貫七十文、常明寺、右如先規令寄附訖、彌守此旨可抽武運長久之精誠、殊可專祭祀之狀如件、天正十九年辛卯十一月日、正二位源朝臣、御華押、其地は今雪下・大町・小町・北條氏の頃は、亂橋・材木座・淨妙寺・扇ケ谷等の村々なり、

社領二百五十五貫八百七十二文、寄附ありし事、【役帳】に見えたり　曰、鶴岡領、百五十五貫八百七十二文、鎌倉社地、五十貫文、久良岐郡杉田之内、五十貫文、鎌倉の内、以上二百五十五貫八百七十二文、神殿修理の事により、全阿彌の書翰　爲年頭御祝儀、總代に最勝院被指上候、殊御祈念卷數、并蠟燭三百挺、則披露申處、一段と御機嫌能御座候條、可御心易候、隨而拙者方へ銀子十五枚送給候、忝存候、將又御寶殿修理之儀、則得御意候へば、幸小刑爰元に被罷有候條、御直談不致大破以前、造營の儀申付候べき由、被仰出候間、是又可御心安候、依其最勝院も、此方に相留申候間、久々當表に被相詰候間、能々禮可被仰候、委細口上に可被申條不能具候、恐惶謹言、二月廿四日、猶々御住合能披露申、殊更御修理の義も、得御意則被仰出候條、可御心安候、萬事可有□□候旨、早々申入候以上、院家中、神主殿小別當貴報、全阿彌、華押、

を藏すれど年代詳ならず、此頃の事なるべし、慶長五年六月、東照宮上杉景勝御征伐として關東へ御下向の時當社に御參詣あり、往昔の佳例を追れ御凱陣の後、神殿御造營あるべき由命ぜらる　【關原軍記】曰、六月廿八日、藤澤に御泊り、是より鎌倉へ立寄せ給んとて、江島に至らせ給ひ、片瀨・腰越を經、稻村崎の道筋、星月夜など御覽じて、雪下に着せ給ひぬこゝにて御裝束を改め給ひ、八幡宮へ御拜禮あり、其後別當坊を召て、當社草創の由緒を御尋あり、此後社頭を修造せらるべしと仰られ、其夜彼所に御止宿、明れば七月朔日、金澤に御止り云々、【大三川志】曰、廿八日、神祖藤澤驛に到り給ふ、廿九日、鎌倉を一覽し給はんと、江ノ島天女祠を拜し、景勝ひ云々、雪ノ下にて御旅服を改め給ひ、八幡祠を拜し、景勝征伐の勝利の爲、往昔頼義・義家・頼朝、源家の吉例を尊慮あり御勝利後祠宮造營し給はんと、祠宮の者に命ぜらる、是夜八幡別當の宅に止宿し給ふ、七月朔日、金澤に到り給ふ、石川忠總留書曰、六月十六日、内府公大阪御發足、相州の内舊都鎌倉へ御立寄被成、一日御逗留有之、鶴岡八幡宮御社參、四方有御覽而鎌倉如元可爲御造營之旨、上意候き、其日は金澤御一宿　九年又御參詣あらせらる、神殿御造營あるべきの命あり　御造營記曰、九年、東照宮樣被爲遊御社參、御宮建逐一被遊御上覽、御歸城之節、先年被爲仰付候地繪圖の通、御宮造替の儀被仰出候處、不被成御成就、元和二年被爲遊甍御云々、松平右衛門大夫正久を奉行として寛永元年事始、上下兩宮は十一月落成して、十五日正遷宮の式を行ふ　同上○棟札あり、其文に、神風永扇、邦基超盤石之固、德日常耀武運過箕裘之長、天下安寧、萬民樂業、大檀那征夷大將軍、從一位源秀忠立焉、寛永元年甲子十一月如意珠日、奉行右衛門佐源正久、一藏法印大和尚位賢融、御殿司法印賢仲、御殿司權律師元恕、神主山城守清元、小別當周能、

鶴岡八幡宮社頭地圖



大工遠江守藤原諸堂社は三年に至て、悉く落成せり、五長次とあり、年八月社中法度の御朱印、及び奉書を賜る御朱印の文曰、今度社中諸法度相定之訖、條々具在奉書、堅可守其旨者也、寛永五年八月朔日、御朱印、鶴岡八幡宮御奉書曰、定、神事法事無懈怠可勤仕、并供僧社人社頭の諸役等、不可有怠慢、若於猥之輩者、可被改替其職事、神社堂塔小破の時、隨分可加修理、自然及大破者、可申上事、御供方如前々、小別當可爲奉行事、掃除の事、社中者小別當并神主石川、如先規可申付之事、上宮者雪ノ下門前ノ者、諸社人可役之、廻廊拜殿四方之緣者、當番之社人可勤之事、下宮者鎌倉中、如前々一月兩度、棟別可致掃除事、供僧中事、相教相學問可相嗜事、供僧社人如先規、可正禮儀、有違犯之輩者、可追放事、宮中三方堀、雪下中殺生禁斷事、付瑞籬之内に牛馬を放置に於ては、爲過代其牛馬を取べし、并三方堀汚穢の輩有之者、其堀前の家より可出過料事、自然供僧社人門前中に、火事於有之者、其近隣者防私宅之難、其外者可除宮中之災事、鎌倉中火葬事、東者座禪川、西者今小路迄、如前々停止事、付重服之族、五十日は可住他所、又五十日者可蟄居私宅事、公儀御法度、有違背之輩者、供僧社人遂穿鑿、可申上事、社中并坊中之山林竹木等、於盜取族者可處罪科事、右堅可相守此旨也、仍執達如件、寛永五年八月朔日、鶴岡八幡宮一膳、前橋侍從、佐倉侍從、華押、崇源大夫人、殊に御信仰あらせられ、春日局屢御代拜を勤めしとなり鶴岡御造營記寛文八年、松平備前守隆綱を奉行として、御再建ありの棟札の文に、上棟相州鎌倉鶴岡八幡宮、寛文八年戊申八月十五日、征夷大將軍左大臣正二位源朝臣修造、奉行從五位下前備前守、源姓松平氏隆綱、大工鈴木修理藤原の長常、本原内匠藤原義永、下宮棟札同、但八幡若宮と記せらる、八月十五日、上下兩宮遷正宮の式を行はる御造營記元祿十年、酒井河内守忠擧を奉行として御修營あり、二月廿九日、事始、九月十五日、正遷宮同書元文元年、松平左近將監乘邑を奉行として御修營、久世隱岐守暉之助役す【承寛雜錄】四月朔日事始、九月十五日、正遷宮、戸田越前守忠余、御代拜十七日なり、上宮へ眞の御太刀一腰、黃金三枚、下宮へ作り御太刀一腰、黃金一枚を御進獻、以上御造營記、寶曆三年、堀田相模守正亮を奉行として御修理、三月十六日、事始、九月十五日、正遷宮、阿部伊豫守正岑御代參十七日なり、御進獻の物、元文度に同じ、天明元年、松平右京大夫輝高を奉行として、御修理、五月廿二日、事始、八月十五日、正遷宮、青山大膳亮幸完、御代拜十七日、御進獻の物、同上、其後諸堂社、大破に及びしかば、文化十四年十二月黃金七百兩、を賜り、修理の料に値らる、文政四年正月十七日夜上宮以下、樓門・廻廊・武内社・白旗社・大供所・愛染堂・六角堂・新宮社及裏門・鳥居等、回祿に罹り、十一年戊子、御再建あり、例祭四月三日下宮の神事あり、八月十五日上宮の神事を行ふ、十六日流鏑馬あり并に上下兩社の條に詳載す又二月十一日の初卯の日、及八月十六日の

夜に陪從神事あり、十一月初卯の陪從は、【東鑑】建久六年の條曰、十一月十日辛卯、鶴岡御神樂也、將軍家有御參、陪從、江左衛門尉景節、唱秘曲等、于時風雨俄起、殆有神感の瑞云々、及成氏が年中行事曰、十一月初卯、八幡宮、陪從、代官御一家有社參、祭禮過まで、終夜社頭に被籠、神事過御代官、御幣被給て後有歸參、に見ゆ、又河内守親行が仁治の紀行にも、陪從の事を載たり【東關紀行】曰、鶴岡の若宮は、陪從を定て、四季の御神樂怠らず云々、【東鑑】等を按ずるに當時は此餘の常祀ありしなり、三月三日、舞樂・流鏑馬・馬長・相撲等を興行す、是文治五年に始て行はる【東鑑】二月廿一日條曰、筥根兒童等、依召去夜參著、是爲勤仕來月三日、鶴岡舞樂也、童形八人、增壽・筥熊・壽王・閉房・楠鶴・陀羅尼・彌勒・伊豆石丸等也、於別當坊、自今日始調樂、山城介奉行之、三月三日條曰、鶴岡法會被始行之、已刻二品御參宮、別當法眼圓曉、并供僧等著座、舞樂、馬場流鏑馬十五騎、而來相繼て祭期とす　按ずるに、是より後【東鑑】に、此神相撲十番等被初之、事執行ありし事、多く載たれど、今爰に省けり、下に記す神事も又同じ、但此日、箱根の兒童等を召て舞童とせしが、建久四年三月より供僧の門弟及諸侍等の子弟を選び舞童とせらる【東鑑】二月七日條曰、來三月三日、鶴岡法會舞樂事、先々召伊豆・筥根兩山兒童等、雖遂行之、供僧門弟等已有數多、又御家人子息等中、撰催可然少生、可調樂の旨、被仰若宮別當法眼、因之因幡前司子息摩尼珠、判官代子息藤一、筑後權守子息竹王等、應其撰三月三日條曰、鶴岡法會、將軍家御參、舞樂如例、但當宮別當供僧等門弟、并御家人子息等爲舞童也、社務記錄曰、若宮兒十二人、并御所侍子息等、童舞始在之、　五月五日神事流鏑馬あり、文治三年始て行はれ【東鑑】九月九日、流鏑馬・競馬・馬長・相撲あり、文治五年に始れり　九月九日記曰、鶴岡八幡宮臨時祭也、流鏑馬以下如例、　此他屢臨時の祭を執行せり　二月廿八日條曰、鶴岡宮被始行臨時祭、二品御出云々、著御廻廊の後、有流鏑馬、二騎、幸氏・盛澄射之、馬長三騎、渡馬場、遠近御家人爲營勤、此會群集、是文治四年二月に權興す、建長四年四月より臨時祭に奉幣の使を立て、將軍の參宮を罷らる　四月十六日條曰、每臨時祭、前々將軍必有御參宮、於向後者、被止其儀、御奉幣者可被用御使の由、治定、是親王行啓、不可輙の趣、依有其沙汰也、以上の神事、今皆廢す、神樂は正月三箇日、同十三日　白旗社祭奠、二月・十一月初卯陪從神事三月三日・四月三日四日　太々神樂　五月五日・七月七日・八月十五日・九月九日及例月朔望に奏す、【東鑑】養和元年閏二月廿一日の條より、文永二年三月九日の記に至る迄、四時及臨時に神樂を奏せし事、往々見えたり、建久二年十一月、上下兩宮正遷宮の時、多左近將監好方宮人の曲を唱ふ、是召に依て下向せしなり　十月廿五日條曰、來月鶴岡可有遷宮之子細、被疑群議、爲令唱宮人曲、召下多好方十一月廿一日條曰、鶴岡八幡宮并若宮、及末社等遷宮也、已

殿内奉遷、好方唱宮人曲、頗有神感之瑞相、社務記錄同、但其賞に、飛驒國荒木郷を賜ふと云、　此時神樂所を置かれ、左右の長を命ぜらる【東鑑】同條曰、神樂所此時被始置之、左一者平内府生狛盛光、右一者多左右門尉景節、　十二月、當社神事の爲、山城江次久家以下の士を遣し、多好方に附て神樂の秘曲を相傳せしむ　十二月十九日、爲鶴岡神事、遣山城江次久家以下侍十三人、可傳神樂秘曲之由、被成下御教書於好方之許也、爲鶴岡八幡宮神事、山城江次久家以下、侍十三人被遣之、爲弟子撰器量、可被教立神樂一座の所作、總被沙汰出後如本社、始行二季御神樂、可被上洛也、弓立星歌者、爲秘事之由聞召、然者相傳の仁、重可被仰遣、且又其志可有御存知也、者鎌倉殿仰旨如此、仍執達如件、十二月十九日右近將監殿、盛時奉、在判、按ずるに、久家後右近將監となる、　三年三月、又右近將監久家を京師に遣し、多左近將監好節より神樂の口傳故實等を相傳せしめらる　三月四日條曰、江次久家、爲相傳神樂秘曲等上洛、仍被遣奉書於左近將監好節の許、平民部丞盛時奉行之、江次久家所上遣也、弓立星歌等爲相傳、上洛之由申之、件歌以下神樂口傳故實、入意能々被教授、來八月放生會以前、定被參向關東歟、其時相具久家、可被下向、者鎌倉殿仰旨如此、仍執達如件、三月八日、盛時奉、　四年十月、來月神樂を奏すべきに依て、多好節下向あり、久家も相伴て下着す、十月七日、多好節依召、自京都參著、來月於鶴岡、依可有御神樂也、又右近將監久同歸參、是爲相傳秘曲、先日所上洛也、宮人曲不殘一事、傳受の由申之、加之好方載狀言上其旨、非譜代の輩雖不傳此曲、隨嚴命、悉以令授之由、　十一月好節神殿にて秘曲を奏し、星辰影現の瑞あり　十一月四日、鶴岡八幡宮神事也、將軍家御參、先被行問答講、次及深更有御神樂、多好節唱宮人曲、于時陰雲俄横、而兩灑瑞籬、寒天雖暗、顯星現寶殿、福威揚焉、凡耳難覃、五日、右近將監久家、進鬢去夜降臨于鶴岡之星圖、將軍家殊に有信仰、嘉禎三年七月、右近次郎久康を洛に遣し、左近將監中原景康に附て歌曲を相傳せしめらる、是當社神事に奏すべきためなり　七月八日、就右近次郎久康申請、可令授神樂歌曲於久康之旨、被遣御教書於左近將監中原景康是爲鶴岡御神樂也、　又年中の法會祈禱は、正月元日上宮、四日若宮、五日藥師堂修正會　按ずるに、建久三年正月、始て執行ありし事、【東鑑】に見えたり、其文各條に註す、社藏長祿三年の記曰、當社修正始行事者、建久三年壬子正月日、御壇供之分、自公方以鳥目、下行之間、各坊人等、承仕等請取之、壇供調進、納之申者也、大小小餅三色有之、上宮御壇供、大二百五十枚、小二百五十枚、小餅三百六十四枚、下宮御壇供、大二百五十枚、小二百五十枚、小餅三百六十四枚、上下之神前悉皆備之、修正始行之間、御布施鳥目三百三十貫文、奉行梶原景時、大庭平太景義、別當宮圓曉、廿五菩薩、二百六十貫文、各十貫文宛配分、二十貫文、初後夜導師加布施兩人、各十貫文宛、二十五貫文、諸所作加布施、各五貫文宛、御布施取事、別當御布施、雲客或諸大夫、廿五菩薩、諸大夫或政所寄人、相殘鳥目廿五貫文、供燈油、并廿六人、各坊官等、同樣仕等下行有、修正米同自公方下行之、御奉行同前、三十石各一石宛、僧膳料也、相殘米四石、供并廿六人各坊官等、同樣仕等下行之、御壇供配分之時者、各坊人等、同樣仕等、爲奉行有配分之者也、別當廿五菩薩、合廿六人之坊中、可配分申者也、上宮大五宛、小五宛、

小餅十枚宛、下宮同前、御壇供各坊官中等、并承仕等中、有下行之、建久年中以後者、別當供僧江、料所御寄進之間、自公方壇供修正米下行無之、然間別當供僧、其後以御談合之儀、修正米壇供事者、別當供僧之以知行之内、修正米御壇供被寄之者也、修正米者、自別當領被納處、近年無其儀、壇供計者、于今無退轉、然間社家次供僧中、殊所作人爲本、可有配分之處、近年衆中之配分不足也、三色之壇供又無之、只大計有配分、殊更大所作之加分、一切無之、仍者正月下宮若宮神前、御壇供、於爲不備置、修正行事、於當社前代未聞也、然間彼是之子細、社家申處、成敗尤之由、被仰出之間、如先規被定置處也次壇供奉行事、先規者各於坊人之處、近年當執行之内者、承仕等計也、然間衆中之各坊人雖可出當會所之坊人二人、執行之坊人一人、承仕等、酒間大夫有談合、自諸卿納壇供於可請取者也、配分之時同前、御壇供配分之事、社家御壇供如例、僧衆各大二宛、小二宛、小餅五宛、大導師加布施、大二小二初夜導師、大二、所作五人加布施大各一枚宛、并兩御殿司、大一小一小餅一、是者根本無之、四條大納言隆房卿息、別當隆辨御代定之、次壇供奉行執行坊人一人、兩會所坊人二人、小二枚宛、可有下行也、已上諸役人壇供下行如例、壇供大小小餅寸形別在之、長祿三年三月日、兩會所權僧都快重、權少僧都胤快、當執行法印賢超、右所定如件、

毎月朔旦、及八月十五日夜、大般若經轉讀あり、【東鑑】等を閲するに、臨時大般若經轉讀の事往々あり按ずるに、【東鑑】養和元年八月を始とす、應長元年正月、北條貞時、大般若經轉讀の料所として、駿州池田郷の内を寄進す（社藏文書曰、寄進、駿河國池田郷内、田畠屋敷事、注文在別紙）事、右爲鶴岡八幡宮、毎季大般若經轉讀料所、寄進狀如件、延慶四年正月十九日、沙彌、華押、按ずるに、玆年應永と改元、池田は有渡郡の屬、小田原北條氏の頃も、神前にて大般若眞讀の事あり 圓覺寺佛日菴文書曰、上樣御煩に付而、鶴岡御神前において大般若眞讀、可被成由被仰出、如嘉例衆中相觸、并諸色調之、事嚴密に可被成候此一札參着次第、早々可有開白候、公物の内、最前に可入分、御書立可給、委細口上に申含候、恐々謹言、八月六日、佛日菴床下、板部岡入道江雪、安藤豐前良整、各華押、二月、十一月の初卯、七月七日、八月十六日の四度、上宮にて法華經供養ありるに【東鑑】等に經供養の事、往々記載す、七月廿四日、一切經會按ずるに、【東鑑】等に文治五年始て行はれ、三月三日を以、常期として執行ありし事、往々見へたり、毎月卯の日、八幡講按ずるに、【東鑑】文永二年三月、執行せし事所見あり、廿一日、御影供を行ふ、此余の法會、【東鑑】等に記載せしは、壽永元年八月、六齋の講演、文治四年二月問答講此後往々、執行ありし事、見へたり、但其内、寛喜三年五月、炎旱旬に渉り、疾疫國に滿るに依て、十ケ日の間、修行ありし事見ゆ、建仁元年二月、仁王經會按ずるに、【東鑑】承久三年五月廿六日條に、世上無爲祈禱として、仁王百講を修せしめし事見ゆ、承久軍物語同じ、十一月、最勝王經八講【社務職次第】に、建仁元年十一月、於上下宮、法華最勝御八講始行、毎年式とあり、【東鑑】脫漏、嘉祿元年正月十四日條曰、二品爲御願、於鶴岡八幡宮、最勝八講被始行、今年以後毎月、此儀可刷之旨被定仰云々、等を修せしが、今皆廢す、又百怪祭

【東鑑】曰、建保元年八月廿八日、去廿二日、鶴岡奇異事、爲兵革兆之由、依有申入之輩、於八幡宮、被行百怪祭、諸神供、正嘉二年三月十九日、於墓泥塔供養建仁三年八月廿九日、鶴岡寶前、被修諸神供、將軍家御不例追日增氣、仍於鶴岡寶前、嘉祿元年五月廿被供養八萬四千墓泥塔、千僧供養日、千僧供養之事、有其沙汰、爲衆徒坐、於鶴岡廟庭、被造假屋等、廿二日、於鶴岡八幡宮、而千二百口僧供養有之、等を行ひし事見ゆ、又佛經新寫の供養ありし事數度なり、臨時の諸禱【東鑑】文治三年四月四日、源義經が在所聞えざるを以て、祈禱を命ず、其餘は祈雨、或は合戰勝利、病惱平癒等の祈禱なり、ありしも屢なれば、記するに及ばず、

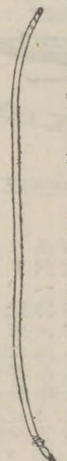
新編相模國風土記稿卷之七十一終

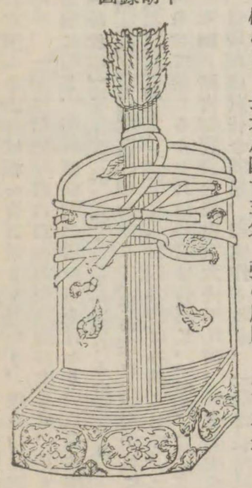
新編相模國風土記稿卷之七十二

村里部　鎌倉郡卷之四

山之内庄　鶴岡三

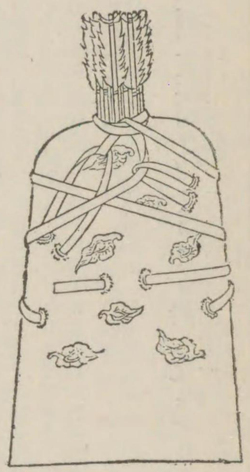
○鶴岡八幡宮三【神寶】△弓一張源頼義當社勸請の時、石清水の神寶たりしを申し下して奉納すと云傳ふ、元は二張あり、上下兩宮に藏せしが、文化四年火災の時、一張焼有す、△平胡籙二口二口共、製作同くして、一口には矢十五筋を盛る、是も弓と同く、頼義の奉納と云、△太


弓圖

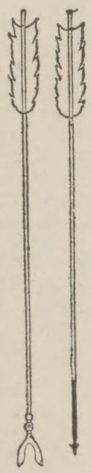

平胡籙圖

檀弓にして惣朱漆、弦は鍮石にて包み弭より下に樋あり、長六尺四寸五分、弭の所圍、二寸二分、

平胡籙圖



矢圖



刀十二振　二振は衛府太刀、二振は兵庫鏁太刀なり、皆頼朝の帶せし物と云、三振は糸卷太刀にて、北條氏綱の寄納なり、二振は白鞘にして、長中心共二尺九寸、行光の作銘あり、三振は當社御修理落成の度毎に御寄納ありし太刀なり、正恒・長光・國持等の銘あり、

△大太刀一振　本多彌八郎正信奉納す、長中心共六尺四寸、巾一寸三分、銘あり、曰、大納言家康卿武運長久、持者今度唐入、早速御開陣丹誠旨趣仍如件、相州鶴岡八幡宮、奉寄進者也、

【衛府太刀圖說明】二振共同し鍔にて、少く大小あり、大の方、長三尺五寸二分、小の方三尺四寸八分、柄銀にて、鮫皮の如く打出なり、鞘沃懸地に螺鈿にて杏葉を置、故に杏葉の太刀と稱す、帶取のはし一は銅物なし、（帶取のはし一は銅物なし）

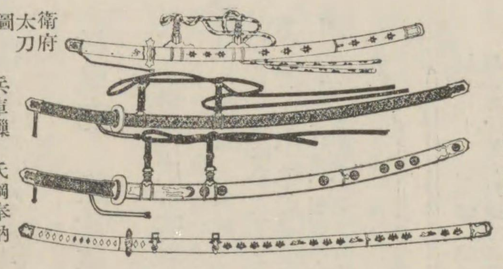
【兵庫鏁太刀圖說明】一振は柄鞘共に銀の板金にて包み、七寶の文あり但板金の合口に細き板金を當胴金を以て止たりされば胴金を去れば板金皆取放るゝ製なり、鏁金物共都て銀を用ゆ、一振は柄鮫皮鞘は銀の板金に菊の文あり、是も取放の製前に同じ、帶取紐萠黃白紫の組を付たり、二振共作銘なし、【鎌倉志】に古法の兵庫鏁とは製作異なる由記せり、

【氏綱奉納太刀圖說明】柄金地にて、卷糸茶色、鞘梨子地に金蒔繪、金物皆赤銅唐草毛彫あり、三振共鍔は各異にして、二振は花田糸にて卷たるのみ其餘の鍔は皆同じ、一振長三尺八寸餘、銘に奉納八幡宮御寶殿北條左京大夫平氏綱、天文七戊戌年八月二日所願成就皆令滿足、綱家作とあり、一振は長四尺二寸餘、銘文上に同くして康國作とあり、一振は長四尺二寸、是も銘文同くして相州住綱廣作と彫れり、社傳に慶長五年、東照宮奥州へ御出陣の時、五月廿九日、當社に詣ぜられ此三振の内康國作の太刀を、御陣中御隨身あり、台德院殿大坂御陣中も亦然りと云傳ふ、

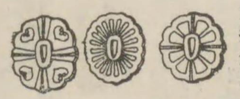
衛府太刀圖

兵庫鏁太刀圖

氏綱奉納太刀圖



三振鍔圖



綱家太刀赤銅にて金覆輪あり、下同

康國太刀

綱廣太刀

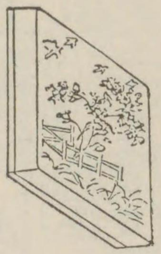
△兜一頭　贈大納言光圀卿奉納、鉢は三十二間、黑漆にて、鍬五枚銀小札、白糸にて威し、耳糸啄木なり、

△太鼓一面　慶長關原御陣中に用ひられし物にて後御寄附ありしと云、胴の裏に、慶長の年號を記せり、今祭禮の時用う、圓徑二尺、

△寶螺一口　是も同じ御陣に用ひられし軍具にて、同時の御寄納なりと云、朱にて文字あれど、剝落して僅に大口鶴岡八口口慶長十等の文字のみ讀べし、

△硯箱二合　一は源頼朝所持と云傳ふ、硯・墨・墨鏈子・香箸等具れり、一は攝州勝尾寺、木食以空の奉納にして、梨子地鶴龜の模樣あり、硯・水滴・筆管・筆帽・錐・小刀夾剪・小刀の柄に、以空上人寄給、丹波守信之と銘す、硯箱長八寸、巾七寸五分、

△疎影硯一面　今大路方本多彌八郎正信、天正十年壬辰八月十三日、敬白、



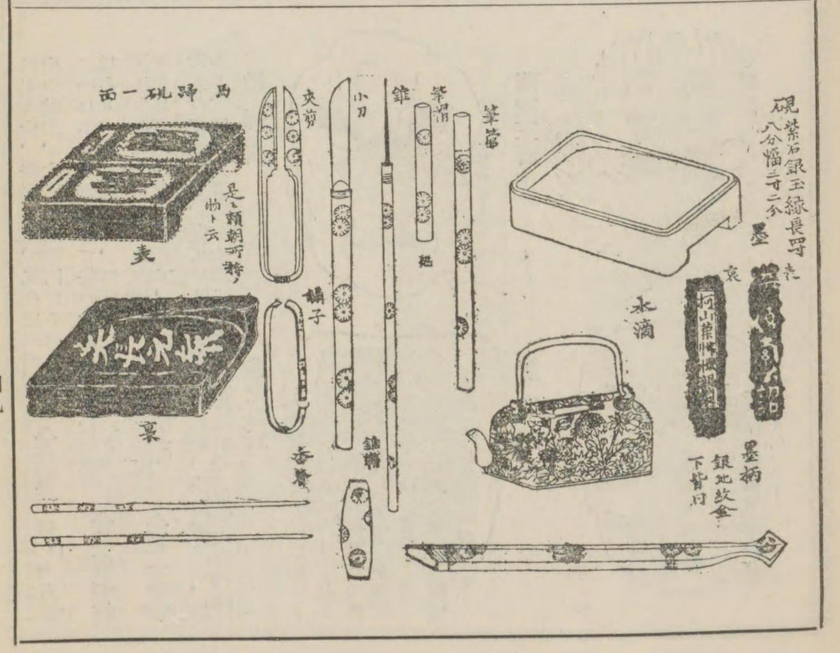
頼朝所持硯箱圖

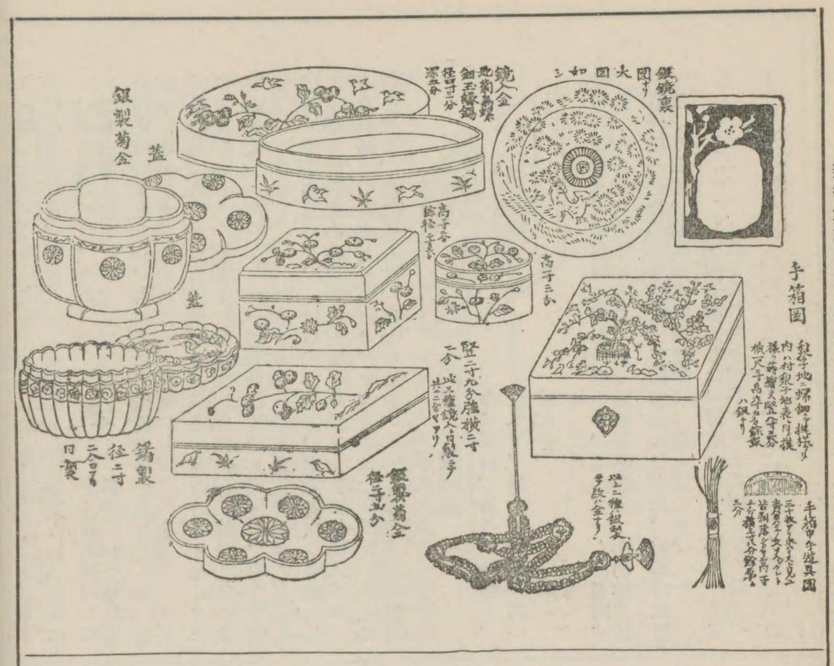
金泥蒔繪、錫の玉緣あり、竪八寸、横七寸一分、高一寸二分、

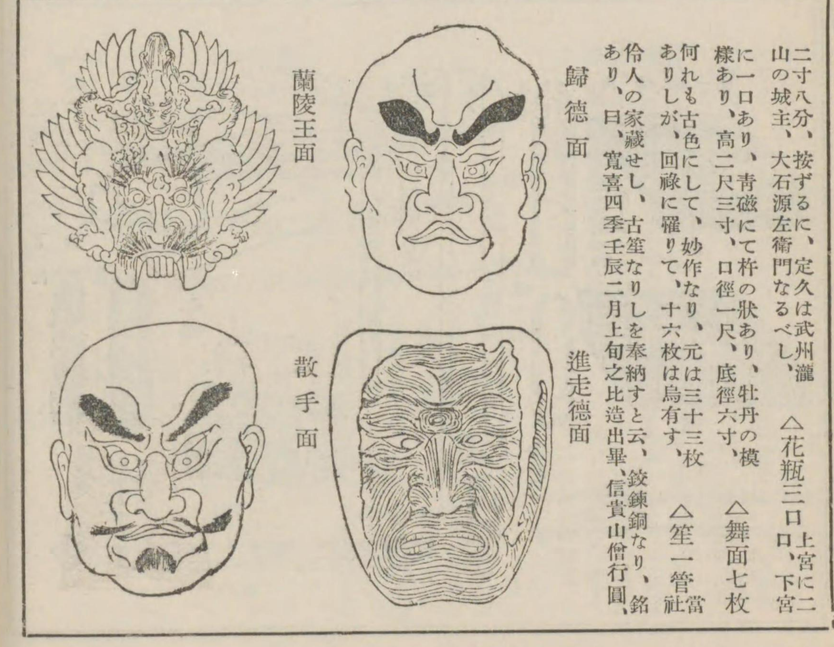
教の奉納なり、硯面梅花疎影の形あり、故に名づく、竪四寸二分、横三寸、背に銘あり、曰、爲祈子孫榮班、奉納林和清疎影潤硯一面於鶴岡八幡宮、寛保改元六月吉旦、贈正二位道三法印八世嫡、前民部大輔典藥頭橘方教と記せり、

△十二手箱一合　平政子所持と云、替匣二あり、種々の手道具を入れたり、下に載する圖に就て見るべし、

△香合一合　堆鳥にて、圓徑二寸七分、底に八幡宮奉納天文三年甲午五月一日、定久と銘あり、徑





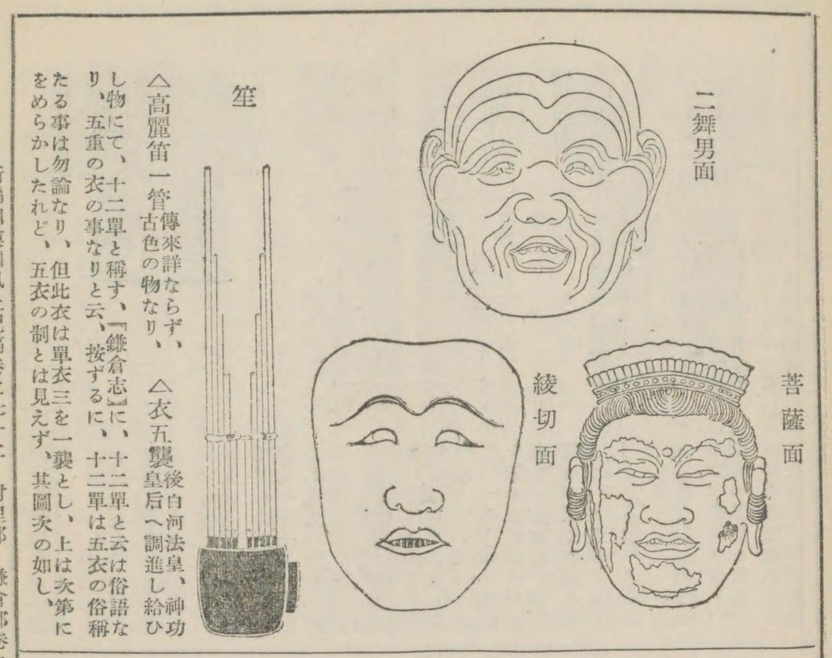


二寸八分、按ずるに、定久は武州瀧山の城主、大石源左衛門なるべし、

△花瓶三口　上宮に二口、下宮に一口あり、青磁にて杵の狀あり、牡丹の模樣あり、高二尺三寸、口徑一尺、底徑六寸、

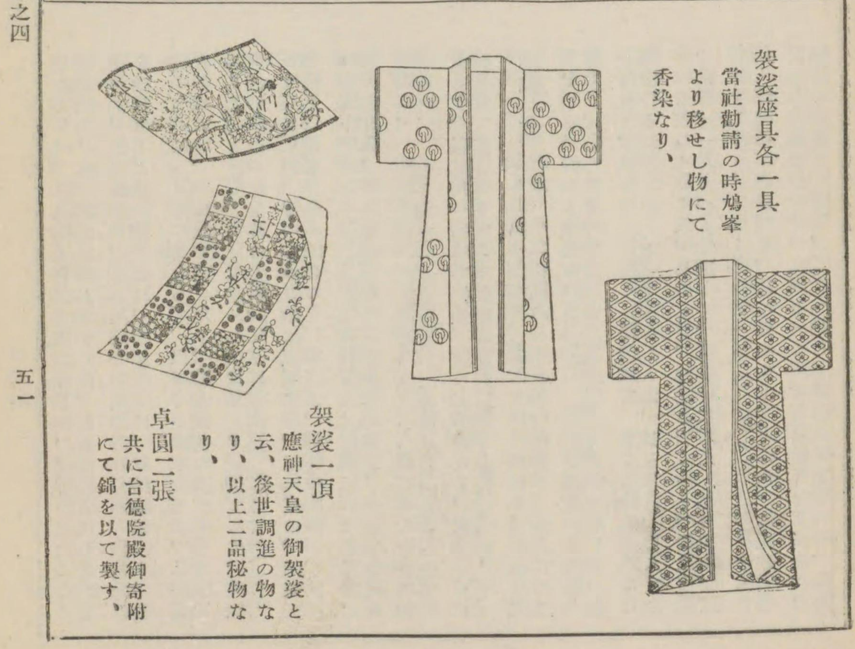
△舞面七枚　何れも古色にして、妙作なり、元は三十三枚ありしが、回祿に罹りて、十六枚は烏有す、

△笙一管　社當伶人の家藏せし、古笙なりしを奉納すと云、鉸鍊銅なり、銘あり、曰、寛喜四季壬辰二月上旬之比造出畢、信貴山僧行圓、



△高麗笛一管　傳來詳ならず、古色の物なり、

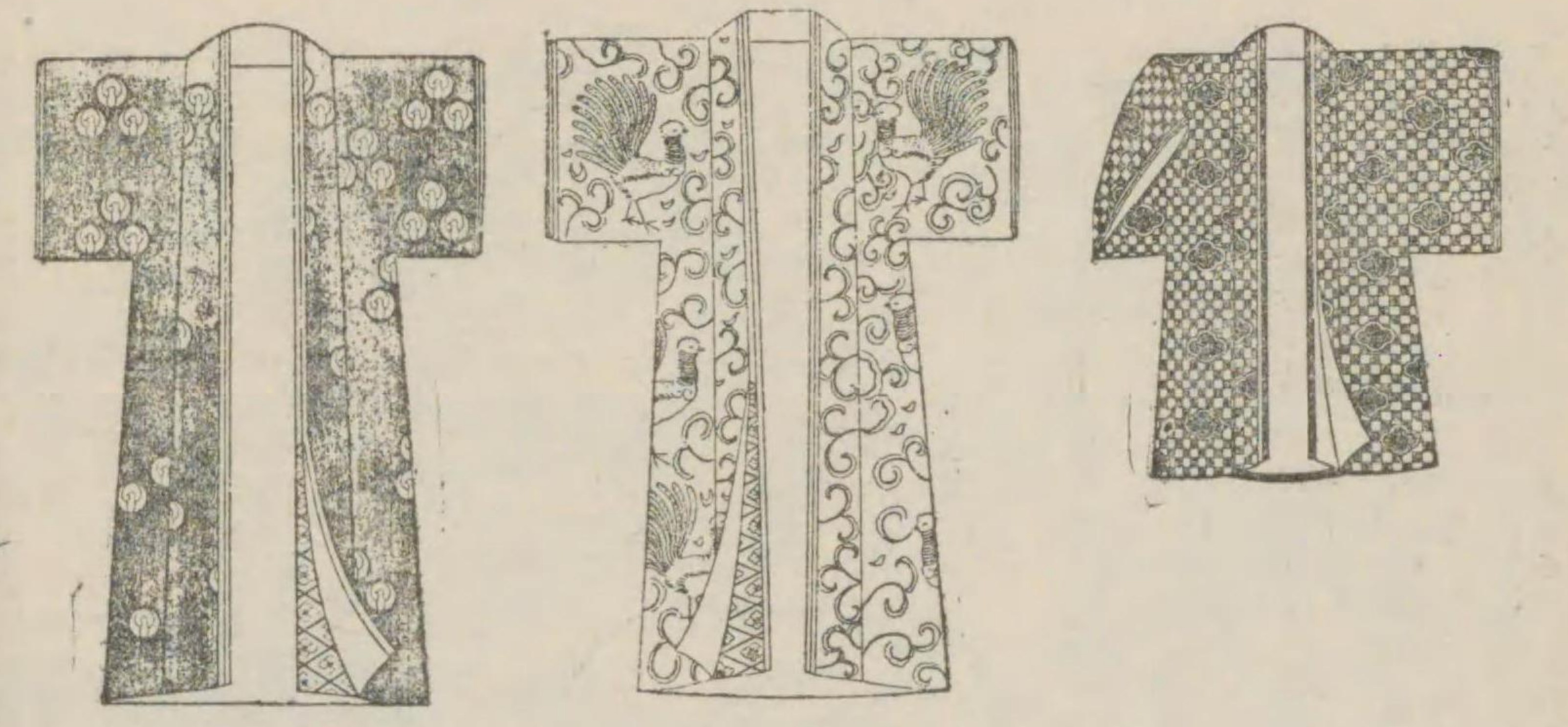
△衣五襲　後白河法皇、神功皇后へ調進し給ひし物にて、十二單と稱す、『鎌倉志』に、十二單と云は俗語なり、五重の衣の事なりと云、按ずるに、十二單は五衣の俗稱たる事は勿論なり、但此衣は單衣三を一襲とし、上は次第にをめらかしたれど、五衣の制とは見えず、其圖次の如し、



袈裟座具各一具　當社勸請の時鳩峯より移せし物にて香染なり、

袈裟一頂　應神天皇の御袈裟と云、後世調進の物なり、以上二品秘物なり、

卓圓二張　共に台德院殿御寄附にて錦を以て製す、



△念珠一連 木食以空の奉納なり、七寶の念珠と云、金・銀・瑠璃・珠・瑪瑙・水晶・珊瑚・琥珀等の玉なり、臺あり、古製の物と見ゆ、烏丸大納言光慶より以空へ贈りしを、延寶三年十一月、奉納せし由添狀あり、 △寶珠一顆 秘物なり、【鎌倉志】に能作生珠と號し、眞言の秘法を修して、作れる珠と云、 △牛玉一顆 社藏永祿十三年二月、源義氏の文書に、佛舍利及牛玉を奉納すと載す、則此玉なるべし △鹿玉一顆 △五鈷杵二箇 一は長七寸許、金滅金なり、雲呑の五鈷と號す、是は昔醍醐山の範俊勅を奉て、請雨の法を修せしに、僧義範是を距て修法せし時、持所の五鈷にして俊が法力に依、雲起雨降んとせしに、此五鈷鴉と化し黑雲を呑却す、依て名づく、もと極樂寺の寶物たりしが、後當社に奉納ありしと云、按ずるに、今極樂寺に、五鈷緣起あり、雲呑の名義は、社傳に異ならず、但同寺へ傳來せしは、弘安蒙古襲來の時、開山忍性勅を奉り、蒙古調伏の法を修せし時、賜りし由を記し、當社に納めし事は見えず、按ずるに、義範範俊が請雨の法を礙せし事【元亨釋書】範俊の傳に見へたり、一は長五寸許、首の方の五鈷は龍頭にて、尾の方は、四天王の像を鑄出す、是も滅金なり、相傳ふ、禪林寺宗叡が、所持の金剛杵なりと、【元亨釋書】宗叡傳曰、貞觀三年入唐請益、謁汴州玄慶、得金剛灌頂青龍寺法全胎藏灌頂、全便付金剛杵及儀軌、と見ゆ、 △愛染像一軀 弘法作、長三寸、巾二寸八分の丸木を割き、一方に像を彫刻し、一方は蓋とす、臺座共一木にて作る、極めて妙作なり、五指を以て量るべき大さなれば、五指量愛染と號せり、 △藥師像一軀 是も弘法の作にて、伽羅を以て刻めり、長一寸二三分、十二神將及日光月光の像あり、龕戸に四天王を彫る、何れも細密の妙作なり、龕の長五寸許、 △辨天像一軀 瑪瑙石に蛇形の像を彫たり、長一尺五寸、是も弘法作と云、 △廻御影 秘物にて、昔より終に見たる人なしと云、長三尺許、巾八寸四方程の細長き箱に入、鳥居を立、注連を引てあり、拾二箇院の供僧、一ケ月づゝ守護して、我院中に居え、毎日本地供三座の行を勤め、一月に法華經一部・仁王經五部・法華三十講・仁王經講釋等を修行す、故に此名あり、社傳に、源賴義安倍貞任を征伐せんとて、奧州下向の時、此御影を守りにかけ、凱旋の時鎌倉に來て、當社へ納む、其後義家下向の時、御影を申請て守りに掛け、奧州凱陣の日、爰に返璧せり、賴朝豆州に在し時、一夜夢みらく廿五菩薩を勸請せよと、時に異人來て此影を授く、賴朝此を受て、終に四海を掌に治め、宮を由比鄕より此地に移し、廿五院を立、御影を納めしとなり、緣起あり、曰原夫彼御影者、右大將家賴朝、未召御代以前、對祖神有御擔願子細年久、然安元之比、不思議之化人、彼尊持來奉賴朝、御感得ノ後、是偏所願成就、先相思食、含笑彌有無二御立願、爲奇瑞繁多、無程達本望、自收四海安危堂內給以來、御崇敬異于他、然賴朝卒後、二位家御信仰又甚、其後時賴(最明寺)代、右大將家、二位殿御崇敬爲超過、雖然於未來者及世澆季、禮奠□可施、所詮彼御影、可奉遷置鶴岡御宸殿之旨、康元年中、被經御沙汰、正嘉年中、奉遷八幡宮、仍御勤□料所、可有御寄進之由云々、其後社供僧等始、令日參致法施之處、依有夢想奇瑞、一月宛於坊々、可奉賞翫之由、衆議一同、上下坊々廻給事、于今無退轉、依之永仁・正和、回祿漏給、其後當社造功終、御遷寶之刻、彼御影於可奉納御寶殿之旨、面々被申處、有不思議御託宣、只如斯之間、坊々廻可請法施之由被示云々、然間自正和元年中冬、至于元亨元年中夏、六十五ケ年之間、無勤行退轉、爰賴朝被召御代事、是併非彼神恩乎、雖自今以後致信力人何無感應實哉耳、元亨元年八月廿五日、大通院第五代、以慈慶自筆本、書寫之、又曰八幡廻御影、兩月一所御座事、正和三年甲寅、四月二十九日曉、梶原帥法印景辨、出御影御前、致懇懃法施云々、雖然依有急事子細、法華等御經、轉讀義在之、其後脇足打懸少休息處、夢幻不覺七八歲許童子來云、我是大菩薩御使也、仍此間不彼經愚讀、同高聲能讀給仰有、見夢覺見開見給へば、無左右聖天御厨子に見合たり、さては何樣、聖天にて御座也と、彌致信心、祈念申けり、既今日御影可奉渡他坊處、如此被示奇特瑞相之間、今、一月抑留申度之由、景辨申之、供僧一同に擬て云、此御影廻給事者、自正嘉年、至于正和今曆、五十餘年之間、兩月一所御座例更以無之、不可叶之由衆議也、雖然景辨餘被懇望、申子細之間、以別議被寬云々、然間次月三十日之間、每日法華妙典一部、或大般若轉讀、或五部大乘經讀誦、或論議、或講印佛讀經、或時者供僧、施僧非人供養、或頓寫、或漸寫、其外晝夜不斷勤行、無退轉、且思神々德恭事、且祈二世願望、三十日之間、五體板地、遍身流汗、發露啼泣、閣諸事無他念、偏奉祈於出離生死之要道事無懈怠、依玆一瑞相示給事在之、(不出心中)憑哉悅哉、遂未來願望也云々、「正和四年二月九日、百三歲臨終正念入滅畢、廻御影御勤、仁王經等可信讀事、文應元年己未、八月十四日夜、三條大納言實曉法印、於御影御前、歎身宿善輕事、少まとろみ給時、八十有余老僧立寄給、般若妙典同一字不缺讀給へと、仰有と見て夢覺たり、定何樣此間仁王等御經、轉讀申たりし事、神慮にも背かと、其後彌發信心、致法施云々、實曉法印、三條大納言公實卿御息也、此事賢基大夫僧都、語之間記之云々、又曰、廻御影經卷等施入事、正和二年癸丑、三月五日曉、賴源於廻御影御前、蒙夢相子細有之云々、委細在別記、其後元亨年中、經卷等奉施入之云々、奉施入、八幡廻御影、緣起一卷唐櫃、應永六年己卯、七月二十三日、以上の緣起、寬延元年、僧明辨の謄寫する所なり、按ずるに、【御殿司職次第】にも、正和の事蹟を載、曰、正和年中、八幡廻御影依夢想、兩月一所奉置事在之、又天文四年、賴賢上洛の祈禱として、影前にて、陀羅尼を讀誦せし事【快元記】に見えたり、曰、四月五日、三崎津賴賢御房、伊豆地被致上洛、仍爲祈禱大般若轉誦、亦於廻御影御前、三ケ日千返陀羅尼云々、按ずるに、三崎は三浦郡の屬、同十九年六月、北條氏康、三浦郡大田和鄕內を御影供の

料所に寄附あり、事は相承院文書に見ゆ、曰、三浦郡大田和郷、近年龍源被致代官、檢地之上本增、合百十七貫文、此内六十七貫文者、廻御影供の方に可被定候、殘分者相承院可有所務候、郷之事者如昔相承院請取、代官職之儀、可被申付者也仍如件、天文十九庚戌六月十八日、相承院、氏康華押、

△華嚴經一卷第五十一卷目なり、大纖冠鎌足の筆と云、裏に至正八年七月日始、十四日畢、卷内叶四百五十一行とあり、至正は西土元朝の年號なれば、元人此卷讀誦卒業の日時を書せしなるべし、叶は計の誤ならん、又按ずるに、後に出せる菩提心論の奥書、比叡山圓珍在唐の日、書せし由を載たるを以考れば、若くは入元の沙門等、彼地に持行て書せしも亦知るべからず、

△菩提心論一卷智證の筆、細字也、自筆の奥書あり、曰、此論有人疑、如今依貞元錄決他疑、更不可迷、猶如菩提心義章耳、巨唐大中九年十一月十七日、於上都記、日本國上都比叡山延曆寺持怠供奉沙門□□、又末に、永久・保安・元亨年間校正の奥書、及享德二年寄納の記あり、曰、永久二五二日、以乘々坊唐本論比校畢、件本有批記、即大師御眞跡也、但此論文字猶不快矣、以上書本批記也、保安五四月十五日、以越前律師御房御本、於光明山北谷書畢、沙門觀導記之、次日一校正了、此本在師跡相承書籍之中、如右批記者、交于大師御提携正本、云々、尤可崇重々々、仍以追勘樣可爲正也、但於有疑文字之詞爲決之、元亨二年七月比、更聚數本對交の處、附合本一非彌不可有異途、抑以此次些々異說、少々注于裏、又粗加音訓兩點了、自元雖有朱點、任雅意添削、有恐有憚而已、三井門乘□記之、○元亨二年十一月十五日、申請右御本於岡崎圓密院、書寫校點畢、於同座下、蒙訓記乎三井末學沙門蓮臺阿闍梨、權少僧都覺珍記、○右一卷帥資相傳の本也、然與法印珍祐相語、八幡廻御影御幣檀此書無之、可奉寄入歟の由、雖被勸之、於愚案思惟者、彼御影御事毛雖辱、爲譜代重書之間、彼是迷惑之間、所詮云御影神慮の祖師冥鑒、奉取御圖の處、可奉寄納、御圖給之間、隨彼儀了、享德二年十一月十二日、權少僧都範季、八幡廻御影御寶前、○右爲智證大師御筆間、自惡恩院致所望、奉施入了、然而某珍祐菩提心所奉祈念也、享德二年十一月十三日、香象院法印珍祐、年五十六歲、

△大般若經一卷弘法筆、一部を二卷に縮寫せし物にて、長八寸の内へ、左上りの文字、極細字に書す、一卷は鳩峯にありと云、此卷は初分なり、古河義氏の寄納する所なり、奥書あり、曰、就今般御座移之宿願、弘法大師之筆跡大般若經、奉納鶴岡八幡宮寺者也、天下泰平武運長久所願成就之所如件、昔永祿七年甲子八月十五日、右兵衛佐源朝臣義氏華押、

△同一部卷毎に、鶴岡兩界壇場の印を押す、第十卷の末に奥書あり、曰、大般若經一部六百卷、爲宿願開板畢、觀應三年九月十五日、正二位源朝臣尊氏、大般若經一部六百卷、爲宿願開板畢、文和二年九月二十二日、左馬頭源基氏、又四百十一卷の末に、應永十四年丁亥六月十五日供養と記せり、

△同四百卷座不冷所の物なり、鶴岡八幡宮寺の印を押せり、元は全部ありしを、回祿に罹りて、殘缺となりしと云、毎卷の末に、沙彌尼妙春、太田大夫資長と記せり、

△法華經四卷菅丞相の筆なり、長七寸許の内へ細字にて書せり、延慶二年奉納の添狀あり、曰、奉納鶴岡八幡宮寺、菅家御自筆妙法華經一部八卷、右爲現當所願成就奉納如件、延慶二年五月十□日別當前大僧正道瑜、華押、是に據ば、初は全備せしを、後來半を失しなり、道瑜は第十二世の別當なり、

△同八卷日蓮筆、長一寸八分の内、一行十八字づゝの細書なり、

△同八卷座不冷所の書なり、鶴岡八幡宮寺の印を押す毎卷奥書あり、曰奉施入鶴岡八幡宮下宮、通夜番經、永和五年閏四月十五日、法印教季、

△心經一卷管領基氏、一字三禮の筆なり、紺紙金泥奥書あり、曰、貞治乙巳夷則二十五日書之、佐兵衛督源朝臣基氏、華押、

△同一卷管領氏滿の筆にて、前に同じ奥書あり、曰、至德二年二月十六日、右兵衛督源朝臣氏滿、華押、

△五部大乘經一部二百卷、座不冷所の書なり、鶴岡八幡宮寺の印を押す、毎卷、上杉陸奥守憲直の奥書あり、曰、奉納鶴岡八幡宮寺、永享五年三月廿三日、于時惣奉行前陸奥守憲直、

△貝多羅葉經文一枚天竺貝多羅葉に經文を書せり、首尾は損ず、長三寸六分、巾一寸六分余あり、

△鶴岡社務記錄二軸建久三年に起り、文和四年に止る、社務の事を、日次に記せしものなり、

△同供僧帳一本供僧の歷世を書せり、建久中に起れり、

△八幡宮修理圖一鋪天正十九年、秀吉社頭を修理せんが爲、山中橘内・增田右衞門尉に命じ、諸堂社破壞の點閲を加へしめし圖なり、既に前に縮寫す、

△古文書百十五通賴朝以來の文書にして、其文は引用の條に註したれば、爰に贅せず、

△連歌一軸寛永二年、當社落慶により二月四日柳營にて、百韵の御連歌ありし、御詠草なりと云、箱の上書に、鶴岡八幡宮御造營落慶、御會百韵連歌とあり、御一順左の如し、

宮柱たつや岡部の八重霞　法橋　紹之
わかみ若　とりふう綠　神垣の松　元能

池水の鏡も花の本にして　杉
さたかなりけるかほ鳥の聲　義成
そゝきしも雨ましらるゝ野を近み　宗茂
秋まちあへぬかせのすゝしさ　紹之

第三は、台德院殿の御句なりと云傳ふ、

△御扇面軸物一幅地紙は金にて、嚴有院殿御染筆あり、くれかゝる霧よりつとふ鐘の音に、をちかた人も道いそぐなり、

△蒲萄墨畫一幅是も、嚴有院殿の御筆なりと傳ふ、

△佛像一幅兆殿司筆貞享四年志村助十郎師金、奉納の由裏書あり、

△四書一部元祿元年、常憲院殿の御寄納の由、寺社奉行酒井河内守忠擧、神主大友志摩への書簡あり、

△同直解一部水戸光圀卿奉納下同じ

△扶桑拾葉集一部

△玉盃一口酒井忠勝奉納す、青紅白の玉を以て飾り、金の獅子の耳を付たり、箱に、寄進玉盃金耳獅子幷裝、寛永二十年六月吉辰、若狹侍從酒井讃岐守忠勝と記す、

△伽羅木食以空奉納、長二寸許、箱に、白一端鷲之伽羅一端、贈以空上人とあり、

新編相模國風土記稿卷之七十二終

新編相模國風土記稿卷之七十三

村里部　鎌倉郡卷之五

山之内庄　鶴岡四

○鶴岡八幡宮四

○上宮　祭神三座、中央は應神天皇、右は神功皇后左は比咩大神應神帝の姉、鶴岡八幡宮記に、上宮三所、中は應神天皇、東は氣長足妃、應神の御母神功皇后也、西は妃大神、應神の御姉也、本社　桁行六間三尺二寸、梁間三間六寸六分、幣殿　桁行三間二尺五寸、梁間二間五尺九寸、拜殿　桁行四間六尺、梁間六尺二寸、建續けり、建久二年新に勸請ありし社是なり【東鑑】四月十六日條曰、鶴岳若宮上之地、始爲奉勸請八幡宮、被營作寶殿、四月上棟の儀あり　同條曰、今日上棟也、奉行行政、幕下御參【社務職次第】曰、若宮上地於引始、爲奉男山御身躰勸請、今日假殿上棟、十一月、遷宮の式を行はる【東鑑】十月二十五日條曰、來月鶴岡可有遷宮之子細被凝群議、行政・善信・盛時・俊兼等申沙汰之、當宮別當候其坐、條々被申定、者爲令唱宮人曲、召下多好方、十一月廿一日條曰、鶴岡八幡宮并若宮、及末社等遷宮也、義盛・景時率隨兵、警衛辻々并宮中、其後幕下御束帶帶劔御參宮、江間殿持御劔、被候御座之傍、朝光同參候、巳殿内奉遷、好方唱宮人曲、頗有神感之瑞相、【社務職次第】曰、十一月二十一日、八幡宮御遷宮、男山御身躰也、六年二月、賴朝參宮の時、幣殿に著座、法華經供養を聽聞あり【東鑑】曰、二月十一日鶴岡八幡宮御神樂也、將軍家御參宮、梶原源太左衛門尉景季持御劔、着御幣殿、隨兵等在廻廊之外、於寶前被供養法華經、辨法橋定豪爲導師、建暦二年十月神前に羽蟻群飛し【東鑑】十月二十日條曰、午剋鶴岡上宮寶前、羽蟻飛散、不知幾千、建保元年八月、黄蝶集る八月二十二日未剋、鶴岡上宮寶殿、黄蝶大小群集、人奇之、嘉祿二年二月、神樂の時、神扉數刻開かず【東鑑】脫漏曰、二月一日辰刻、鶴岡八幡宮、恒例御神樂之間、上宮神殿戸不開而及數刻仍神主子細申之、武州甚有御怖畏、被召尋陰陽師等、如辰時者、神事不淨不信之上、可被慎火事之由占申之、十月、神殿修理により神躰を下宮に遷座す十月二十一日、鶴岳宮寺依可有修理、今夕御正躰等、奉渡假殿所謂八幡宮御正躰者、奉渡若宮御殿、程なく落成、正遷宮あり二十七日寅刻、八幡宮修理遷宮也御正躰奉渡本宮、武州參宮給、社務記錄曰、二十七日、八幡三所御遷宮、按ず建長二年五月に、嘉祿元年の異同あることは、前に辨ず、修造の事始あり【東鑑】曰、五月一日、鶴岡上宮破損修理事、有其沙汰、召宮寺番匠等、重々所被定仰也、筑前前司、清左衛門尉、深澤山城前司等爲奉行、二十五日、鶴岡八幡宮上宮、修理事始也、奉行人等豫參、按ずるに、當宮造營修理、其餘の事蹟等、既に前に記載す、四年五月、神宮造營修理、其餘の事蹟等、既に前に記載す、四年五月、神るものは、爰に省けり、下皆これに倣へ、戸開かず五月一日、鶴岡宮恒例御神樂也、而上宮寶殿御戸不被開、自卯剋及午一點神主依申子細、被行御占、如卯剋者不快、午剋爲吉兆云々、於御膳者可備大床之由、相州被計申之、二日、召工等、於宮寺被開御戸之處鑰舌折、正和五年十一月、再建成て正遷宮あり【社務職次第】曰、十一月二十一日、八幡宮御遷宮、別當并供僧中、悉造進云々、按ずるに、前年三月丙丁に罹りしなり、延元元年、世上祈禱として、別當賴仲、六月より百日の間、神殿に參籠す社務記錄曰、六月二十九日、爲世上御祈、限百日參籠上宮、十月十日丑刻、六月二十九日、山門御敵沒落、先帝御入洛、百日參籠結願日也、爲無雙効驗之由、於都鄙有其沙汰、被施面目了、其後猶一七日參籠、永德の頃に至り、社地の舊名を以て、當社を松岡八幡宮と稱し、社務職も別に補任あり社藏、永德元年六月、將軍義滿の補任狀、應永・及莊嚴院相承院等、所藏文書に證あり、永享中の物に註すにも、尙松岡の號見えたり、其後は絶て所見なし、應永二十四年閏五月、管領持氏常州北條郡宿郷を社領に寄進し社藏文書曰、奉寄進松岡八幡宮、常陸國北條郡宿郷、右衛門佐入道跡事右爲天下安全武運長久、所奉寄附之狀如件、應永二十四年閏五月二日、左兵衞督源朝臣、華押、按ずるに右衛門佐入道は上杉氏憲入道禪秀なり、今年正月　三十二年六月、武州河越滅亡す、北條は今筑波郡の屬、の地を供料に寄す寄進、松岡八幡宮、武藏國河越兵庫助跡半分除湯命分事、右爲日御供料所寄附也、者早守先例、可被致沙汰之狀如件、應永三十二年六月二十一日、從三位源朝臣、華押、永享四年十月、小田原關隘の征錢を以て、當社修理の料に宛つ松岡八幡宮、御修理要脚事、所寄相模國小田原關所也、早三ヶ年之間宛取關賃、可令終修造功之狀如件、永享四年十月十四日、信濃守殿、持氏の華押あり、按ずるに、信濃守は大森與一賴春なり、時に小田原城主たり、天文元年六月、神輿を拜殿に安じ、諸人群參す【快元記】曰、六月一日、神所、諸人參、散錢二三千疋計有之云々、二十一日迄置申、三年十月、北條氏綱の命に依て、諸士募絲して寶前に燈明を置けり十月十七日、於八幡三所御寶前、每夜燈明不可有斷絶由、以奉加帳、當方諸持侍方江、小別當依申、各有合點、五百四三百四宛、思々に被載判形、此事屋形社參之時、被申出、奉行、樂爲始、悉被載灯明帳名字官途、八年十一月、轉經舞樂等あり、北條氏綱父子聽聞す十一月二十二日、庚戌、天晴風靜、上宮轉經舞樂等有之、導師某快元云々、氏綱・氏康・長綱、其外一門之人々、於御壇所聽聞、天正二年閏十一月、北條左衛門大夫氏繁、神鏡及び雲板を寄附す文書曰、下社家大久保采女藏、奉寄附、神鏡雲磬七面、八幡宮御寶前一面、若宮御寶前同、大藏稻荷寶前同、飯山權現寶前同、阿彌陀之前寶同、辨財天寶前同、歡喜天寶前同、右奉納之旨趣者、於内道場、本尊之祈禱抽精誠、天下安全、可奉祈武運榮盛者也、仍而寄附之狀如件、天正二年甲戌閏霜月五日、左衛門大夫氏繁華押、文政四年正月十七日の夜、回祿に罹り、十一年御再建あり、例祭八月十五日其式、三座の神輿を昇て、赤橋に至り、薦福の儀あり、是を神幸と稱す、其行列警固二人、次に鉞棒を持者二人、次に獅子二頭、次に大貫太刀を帶す、次に假面を掛る者十人、次大薙刀、次幟二本、次大鉾、次弓、次干珠滿珠を捧げ持、次幣東大麻袋、次錦幡、次錫杖、次鉾三柄、次に幣束三本、次八乙女、職掌、伶人樂を奏す、次御衣箱、次手箱、次に杖、次矢、次弓、次硯箱、次劔、次法

螺、次鐃、次合鉢、次甲桒、次衲桒、此内鼎司職二人鍵を持、一瞰灑水器を持、各兒一人を隨ふ、次神輿、次經師及大工、次沓傘各三、次鏈十本、警固十人なり、按ずるに、行列の内獅子頭は、大住郡平塚宿に住する、舞々鶴若孫藤次是を役す其家藏文書に、天文七年九月、北條氏の指揮により當國東郡中郡の村々を募緣し、獅子頭造立せし事見ゆ、曰、爲鶴岡獅子之勸進、家一間に二錢宛、大小人共に出之、可被造立者也仍如件、天文七年戊戌九月三日、東郡中郡、北條氏虎印、

十六日、流鏑馬　高座郡寒川神社の社人、菅野　相撲等あり、恰、舊例によりて參勤す、

【東鑑】に據に、文治三年八月十五日始て放生會及流鏑馬を行なはれ【保暦間記】に、建久三年八月、始て放　弓馬堪能の輩を撰て射手に充らる、此時諏訪大夫盛澄に命じて、流鏑馬其外射藝を施さしむ【東鑑】曰、八月四日、今年於鶴岡、依可被始行放生會、被充催流鏑馬射手并的立等役、其人數以熊谷二郎直實、可立上手的之由、被仰之處、直實含鬱憤申云、御家人者皆傍輩也、而射手者騎馬、的立役人者步行也、既似分勝劣、於如此事者、直實難從嚴命、者重仰云、如此所役者、守其身器、被仰付事也、全不分勝劣就中的立役者非下職、且新日吉社祭御幸之時、召本所衆、被立流鏑馬的畢、思其濫觴說、猶越射手之所役也、早可勤仕者、直實遂以不能進奉之間、依其科、可被召分所領之旨被仰下、十五日、鶴岡放生會也、二品御出、三河守範頼等扈從、有流鏑馬、射手五騎、各先渡馬場、次各射訖、皆莫不中的、其後有珍事、諏訪大夫盛澄者、流鏑馬之藝、窮依慣傳秀郷朝臣秘決也、爰屬平家多年在京、連々交城南寺流鏑馬以下射藝訖、仍參向關東事、頗延引之間、二品有御氣色、日來爲囚人也、而被斷罪者、流鏑馬一流永可凌廢間、賢慮思召煩涉旬月之處、今日俄被召出之、被仰可射流鏑馬之由、盛澄申領狀、召賜御厩第一惡馬、盛澄欲令騎之刻、御厩舍人密々告盛澄云、此御馬於的前、必馳于右方也云々、則出一的前、寄于右方、盛澄爲生得逢者、押直射之、始終無相違、次以小土器、挾于五寸之串、三被立之、盛澄亦悉射畢、次可射件三箇串之由重被仰出、盛澄承之、既難思切生涯之運、心中奉祈念諏訪大明神、拜還瑞籬之砌、可仕靈神者、只今乘擁護給、者然後鏃於平仁捻廻天射之、五寸串皆射切之、觀者莫不感、二品御氣色又快然、忽被仰厚免云々、今日流鏑馬、一番射手、長江太郎義景、的立、野三刑部丞盛綱、二番射手、伊澤五郎信光、的立、河匂七郎政頼、三番射手、下河邊庄司行平、的立、淺羽小三郎行光、五番射手、小山千法師丸、的立、勅使河原三郎有直、四番射手、小山千法師丸、的立、横地太郎長重、四年八月より舞樂を興行す　八月十五日、鶴岡放生會也、二品御參、先法會舞樂等、次流鏑馬射手幷的立等役、其人數以熊谷二郎直實、氏、盛澄等射之、五年の祭期には、賴朝奥州の役に在べきを以て、七月放生會・舞樂・馬長・競馬・相撲等を行はれ　六月二十八日、鶴岡放生會、來月朔日可被遂行之旨、有其沙汰、是於式月者、定可有御座奥州之上、泰衡爲征伐御祈禱及此儀、七月一日、鶴岡放生會也、巳刻二品御出、先法會、舞童八人相分左右、次馬場儀、馬長十騎、競馬五番、皆老翁也、流鏑馬、(十六騎)相撲、(十六番)及黄昏還御、　祭期に及て亦例の如く放生會・舞樂・馬長・流鏑馬等あり　八月十五日、鶴岡放生會也、去月朔日、雖被行之、依爲式日、故以有其儀、宮根山兒童八人參上、有　建久元年に至り、祭事繁劇な

るを以て兩日に分たれ、十五日放生會・舞樂八月十五日鶴岳放生會也、二品御參宮云々、先供僧等、大行道、次法華經供養、導師別當法眼圓曉、有舞樂、舞童皆伊豆山參上、　十六日流鏑馬・競馬・相撲・田樂　按ずるに、相撲の事は、三年八月十四日條に、初て見えたり、又田樂は、寛元三年八月十六日條に載せて、常の如しと記したれば、是等も例年の式たりしと見ゆ、故に爰に載せり、等を行はる、此日流鏑馬の射手、一兩輩闕如するを以て大庭平太景能吹擧して、囚人河村三郎義秀に射せしめられ、且三流の作物を射て、失禮なきを以て其罪を免さる　十六日、馬場の儀也、先々會日雖有流鏑馬・競馬、依事繁今年始被分兩日也、二品御出如昨日、爰流鏑馬射手一兩人、臨期有障、已及闕如、于時景能申云、去治承四年、所與景親之、河村三郎義秀爲囚人、景能預置之、達弓馬之藝也、且彼時與黨、大略預厚免訖、義秀獨非可沈淪歟、斯時可被召出哉、者仰曰件男者、可行斬罪由下知訖、于今現存奇異事也、然而優神事、早可召進、但非指堪能者、重可處罪科者、則招義秀、召仰此旨之間射之訖、二品召覽其箭之處、箭十三束鏑八寸也、仰曰義秀依達弓箭有驕心、與景親之條、案先非今更奇怪也、然者猶可射三流作物、於有失禮者、忽可行其咎者、義秀又施其藝、始終無相違、是三尺手挾八的等也、觀者莫不感、二品感荷給、而來兩日の神事、年毎に歷々として記載す　按ずるに、【東鑑】に、當社流鏑馬・競馬・相撲等を役せし、交名を載せたり、當時殊に堪能の人を撰ばれし事、見るべし、故に爰に其略を註す、建久二年八月十五日、鶴岳放生會、幕下御參、經供養、導師安樂坊重慶、有童舞、(筥根兒童)十六日御奉幣如昨、被進神馬二疋、流鏑馬、競馬、如例、三年八月十四日於鶴岡廻廊外庭、放生會・相撲内取手被召決、藤判官代爲奉行、一番奈良藤次・荒次郎、二番鶴次郎・藤塚目、三番犬武五郎・白河黑法師、四番佐賀良江六、僕伏太郎、五番所司三郎・小熊紀太、六番鬼王・荒瀨五郎、七番紀六・王鶴、八番小中太・千手王、十五日、鶴岡放生會舞樂也、將軍家無御出、上總介義兼爲奉幣御使、著廻廊有經營舞樂等、舞童、左、金王・瀧楠・彌陀王・伊豆熊、右、夜叉・觀音・龜菊・良壽、十六日流鏑馬、以下如例、社務記錄曰、十六日、馬場儀式、相撲十人、自京下向云々、四年六月十三日、放生會、童舞習始之、【東鑑】曰、八月十五日、鶴岡八幡宮放生會也、將軍有御參宮云々、十六日、同宮馬場流鏑馬也、將軍家御出如昨日、其射手、三浦平六兵衛尉・北條五郎・小山又四郎・下河邊六郎・和田三郎・氏家五郎・海野小太郎・望月三郎・榛谷四郎・千葉平二兵衛尉・小笠原二郎・武田五郎・梶原三郎兵衛尉、五年八月十五日、鶴岡放生會有舞樂、將軍家御參、十六日、馬場流鏑馬、已下如例、將軍家御參、江間太郎始射流鏑馬預祿、六年八月十五日、鶴岡放生會也、將軍家御參宮云々、有舞樂、十六日又御參宮、有馬場流鏑馬、射手十六騎、皆所被撰堪能也、一番三浦和田五郎、二番里見太郎、三番武田小五郎、四番東平太、五番榛谷四郎、六番葛西十郎、七番海野小太郎、八番愛甲三郎、九番伊藤四郎、十番氏家太郎、十一番八田三郎、十二番結城七郎、十三番下河邊四郎、十四番小山又四郎、十五番江間太郎、十六番梶原三郎兵衛、正治元年八月十五日、鶴岡八幡宮放生會十六日、馬場流鏑馬、以下神事如例、和田左衛門尉義盛、梶原平三景時、相率子息郎從、警固宮寺、二年八月十五日、鶴岡放生會、羽林御參宮如例、十六日、甚雨、流鏑馬如例、建仁元年八月十五日、鶴岡放生會延引、依廻廊顚倒也、九月十五日、被遂行鶴岡放生會、式月依廻廊顚倒所延引也、左金吾

御出無隨兵、希代新儀也、近日於事陵夔、如忘先蹤、古老所愁也、十六日、左金吾御參宮、流鏑馬以下如例、二年八月十五日、鶴岡放生會如例、將軍家御參宮、十六日、將軍家無御參宮、於馬場棧敷覽流鏑馬許也、三年八月十五日、鶴岡放生會如例、十六日、大膳大夫著鶴岡下廻廊執行神事、流鏑馬以下如例、元久元年八月十五日、鶴岡放生會、將軍家御輕服之間、附宮寺被行之、二年八月十五日、鶴岡放生會、舞樂如例、將軍家御參、十六日、八月十五日、將軍家御出、流鏑馬最中暴風甚雨、仍被待晴天期之間、一會及夜陰、承元元年八月十五日、鶴岡宮放生會、將軍家既欲有御參宮之處、隨兵以下臨期有申障之輩、及申剋御出之間、舞樂等入夜、取松明有其儀、未事終還御、十六日、將軍家御參宮、流鏑馬以下如例、二年八月十五日、鶴岳放生會如例、十六日、將軍家入御馬場棧敷、於其所有御遙拜之儀、美作藏人朝親、橘判官代隆邦等、爲御使奉幣、參宮寺、神馬二疋被奉之、入夜尼御臺所、又御奉幣、三年八月十五日、鶴岡放生會如例、四年八月七日、鶴岳放生會、舞童十二人參幕府、別當相具之、卽於鞠御壺、及調樂、十三日、來十六日、鶴岡馬場流鏑馬射手、數輩被差之中、今日於馬場被試、就堪否有用捨之定、先々無此儀、今年被始例、十五日、鶴岡放生會、十六日、相州亦令參宮給、將軍家爲覽馬場之儀、密々渡御棧敷、尼御臺所并御臺所同令出棧敷御、流鏑馬事終、於廟庭、相撲勝負有結構之儀、相模太郎侍、岡部平六與犬武、被召決之處、岡部雌伏、次廣瀨四郎與鬼童、兩度被召決之、遂無勝負、人以爲壯觀、建暦元年八月十五日、鶴岡宮放生會、將軍家依聊御不例無御出、奉幣御使相州、次將軍家於廻廊簾中、密々覽舞樂、十六日、相州令參宮給、將軍家爲御見物、御出馬場棧敷、二年八月十五日、鶴岡放生會、將軍御參宮如例、先是尼御臺所并御臺所、爲覽舞樂、渡御廻廊、十六日、將軍家御出、馬場儀等又如例、建保二年八月十五日、鶴岡放生會也、蝕之間拂曉、將軍家御出、經會舞樂、早速被遂行也、十六日、將軍家御參宮如昨日、三年八月十五日、鶴岡放生會、將軍家御出如例、十六日、無御參宮之儀、於馬場棧敷、覽流鏑馬、四年八月十五日、鶴岳放生會、將軍家御參宮、十六日、同御出、流鏑馬已下如例、五年八月十五日、鶴岡放生會、將軍家御出如例、十六日、御出同昨日、尼御臺所並御臺所、爲御見物、令出馬場棧敷給、六年八月十五日、鶴岡放生會、將軍家御參宮供奉人行粧華美越例、被用檳榔御車、被召具一員也、十六日、同御出如昨日、流鏑馬殊被結構、承久三年九月十五日、鶴岡放生會遂行之、式月天下大穢之間所延引也、十六日、馬場儀如例、元仁元年八月十五日、鶴岡放生會、式月延引、依奥州禪室事也、九月十五日、鶴岡放生會、今日被遂行、十六日、流鏑馬已下神事如例、三浦駿河、出羽守以下候廻廊、小山判官朝政、警固馬場、按ずるに、今年六月十三日、北條義時死す、【東鑑】胤濡曰、嘉祿元年八月十五日、鶴岳放生會延引、二品御事依觸穢也、十一月二十二日、鶴岳放生會、被遂行、八月延引之故也、按ずるに、今年七月十一日、平政子薨ず、安貞元年八月十五日、鶴岡放生會延引、依御輕服、十二月十五日、鶴岡放生會被遂行、式月依輕服延引也、按ずるに、今年八月七日、將軍賴經の外祖母薨ず、【東鑑】曰、二年八月十五日、鶴岡放生會也、將軍家有御出之儀、十六日、又御參宮、馬場流鏑馬以下事終、及暮還御、嘉禎元年閏六月二十四日、爲來八月鶴岡八幡宮放生會舞樂、被召右近將監多好節、但公役有障者、可差多好繼之由、今日被仰遣京都、八月十五日、鶴岡放生會、將軍家御出、十六日、馬場儀如例、御參宮三箇日相續者也、昨今供奉官人、光村定員等也、十八日、舞人多好氏歸洛、御馬一疋賜好氏、兩三年一度放生會之時、可參仕之由、以木工權頭、被仰含好氏、二年八月十五日、鶴岡放生會、將軍家御出、法會舞樂如例、十六日、將軍家御奉幣于同上下宮、其後流鏑馬以下有馬場儀、廷尉定員、候埒門邊、三年七月十九日、北條五郎、八月十五日、鶴岡放生會流鏑馬之間、於鶴岡馬場有其儀、始可被射來月放生會、將軍家御參宮、法會舞樂如例、十六日、將軍家御參宮、大夫判官景朝、伊豆判官賴定等供奉、被行馬場儀之間、北條五郎時賴主、被射流鏑馬、佐渡前司基綱以下五位、流鏑馬的、河津八郎左衞門尉尙景、佐々木七郎左衞門尉氏綱、以下、衞府爲十列、競馬(十番)役、行粧各極華美、依別御願、及此結構、延應元年八月十五日、鶴岡放生會云々、十六日、將軍家爲覽流鏑馬出御馬場御棧敷云々、大夫判官泰綱、出羽判官家平、不供奉御出、依別仰警固馬場、陸奥掃部助實時、候御棧敷前座床子、仁治元年八月十五日、鶴岡放生會、將軍家御參宮、十六日、又御參宮、近江大夫判官泰綱、束帶、出羽判官家平等供奉、按ずるに、本書月闕、二年八月十五日、鶴岳放生會也、將軍家御出、法會舞樂如例、十六日、將軍家御參宮、大夫尉基政、行久等供奉、馬場之儀如例、寛元元年六月二十日、來八月鶴岡放生會、役人以下事、有其沙汰、八月十五日、鶴岡放生會也、將軍家御出如例、十六日、將軍家御參宮、如昨日、自今年三箇年馬場儀、依御立願可有結構、仍十列、武藤左衞門尉、加藤左衞門尉・加地七郎左衞門尉・紀伊次郎左衞門尉・長掃部左衞門尉以下騎之、信濃大夫判官・小笠原六郎・駿河五郎左衞門尉・上野十郎・加地八郎左衞門尉、以下爲流鏑馬射手、同的立、能登前司・隱岐前大藏少輔・上野大藏權少輔・大隅前司・上總權介、以下立之、競馬、雅樂左衞門尉、左府生兼見・本間左衞門尉・中村三郎、以下被召決之、二年八月十五日、鶴岡八幡宮放生會也、大殿並將軍家御參云々、十六日、鶴岡馬場之儀也、依有御宿願、殊有結構之儀、每年如去年、以五位六位等爲十列、的立、競馬、役人等、午一刻御參宮、馬場儀、十列、一番、長掃部左衞門尉、二番、飯高彌次郎□衞門尉、三番、紀伊次郎左衞門尉、四番、大多和新左衞門尉、五番、遠江六郎左衞門尉、六番、狩野五郎左衞門尉、七番、伊勢五郎左衞門尉、八番、肥後四郎兵衞尉、九番、□□□□□□、十番、土肥次郎兵衞尉、沖鏑馬、一番、長江八郎入道、射手、子息八郎四郎、的立能登前司、二番、北條左近大夫將監、射手、武田五郎三郎、的立、宗左衞門大夫、三番、佐渡前司、射手、孫子彌四郎、的立、攝津左衞門尉、五番、城介、射手、子息六郎、的立、彌次郎左衞門尉、四番、上總介、射手、子息六郎、的立、押垂左衞門尉、六番、出羽前司、射手、子息次郎兵衞尉、的立、狩野五郎左衞門尉、七番、小山五郎左衞門尉、射手、上野十郎、的立、武藤左衞門尉、八番、和泉次郎左衞門尉、射手、阿會沼七郎、的立、出羽四郎左衞門尉、九番、壹岐六郎左衞門尉、射手、子息左衞門次郎、的立、和泉六郎左衞門尉、十番、春日部甲斐守、射手、子息次郎兵衞尉、的立、小野寺四郎左衞門尉、十一番、近江前司、十二番、射手、舍弟四郎左衞門尉、的立、淡路四郎左衞門尉、子息五郎、的立、能登四郎左衞門尉、十三番、信濃民部入道、射手、子息六郎左衞門尉、的立、宇佐美與一左衞門尉、十四番、上野入道、射手、子息五郎兵衞尉、伊賀四郎左衞門尉、的立、大須賀七郎左衞門尉、十五番、右馬權頭、射手、的立、薗田淡路守、十六番、若狹前司、射手、舍弟五郎左衞門尉、的立、宍戸壹岐前司、競馬、一番、左、雅樂左衞門尉、右、秦次郎府生兼種、二番、左、富田次郎兵衞尉、右、澁河彌次郎、三番、左、下條四郎、右、秦三郎清種、四番、左、河村小四郎、右、高橋六郎兵衞尉、五番、

左、淺羽左衞門四郎、右、河村三郎、三年八月十五日、鶴岡八幡宮放生會也、將軍家御出每事被盡華美、放會舞樂事終、及酉刻還御、十六日、鶴岳馬場之儀、殊被結構綵也、如去年將軍御出云々、馬場儀結構同去年、希代壯觀也、入道、大納言家、於棧敷、有御見物、馬場儀神子田樂、馬場儀等如常、十列、一番、火鳴太郎左衞門尉、二番、豐後十郎左衞門尉、三番、石戸左衞門尉、四番、足立太郎左衞門尉、五番、三浦新左衞門尉、六番、加地七郎左衞門尉、七番、田中右衞門尉、八番、相馬四郎兵衞尉、九番、佐貫次郎兵衞尉、十番、同小次六郎左衞門尉、流鏑馬、一番、長江四郎入道、射手、同五郎七郎、的立、壹岐前司泰綱、三番、小笠原六郎、射手、同四郎太郎、的立、內藤肥後前司盛時、五番、佐渡前司、射手、隱岐左衞的立、前隼人正光重、四番、上總介、射手、子息六郎、門四郎、的立、內藤豐後前司、六番、信濃民部入道、射手、子息四郎左衞門尉、的立、宮內左衞門尉、七番、出羽前司、射手、判官長村、射手、子息二郎兵衞尉、的立、肥前太郎左衞門尉、八番、小山內兵衞三郎、的立、肥前四郎左衞門尉、九番、上野入道、射手、同彌三郎、的立、遠江六郎左衞門尉、十番、淡路四郎左衞門尉、射手、子息彌四郎、的立、肥後次郎左衞門尉、十一番、和泉次郎左衞門尉、十二番、佐々木壹岐前司、的立、豐後四郎左衞門尉、射手、相馬小五郎、射手、相馬左衞門三郎、的立、上總式部大夫、十四番、北條左近大夫將監、射手、武田五郎六郎、的立、上野大藏少輔、十五番、右馬權頭、射手、伊賀六郎、的立、石見前司能行、十六番、若狹前司、射手、佐原七郎左衞門尉、的立、能登前司、競馬、一番、左、工藤右衞門次郎、右、秦次郎府生、二番、左、富田二郎兵衞尉、右、相良彌五郎、三番、左、本間三郎兵衞尉、右、河村小四郎、四番、左、山口三郎兵衞尉、右、下條四郎、五番、左、樟曾根小三郎、右、葛西又太郎、四年八月十五日、鶴岡放生會也、將軍家有御出之儀、十六日、同馬場儀也、流鏑馬十六騎、揚馬訖而射手十人、俄有窪亂之氣、申障、已及神事違例、仍於御棧敷、有御沙汰、可勤此射手之旨、被仰驗河式部大夫家村、時景蹲居家村前傳仰、家村降自床子答申云、亡父義村存生之時、壯年而一兩度雖令勤仕此役、廢忘隔多年也、日來縱雖有習禮、年闌後能、致不可叶事也、況於當日所作哉、更不堪身之由云々、御使申此趣之間、仰兄若狹前司泰村、慥可令勤云々、仍泰村起座行向弟家村座前、早可應仰之旨、再往加諷詞等、時只今稱無射馬、泰村馬者答用意之由、凡泰村存如此時儀、射馬(號深山路名馬也)置鞍兮、兼以令置流鏑馬舍近邊云々、此上家村失據于遁避、自取敷皮、副于下手鏑、向流鏑馬舍、公私見此儀入興、見物之輩悉以屬目於馬場下之方、相待家村、家村改布衣行粧、著射手裝束、然後駕于件深山路、打出于第四番、其體不恥古堪能、人々美談時之壯觀也、射訖則又裝布衣、歸著本座之間、頻預御感、御使、當家他門莫不賀之、寶治元年八月十五日、放生會延引、去六月合戰觸穢之上、依彼追討餘炎、流鏑馬舍燒失故也、十一月一日、鶴岡馬場流鏑馬舍被建之、十五日、鶴岡八幡宮放生會也、依去六月五日泰村追討觸穢、並流鏑馬舍炎上等、一月延而及今日、將軍家有御出云々、十六日、午剋、將軍家御出、馬場之儀等如例、二年八月十五日、鶴岳放生會也、將軍有御出之儀、建長二年八月十六日、將軍家於鶴岳上下宮、令奉幣給、其後有馬場之儀、按ずるに、十五日の條に闕文あり、三年八月十五日、鶴岡八幡宮放生會也、將軍家御出、十六日、鶴岡流鏑馬以下、馬場之儀如例、將軍家

有御奉幣、四年八月十五日、鶴岡八幡宮放生會也、十六日、馬場儀如例、五年八月十五日、鶴岡放生會也、有御參宮、十六日、鶴岡馬場流鏑馬以下如例、將軍家御出、十六日、御出之儀同昨、康元元年八月十五日、鶴岡八幡宮放生會、將軍家御出、十六日、將軍家御出、流鏑馬射手已下、殊被撰其人、所謂相模三郎時利・陸奥六郎義政・足利三郎利氏・武藏五郎時忠・三浦介・六郎賴盛等、爲其最、又競馬五番、一番、左、追持、富所左衞門尉、右、村岡彌三郎、三庭之後、右好而在外、空馳及數度、左、追表前取合落馬、富所自額血出、二番、左、當麻右、馬五郎、右、追勝、檢伏三郎、左、先出互相競、各空馳二度右、追下手無程馳追、當麻撰取鞦合取拔畢三番左、追持、下條四郎、右、秦弘貞離馬懷共落馬而左勝之由、暫不得相並、但於勝負揷內取之、弘貞離馬懷共落馬而左勝之由、雖有沙汰、右頻申子細、祿畢、四番、左、追持、澁谷右衞門三郎、右、秦種久、右先出、出遲之間、左追之、即取之揷脇、種久離馬、取澁谷腰共落馬、左顯勇力、右存故實、太有其興、五番、左、追勝、鳥子左衞門次郎、右、秦行久、右先出空馳度々左追之、行久不合鞭止畢、是怖鳥子之勇力之故也、正嘉元年八月十五日、鶴岡放生會、將軍家御出、十六日、將軍家御出、鶴岡流鏑馬等、無爲所被遂行也、二年八月十五日、鶴岡放生會、將軍家御參宮、十六日將軍家御參鶴岡宮寺、馬場流鏑馬以下儀如例、文應元年八月十五日、鶴岡放生會、十六日、馬場之儀棧敷等如例、弘長元年八月十五日、鶴岡放生會、十六日、御息所爲覽舞樂渡御、其後將軍家御出、十六日、御參宮同昨、流鏑馬以下如例、三年八月十五日、鶴岳放生會、將軍家御出如例、十六日、御參宮同昨日、文永二年八月十五日、鶴岳放生會、十六日、將軍家爲覽馬場儀、密々入御于相州御棧敷、十有餘輩供奉、今年相州御棧敷、七箇間之外、人々棧敷皆以停之、將軍家無御出儀之上依儉約也、流鏑馬第三番、射手二三的不中、競馬勝負宮寺可定申之由、左京兆被計申之、依御覃無御執行神宴之由也、同日取祿等事者、爲諸大夫之役、相撲之祿者、神宮寺取之、講讀師等僧布施、各被送本坊、又【增鏡】にも當社放生會の事見えたり曰、さても岩清水の流れをわけて、關の東にも若宮ときこゆる社をはしますに、八月十五日、宮この放生會にまねびて行ふ、そのありさま殊にめでたし、將軍もまうで給ふ、あるつはもの、諸國の受領どもなど、色々のかり衣、思ひ思ひのきぬ重ねて出たちたり、赤橋といふところに、將軍御車とゞめてをり給ふ、上達部はうへのきぬなるもあり、殿上人などいとおほくつかふまつる、此將軍は中務の宮の御子なり、この比權中納言にて、右大將をかね給へれば、御隨身ども華ををらせて、さうそきあへるさま、都めきてをもしろし、法會のありさまも、本社にかはらず、舞樂田樂獅子がしら流鏑馬など、さまゝ所にしつけたる事ども、をもしろし、十六日にも、猶かやうの事なり、棧敷どもいかめしくつくりならべて、色々のまんまくなどひき、將軍の御棧敷のまへには、相模の守をはじめそこらの武士ども、なみ居たるけしき、さまかはりてこのましう、うけはりたる、心ちよげに、所につけては、又なく見えたり、按ずるに、正應二年の條なり、按ずるに式月障りある時は、九月或は十一月、十二月等に行はれしなり　承久三年・元仁元年共に九月十五日、興行、嘉祿元年十一月二十二日、安貞元年十二月十五日、寶治元年十一月一日、以上【東鑑】及脫漏等に見ゆ、其文前に注す、又社務記錄曰、永仁五年放生會、九月十五日、被行之、八月六日、

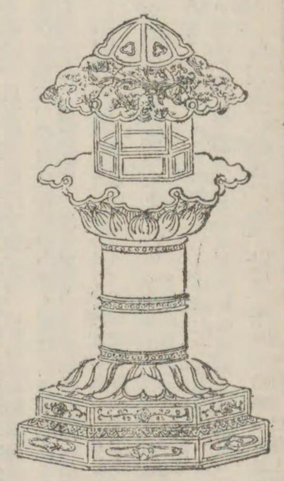
大守女子誕生他界、同日、長崎金吾光綱他界、依闕穢式日延引、德治元年、放生會、十二月十五日被行之、延慶元年、放生會、九月被行之、正和五年八月十五日、放生會延引、九月十五日被行、元亨元年、放生會、九月被行之、正中元年十二月十五日、放生會被行之、又法會のみにして、流鏑馬等を廢せし事あり　德治元年、最勝恩寺殿姙者之故歟、法會許也、馬場儀無之、二年放生會、竹園依遊義門院御事御輕服無御社參、依赤班瘡舞童等多病惱、法會舞僅兩三人云々、入道殿御流鏑馬依御母儀潮音院殿重服無之、　延文三年八月、放生會の用途として、社領武州鶴見郷より十二貫文を送進す　社藏文書曰、送進鶴岡八幡宮寺、放生會料用途事、合拾二貫文者、右當社御領、武藏國鶴見郷分、所送進之狀如件、延文三年八月十四日、致誠、華押、按ずるに、鶴見は橘樹郡の屬、永和三年八月亦然り　檢納鶴岡八幡宮寺、御放生會御神事料足用途事、合拾二貫文者、右當社御領、武藏國鶴見郷(號大山郷)御年貢內、且所檢納之狀如件、應永二十一年八月、管領持永和三年八月十三日、榮華押、氏、常州那珂東、國井郷を寄進す、是放生會料所、武州津田郷の不足分を補ひしなり　寄進鶴岡八幡宮、常陸那珂東、國井郷內(佐竹左馬之助跡)事、右者十六日於社頭、依下人狼藉收公之、爲武藏國津田郷內、放生會料所不足分、所寄附之狀如件、應永二十一年八月二十日、左兵衛督源朝臣、華押、按ずるに、今那珂郡の屬に、上下國井村あり、津田は大里郡の屬、　享德の頃は十六日に猿樂を催し、管領の見物ありし由、成氏年中行事に見ゆ　曰、八月十五日、八幡宮放生會祭禮、同十六日、於社頭猿樂あり、長命太夫每年申也公方樣有御出、於龍王の間御覽、自社務終日御酒あり、管領以下被參也、按ずるに、享德三年の條なり、　天文中放生會の時、北條氏綱神馬太刀等を獻ず　【快元記】曰、天文四年八月放生會御供如恒、從氏綱神馬太刀被進之如每年、六年八月十五日、神事御供如恒、神馬太刀自小田原神主方來、其後放生會は廢して、流鏑馬相撲のみ、僅に古例の萬一を存す、又年中の祈禱法會は正月元日修正會、是建久三年正月元日、始て行はれしなり　【東鑑】曰、正月一日、幕下御參鶴岡宮、今日始被行修正七箇夜、於八幡宮、八日、八幡宮修正結願、幕下御參、按ずるに、天文の頃も、每年修行ありし事、【快元記】に見ゆ、曰、正月一日、修正如每年、御供闕如耳、少別當依借物事、御供錢被引之歟云々、東西護摩有之、　二月・十一月、初卯の日、七月七日・八月十六日、此四度法華經供養あり、按ずるに、【東鑑】正治二年二月、當宮にして經供養の事始て見えしより往々記載す　二月二十六日、中將家御參鶴岡、於上宮被供養御經、導師辨法橋宣豪、承元元年正月九日、將軍家御臺所御參鶴岡宮、於上宮有法華經供養、導師別當法橋定曉、供僧等群參、正嘉元年二月二日、將軍家御參鶴岡八幡宮次御參上宮、御經供養有御聽聞、文永二年三月十一日、於鶴岡上宮、有法華經供養、權少僧都慈曉導師、此餘猶經供養の事見えたれど、上下兩社に通涉したれば、既に前に註せり、

△樓門　拜殿の前にあり　桁行四間五尺二寸、梁間二間五尺二寸、八幡宮寺の額を揭ぐ　曼珠院二品長恕法親王筆、背に、金剛入道二品親王良恕書之、寛永六己巳年三月八日壬巳日と題す

左右に豐磬間戶・櫛磬間戶の神を安ず　遷慶作、建永元年三月實朝參宮の時、廷尉加藤光員、此門に祇候す　【東鑑】三月三日條曰、鶴岡一切經會、將軍家御參廻廊、加藤判官光員、候樓門之邊、　建保六年六月、左大將拜賀として參宮に依て、廷尉二人門の左右に候す　六月二十七日、將軍家爲御拜賀、參鶴岡給、大夫判官行村、(束帶)佐々木判官廣綱(布衣冠)等、候于樓門東西脇、(相對坐床子)隨兵各十人群居傍、　承久元年正月、右大臣拜賀の時、北條義時、劍の役たりしが、俄に違例に依て此門より退去す　正月二十七日、將軍家右大臣爲拜賀、御參鶴岡、令入宮寺樓門御之時、右京兆俄有心神御違例事、讓御劍於仲章朝臣退出給、天文二年再建の事あり、三年落成す　【快元記】曰、十二月十八日去三年十一月廿二日、樓門扉立事、　文政四年、回祿に罹り、十一年御再建あり、按ずるに、天正の修理圖に、今の樓門の外に又二所樓門を圖せり　一は當宮石階の正面一は下宮の前にあり　此二宇は後廢せしなり、

△銅燈臺二基　樓門前左右にあり、一基は延慶三年七月、滋野景善の寄附　銘あり、曰、冶鑄鶴岡八幡宮寶前燈籠一基、右且爲祈天下泰平之御願、且爲貴尊神鎭護之威光、致一基之冶鑄、備萬代之莊嚴、伏願請哀納懇篤之心誠、令成就現當之願望、覲疎不限、利益無邊、敬白、延慶三年庚戌七月日、願主滋野景善、勸進藤原行安、大工檜前恒弘、　一基は寬永五年十二月、向井兵部忠綱奉納す　銘曰、奉寄進鎌倉八幡宮殿前、燈籠一箇矣、

延慶古燈臺圖



向井將監忠勝、息子兵部鶴千代、爲傳武運於長久、保壽算於遠大、而三身安樂同苗繁茂故也、仍銘曰、燈籠玉成、明德見新、天命不昧、日月星辰、愛希武運、咨保福來臻、至祝至禱、寬永龍集戊辰十一月如意珠日、相州三浦紫陽山白室叟書、勸進沙門莊嚴院法印賢融、大工江州住、大田佐兵衞藤原友定、　元文元年八月、子孫伊織修理を加ふ　追銘曰、此銅燈籠一基者、昔年吾祖所奉獻也、爾來凡向百歲、既逮頹敗、罔玆今復修之、補其奮功以祈運命亨通者也、元文元丙辰歲八月穀旦、向井伊織源謹記、彫工中井傳助兼長、田口市兵衞保武、

△廻廊　樓門に續き、四方に回らす　桁行餘て六十三間四尺六寸餘、梁間一丈一尺八寸、建久三年八月、外庭にて神事に召決すべき、相撲の勝劣を試む　【東鑑】曰、八月十四日、於鶴岡廻廊外庭、放生會相撲內取手被召決云々、祭祀の條に詳なり、　五年十一月、足利上總介義兼、兩界の曼荼羅を供養し、東の廊に安置す　事は兩界壇所に詳なり　正治元年十月、千葉介常胤以下の諸士、爰に集會して、梶原平三郎景時に向背の事を誓ふ

十月二十八日、千葉介常胤以下御家人、群集于鶴岡廻廊、是向背于景時事、一味條不可改變之旨、敬白之故也、按ずるに、常胤の外、三十五人の交名あり、今略す、二年閏二月、將軍賴家狩獵として藍澤に赴く、其路次無事の祈禱として讀經あり 閏二月八日、羽林爲狩獵、渡御伊豆國藍澤原、御往還之間、無魔障之樣、可致祈禱之由、相觸于鶴岡供僧等、仍群集廻廊、讀經不斷觀音經、按ずるに、藍澤今鮎澤に作る、駿州駿東郡の屬、建仁元年八月、大風にて顚倒す 八月十一日、甚雨午刻大風、鶴岡宮寺、廻廊八足門以下顚倒、十月、上棟の儀あり 十月二十七日 鶴岡八幡宮廻廊八足門上棟、匠等賜祿、遠州、大官令、大夫屬入道等、參宮寺被行此儀、三年正月、賴家參宮の時、爰にて遙拜す 正月一日將軍家御參鶴岡、於廻廊御遙拜、後還御、承元元年正月、實朝參宮の時も又爰にて遙拜あり 正月三日將軍家令詣鶴岡給、但於廻廊御遙拜、建暦元年八月、實朝當所簾中にして、神事の舞樂を見る 八月十五日、鶴岡放生會、將軍家聊御不例依無御出、於廻廊簾中、密々覽舞樂、二年八月、政子及夫人舞樂を見物す 八月十五日、尼御臺所、并御臺所、爲覽舞樂渡御廻廊、建保五年十月、別當公曉、西の壇所に參籠す【社務職次第】曰、公曉十一月十一日、拜社、自今夜號有宿願子細、上宮西壇所、千日可有參籠云々、按ずるに、今も廻廊に供僧等の壇所あり、六年三月、勅使中原重繼爰に下着す、是實朝、左馬寮御監の宣旨狀を持參せしなり【東鑑】曰、三月十八日權少外記中原重繼、爲勅使下着、是去六日將軍家可爲左馬寮御監之旨被宣下、仍所持參件宣旨狀也、先着鶴岡宮廻廊、次爲前大膳大夫入道沙汰、點旅亭請勅使、貞應二年八月、此廊にして一日に百部の法華經を書寫せらる【社務職次第】曰、八月於廻廊、一日百部法華經被書寫、供養導師當宮別當、嘉祿元年五月、千僧供養の時、衆徒着座す【東鑑】脫漏曰、五月二十二日於鶴岡千二百口僧、供養有之、寅剋衆會、貞永元年七月、西の廊に死人あり 【東鑑】曰、七月十一日、鶴岡八幡宮西廻廊、自南第四間、有死人十四五歲童之由、宮寺申之、建長五年八月を始、宗尊親王廊中にして舞曲を覽る事度々あり 八月十五日鶴岡放生會御參宮、入廻廊覽舞曲、康元元年八月十五日、將軍家御奉幣之後、於廻廊覽舞曲、正嘉二年八月十五日、將軍家御參宮、於廻廊覽舞曲、文永二年三月、御息所參籠に依て廊中に假の局等設く 三月七日、御息所從今日七箇日、御參籠鶴岡、先之爲縫殿頭師連奉行、被遣指圖於宮寺、令構御局等、別當僧正催六十四人匠、終不日之功、以熱田三島御前橫廊四間、爲御局、以西二間御寢所並御念誦所とす、以東二間爲御出居、以東廻廊與橫廊之中間敷板成臺所、以東廊北端爲東御方局、以其次一間御湯殿とす又局後籠軒敷板、爲下口并湯殿、以白幕五帖、曳廻廊小軒爲面道、按ずるに、爰に記する所を以て、當時廻廊の樣を想像すべし 永仁四年二月、回祿に罹れり 社務記錄曰、二月三日廻廊等燒失、曆應四年、東廊にて愛染の修法あり 四月廿日於上宮樓門東廊、愛染王修法勤行之、伴僧六人、辨法印賴通・勝法印教玄・兵部卿大僧都長鎔・大夫僧都貞雅・卿□□教書・勝阿彌賴惠・神供所仕覽圓法橋昨乘、廿七日、結願、修法 管領成氏每歲二月、社頭に參籠の時、宿老の士

爰に參籠して出仕す【鎌會年中行事】曰、二月、八幡宮に一七日御參籠、社務社家奉行出仕、政所問注所御所奉行、其外宿老中、廻廊に幕打參籠あり、管領出仕、僧萬里が詩に、廊六十間靈地の句あり 【梅花無盡藏】○按ずるに、今の廻廊、この間數と合す 天文元年十一月、西の廻廊を修理す【快元記】曰、十一月一日八足門西方廊宣葺、後藤取沙汰了、二年、北條氏綱の命に依て、四月より四年八月に至り、廻廊造營落成す 四月十八日、百八十間廊跡、擇築地に可被成之由、侍共に下知畢、三年二月廿二日鶴岡上宮廻廊奉行事、一方鎌倉番匠、此奉行朝倉與四郎・仙波肥前入道・後藤善右衞門、一方奈良番匠衆、此奉行太田亦三郎・地藏院・田村與三左衞門尉、一方玉繩番匠、此奉行者蔭山圖書助・渡邊次郎三郎・神保宮內入道、一方伊豆番匠、此奉行山中彥次郎・窪田豐前入道・橋本九郎五郎、右此人數爲請取、每日改、番匠并小奉行迄也、無闕如可被申付、出陣之時爲中間、一人宛可殘置間、何も嚴密可被申付者也、仍如件、天文三年甲午二月廿二日氏綱判、六月十六日、石切十人、鎌倉臺跡切石等相尋、廻廊之四方下地築、四年八月、當月中上宮廻廊令成就畢、文政四年の回祿に烏有し、十一年御再建あり、△座不冷壇所 左佐末左豆乃太牟之與 廻廊中の巽隅にあり、日夜不斷勤行の所にて、天下安全國土豐饒を禱れり、本尊は秘佛にて御正躰と號す【鎌倉志】曰、御正躰と號して壇を構へ、鏡に彌陀の像打付たる物 又十一面觀音、金銅藥師等を安ず、其修法は本地供六座 彌陀・藥師・不動・愛染・正觀音・十一面觀音、仁王講八幡講各一座、新古大般若經各十卷、最勝王經一卷、五部大乘經五卷を轉讀す、供僧十二院の衆徒、一晝夜を限り交替 朔旦より廿四日に至り、十二人の衆徒、廿五日より晦日に至り、古院家七院萬次に任せ交代す、古院家七院萬次により勤修す、して勤修怠る事なし、故に座席冷かならざるの義に取て、座不冷の行法と號す、是治承四年十月、賴朝の祈願に依て此勤行を始めしなり【東鑑】曰、十月十六日、爲武衞御願、於鶴岡若宮、被始長日勤行、所調法華・仁王・最勝王等、鎭護國家三部妙典、其外大般若經・觀世音經・藥師經・壽命經等也、供僧奉仕之、十二月十六日被始行長日最勝王經講讚、武衞令詣給、裝束于駕龍蹄給、養和元年八月、祈禱の式を定めらる 八月廿九日、爲御願成辨、於若宮并近國寺社、可令轉讀大般若經・仁王經等之旨被仰下、此內可致長日御祈禱之所處有之、於鶴岡宮、兼日被定其式、十月、長日大般若經及最勝王經の供僧職を補任す 供僧禪裔、及玄信の傳に詳なり、壽永元年正月、長日不動、十一面供を始めらる 正月八日鶴岳若宮被始行長日不動・十一面等供養法、供僧等奉仕之、爲御素願成辨也、建久二年十一月、長日不斷本地供の料所として、當國村岡郷及富塚の地を寄進あり 香象院文書曰、奉寄、鶴岡八幡宮寺廿五口、重衍法印供米、相模國村岡郷內并富塚內、田畠屋敷合七町五段者、右爲長日不斷本地供料所、寄進之狀如件、建久二年十一月廿二日、賴朝の華押あり、按ずるに、村岡富塚は當郡の屬、但富塚は今戸塚に作る、三年九月、長日正觀音供及法華講讚を始めらる【東鑑】曰、九月四日、於鶴岡上宮西壇所、被始行長日聖觀音供養法、并法華講讚供僧等奉仕之、寶治元年

七月、社領武州矢古宇郷の内を以て、大般若讀經の料に宛られ、不斷轉讀を始めしむ七月十六日、宮寺領、武藏國矢古宇郷内、以別當得分、爲御讀經料、被始置不斷大般若經轉讀、按ずるに、矢古宇は足立郡の屬、今の如く座不冷所を置しは弘安八年三月なり【社務職次第】日三月十七日、長日座不冷本地供養法始行、社務開白、供僧奉仕、最勝園寺御願也、又曰、當社不冷事、佐々目大僧正輝助御代、弘安八年三月十七日、始行之、今迄正長二年、凡一百四十五年、正應元年十一月、江州防州豫州等の内にて長日不斷本地供の料所を寄進せらる、是武州鹿島田郷の替なり社藏文書曰、奉寄鶴岡八幡宮寺、近江國報恩寺半分地頭職、并周防國小鯖庄半分預所職、伊豫國齋院勅旨田事、右爲長日不斷本地供料所、武藏國鹿島田郷替、所被寄進也、者依將軍家仰奉寄如件、正應元年十一月廿一日前武藏守平朝臣、相模守平朝臣、各華押、按ずるに、鹿島田郷を寄進ありしは、弘安九年なり、小鯖は吉敷郡の屬、永仁元年七月、駿州入江庄の内を寄進して正應中、寄進地の不足を補はる鶴岳八幡宮、座不冷本地供養法衆申供料事、右伊豫國齋院勅旨田東方、并□□地頭分、周防國小鯖庄壹方預所職、近江國報恩寺壹方地頭分、爲料所之處、不足の間、駿河國入江庄内、長崎郷三分一、井同庄楠木村、所被寄加也、早可令致沙汰之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、正應六年七月二十九日、陸奥守平朝臣、相模守平朝臣、各華押、按ずるに、鼓年八月、永仁と改元す、陸奥守は則宣時なり、按ずるに、入江・長崎・楠木井有渡郡の屬、嘉元元年七月、五部大乘經の不斷轉讀を始む【社務職次第】曰、七月二十三日、今夜始被置不斷五部大乘經、社務自身開白、請僧二人、政圓・圓譽、供僧奉仕、人數三十人、加脇堂五人於、按ずるに、十二世の社務、道瑜の代なり、建武の頃、將軍尊氏の祈願として大般若經不斷轉讀を始めらる被置當社不斷大般若經事、爲長壽寺殿御願、二年八月、尊氏武州佐々目郷を以て、不冷座の料所に寄附す社藏文書曰、寄進鶴岡八幡宮武藏國佐々目郷、美作權守知行分、右爲不冷座本地供料所、奉寄之狀如件、建武二年八月二十七日、源朝臣、華押、【社務職次第】曰、寄加料所事、建武二乙亥八廿七、佐々目領家職、御寄進二階堂御所江、直被召供僧被下御判、奉行對馬民部、按ずるに、佐々目は足立郡の屬、應永十八年七月、社領武州吉富郷を長日本地供の料所に宛つ七月八日、於八幡宮、長日本地護摩愛染王被始行、供僧奉仕三十人、加脇堂十人、社務開白、料所吉富郷五ケ村、按ずるに、吉富は今多摩郡關戸村の庄名に存す、三十年九月、長日仁王講を始行せらる長日仁王講、應永三十年九月、爲御願申御沙汰云々、永享四年正月、長日最勝王經を始行ひ人數三十人、武州師岡保内入江郷を以て、其料所に宛つ正月一日、爲社家御願、奉爲天下安全御祈禱、長日最勝王經被始行、料所武州師岡保内、入江郷御寄進之、供僧奉仕、按ずるに、師岡保は橘樹郡の屬、天文三年二月より壇所再建の事あり【快元記】曰、二月十八日、東方座不冷部間迄、下地取掛畢、三月石切等被召上、座不冷前築了、同渡邊次郎三郎、小田原大窪五人、伊豆長谷十五人也、四月四日座不冷壇所を假殿脇籠殿被移之由、自會所惠光院被觸了、七日癸卯依爲吉日、座不冷御本尊、假殿之脇構壇所被移畢、

四年二月成就す下宮の條に詳載す後藤善右衛門某、櫻樹を寄進して前庭に植廿一日、座不冷前庭櫻一本、十月、上杉朝興後藤善右衛門、被殖寄進、十月、上杉朝興出張により祈請あり十月三日、於座不冷、敵退散之祈禱始行、六日、河越衆被人馬皈國畢、敵は上杉扇谷朝興、又氏綱、梅樹を奉納して壇所の庭前に植て、神木となす廿七日、自小田原、梅木御神前被進、以直書切紙、神主小別當被申越、廿八日辰時、座不冷前、爲神木被植了、一札云、此梅木は、續木は泉式部間、爲神木進之間、好匂花御殿之前可被植間、但又殖所者何方に成共任申候恐々謹言、十月廿七日、謹上鶴岡神主殿、北條氏綱、就當社梅木被進之間、貴札即令拜見候、座不冷前東方庭、植令申候、御殿之前者、御造替之時分、材木可相障候間如斯候、殊名花の由蒙仰候、御神定而可有御納受候、此旨可令得御意給候、恐惶謹言、十月廿八日、謹上北條殿人々御中、御報、鶴岡神主山城守時信、六年五月、千遍陀羅尼を修す、此後度々あり五月十日、於座不冷、尊勝千遍陀羅尼始、六月十三日、向駿州進發、翌日十四日、於座不冷、千遍陀羅尼有始行、人數六人、同日於駿州、一職、氏綱被得勝利畢、敵數百人討取云々、十六日、千遍陀羅尼結願也、七年三月四日、於座不冷壇所、千遍陀羅尼始之、八年五月十六日、爲旱祈禱、於座不冷、陀羅尼奉滿之、十七日、大雨降及日暮、十八日、天晴雨不降、雖然三箇日可有祈念之由、儀定之間、陀羅尼滿之、十九日猶炎旱、廿日、天雨南風夜吹、雖末世神之靈驗、陀羅尼之功能、不空耳、廿一日、從河越彦九郎殿被越、便炎旱之祈禱事、可致之由承了、如此之次第、御返事之間、廿二日、雨降、廿三日天陰、廿四日大雨、辰刻天晴了、相續而六日七日八日九日、大雨濕國土、開諸人喜悅之眉耳、六月一日丁酉、天陰巳刻より雨、當月中細々降畢、九年四月七日、神主方五百匹、自遠山隼人方、千度分公物來、亦當院同少別當五百匹、合拾結、卽於座不冷、千遍陀羅尼滿之、九年十月、壇前東西の瑞籬、修理の儀あり十月一日、座不冷前、東西之瑞籬可被成之由、自先度儀定了、十一月、氏綱不豫に依て祈禱を修す十一月一日、於座不冷、大守虫氣、平癒之祈禱有之、卽減氣之鼓月、氏綱の息女古河に入輿あり、依て路由注進有之、廿八日、古河樣御緣氏綱息女被參、爲祈念路次安全、從今日三ケ日、於座不冷、千遍陀羅尼有之、某年吉良左兵衛佐賴康、供料を寄附す相承院文書曰、態申入候、仍任賀例自今以後、當家祈願所に可憑入候條、以使申述候、爾者於座不冷御神前、年中一度御供可進、追而爲其段供錢令進獻旨、態斗貴院江五百文進候、誠祝儀迄候具樣躰江戸彦五郎口上に付而、百賀重可申入候、恐々謹言、吉月吉祥日、鶴岡宮相承院、賴康、華押、

△閼伽棚　【快元記】に據れば座不冷所に設けしと見ゆ、【東鑑】建仁三年七月の條に閼伽棚の下に、死鳩ありし由見ゆ七月九日辰刻、鶴岡宮寺、閼伽棚下、鳩一羽頭切而死、此事無先規之由、供僧等驚申之、社務記錄曰、九日辰刻、若宮閼伽棚本仁、鳩頭切天在之、【快元記】曰、八月十日、閼伽棚近年斷絶、奈良大工に天文四年八月、社頭再造の時再新造あり被仰付了、十月九日奈良大工、座不冷閼伽棚妻戸北方、金物仕付了、

△兩界壇所　廻廊中の良隅にあり、供僧相承・等覺兩院の管する所なり、建久五年十一月、足利上總介義兼、兩界の曼荼羅を供養し

東の廻廊に安置せし事、【東鑑】文書等に見えたるは則此所に安ぜしなり【東鑑】曰、十一月十三日、上總介義兼、於鶴岡八幡宮、供養兩界曼荼羅二鋪、導師當宮別當法眼、題名僧六十口也、施主著布衣在廻廊、伊豆守以下、門葉源氏兩三輩、又源高重、安房判官代藤原敎重、(號三位判官代)等、取布施云々、十四日、上總介義兼、以因幡前司廣元申云、昨日所供養之曼荼羅者將軍家御祈禱也、者仍可奉納宮寺之旨、被仰別當法眼圓曉、則被安置于上宮東廊、社藏文書曰、鶴岡八幡宮一切經、并兩界曼荼羅供養事、施主上總介義兼、著布衣在廻廊、武藏守、伊豆守以下、門葉數輩同列座、曼荼羅供、建久五年甲寅十一月十三日、諸大名群參、爲結緣貴賤成市導師當宮別當法眼圓曉、願文草信敎、淸書按察使朝方卿、題名僧六十口、當社供僧以下、導師布施□被物五重綾被物五重、色々被物廿重砂金五十兩裏物一、(納染絹口十端)唐綾五十端、白綾五十端、染綾五十端、染付五十卷、帖絹五十匹、□□□五十端、紫付濃五十端、藍摺百端、綿三百兩、糸二千兩、紫絹五十端、染□□十端、白布五十端、紺布五十端、色革百枚、加布施金作劔一腰、水精念珠、(在銀折枝)香呂宮、(在香呂)居筥(在三衣袋)此外馬十疋(二疋置鞍)供米百石、題名僧口別、被物五重、色々裏物一(納染絹十五端)白綾廿端、唐綾廿端、紫村濃廿端、染付廿卷、帖絹廿匹、卷絹廿匹、綿五十兩、糸千兩、藍摺五十端、白布五十端、紺布五十端、染絹二十端、色革二十枚、此外馬二疋(一疋置鞍)供米三石、布施取三位判官代敎重・上野介憲信・豐後守季光・安房判官代高重以下十二人、略之、願文在別紙、南都信敎草、(後改覺明)題名僧六十口者、當社供僧廿五日、導師分、加請五口、尊念加請一口、勝圓加請二口、良成加請二口、(已上當宮三十五口)勝長壽院十口、永福寺六口、阿彌陀堂三口、藥師堂一口、慈光寺一口、觀音寺一口、伊豆山二口、箱根山一口、交名委細記者被副一切經目錄云々、應永十三年七月二十三日、足利左馬頭義氏按ずるに、義兼が次男なり、の代に至り、兩界の供料闕怠により寶治二年二月、所領下野國足利粟谷郷を寄進し、其用途に宛つ社藏文書曰、定置若宮修正兩界用途料事、副進註文壹通、右件修正并兩界供料已下事、亡親亡母深有願念、云兩本尊、云一切經論、二親被□□纒目裏判、奉納若宮之後、其勤于今無退轉之處、近代彼用途、隨年多未下、每折節令闕怠之由、供僧被示之、驚召問子細於沙汰人之處、或不知根元哉、又令失念云々、因茲相尋供僧之間、訴令出、正治年中送文等已明鏡也、以不違父母之教命、爲孝行本躰、然者相分足利粟谷郷地利、永以可奉送御壇所、不論旱水兩損、不可致懈怠、凡相傳此所之仁、莫背止勤、仍所定置如件、寶治二年二月日、沙彌、花押、按ずるに、粟谷郷は、足利郡の屬、其後當社回祿の時、寄進狀烏有せしを以て、弘安六年伊豫守家時改て證狀を出せり相承院文書曰、鶴岡八幡宮寺、兩界供僧等申、供料所粟谷郷御寄進狀、令燒失由事、右解狀偏、以當郷被宛置于兩界供料所畢、件御寄進狀、於弊坊者、依有火難之怖畏、相具于一切經目錄、納置御壇所之處、當社回祿之時、令燒失畢、且先年供料未下、訴訟之時、令披露案文於奉行所畢、任件案文如元被成下之、欲備後代龜鑑云々、者件寄附狀、當社炎上之時、燒失之由、令申之間、且爲不違本願之意、且爲令備永代之龜鑑、加彼案文於判形畢、仍狀如件、弘安六年十二月廿三日、伊豫守源朝臣、華押、文和元年四月、足利尊氏當國戸田郷大住郡の屬、を寄附す事は下條に詳なり又十月、尊氏先規に任せ粟谷郷の地を寄進す鶴岡八幡宮供僧土雜掌申、下野國足利庄粟谷郷年貢事、爲兩界壇所供料、任先例可致沙汰之由、所被仰也、早准御敎書之旨、可辨之旨、可被相觸給主之狀如件、按ずるに、仁木兵部大輔殿、尊氏の華押あり、文和と改元、今年九月、

二年七月、去年四月寄附ありし戸田郷を供僧重辨に、附與すべきの下知あり等覺院文書曰鶴岡八幡宮兩界供僧、信濃法印重辨申、相模國戸田郷內(渡邊五郎跡)事、任本年觀應三年四月二十三日御寄附狀之旨、可被沙汰付于重辨代之狀、依仰執達如件、文和二年七月二日、河越彈正少弼殿、修理大夫、按ずるに、戸田は大住郡の屬、其後一旦、一色刑部大輔持家の所領となりしが、應永三十三年六月、持家甲州發向に依て再寄進し、凶徒退治の祈禱を命ず相承院文書曰、鶴岡兩界料所相州富田郷事、返進候也、仍今度甲州進發、凶徒退治の御祈念、無御等閑候者□□□出候、恐々謹言、六月廿五日、相承院法印御房持家、華押、按ずるに、戸富古は通じて記せり、今年武田大膳大夫信長、退治の爲、持家大將として、甲州に發向の事、【鎌倉大草紙】に見えたり、享德の頃當國小田原關所を以て、兩界一切經以下修理の料所とせり社藏文書曰、禁制、鶴岡八幡宮、兩界一切經以下修理料所、相模國小田原宿關所事、右甲乙人等、不可致違亂狼藉、若有違犯輩者、可被處罪科之狀、依仰下知如件、寶德四年四月二十一日、前下野守、華押、按ずるに、今年享德と改元、小田原は足柄下郡の屬、文永中より兩界供僧補任の事、往々見えたり、八年二月相承院文書曰、圓辨阿闍梨申、兩界供僧職□□如狀者、不可有相違之旨、御氣色候、恐々、二月八日、三位阿闍梨御若宮兩界供房、良阿奉、惟康親王の袖判あり、弘安九年三月僧職事、如元不可有相違之由、可申旨候也、恐々謹言、弘安九年三月二日、參河阿闍梨御房、沙彌、華押、永仁二年十二月下、兵部僧都圓景、補任兩界供僧職壹口事、右爲彼職、可被致精誠勤之狀如件、永仁二年十二月廿日、將軍久明親王の袖判を押す乾元元年二月鶴岡八幡宮、兩界供僧職事、任先師參河法印之讓狀、不可有相違之狀如件、正安四年二月二十五日、辨律師御房、久明親王の袖判あり、按ずるに、今年乾元と改元、嘉慶二年九月鶴岡八幡宮兩界供僧職、阿闍梨敎譽蹟事、當社務弘賢僧正、無是非押妨之條、頗先規違背、楚忽之沙汰也、乾中社務所進、正和元年七月十日、下知狀云、公方供僧事、縱雖有罪科、於向後者可言上子細、別當輙不可改補云々、所詮敎譽爲公方供僧之條、文書分明之上者、彼所職領掌不可有相違之狀如件、嘉慶二年九月廿五日、大輔阿闍梨御房、氏滿の華押あり、鶴岡八幡宮、兩界供僧職、阿闍梨敎譽蹟事、任御下知旨、矢田左京亮、相共莅彼所、云所職、云供僧領、可沙汰付大輔阿闍梨賴圓之狀、依仰執達如件、嘉慶二年九月二十五日、明石修理亮入道殿、沙彌、華押、鶴岡八幡兩界供僧職、阿闍梨敎譽蹟事、任御下知之旨、明石修理入道、相共莅彼所、云所職、云供僧領、可沙汰付大輔阿闍梨賴圓之狀、依仰執達如件、嘉慶二年九月廿五日、矢多田左京亮殿、沙彌、華押、按ずるに、沙彌は上杉憲方也、等なり、應永中壇所にて本地供を修し、卷數を上杉中務少輔朝宗入道禪助に贈る曰、八幡宮於兩界御壇所、本地供一七ヶ日、卷數一枝、爲冬季分給り悅入候、恐々謹言、十二月七日、頓覺坊返事、華押、又天文五年五月【快元記】曰、五月十日、於東壇禪助、華押、是偏爲當社繁榮、并國土豐饒也、七月六日、於兩界壇處、眞讀大般若始行畢、七月十日、於兩界壇處、眞讀大般若、日數六十一日結願畢、守札小

田原江翌日進之、別而者大施主爲安穩御願圓滿也、の兩度、大般若經を眞讀す、

【末社】　△武内社　本社の西、瑞籬の内にあり、武内宿禰を祀る、神鏡を置、嘉祿二年十月、修理の事あり、社務記錄曰、十月二十一日、當社御修理始、二十七日、八幡三所并武内御遷宮、貞治二年十二月、兵部大輔某の文書に、文和二年十月、亡父貞家當社に寄進せし、上總國小林郷の年貢五石を、當地に運致すべき由記せり神主大伴氏藏文書曰、鎌倉八幡武氏宮、寄進之地事、任文和二年十月十五日、亡父貞家寄進狀之旨、上總國小林郷半分年貢内、毎年五石可運送鎌倉之由、申付代官訖、可被存其旨之狀如件、貞治二年十二月二十五日、當社神主殿、兵部大輔、華押、按ずるに、小林は長柄郡の屬、鎌倉管領年首の參宮に、當社に奉幣あり【鎌倉年中行事】天文四年五月、北條氏綱社頭造營す【快元記】文政四年の回祿に罹り、十一年再建せらる、毎年正月朔日尊供あり、御殿司職持、△白旗明神社　本社の西にあり、賴朝を祀る、木像あり、左右に住吉・聖天を合祀す、賴家の造建なりと云ふ、元旦に尊供あり、正月十三日神事を行ふ神樂三十六座を興行す鎌倉管領年首の拜賀に、先當社を拜して後本社に詣るを例とす【鎌倉年中行事】曰、正月廿日頃、八幡宮へ御參、宮の左の方を有御廻、先白旗を押拜、御申あつて、其後本社へ御參云々、天文九年北條氏綱再建す【鎌倉九代後記】天正十八年小田原凱陣の時、豐臣秀吉當社に詣し、賴朝影像を見る【大三川志】曰、七月十四日、秀吉奥州に至り、制令を正さんと是日小田原を發す云々、秀吉鎌倉を一覽せんと、藤澤の驛より鎌倉に入り、鶴岡の八幡の祠を拜し、右大將賴朝の廟を問へば、白旗の祠是也、因て白旗の祠に至り、帳を開き拜首し賴朝の像を熟視して曰、凡本邦廣大也と雖ども、卑賤より起り、天下を一統し、四海を掌に握るは、足下と我とのみ、然れども足下は多田滿仲の後裔なり、皇胤を出て遠からず、又祖先伊豫守賴義、陸奥守義家、關東の守護たり、列侯より百姓に至るまで、恩澤を蒙らざることなし、足下義兵を起すに及て、關八州響の如く應ず、故に創業の功大に就れり、我は足下に異なり、匹夫より起て、天下一麈に歸す、創業の功に於ては、我足下より優れり、然れども足下と我とは、天下の友たりと、肩を叩き笑ふて去る、【關八州古戰錄】同じ、當社も文政の災に烏有し、十一年御再建あり、御殿司職司となれり、△柳營明神社　白旗社の西にあり、右大臣實朝の靈を祀る、將軍賴經の創建と云傳ふ、至德・應永の頃は本社の別當兼帶せしが【社務職次第】曰、弘賢左衞門督法印、至德四年轉大僧正、柳營別當職兼之、又曰、登運應永二十四年、任社務職柳營最明寺等別當、今は淨國院の管する所なり、△丸山稻荷社　本社の西山上丸山と號す、にあり古上宮の地に稻荷の社あり、松ヶ岡明神と號せしを、建久中本社造營の時、此地に遷され丸山明神と唱ふ、後星霜を經て頹廢せしかば、寛文中二王門前にありし稻荷社を爰に移す、則今の社是なり、其頃は十一觀音

と、醉臥人の木像大工遠江と云る者、甚酒を好て、此像を寄進すと云ふ、を安じ、酒の宮と號せしが、醉臥の像は非禮なりとて是を廢し、觀音を以て本地佛とす、社人岩瀨一學持、△六角堂　樓門の東にあり、正觀音を置く、中に六角井あり、六十六部の聖經を納むる所なり、文政四年回祿に罹り十一年再營せらる、此下大供所に至る迄同じ、小別當預れり、△愛染堂　樓門の西にあり、像は運慶の作長三尺、即八幡の本地佛なり、又地藏を置長三尺許、政子の守護佛と云、古は赤橋の東方に別堂あり、承仕山口榮存預れり、△大供所　竈殿とも唱ふ、白旗社の西にあり、寶滿菩薩の像を安ず長一尺、八幡宮記に、八幡の姨、俗におみるめとも申すとあり、正月三ヶ日、及四月三日、八月十五日の祭禮に五々三の供物を具する所なり、嘉祿二年十月、下宮修造により其神躰を爰に遷す【東鑑】脫漏曰、十月廿一日、鶴岳宮寺、依可有修理、今夕御正躰等、奉渡假殿、所謂八幡御正躰者、奉渡若宮御殿、又若宮御正體者、奉渡竈殿、曆應四年五月鳴動す社務記錄曰、五月十四日、若宮竈殿終日鳴動、天文三年四月修理により座不冷の壇所を爰に遷せり【快元記】曰、四月四日座不冷壇所を、假殿竈殿被移之由、自會所惠光院被觸了、四年五月、祈雨の爲、千遍陀羅尼を修行す五月十二日、天晴旱、午剋於竈殿座不冷、千遍陀羅尼如□行西風拂雲畢、十三日如昨日旱無雲、十四日、天晴如昨日、今日猶以增遍數、陀羅尼千反誦之、未剋雲起雨降畢、雖末代法力亦不廢歟、午剋迄者更無雲、炎熱無極也、尊勝萬陀羅、龍神之像掛、令祈念所也、十五日雨降、頗如忘旱天計思也、今日百二十五遍宛、一日千遍陀羅尼、雨祈也、十六日丙子、雨終日降畢、雖末學、眞言不思儀之妙用不衰、去比諸寺諸山、我不劣請雨畢、廿二日、請雨始之處如此、云末法不可旱廿可信云々、抑去年冬中、天下鳴動旱魃瑞云々、社人岩瀨一學預れり、△小供所　丸山の西麓にあり、毎月朔四月を除く、望四月八月を除く、五節供、二月十一月初卯の日に、奠供を具する所なり、承仕藤田圓順預れり、△神庫　丸山の下にあり、建久七年十月新造す【社務職次第】曰、十月、正嘉二年正月、回祿に罹り【東鑑】二十九日、寶藏棟上、寶藏鳴動三ヶ度、文安四年閏二曆應四年閏四月鳴動す閏四月九日、西刻曰、正月十七日、丑剋秋田城介泰盛、甘繩宅失火、南風頻扇、若宮寶藏、同別當坊燒失、五月再造成て神寶を收めらる五月十四日、鶴岡寶藏造畢之間、今日被奉納神寶、正和四年三月、社頭炎上の時、神庫のみ回祿を免る、よりて神躰をこに移す社務記錄曰、三月八日子剋炎上、無殘所、寶藏遁餘災、仍御正躰等、奉移入之、四月假殿遷宮、社藏文書曰、寶藏御興三躰、御嚴入日記、羅網十二流、玉旛十二流、御戶帳十二流、鈴大小七十五、此内三者大桙分、大小六十八あり、七失畢、御茵三枚、御莚三枚、御正體三十六面、此外に一面金埵像有之、以上三十七面大桙旛三流、今度一流見出之、小桙旛十二流、古御戶

帳一流、本之料雖然、今度無之、以上一合分、糸繩十二筋、絹繩六筋、中御輿鳳凰一、今度入之、以上一合分、右明德三年入日記如此、本在之而近日惡黨、令蜂起所々、神寶御正體等、盜取之間、寶藏依人遠、俄上宮被移置之者也、仍注文書改訖、文安四年丁卯閏二月六日、法印快季、華押、明應九年五月、神具を增し、神輿を社頭に置、諸人に拜せしむ　曰、明德・文安之如入日記、有其數、此度升形一、寶珠形一、副之、已前之日記之外、御正體一面、顯金剛薩埵像云々、所詮御輿以下之嚴重物共取出、招貴賤參拜、偏是爲令起發恭敬心也、仍自端午至于十一日、諸人之群參、立錐無隙而已、明應九年庚申五月日、法印俊朝、華押、　永正十七年八月、神輿修造成る【快元記】曰、八月二日、神輿莊嚴了、重而輝宮中、幡蓋飜雲、鈴鐸鳴風、諸人群集、悅目驚耳者哉云々、大永六年十二月里見左馬頭義弘、社地へ亂入して、神庫を破却す　小田原記○前に引用す　△影向石　樓門前の西にあり、正應二年二月四日、大風雨の時涌出す、其頃供僧圓頓坊の夢に、龍神座不冷の行法を聽聞の爲此石上に、影向あるべしと見えたり、依て名づくと云ふ、古は一顆なりしが今は二顆となる、△鶴龜石　同所にあり、水もて石面を洗ふ時は光澤出で、鶴龜の紋輝きあらはると云、僧萬里が【梅華無盡藏】にも此石のことと見えたり　曰、謂鶴岡八幡宮、階除有不踏之石、石紋之龜鶴、凡眼不得見之、　△石階　樓門の前にあり、階下西方に銀杏の老樹あり、圍二丈餘　相傳ふ、別當公曉、婦人の服を衣て、此樹陰に匿れ、實朝を害せしと、按ずるに、公曉實朝を此石階の邊にて害せし事、【東鑑】【增鏡】等に見えたり、但【增鏡】に公曉女のまねして白き薄衣を着たる由載す　共に其文、社の總說に註す、寛喜三年正月、石階の西邊梅樹に、山鳩來り八ヶ日を經て飛去らす【東鑑】正月廿日條曰、鶴岡別當法印、申入御所云、當宮石階西邊有梅木、山鳩二居彼樹、今日八箇日、未立去、二月廿三日、去月十三日以後八箇日、山鳩集宮寺石階下梅木、不立去事、被行御占之處、非上御慎、宮寺可慎口舌鬪諍之由、天文四年五月、修築就る【快元記】曰、五月廿八日、占申訖、天文四年五月、修築就る、以數日之功、南石階、孫右衞門築納丁、結構之稱美也、　階下の東に梛樹あり、△石類盤　階下の東方にあり、寛文七年松平備前守隆綱寄附　寄進、石水盥盤、鶴岡八幡宮廣前、寛文七年丁未十二月二日、從五位下松平備前守源隆綱と彫る、

新編相模國風土記稿卷之七十三終

新編相模國風土記稿卷之七十四

村里部　鎌倉郡卷之六

山之內庄　鶴岡五

○鶴岡八幡宮五

○下ノ宮　若宮と稱す　社僧云、若宮とは本社より別ちて、他所に勸請せし宮を號す、蓋頼義、由井郷に祀りしは、石淸水八幡宮なれど、【東鑑】に載する如く、私に勸請する所なれば、則別宮の義に取り、若宮と稱せり、又頼朝上宮を勸請せしは、敕許を得たる事なれば、直に八幡宮と號す、故に此時下宮の神躰を、上宮に選し、下宮は空殿となりしかば、後世若宮の唱へに因て、仁德帝を勸請せしなりと、按ずるに、【東鑑】に建久二年三月若宮以下火災に罹りし時、新に上宮を造立し、若宮及末社等、悉く再建ありて、十月上下兩宮共に、遷宮ありしと見ゆ、然れば下宮、空殿となりしと云は謬なり、且頼義の勸請する所、石淸水の本宮たらば、若宮の稱呼ありとも、頼朝祖先の祀る所を廢して、更に勸請すべき謂なし、上宮石階の下、東方にあり、若宮大權社僧の說信じ難し、上宮石階の下、東方にあり、若宮大權現の額を揭ぐ　青蓮院尊純法親王筆、祭神四坐、中央は仁德天皇、右は久禮、宇禮　仁德帝是も帝の妹なりと云、二十の姉妹左は若殿　二社註式曰、若宮八幡四所御事、若宮、仁德天皇也、今宮、宇治王子也、宇禮姉、久禮妹、別本云、姉妹祭則別稱姫若宮、是に據れば、若殿は卽今宮にて宇治王子　本社に、四間五尺、三間、幣殿に、二間六尺、拜殿　四間五尺八寸に、二間五尺九寸向拜等あり、三十六歌仙の額を扁す　畫は住吉廣守筆、歌は日光准后公寛法親王の筆なり、是元文御修理の時、造らるゝ所なり【承寛雜錄】曰、元文元年、上下兩宮へ、歌仙一通づゝ、御奉納、日光准后の筆なり云々、按ずるに、上宮の額は、回祿の時烏有す、　治承四年十月、源頼朝由比郷より移して建立ありし社なり【東鑑】曰、十月十二日辛卯、快晴寅剋爲崇祖宗、點小林郷之北山、構宮廟被奉遷鶴岳於此所、以專光房暫爲別當職、令景義執行宮寺事、武衞此間潔齋給、當宮御在所、本新兩所用捨、賢慮猶危經之間、任神鑒於寶前、自令取闔給、治定當砌訖、然而未及花構之儲、先作茅茨之營、按ずるに、本とは由比の宮を云、新とは當社地を指せるなり、當國桑原郷を以て供料所となす　十月十六日、爲武衞御願、於鶴岡若宮、被始長日勤行、以相模國桑原郷十二月十六日、爲御供料所、按ずるに、桑原は足柄下郡の屬、　十二月、鳥居を建　鶴岳若宮被立鳥居、武衞令詣給、養和元年正月、頼朝參宮して神馬を奉裝水干駕龍蹄給、養和元年正月　正月一日卯剋前武衞參鶴岳若宮給、不及日次沙汰、被定當宮奉幣之日、三浦介義澄、畠山二郎重忠、大庭平太景義等、牽郎從去、半更以後、警固辻々、御出御騎馬也、著御于禮殿專光坊良還、豫候此所、先神馬一疋引立寶前、宇佐美三郎祐茂、仁田四郎忠常等引之、次法華經供養御聽聞、事終還御　閏二月、立願に依て七ヶ日參詣す、神託あり　閏二月日一日今廿

以後七ヶ日、可有鶴岳若宮參詣之由、立願給、是東西逆徒蜂起事爲靜謐也、未明參給、被行御神樂廿七日、武衞奉幣若宮給、今日所滿七ヶ日也、而跪寶前、三郎先生蜂起如何之由、獨被仰出、于時小山七郎朝光持御劔候御供、承此御旨云、先生已爲朝政被攻落訖歟、武衞顧面曰、少冠口狀者、偏非心之所發也、尤可用神託、若如思、於令屬無爲者、可被行優賞者、朝光今年十五歲也、御奉幣事終、還向給之處、行平、朝政使參著、義廣逃亡之由申之、及晚朝政使又參上、相具先生伴黨類之由言上、此後參宮屢ありし事、【東鑑】其外記錄等に見えたり

【東鑑】養和元年四月一日條曰、前武衞參鶴岡給、而廟庭有荆棘、瑞籬藏草露、仍被掃除、大庭平太景能參上、終日有此沙汰、七月廿日、八月十五日、壽永元年正月一日、元暦九年四月十五日、文治元年正月一日、二年正月三日、四月八日、賴朝同夫人同參、八月十五日、十一月十二日、賴家、三年正月一日賴朝、及夫人、賴家同參、十二月、賴朝、賴家、四年正月一日、十一月十一日、五年正月一日・廿一日、夫人、閏四月、夫人、及賴家、十月十七日、夫人、十二月一日、賴朝、及賴家、同十八日、夫人、建久元年正月一日、二年正月十一日、二月四日、三月六日・八日・十三日、正嘉元年二月、宗尊親王等參詣ありしなり

五月、社頭營作の沙汰あり　五月十三日、爲鶴岡若宮營作材木事、有其沙汰、土肥次郎實平、大庭三郎景能等爲奉行、當宮去年假雖有建立之號、楚忽之間、先所被用松柱萱軒也、仍成花構之儀專可被貢神威云々

六月、材木由比濱に着岸す　六月廿七日、鶴岡若宮材木、柱十三本、虹梁二支、今朝著由比浦之、七月、武州淺草の工匠を召て、造營の事始あり　七月三日、若宮營作事、有其沙汰、而於鎌倉中無可然之工匠、仍可召進武藏國淺草大工字鄕司之旨被下御書於彼所沙汰人等中、昌寬奉行之、八日、淺草大工參上之間、被始若宮營作、先奉遷神體於假殿、武衞參給、相模國大庭御厨庋一古娘依召參、奉行遷宮事、亦輔道、景義等沙汰之、來月十五日、可有遷宮于正殿、其以前可造畢之由、此月、上棟の儀を行ひ　二十日、鶴岡若宮寶殿上棟、社頭東方構假屋、武衞著御、御家人等候其南北、工匠賜御馬、而可引大工馬之旨、被仰源九郎主之處、折節無可引下手者之由被申之、重仰云、畠山次郎、次佐貫四郎等候之上者、何被申無其仁之由哉、是併存役卑下之由、寄事於左右被、離澁者、九郎主頗恐怖、則起座引兩足、初下手畠山次郎重忠、後佐貫四郎廣綱也、此外土肥次郎實平・工藤庄司景光・仁田四郎忠常・佐野太郎忠家・宇佐美平次實政等引之、申剋事終、武衞令退出、又神馬を奉納せらる　廿一日、被奉御厩御馬於八月正遷若宮、葛西三郎爲御使、八月正遷宮あり　八月十五日、鶴岳若宮遷宮、武衞參給、壽永元年六月、社頭に怪異あり　六月九日戌刻、鶴岳邊有光物、指前濱邊飛行、其光及數丈暫不消、八月、賴家誕生により龍蹄を奉納せらる　八月十三日、若君誕生之間、御家人等獻御馬、及二百餘疋、以此龍蹄等被奉于鶴岡宮、兼備父母之壯士等、撰定御使、九月賴朝參宮の時、拜殿にて僧圓曉に別當職を命ず　【東鑑】曰、九月廿三日武衞相催中納言法眼坊、參鶴岡給、是宮寺別當職、依被申付也、於拜殿有此芳約、二年二月、當國高田・田島の二鄕、及武州瓰尻鄕を社領に寄附あり　社藏文書曰、奉寄相模國鎌倉郡內、鶴岡八幡新宮若宮御領事、在當國武ヶ所、高田鄕、田島鄕、右爲神威增益、爲所願成就、所奉寄也、方來更不可有罕籠之狀如件、壽永二年二月廿七日

前右兵衞佐源朝臣賴朝華押、又曰、奉寄相模國鎌倉郡內、鶴岡八幡新宮若宮御領壹所事、在武藏國波羅郡內、瓰尻鄕、右爲神威增益、爲所願成就、所奉寄也、方來更不可有罕籠之狀如件、壽永二年二月廿七日、前右兵衞佐源朝臣賴朝華押、按ずるに、高田・田島は足柄下郡の屬、瓰尻今三ヶ尻に作る、幡羅郡の屬、渡內村民所藏文書に、社領瓰尻鄕內、高柳村の地頭、押領の事により、別當賴仲の呈書あり、曰、鶴岳八幡宮神官等申、當社領武藏國瓰尻鄕內高柳村事、地頭等多年押領之條、無其謂候、重役者候任先例、可令申沙汰給候哉、恐々謹言、十一月十日、謹上、駿河守殿、前大僧正賴仲華押、按ずるに、賴仲は建武三年補任し、文和四年入滅せし人なり、高柳村は幡羅郡の屬、元暦元年四月、左馬頭能保參詣す、是新任拜賀の爲あり　【東鑑】曰、四月十一日新典厩被參鶴岡八幡宮是被申慶之由也、按ずるに、文治二年五月、黃蝶の怪あるを能保去月廿七日新任せらるをもて臨時に神樂を行はれ　五月一日、自去比黃蝶飛行、殊遍滿鶴岡宮、是怪異也、仍今日以奉御供之次爲邦通奉行、有臨時神樂、託宣の事に依て、神馬を奉納あり　此間大菩薩託巫女給曰、有叛逆者、自西廻南、又歸西自西猶至南、又欲到東、日々夜々、奉寬二品之運、能崇神與君、申行善政者兩三年中、彼輩如水沫可消、重有解謝、八月、賴朝參宮の時、西行鳥滅依之被奉神馬、居の邊に徘徊す、依て其名を問しめられ、奉幣の後謁見す可き由を命ぜらる　八月十五日、二品御參詣鶴岡宮、而老僧一人、徘徊鳥居邊、以景季令問名字給之處、佐藤兵衞尉憲淸法師也、今號西行云々仍奉幣以後、心靜遂謁見、可談和歌事之由被仰遣、西行令申承之由、廻宮寺奉法施二品爲召彼人早速還御、四年三月、梶原平三景時本願として、新寫の大般若經を供養す　【東鑑】曰、三月六日、梶原平三景時、依年來宿願、日來令持戒淨侶、書寫大般若經一部訖、是奉爲關東御定運也、仍奉納鶴岡之間、於彼宮可遂供養、稱御旨可唱請導師舞童等之由言上之間、爲果公私祈禱、於若宮寶前、可供養大般若經、導師垂髮等、可從景時招請之旨、賜御書景時、十五日、於鶴岳宮道場、行大法會、景時宿願大般若經供養也、二品爲御結緣御出云々、御參之後有供養儀、導師義慶房阿闍梨、（號伊豫、若宮供僧一和尙）請僧三十口也、先舞樂（筥根兒五人、伊豆山兒三人）次供養事訖曳布施、源判官代、大舍人助、藤判官代取之導師別祿銀劔一、梶原平三景時、豫候最中行事、八月、岡崎四郎義實をして、一百日の間、當社に宿直、警衞せしめらる　八月廿三日、波多野五郎義景、與岡崎四郎義實遂對決云々、義實雖伏、御成敗云、義實造意尤不當也、依其科百ヶ日之間、勤仕鶴岡并勝長壽院等之宿直、詳なる事は、大住郡曾屋村條に註す　十月、大庭平太景義、社頭警衞の爲社地に小屋を構へ、寓宿の所とす、賴朝來臨ありて、庭上の霜葉を賞す　十月廿日、景能此間、於鶴岳馬場邊構小屋、是爲警固宮寺也、今日有移徙之儀、而其庭上多栽樹、各紅葉盛如錦、太催興之由依令申之、二品入御彼所、十一月、馬場の若宮別當參會、御酒宴之間、兒童及延年、十一月十一日樹木倒るゝに依て、賴朝參宮、神馬を奉納あり　十一月鶴岳宮馬場木、無風而顚倒、景能申子細、仍二品御參有御覽、仍奉神馬幣物、解謝給、五年八月、奥州秀衡追討の祈禱として夫人女房等をして、百度詣をなさしむ　八月十日、御臺所以御所中女房數輩、有鶴岳百度詣、是奥州追討御祈禱也、十二月、奥

州凱陣の報賽として、夫人參宮す十八日、御臺所御參鶴岡、是二品奥州御下向之時、有御立願之間、爲被果之也、北條五郎殿被俱奉、於宮寺有御神樂、建久二年三月、神殿已下回祿に罹る三月四日丑剋、小町大路邊失火、餘炎如飛而移于鶴岳馬場本之塔婆、若宮神殿廻廊經所等、悉以化灰燼、供僧宿坊等、少々同不遁此災、賴朝參詣ありて、礎石を拜し涕泣を催さる六日、若宮火災事、幕下殊歎息給、十三日、仍參鶴岡、纔拜礎石御涕泣歟、假殿に遷宮あり八日、若宮假寶殿造營事始也、行政・賴平奉行之、幕下鑑臨給、十三日入夜、若宮假殿遷宮、別當法眼、并供僧、及巫女職・掌等皆參、隨兵百餘人、兼固宮四面、義盛・景時・盛長等奉行之、幕下御出間、佐貫太郎役御劔愛甲三郎懸御調度、河勾七郎著御甲、所雜色基繁、源判官代高重等、取松明候御前、八月、本殿上棟八月廿七日、鶴岡若宮、并末社、十一月、落成して正遷宮の式を行ふ十一月廿一日、天霽風靜鶴岡八幡宮、并若宮及末社等、遷宮也、三年正月、修正會を行はる正月九日戌剋、若宮修正(一ヶ夜)被遂行之、建仁三年六月、鳩一羽、寶殿の棟上より落て死す六月三十日辰剋、鶴岳若宮寶殿棟上唐鳩一羽居、頃之頓落地死、人奇之、嘉祿二年按ずるに、或は元年の事とす、前に辨あり、十月、神殿修理により神體を竈殿に遷す【東鑑】脫漏曰、十月廿一日、鶴岡宮寺依可有修理、今夕御正體等、奉渡假殿、所謂八幡御正體者、奉渡若宮御殿、又若宮御正體者、奉渡竈殿、十一月、正遷宮の儀あり十一月四日、夜入鶴岡若宮修理遷宮也、御正體奉渡本宮、嘉禎二年四月、社頭に羽蟻集る【東鑑】曰、四月一日午寅剋、鶴岡若宮羽蟻群集、寛元二年正月、天變に依て、祈を命ぜらる正月十一日、天變御祈、於鶴岳若宮、大般若經轉讀、於五月、世子乙若、病惱の祈禱として大般若經を轉讀す五月廿九日、爲若君御祈、於若宮、被轉讀大般若經、寶治二年二月、足利伊豫守家時、若宮修正、及兩界の用途料として、足利粟谷郷を寄進す所藏文書曰、定置若宮修正兩界用途料事、副進注文壹通、右件修正并兩界供料已下事、亡親亡母深有願念、云兩界本尊、云一切經論、(二親被奉□續目裏判)奉納若宮之後、其勤于今無退轉之處、近代彼用途、隨年多未下、每折節令闕怠之由、供僧被示之、驚召問子細於沙汰人之處、或不知根元、或又令失念云々、因茲相尋供僧之間訴令出、正治年中、送文等已明鏡也、以不違父母之敎命爲孝行之本體、然者相分足利粟谷郷地利永以可奉送御壇所、不論旱水兩損、不可致懈怠、凡相傳此所之仁、莫□止勤、仍所定置如件、寶治二年二月日、沙彌華押、建仁三年七月、怪異の事に依て八講を行ふ【社務職次第】曰、七月廿九晦、於建長四年正月、下宮最勝御八講、依怪異被行、神殿に怪異あり正月十一日、鶴岡若宮御供飯半に破、又三百餘枚積處之餅顚落、次同御殿、與舞殿之間樋之內、鵄一羽死、文永二年三月、管絃講を行ふ三月九日、今夜於鶴岳若宮寶前被行管絃講、別當弘安四年七月、蒙古退治の祈あり社務記錄曰、七月僧正讀式、廿一日、尊星王護摩一七日、於若宮本坊被修之、僧徒七人修之、寺門如此、八月一日、依大風、異國軍船悉漂沒、正和四年三月、災に罹り【社務職次第】曰、三月八日、若宮并別當坊回祿、按ずるに、社務記錄には、上下兩宮已下末社等迄烏有する由見ゆ、故に社の總說に引用す、併せ見る可し、六月、再建の事始あり六月廿七、若宮事始、社務記錄曰、六月廿七日、若宮事始、大奉行攝津大輔親鑒、布衣、執筆奉行齋藤右近將監基行、豐前介實顯、各布衣、社家少別當勝木左衞門入道、民部大夫等出仕、五年四月、正遷宮あり四月廿八日寅剋、御遷宮、元弘三年五月、北條高時滅亡の時、新田義貞拜殿にて首級を實檢し、神殿に入て重寶を披見あり【太平記】曰、元弘の初、義貞鎌倉を攻亡し、若宮の拜殿におはして、首共實檢し、御池にて太刀長刀を洗、結句神殿を打破りて、重寶共を披見し給ふに、錦の袋に入たる、二引兩の旗あり、是は曩祖八幡殿、後三年の軍の時、願書を添て籠られし御旗なり、奇特の重寶と云ながら、中黑の旗にあらざれば、當家の用に詮なしと宣ひけるを、足利殿方の人是を聞て彼旗を乞奉る、義貞此旗を出さゞりしかば、兩家確執合戰に及んとしけるを、上聞を恐憚て默止けり、延元元年八月、惡徒等社頭に濫入し、神寶を奪んとす、時に宿直に在し、小栗十郎防戰するに依て惡徒等退散す、十郎創を被り終に死す社務記錄曰、八月廿日亥刻、惡黨五十餘人、亂入社頭、而欲奪取神寶之處、横地養子小栗十郎、爲宿直番、而出向下宮而防戰、即追歸了、小栗多蒙疵、於上宮廻廊令死去了、無雙高名也、曆應元年五月、神殿鳴動す五月八日夜、二年八月、社頭にて若宮鳴動、二年八月、社頭にて世上無爲の祈禱を修す八月廿二日、於若宮不動供三座、仁王經一部、爲世上御祈每日勤行之、供僧始之應永廿二年五月、社頭にて最勝王經の講讀を始む【社務職次第】曰、五十五、始行於下宮、最勝王經、每月一部講讀、護摩人數之外五人、加學頭六人、料所吉富內中河原村、此兩條隨分御興隆云々、永正の頃は宮殿大に破壞せり社藏、永正十七年八月、供僧快元の記に、爰以下の廻廊拜殿幣殿以下、皆以顚倒、歎而有餘云々、天文元年十月、中門を修理す【快元記】曰、十月廿二日、下宮中門所殘、可致營葺由、後藤善右衞門尉方下知了、因之同廿六日、卽竹萱相調被葺畢、按ずるに、天正十九年の修理圖を閲すれば、當社前に樓門あり、蓋此門を云るなるべし、三年十一月、社邊に光り物あり十一月十五日、若宮拜殿之山邊より半間程の光物、南方江飛之由、赤橋詰家者共見之、總而去月中、至當月今日、數日震動、諸人怪異之由申、俗語大雪與申說有之、亦有兵亂申者有之、旱魃與申者有之、概者自九月末今日迄、旱而更不降、四年二月、奈良大工藤朝與二郎と呼ぶ寶前に常燈を寄附す二月十一日、鶴岡宮若宮、四所御寶前常燈事、右去癸巳八月、當國隨宮命、自奈良京下着相州小田原、重蒙嚴旨、樓門并瓦以下、東廊座不冷壞所、令造營也、然勸賞勝于他、所作無紕繆、是偏爲靈神之冥助者歟、爰以爲奉報神恩、限夜々五更、入赤銅破壞之燈戶修補、奉備若宮御寶前常灯、但歸國可有其期者乎、頗用途五百匹、燃役者之公料百匹、奉渡小別當法眼御房了、伏冀以此少財、永挑每夜之灯、欲無闕怠耳、重□遠近新疎、二世悉地圓滿、再拜々々敬白、天文四乙未年二月十一日、鶴岡小別當法眼御房、奈良大工平藤朝、請取書、當宮御修理、就中西樓門東廊有修造、公私無相違、旣三ヶ年在鎌倉因茲爲自願、用途五百匹渡給候、以此子錢、可奉備若宮御寶前常灯之由承候、懇志之至、感存候間、令領了、並而百匹被渡候、以此利錢燃者之料、永不可有斷絕候、云神監云冥助、旁以現當之家望滿

足、不可有疑候、仍爲後證一札如件、天文乙未二月十一日、奈良四恩院の大工、與次郎殿、鶴岳小別當法眼良能、將亦於淨國院客殿、院家中江御時申之有敷獻御布施等如形有之、抑限夜々五更、昔之銅灯呂破壞之間、悉手修理之、用途六百匹小別當江渡申、燃常灯若宮奉備之、今日爲開起、轉讀大般若愚僧開白之詞云、方今信心護持施主、合十指之双掌、運三業之誠、轉讀大般若六百軸花文事、旨趣如何、夫燃常灯於神前、照每夜之昏闇備般若之法味於寶前、燿四所權現之威光者也云々亦末句者、般若梵風忽扇遙拂夭厄之塵、神威光彌顯續灯燭萬年之春、乃至法界利益平等、と讀上而發願、

九年北條氏綱、神殿を再興す【鎌倉九代後記】按ずるに、【快元記】に上宮を始、諸堂末社に至るまで再造の事、往々見えたれど、當社造替の事は漏せり、されど九年十月、正遷宮の後、匠作のことゝ見えたり、是當社の修理なるべし、

天正二年閏十一月、北條左衛門大夫氏繁、神鏡及雲板を寄附す社人大久保采女所藏文書、其文上宮條に註す、例祭四月三日 其式上宮八月十五日神事の如し、但干【東鑑】には此祭禮を、臨時祭とも記せり、當日流鏑馬・馬長・競馬・相撲等あり【東鑑】文治四年四月三日條曰、鶴岳臨時祭、二品御參、流鏑馬專被召其堪能、故波多野右馬允義經嫡男有經、不恥嚢祖達者也、仍應今日淸撰頗施群藝、御感之餘給一村、(亡父所領隨一)五年四月三日、鶴岡祭、二品御參宮、馬場儀、馬長、(十騎)流鏑馬、(十五騎)競馬、(三番)其後於廻廊內有相撲、(十五番)建久元年四月三日、鶴岡八幡宮祭也、二品令參給、流鏑馬、幸氏・盛澄・淸近等射之、按ずるに、此後祭禮の事、往々見えたれど、是を省けり今皆廢す、正月四日、修正會を行ふ建久三年三月始て行はれし事、前に見えたり、按ずるに、天正十九年の修理圖に當宮の前に樓門あり、其左右に續きて廻廊を圖せり其圖、上宮條に載、併見る可し、【東鑑】にも當社廻廊の事、往々見ゆ、元暦元年正月、廊中にて法華八講を行ふ正月一日條曰鶴岡八幡宮有御神樂、藤判官代邦通爲奉幣御使、着廻廊、別當法眼參會、被行法華八講、四月、三善康信入道善信、賴朝に謁す四月十五日、武衛參鶴岡給、於廻廊對面屬入道善信、按するに善信前日京師より着す、文治二年四月、賴朝及夫人參宮の次で、靜女源義經の妾、の舞曲を見物す四月八日、二品并御臺所、御參鶴岡以次被召靜女於廻廊、是依可令施舞曲也、此事去比被仰處、申病由不參、於身不省者、雖不能左右、爲豫州妾、忽出揭焉砌之條、頗恥辱之由、日來內々雖澁申之、彼既天下名仁也、適參向歸洛在近、不見其藝者無念由、御臺所頻以令勸申給之間被召之、偏可備大菩薩冥感之旨被仰云々、近日只有別緒之愁、更無舞曲之業由、臨座猶固辭、然而貴命及再三之間、怒廻白雪之袖、發黃竹之歌、左衛門尉祐經鼓、是生數代勇士之家、雖繼楯戟之基、歷一藕上月之職、自携歌吹曲之、故候此役歟、畠山次郎重忠爲銅拍子、靜先吟田歌云、吉野山峯の白雪ふみ分て入にし人の跡ぞこひしき、次歌別物曲之後、又吟和歌云、しづやしづしづのをだまきくりかへし、昔を今になすよしもがな、誠是社壇之壯觀、梁塵殆可動、上下皆催興感、二品仰云、於八幡宮寶前、施藝之時、尤可祝關東萬歲之處、不憚所聞食、墓反逆義經、歌別曲奇怪云々、御臺所被報申云、君爲流人座豆州給之比、於吾雖有芳契、北條殿怖時宜、潛被引籠之、而猶和順君、迷暗夜凌深雨、到君之所、亦出石橋戰場給之時、獨殘留伊豆山、不知君存亡、日夜消魂、論其愁者、如今靜之心、忘豫州多年之好、不戀慕者、非眞女之姿、寄形外之風情、謝動中之露膽、尤可謂幽玄、抵可賞翫給云々、于時休御愼、少四年二月、廻廊にて、流鏑馬を覽る御出、着御廻廊之後、有流鏑馬、五年四月、廊內にして神事の相撲あり四月三日、鶴岳祭、二品御參云々、於廻廊內、有相撲建久元年二月、大般若經を轉讀す二月一日、於鶴岡廻廊、被讀誦大般若經、供僧等奉仕、三月一日、鶴岡大般若經轉讀、歷三十ケ日今日結願、奉卷數廿部、二年三月、回祿に罹り、八月上棟あり三月四日、若宮神殿廻廊等、悉以化灰燼、八月廿七日、廻廊等上棟、建仁二年八月、西の廊に鳩來て數刻去らず、依て問答講を修す、賴家來て是を見聞す八月十日午剋、鶴岡若宮西廻廊、鳩飛來數剋不避立、仍供僧等怪之、眞智房法橋・大學房等、修問答講一座、令法樂之、將軍家爲見聞參給、遠州、大官令等扈從、其外貴賤成市、及酉剋、三年七月、鴿鳥の怪あり七月四日未剋、鶴岡八幡宮、自件鳩指西方飛去、經所與下廻廊造合之上、鴿三喰合、落地一羽死、

建長六年五月、神事の時鬪亂ありて殺害に及ぶ、是に依て造替あるべき由、評議あり五月五日鶴岡神事如例、但於下廻廊中巽方有鬪亂、被疵者三人、死者一人、七日條曰、一昨日、鶴岡廻廊殺害觸之間、可造替之由、被評議、此餘、賴朝及奉幣の使等、廻廊に着座の事見えたれど爰に略せり、社前に銅燈臺二基を置一基は元和元年、秋元藤原朝丸、同父但馬守泰朝、同祖父越中守長朝等の寄附なり、一基は寛永六年、松平伊豆守忠春寄附す、西方末社の傍に槐樹小樹なりあり、社傳に、應神天皇、槐樹の下にして、降誕ありし故此社地にも植しなり、故に安產守護の樹と稱せりと云ふ、

【末社】

△熱田・三島・三輪・住吉合社　下宮の東にあり、東四社と唱ふ、古は各自二社あり天正十九年の修理圖には、熱田・三島を各殿とし、三輪・住吉の二神は漏せり、熱田明神は元暦元年七月、賴朝の勸請なり、遷宮の時當國の內一村を社領に寄附あり【東鑑】七月二十日條曰、此間於鶴岡若宮之傍、被新造社壇、今日所被勸請熱田大明神也、武衛參給、武藏守義信・駿河守廣綱已下門客等、殊刷行粧列供奉、結城七郎朝光持御劔、河勾三郎實政懸御調度、御遷宮事終之後、爲貢稅料所、被奉寄相模國內一村、筑後權守俊兼被召寶前、書御寄附狀云々、文治五年九月、始て神事を行ひ流鏑馬・競馬・相撲等あり、九月十日、鶴岡末社、熱田社祭也、流鏑馬十騎、競馬三番、相撲十番也、建久二年三月、熱田・三島兩社共回祿に罹り、八月上棟、十一月遷宮あり、八月二十七日、末社熱田、三島社廻廊等上棟、十一月二十一日、末社等遷宮也、三島明神祭禮の事【東鑑】建久元年四月に始て見えたり四月二日、鶴岡末社三島社祭如例、廣元爲奉幣使、五月廿一日、三島社神事也、殊御潔齋、令參鶴岡三島別宮給、元久二年五月、修理を加ふ五月十八日鶴岡三島等社、被加修復寛喜三年十一月、社壇鳴動す十一月廿四日辰剋、鶴岡內三島社壇鳴動、仍有御

占、依神事穢氣不淨也、可應永九年十月、神主大伴山城守時速を、當社の神職に補任す大伴氏文書曰、鶴岡八幡宮末社、三島神主職事、慣御病事之由、占申之、於阿藤入道者、不及出仕、號代官子息者、依出仕憚之病氣、神役欠如云々太不可然、仍所被補任也、守先例可被專神事之狀、依仰執達如件、應永九年十月廿六日、神主山城守殿、沙彌華押、按ずるに、沙彌は上杉中務少輔朝宗入道禪助なり、十一月、社領當國下海老名郷を時速に附與す鶴岡八幡宮末社、三島神主申、當國下海老名郷領家職事、任去月廿六日御補任狀、并同日遵行之御奉書等之旨、可沙汰付下地於神主山城守時速之狀如件、應永九年十一月七日、岡豐後守殿、沙彌華押、按ずるに、海老名郷は高座郡の屬、十一年八月管領滿兼改て、神職の補任狀を、時速に渡せり鶴岡八幡宮末社、三島大明神主職、并社領等事、任去應永九年十月廿六日中務少輔入道禪助、補任之旨、不可有相違狀如件、應永十一年八月十九日、若宮神主山城守殿、滿兼の華押あり、鎌倉管領改年の社參に、三島熱田等の社前にて奉幣あり【鎌倉年中行事】曰、正月廿日頃鶴岡御社參、三島・熱田・天神の御前にて、御幣を被召、毎年二月・十一月の初卯、及び八月十六日、三島・熱田兩社の神事あり、社人追川俊藏持、△天神・松童・源大夫・夷三郎合社　下宮の西にあり、故に西四社と唱ふ、古は各自に社あり、天正の修理圖を閲するに、三島の東に續きて松童・天神・源大夫の三宇相並び夷社は別に上宮西門外の西にあり、【東鑑】建長五年八月、西門の脇に三郎明神を勸請せし由を載曰、八月十四日、今度始而於西門脇所被奉勸請三郎大明神也、たるは則此社なり、鎌倉管領年首の社參に天神の神前にて奉幣あり【鎌倉年中行事】其文前社に引用す、明應の頃、社頭再造の事あり社藏、明應九年、僧俊朝の記に、西小社兩所神宮寺、云々の造營如新造、天文七年七月、神保宮内入道了珊、本願主となり、天神社を再建【快元記】曰、七月廿三日天神小社、神保宮内入道了珊、本願勸進十穀云々、六月落成す六月三日、天神社、松童は八幡宮記に、牛飼也と見ゆ、此社建長三年三月、大風に顚倒す社務記錄曰、三月六日、至廿三日、大雨大風、若宮小宮後崩、木一二本倒、松童社逆倒、高良社向西、小別當菴快法橋有全・二王大夫清時等、爲奉行奉直之、源大夫は八幡宮記に八幡の車牛を祀れりとあり、或は元大武とも書り、社人金子泰亮預れり、△高良明神社　階下東方にあり、武内宿禰を祀る八幡宮記曰、又玉垂の大神と號す、應神の臣也、建長三年三月の大風雨に社殿損す社務記錄、前社に引用す、是も泰亮預れり、△神明宮　階下西方にあり、職掌小坂伊豫預れり、△辨天社　二王門外、東池の中嶼にあり、古は琵琶橋の邊にありしを、養和元年爰に移せりと云、神躰は運慶作、長三尺餘膝に琵琶を横たへたり、俗に云小松大臣の持たる琵琶なりと、背に文永三年九月の銘あり始造立之、奉安置舞樂□□□文永三年丙寅九月廿九日、從五位下行左近將監中原朝臣光氏、天文九年、北條氏綱再建す【鎌倉九代後記】伶人八員の預る所なり、△藥師堂　下宮の東方にあり、藥師三尊及十二神將御首の内に、法橋堯　天正の修理圖に彫れりと云ふ、を置　は、御本地堂と載す、鶴岡八幡宮記曰、應神の御父、仲哀天皇は、何れの處に座し給へる乎、曰く神宮寺に、本地垂跡合體にて座し給也、上宮三所は、阿彌陀の三尊の義に依也、仲哀天皇は、本地は藥師なる故に、奉除之也、【東鑑】等に神宮寺或は神護寺など載たるは、則此堂なり按ずるに同書に、本社をも神宮寺と記せし所あり、建仁三年二月五日、於鶴岡神宮寺、被供養法華經、と載するの類是なり、承元二年四月、創建の沙汰あり、三善康信入道善信總奉行たり【東鑑】曰、四月廿五日、鶴岡宮之傍、始可被建神宮寺之由、有沙汰、今日被曳其地、大夫屬入道善信爲總奉行、盛時・仲業等、所被相副也、閏四月、木材を豆州狩野山より運致す閏四月二日神宮寺造營材木、自伊豆國狩野山之奥、出河津海、七月、上棟あり七月五日、神宮寺上棟、相州・武州・前大膳大夫等監臨之、又總奉行善信・朝光、同以參向、匠等給祿、大工馬二疋、(一疋畳鞍)、被物一重裹物(各納白布五段)、小工馬一疋、(裸)空衣一領、裹物二、(各納奥布三段)、行光奉行之、十二月、落成して、本尊を安置す十二月十二日、神宮寺造畢、仍今日午剋、被奉安置本尊藥師像、橘三藏人奉行之、茲月、實賴參詣十六日、將軍家、令拜見神宮寺本尊(藥師)給、又本尊開眼供養を行ふ十七日、神宮寺藥師像開眼、相州、大官令被參、導師眞智房法橋隆宣、(八幡宮供僧一和尚、兼日光山別當也)、請僧廿五日、(若宮供僧)供養之後美作藏人、播判官代等、取御布施云々、入夜供養法閑白、導師魔尼房印尊也又有御布施、三年四月、供僧等に仰せ一夏の安居を結ばしむ四月十四日、依將軍家之仰、神宮寺始結一夏九旬安居是當寺供華最初也、鶴岡供僧等奉仕之、十一月、常燈明を置き、駿州益頭庄を以て其料に宛十一月八日、鶴岡神宮寺、可奉常燈之由被仰下、以駿河國益頭庄乃貢、可爲彼燈油之由、被仰相州、按ずるに、益頭庄は志太郡の屬、建暦元年十一月、政子の本願により藥師佛三體を安置す十一月六日、爲尼御臺所御願、被供養金銅藥師三尊(三尺)像、導師門如房阿闍梨遍曜也、此本尊所被安置鶴岡神宮寺也、按ずるに、今座不冷壇所に、金銅の藥師、長二尺餘なるを置、是政子の安ずる三體の一なり、二體は中古失へりと云、仁治元年二月、堂宇顚倒せしにより修理を加へ、八月落成して入佛あり八月廿二日、鶴岡神護寺、去二月顚倒之間、日來被修造、已造畢之、仍今日奉入本佛、寶治元年六月、三浦若狹前司泰村を誅する時、安達泰盛・大曾根長泰等兵を率ひ此門外に至り、鬨を發して泰村が館を襲ふ六月五日・城九郎泰盛・大曾根左衛門尉長泰・武藤左衛門尉景頼・橘薩摩十郎公義以下、一味之族、引卒軍士、馳出廿繩之館云々、行渡鶴岡宮寺赤橋相構、盛阿歸參以前於神護寺門外作時聲、公義差揚五石疊文之旗、進于筋替橋北邊、按ずるに、此條によれば當時は別に一區をなして、門ありしと見ゆ、弘安二年十月、回祿に罹り五年二月再建落成す社務記錄曰、十月廿八日丑刻、神宮寺千體堂燒失、五年二月六日、神宮寺供養導師社務、其後も

屋火災あり　永仁四年二月三日神宮寺等燒失了、【社務職次第】曰、五年十二廿四、神護寺供養、覺乘僧正勸之、依社務進例也、社務記錄曰、延慶三年十一月六日、神宮寺炎上、【社務職次第】曰、正和二年八八、神宮寺供養、導師法印房朝、社務記錄曰、四年三月八日、子刻炎上、八幡宮上下、大小社以下、社務坊供僧房等、無殘云々、【社務職次第】曰、六月十一日、神護寺供養、導師社務、明應九年五月、再建の事あり　社藏、明應九年五月、僧俊朝の記に見ゆ、天文元年十月、堂宇頹廢せしにより、本尊を他に移す【快元記】曰十月廿一日、神宮寺藥師堂大破之間、山外宮內下宮酒間部屋、次門下奉移畢、四年二月、造營を始む　二月廿日夜、前大道寺上倉、辰刻社頭參詣、太田兵庫同心見廻了、神宮寺可有建立、差圖等被致之云々、大道寺道圓對談、廿一日、神宮寺差圖出來、可有木屋入日限見調了、廿八日、神宮寺木屋入、大工者新右衛門、大道寺指南也、三月十五日、神宮寺爲造營、上寶殿之後、松三本被伐之、大鋸引每日引之、五年四月、僧長泉衆力に依て修造せんと欲し、供僧快元をして勸進帳を草せしむ　四年三月、神宮寺萬人講興云寄、可有勸進歟、樣々意見也、廿八日、神宮寺萬人講日記付僧領狀云々、五年四月十五日、寺萬人講本願長泉、小別當來而勸進帳事、可作之由被申之間草之、按ずるに、此下勸進帳の文を載せたれど、爰に省けり、七年十月、落成す【小田原記】には北條氏綱再建せし由載す【鎌倉九代後記】例年正月五日、修正會をなす、承元三年正月始て行ひし事、【東鑑】に見えたり、正月十二日神宮寺始被行修正、民部承康後爲奉行、十四日神宮寺修正經三ヶ日、今日結願鬼走、承仕山口榮存預れり、△神樂殿　舞殿とも稱す、下宮の西南にあり、建久四年二月、藤原行政を奉行として、新に造立あり、【東鑑】三月廿七日の記曰、鶴岡宮寺舞殿、此間新造、今日被立之、行政爲奉行、將軍家監臨給、建長四年正月、殿邊に死鳶ありし事見ゆ　正月十一日、鶴岡若宮御殿與、舞殿之間、樋之內、鵄一羽死、職掌八乙女預れり、△輪藏　階下の西方にあり、天正の修理圖には藥師堂の南側にあり、堂中に宋板の一切經を藏す、實朝の寄納と云　實朝、朝鮮國に書を贈り宋朝より贖得たる物と云又此經渡りし時、宋人竹溪、經司として來り、其子孫代々當社の經師を勤め、今扇谷村に住し、神尾伊織と稱す、按ずるに【東鑑】に、建曆元年十月十九日、於永福寺、被供養宋本一切經五千餘卷とあり、これ當社奉納の經なるべし、【社務職次第】曰、當社一切經者、一千六百八十六、經筐は八角なり　台德院殿部、五千三百五十一卷三百九十九帙、長五尺許、海上の鎭護として一切經と共に、舶來せしと云、莊嚴院御寄附、傍に四天王を置　中尊長二尺、餘は四尺許の立像なり、運慶作、管す、△護摩堂　輪藏の南にあり五大尊の像を置　天正の修理圖に五大堂と載す、文永十一年、一百日の間、五壇護摩を修す【社務職次第】曰、十一年、於當社、五壇護摩一百ヶ日在之、中壇者社務被勤之、建武元年三月、別當覺伊・尊勝護摩を始行す　尊勝護摩始行事、建武元三二十三、擬八大佛頂、人數八人、元十六人、又曰、尊勝護摩事、任承久例、被擬八大佛頂、而可被定置八口衆之旨、社務代覺伊僧正申行、仍被成御教書、御本尊於被圖繪、建武元年甲戌三月廿三日、被始行云々、

永德三年九月、護摩修行の料所として武州吉富鄕を寄附あり　社の總說に詳載す　嘉吉元年十二月、護摩料所、武州師岡保柴關所、元の如く社家知行すべきの命あり　同上　天文四年十月、北條氏綱武州川越出張により、愛染の護摩を修す【快元記】曰、十月十三日、引卒房州豆州相州武州之軍兵而河越口江氏綱發向、十四日寅刻、於護摩處、彥九郎爲昌、當陣之祈禱に、愛染王護摩勤修、其開白申、十六日、飛脚以卷數進覽、即無相違、十七日、被還馬、千度護摩事者、自彥九郎爲昌、以窪田豐前入道承之間、即席吉日見處、十四日卯刻爲吉日良辰之間、如何、用途五百匹、太刀一腰、撫物一、黃練給（同廿八日、拾窪田）五年九月、北條彥九郎爲昌、三浦郡大多和村を寄進す、是每月護摩を修す可き、料所に宛しなり　社藏文書曰、仍三浦郡之中、大多和村、不及改沙汰、令寄進之狀如件、天文五年丙申九月十四日、鶴岡社僧御坊中江、北條彥九郎爲昌華押、今每年正月五日、護摩開闕　十二院の供僧、薦次に任せ執行す、廿八日結願す、承仕藤田圓順預れり、△塔　下宮の前にあり、二層の浮圖なり　方五間四尺五寸、五智佛を安ず、文治五年三月新に建立あり、主計允行政奉行す【東鑑】三月十三日條曰、鶴岡八幡宮之傍、此間被建塔婆、今日上空輪、二品監臨給、主計允行政奉行之、僧昌寬を洛に遣し、塔供養の願文、及導師を請はしむ　廿二日、成勝寺執行、法橋昌寬、爲使節上洛、以此次鶴岳塔供養、願文可調給之旨、內々望所、同導師可然之僧一人、可令計申請給、閏四月、賴朝監臨し、工匠を召て祿を賜ひ成功を促す　閏四月八日、二品參鶴岡宮給、是爲覽御塔營作事也、大略成功、其上召工等於御前仰云、來六月上旬、可有供養、不可遲怠、五月、朱砂を塗抹す　五月八日、鶴岡宮寺內、新造塔各賜白布二端、行政・俊兼等奉行之、被塗朱丹地、當宮別當供僧等群集、又供養の日、導師以下に引かるべき龍蹄を內覽せり　十九日、鶴岡塔供養事、可爲來月九日之由、被定之間、御導師御願文等事、先日被申、帥中納言訖、仍唱導并伴僧等、施物以下事、日來有其沙汰、今日先龍蹄八疋、於南面覽之、行政・俊兼・盛時等奉行之、武藏守於御前、立御馬次第、一疋河原毛、千葉介進、一疋葦毛、小山兵衛尉進、一疋鵠毛、三浦介進、一疋黑、信濃守進、一疋黑毛、源藏人大夫進、一疋黑栗毛、遠江守進、一疋糟毛、佐々木四郎左衞門尉進、一疋黑、相模守進、帥中納言經房の使者到著して、塔供養の願文を呈す、廿九日、帥中納言（經房卿）使者到著、所被進塔供養願文一通也、草新藤中納言、清書堀河大納言、又錦物一重、綾被物二重被進之、六月、導師下著あり　六月三日、中納言法橋觀性、自京參着、是天台座主僧正全玄代官、爲鶴岡塔供養導師也、江大夫判官公朝、爲仙洞御使參向、六日、公朝參向す　五日、江大夫判官公朝、爲仙洞御使參向、六日、公朝申云、爲御塔供養、自院被進御馬以下之間、相具參云々、被仰可賜置之由、公朝參御所、御馬（葦毛白鞍付、金獅子丸打物、泥障白伏輪也）御厩舍人武賴、引立南門、駿河守廣綱請取之、又錦被物二重、（一重赤地取裏、一重青地）并女房二品局進物、扇二十本、（納銀筥）公朝取之、授新田藏人義兼等、九日、落成供養の儀あり、導師は觀性、呪願は若宮別

當圓曉なり　九日、御塔供養也、導師法橋觀性、呪願若宮別當法眼圓曉、請僧七口、(四口導師伴僧、三口若宮供僧)有舞樂、二品御出、但於宮寺近者、猶有御愼、埒邊構御桟敷、御覽儀式畢也、隼人佐、并梶原平三景時等、兼候宮中行事云々、供養事終、被引御布施、先錦被物三重、(一重赤地)駿河守廣綱一重、(青地以下自仙洞被下之)皇后宮權少進又一重、(紫地、帥卿進)安房判官代等取之、此外不遺甄錄、次御馬引手、一御馬(葦毛、仙洞御馬)畠山次郎重忠、小山田四郎重朝、二御馬、(河原毛)工藤庄司景光、宇佐美三郎祐茂、三御馬(葦毛)藤九郎盛長、澁谷次郎高重、四御馬、(黑)千葉次郎師胤、同四郎胤信、五御馬、(栗毛)小山五郎宗政、下河邊六郎、按ずるに、此頃賴朝內服あり、故に御愼云々、と記せしなり、

建久二年三月、回祿に罹れり　三月四日丑剋、小町大路邊失火云々、餘炎如飛、而移于鶴岡馬場本之塔婆、若宮神殿廻廊經所等、悉以化灰燼、建仁三年二月、再建の經始あり、三好康信入道善信奉行たり　二月十一日、鶴岳宮塔地曳始之、去建久二年炎上之後無其沙汰、今日被興舊跡、將軍家出御、遠州、大官令等扈從、大夫屬入道、爲總奉行、十二月、夫人政子の命に依て再建を停止す、是此塔新造の後程なく回祿に逢ひ、今年再建の企ありしに賴家病に罹る、かたがた不祥の由なり　十二月三日、爲尼御臺所御計、仰鶴岳別當阿闍梨尊曉、被停止宮寺中塔婆之營作、此塔建立始有火災、當宮以下鎌倉數町燒亡、其後爲再興、被曳其地之處、不經幾日數、金吾將軍御病惱、仍不吉之由有其沙汰云々、故に久しく再建の事無りしにや、天正十九年の修理圖にも漏せり、今の塔建立の年代傳はらず、社人石川掃部預れり、

△鐘樓　塔の東にあり、正和五年の鑄鐘を揭く　序銘曰、夫當宮者馬臺東成之州、鶴岡甲區之地、模男山之宗祧、弘尊廟之襟扉以降、禮神之園、頌祇之堂焉、禮頌丕鑾、春禴之奠、秋嘗之儀矣、春秋幾廻、鎭護年尙、答貺日新、然間去玆迎姑洗、不圖鈔靈祠、肆深仰玄鑒、忽跂經始、課般倕兮、是尋易尺、用規矩兮、不欲不忘、土木之勤、既雖及兩祀、斧斤之功、殆可謂不日、傍斯苔壔而復鴻基、先擊蒲牢、而發鯨音、乃作銘曰、冶鑪甫就、寶器鑄陶、龍文製妙、鳧功寄標、形非哆唇、聲不瓠窕、應陰陽律、入宮南調、小大共振、清濁孔昭、帶霜早和、隨風自搖、或驚千界、高徹九霄、梵聲無斷、覃三會朝、正和五年二月日、曆應元年八月、此鐘大に汗せし事あり　社務記錄曰、八月九日、若宮鐘汗垂、樓は明應九年五月再建　當社所藏、明應九年五月天文九年北條氏綱又再造せり　法印俊朝の記に見ゆ、【鎌倉九代後記】

△閼伽井　輪藏の前にあり　【快元記】天文四年八月祭、及天正の修圖にも閼伽井の名見えたり、△經所蹟　【東鑑】に據に、下宮回廊の邊にありしと見ゆ、建久二年三月回祿に罹れり　【東鑑】其文塔の條に注す、依て假に經營あり　【東鑑】三月二十七日條曰、若宮假經所始、供僧等參入、故以有讀經之儀、建仁三年七月鴿鳥の怪あり　七月四日、鶴岡八幡宮、自經所與下回廊造合之上、鴿三喰合落地、一羽死　弘安四年閏七月、蒙古退治の祈禱を修す　社務記錄曰、閏七月三日、依先例爲異國御祈、於當社、下宮下經所、被始行之不動、社務、降三世、圓勇僧都、軍茶利、持明院賴辨法眼、大威德、承俊律師、金剛夜叉、隆成律師、十三日相當結願日、異賊退散、仍早馬下著云々、中境護摩、自僧は供也、嘉元元年七月、不斷五部大乘經を始む　乘經、始置之、社境經所、社務自身、嘉曆二年十月、變異の禱を行ふ　十月五日、爲變異御祈、被始行御修法、勝長壽院別當、前大僧正道潤、中藥師法、伴僧十二口、道場夏堂并經所、應永廿一年二月、供僧珍譽、經机を調進す　當社執行次第曰、頓覺坊珍譽、應永廿一二月、下宮經所机廿一前、申沙汰之也、廢せし年代詳ならず　下同

△北斗堂蹟　輪藏の前にあり、建保四年八月別當定曉創建し供養の儀あり、小河忠快導師たり　【東鑑】曰、八月十九日、鶴岡宮之傍、別當定曉僧都、建立北斗堂、今日遂供養、小河法印忠快爲導師、尼御臺所令入室給、十月、實朝の祈願として一切經供養を行ひ、定曉を導師とす　十月廿九日、將軍家爲御願、於鶴岡北斗堂、有一切經供養、導師三位僧都定曉、將軍家御出、御臺所御同車也、相州扈從、陸奥守廣元朝臣、爲今日奉行、永仁四年二月回祿に烏有す　社務記錄曰、二月三日、北斗堂等燒失畢、應永中再興あり　相承院藏【鎌倉記】天正の修理圖に、尙此堂を載す　方三間、今の護摩堂の邊なり、△千體堂蹟　藥師堂の背にあり、社務記錄、寶治元年三月の記に見ゆ　曰、三月十七日、神宮寺千體堂云々、弘安三年十月、回祿に罹れり　十月廿八日丑刻、神宮寺千體堂燒失、天正の圖には尙此堂存せり、△大黑天社蹟　愛染堂の邊にあり、建長五年八月勸請ありし事、【社務職次第】に見えたり　八月十四日なり、天正の圖には修理を加ふ可き由記し、西門の左右に夷社と相對して圖せり、△二王門　正面にあり、左右に棚を設く、鶴岡山の額を扁す　曼珠院良怨法親王の筆、裏書に、寛永六年三月八日、遍照金剛入木末葉、良恕親王記之とあり、古は八足門なり　按ずるに、【快元記】に八足門・南大門と號すとあり、天正の修理圖に二王門を、建仁元年八月、大風に南大門と記す、是證とすべし、倒る　覆船、【東鑑】曰、八月十一日、甚雨、午刻大風、鄕里穿屋、江浦鶴岡宮寺廻廊八足門以下、所々佛塔廟顚倒、凡萬家一宇無　全所、十月、再建上棟あり　十月廿七日、鶴岡八幡宮廻廊八足門上棟、匠等賜祿、遠州、大官令、大夫屬入道等、參宮寺被行此儀、天文元年十一月、修理を加ふ　【快元記】曰十一月廿九日、八足門、道圓入道以勸進錢葺之、十二月十七日、葺終畢、三年六月、再造の事始あり　六月五日、京番匠彥左衛門子、亦三郎に八足門、可令建立之由被仰付、六日被召上、八日彼門少々取破畢、今日鶴岡并木松伐初、八足門之御用、可被立云々、此門號南大門、擬奈良歟云々、八月廿一日、京大工亦三郎、八足門之礎相定了、九月八日天晴、京大【鎌倉九代後記】に總門工亦三郎、八足門柱立、と見へしは、是なるべし事は社の總說に詳なり、今社人梶田判事預れり、△八ッ橋　二王門前の小流に架す、天正の修理圖に此橋名を載す、天文四年三月より、七月に及び修理あり　【快元記】曰、三月廿五日、八足門前橋桁渡之、七月十日、八足門前、橋渡之、△池　二王門前にあり、中間に橋

二赤橋新橋を架す、池中に島あり、東の方に三、西の方に四あり、相傳ふ、賴朝平氏追討の頃夫人政子、大庭平太景義をして此池を鑿しめ、東西各四島を築きしが東の一島を壞て三島となす、三を産、四を死として東方より西方を滅すの義に象どり、又池の東に白蓮・西に紅蓮を植て源平の色を表す、是又厭勝の義なりと云ふ【東鑑】に據るに、此地はもと絃卷田と號せし水田なりしを、壽永元年四月專光・景義等奉行として、池となせしなり曰、四月廿四日、鶴岡若宮邊水田（號絃卷田）三町餘、被停耕作之義、被改池、專光・景義等、奉行之【社務職次第】曰、四月二十日、若宮神前被掘池云々、元弘の亂に新田義貞、首實檢の時此池にて刄の血を洗はしむ【太平記】其文前に注す、天文二年北條氏綱、社頭再建の時池中を疎鑿す【快元記】曰、四月十八日、池可被掃由有之、水遣亦被致之、十三年六月、氏康が出せし社中の掟書に、二月・八月の兩度、池中を掃除すべき由見ゆ【鶴岡社中法度之事】、池之掃除は、二月・八月、年中兩度、爲大普請、鎌倉中人足、不撰權門、棟別に申付、草の根をとり、速可致之事、

△赤橋　前の池に架す、石の反橋なり長五間巾三間昔時板橋にして朱を以て塗抹す、故に名く、壽永元年五月新に架する所なり【社務職次第】曰、若宮神前被掘池、五月十五日、被懸橋云々、建保元年五月和田の亂に、土屋大學助義清橋邊にて流矢に中り、命を殞す【東鑑】曰、五月三日、土屋大學助義清、於若宮赤橋之砌、流矢之所犯、義清亡命、鎌倉將軍社參の時は此橋邊にて下乘あり建保六年六月廿七日、將軍家任大將御之間、爲御拜賀參鶴岡宮、給、到宮寺、橋砌脫御駕、建長五年八月十五日、鶴岡放生會也、有御參宮、出御西門、若宮大路北行、到赤橋砌御下車、正嘉元年二月二日、將軍家御參鶴岡八幡宮、遣立御車於赤橋下、【增鏡】曰、八月十五日、放生會行ふ、將軍詣で給ふ、赤橋と云處に、將軍御車とゞめており給ふ、按ずるに、鎌倉管領社參の時も橋を踰下乘あるを例とせし事、【鎌倉年中行事】に見ゆ、曰、正月廿日頃、鶴岳御社參御幣の役は、置石近くにて馬よりをりて、馬をば赤橋より右のきわ、山の內のかたへに、扣へさせて、御輿の近くなる時、赤橋の詰に畏て御輿赤橋をこゆる時、御供いたし、御幣の役も被參也、公方樣御馬をば、赤橋の左の方、置石のきわ、西向にひかへ申也、仍御輿をば、內の御鳥居、弓二つへ計隔てゝ被立云々、寶治元年六月、三浦泰村を誅する時、安達泰盛軍兵を率て此橋を渡る【東鑑】其文藥師堂條に注す、文永三年七月、宗尊親王歸洛の時、橋邊に輿を駐て遙拜あり、且倭歌を詠ぜらる七月四日、將軍家可有御歸洛之路次、出御北門、赤橋西行、經武藏大路、於彼橋前、奉向御輿於若宮方、暫有御祈念、及御詠歌、按ずるに、【夫木集】宗尊親王の歌に、十年あまり五年までも住なれて、猶忘られぬ鎌倉の里と載す、蓋此時の歌なるべし、文和元年閏二月、橋邊にて三浦・新田の輩、高掃部助・石堂左衛門助等と爭戰あり社務記錄曰、閏二月廿八日、於赤橋邊、三浦・新田、與高掃部助・石堂左衛門助合戰、掃部助打負畢、永正十七年七月、橋本宮內丞某再造す社藏永正十七年八月二日僧快元の文書に、就中赤橋頽落、既及退轉之砌、橋本宮內丞、手運材木、自築土石、而一砂一草不假他合力、七月二日、御橋造畢、頗不耻昔供養者一切經、五ヶ日轉藏、而至當日曉、表白神分導師者、法印權大僧都弘算、被勤之云々、按ずるに、【快元記】天文三年十一月の條に、廿二日橋本九郎五郎、七日被參、今日爲結願亡父宮內丞赤橋修造、今日亦其儀思、天文八年より十一年可被掛赤橋御願、於御寶前被取之、に至て修理の事あり八年十一月、赤橋材木橋際引付、本願入道以土車引之、十年二月七日、孫左衞門尉、赤橋可懸義、以下知相定畢、八月材木前濱引付、赤橋に積之、十一年、赤橋小屋入等有之、五月十四日、太平柱等立之、

△新橋　赤橋の側に架す板橋なり、【鎌倉年中行事】に此橋の事見ゆ曰、正月廿日比、鶴岡御社參云々、自鶴岡還御の時、赤橋の詰に、令祇候侍所之辻堅、所司代以下、新橋の詰まて、御供の人々跡に參云々、

△鳥居　治承四年十二月、神前に始て鳥居を建らる【東鑑】曰、十二月十六日、今三鶴岡若宮、被立鳥居、基あり、第一の鳥居は由比ノ濱にあり、大鳥居と云ふ高三丈一尺五寸、笠石四丈八尺、兩脇の間、相去る三丈九尺、極礎周徑一丈二尺五寸、銘あり、曰、鶴岡八幡宮雙石華表、寬文八年戊申八月十五日、御再興也、二三の鳥居銘、皆同じ、建保三年八月、暴風により顚倒し【東鑑】曰、八月十八日午刻、大十月新造せらる十月風、鶴岡八幡宮、鳥居（前濱）顚倒三十日、鶴岡濱鳥居被新造、去八月、依大風顚倒之故也、相州武州匠作以下人々、多以監臨給、及晚終其功、而足代顚倒之間、匠一人、匹夫二人被打損、是重服人、被相交歟之由、別當供僧等申之、寬元三年十月、鳥居再建あり十月十九日、被建由比濱大鳥居、延元元年七月北條左親衞被監臨、人々群集、雷の爲に損す社務記錄曰、七月廿八日、雷落而蹴折濱鳥居兩柱已下、御吉事之由、諸道勘申之、延文三年四月、造營あり少別當記錄曰、鶴岡八幡宮、濱大鳥居棟上事、延文三年戊戌四月十一日卯刻奉行人同所祗候、和泉筑前入道法阿・皆吉掃部助文康・矢田多彈正忠入道禪智出仕、座席次第、神主山城守時國、（著淨衣）鳥居西方、少別當法印宮能、（著純色）鳥居東方、大工左衞門大夫國吉、（著狩衣）取善綱捧神主前拜之、次捧少別當印同拜之、大工祿次第、被物一重、金劍一腰、馬二疋、（一疋置鞍）但御所依有御座入門、何以略儀、兼日大工方被送之畢、延文三年四月廿五日、記之、嘉慶二年六月、上杉安房守憲方入道道合造建す【鎌倉九代記】曰、上杉安房守入道道合、嘉慶二年六月大華表を立らる、【鎌倉大日記】曰、嘉慶二年、濱大鳥居立、上杉安房入道自願、應永二十一年三月、管領持氏、上杉右衞門佐氏憲入道禪秀を奉行として建立あり【鎌倉大草紙】曰、三月十六日、由比濱鳥居御建立、奉行は上杉禪秀なり、此鳥居は賴朝公より、代々公方の御再興の所なり、然れども久しく造營なくして、笠木も朽果ける處に、此御代にかく御建立、目出度かりける事共なり、足利成氏の頃は、每年二月神殿に參籠の時、大鳥居を廻りて七度詣をなせるを例とす鎌倉公方年中行事曰、二月、八幡宮に、一七日御參籠、七日之內に、濱の大鳥居を御回りありて、御七度あり、文明十八年、聖護院道興准后、鳥居の邊に逍遙して、倭

歌を詠ず【回國雜記】曰、由井濱にまかりて、鳥居など見侍て、暫遊侍けるに、朽殘る鳥井の柱顯れて、由井の濱邊に立　僧萬里が記に、兩楹の大さ三圍と載せ【梅花無盡藏】曰、移歩於由井濱華表　又詠ぜし句あり曰、千度境連七里濱、峥嶸華表奪龍之下、其兩柱大三圍、鱗、按ずるに、萬里誤て、由比。七里の兩濱を一所とす、故に此作あり、　十九年、僧堯惠參詣の時、鳥居邊の風景を賞す【北國紀行】曰、鶴岡へ參りぬ、由比濱の鳥居、遙に霞渡りて誠に妙なり、【名所方角抄】には、磯邊十八町に、大鳥居ありと記せり、天文四年正月、名越安養院の僧玉運、瑞夢により本願主となり、再建の事を企つ【快元記】曰、正月七日、本願安養院之僧、來而依瑞夢思立之由申、愚僧申曰、當社上宮、數十貫每日被出公料、被爲拵、今半過之處無爲而已不事闕、鳥居事屋形江可申入事、更不得心、或者上宮廊歟、亦者下宮拜殿歟、末社歟之由、被取立尤由申處、夢想之間、費之多少も不可入、此外者不可致之由、小別當被申、愚拙心底者更不事耳、按ずるに、名越は大町村の屬、　四月玉運北條氏綱の許を得て、十方を募緣す四月廿四日、鳥居願主玉運、小田原へ罷立、廿八日玉運歸倉、奉加之事屋形申入、判形有之、本願玉運歡喜、晦日當院江被來、按ずるに此下、勸進帳の文を載せたれど、考證に益なければ省けり、五月廿七日、鳥居之本願玉運、勸進帳以下相調、山根江被越云々、七月條曰、去月中、鳥居本願、山家之三田彈正忠以指南、鳥木等少々見立、亦勸進等有之由申了、八月十日、鳥居本願、上總峯上江可罷越分相定、爲材木取之云々、按ずるに、山根村は、上總國長柄郡、峯上は同國、天羽郡の屬、　十月より六年七月に至り、材木運致せし事見えたり十月、上總峯上之地、鳥居木二本、彼本願被伐之由被申、五年五月、總州峯上鳥居木、數千人之夫力可入處、去廿七日、以洪水、數千町引出了、則臨海濱鳥居木、千餘人之以夫力、陸地上畢、六年七月三日、鳥居木三崎著之由被申了、十五日、小坪浦に著了、十六日、由井濱引付了、卽數千人以人夫上之畢、小坪之浦鳥居木、由井濱之鳥居際え、以數千人引上畢、太三尋餘、長十尋也、按ずるに、三崎小坪は、并三浦郡、佐貫は上總國、天羽郡の屬、九年正月、鋸始あり正月廿一日、濱鳥居鋸初、京大工自小田原上倉、數十人數日致之、柱二本如形彫、二月朔日、濱鳥居根掘之、二丈餘入土中之間、送日數畢、沙底不朽如新木、亦柱木二本彫九云々、是送日數、每日大工衆、十一人、其後匠作の事姑く廢し、十二年を歷、二十一年十一月に至り、北條氏康再び匠功を興し、明る二十二年四月落成す當社大工、岡崎卯右衛門が家藏古記曰、鶴岡濱之大鳥居二柱之事、於上總國峯上山剪之、爲大木之間、引出之不及人力、然處天文五年五月廿七日、一夜大雨洪水、大地動搖而海邊押出之、木上有光物云々、見者成不思儀之思、卽棄舟由井浦引付之、其後經十七ケ年、今年天文廿一霜月鋸立、翌年四月十二日造立之、願主北條氏康、總奉行大道寺駿河守昌盛、小奉行蔭山長門入道、關左近尉、四月廿五日降雨故、廿六日笠木上之、同廿七日有祝言、悉任延文之例、大工前飛騨秀吉、(狩衣、立帽子、大口)神主時考、(淨衣)小別當淳能、(鈍色)鳥居前構于屋形、神主西坐、小別當東坐、大工向鳥居坐、各疊敷之、其後大工西善綱懸手、小別當渡之拜、神主渡之拜、又東善綱懸手、小別當渡之拜、奉行中同拜之、其後馬二疋、(一疋置金幅輪鞍)總奉行大道寺、在陣之間、以代官引之、大工請取之、奉行中各馬一疋、太刀一腰、其外馬太刀不知數、鳥居之笠木用途、百貫文懸之、大工取之、按ずるに、【關東兵亂記】【小田原記】等には氏康建立の年を謬れり【兵亂記】曰、北條氏康、先君の遺願をも果し、且は武運榮久をも祈らん爲に、天文二十一年卯月に、由比濱に大鳥居修造せり、【小田原記】曰、氏康は先考の遺願をも果し、曾は武運の榮久をも祈らん爲に、鶴岡八幡宮の大鳥居を建立あり、天文十一年卯月十日、修造終りしかば、先例にまかせ、一切經を轉讀あり、諸國の僧綱、淸淨僧侶、別而南都七大寺、高野山・横尾・三井寺・鎌倉五山家、雪下の院家衆、極樂寺・稱名寺の律宗衆、集りて勤之、近代未聞の作善也、氏康喜悅の眉を開き、小田原へ歸らせ給、宮寺の奉行せし、大道寺も、御馬御腰物被下けり、【鎌倉九代後記】同、古は三基共、木にて造立ありしを、寛文八年再建せられし時、すべて石の鳥居とせらる【鶴岡御造營記】に、石は備前國大島より取寄られしと云ふ、第二の鳥居は段葛中にあり一の鳥居より爰に到て、六町四十五間、應永二十八年九月、持氏再建す【鎌倉九代記】曰、九月十二日若宮八幡の、中の鳥居を慶讃す、　第三の鳥居は赤橋の前にあり二の鳥居より爰に到【東鑑】に寶治元年五月、三浦若狹前司泰村、近日誅罰せらるべき由、木牌に記して鳥居前に立しと見えしは曰、五月廿一日、若狹前司泰村、獨歩之余依背嚴命、近日可被誅罰之由、有其沙汰、能々可有謹慎之旨、注簡面、立置鶴岡鳥居前、諸人見之、此鳥居を指るなるべし、此餘横大門の東西に木鳥居各一基四足あり上宮社地の西門內に、石鳥居一基あり、天正の修理圖を閲するに、赤橋の內に又一基あり內の鳥居と記す、【鎌倉年中行事】にも此鳥居の事見えたり其文前に注す廢せし年代を知らず、

△馬場　二王門前、横大門に在り東西鳥居の間なり、長三町廿間、【東鑑】文治二年十一月條に、馬場本假屋とあれば其頃既に開かれしなり十二日、若宮御參鶴岡、於馬場本假屋、大庭平太景能獻餉、　三年八月放生會の時、始て流鏑馬あり八月四日、今年於鶴岡、依可被始行放生會、被充催流鏑馬射手并的立等役、九日、造馬場結埒、仍二品監臨給、若宮別當法眼被參會。常胤・朝政・重忠・義澄以下御家人參會、十五日條曰、鶴岡放生會也云々、有流鏑馬、射手五騎、先渡馬場、次各射訖、皆莫不中的云々、流鏑馬次第曰、於關東八幡宮、頼朝御代、神事射手次第、二月初卯十六騎、四月四日十六騎、五月五日十六騎、六月廿日十六騎、八月十六日十六騎、九月九日十六騎、十月十騎、十一月七騎、十　此後鎌倉將軍及夫人等、馬場の棧鋪にして流鏑馬見物の事、往々所見あれど爰に省けり、四年十一月馬場の木、風なきに倒る十一月十一日、鶴岡宮馬場木、無風而轉倒、景能申子細、仍二品御參有御覽、仍奉神馬幣物解謝給、正治二年五月、神事の時馬場にて長江四郎明義が僕從、双場に及ぶ五月五日、鶴岡臨時祭、流鏑馬之時、於馬場見物輩之中有喧嘩、一兩人被殺害、長江四郎明義僕從等云々、承元四年八月、始て神事

以前に、流鏑馬射手の堪否を試らる八月十三日、來十六日、鶴岡馬場、流鏑馬射手數輩、被差之中、今日於馬場被試就堪否、有用捨之定、先々無此儀、今年被始例、堪建保六年六月實朝左大將の拜賀として參宮の時、北條義時の內室以下此邊に棧敷を構へて、其行列を見物す六月二十七日將軍家任大將御之間、爲御拜賀、參鶴岡宮給云々、右京兆室家、以下女房等、構棧敷於馬場邊、凡見物之輩如堵、寶治元年六月、兵火の爲に流鏑馬舍回祿す、十一月再建あり、六月合戰餘炎、流鏑馬舍燒失、十一月一日、鶴岡馬場流鏑馬舍被建之、

△駒留木七所　置石に三所、横大門東西鳥居外各一所、西木戸外に一所、十二院總門外に一所あり、騎馬にて社地に入るを、禁止する爲なり、按ずるに、古文書等には、釘貫と記せり社藏、永享四年十一月、持氏の出せる社中の製狀に、雪下釘貫內、乘馬事云々、又【快元記】に、天文四年七月三日、馬場小路方西所、釘貫被相改畢、と見ゆ、天正修理圖にも、東鳥居外に、釘貫と記せり、

△置石　三ノ鳥居前より一ノ鳥居の邊に至り、往還の中央に一段高く築き、兩側の隄脚は石をもて疊めり長十六町、高一尺五寸、巾五間、壽永元年三月、賴朝夫人平產の祈禱として、新造する所なり【東鑑】曰、三月十五日、自鶴岡社頭、至由比浦、直曲横而造詣往道、是日來雖爲御素願、自然涉日、而依御臺所御懷孕御祈故、被始此儀也、武衞手自令沙汰之給、仍北條殿以下、各被運土石云々、是を七度小路とも唱へ【社務職次第】曰、七度小路事、壽永元年三月十五日、自鶴岡社頭、至由比濱、直置路被造者也、【快元記】にも七度行路と載、或は千度小路、千度壇など呼しなり【梅花無盡藏】曰號此濱爲七里、透千度小路、謂鶴岡八幡宮、又、千度壇連七里濱、峻嶸華表奪龍鱗の句あり、これ由井濱大鳥居を謂るなり、萬里由比七里の兩濱を一所とす、故にかく記せるなり、【鎌倉年中行事】には置石と記す其文、赤橋條今俗に段葛太牟可部良、と唱へり、明應四年八月地震洪水にて海波此所に至る【鎌倉大日記】曰、八月十五日、大地震洪水、鎌倉由比濱海水、到于千度壇、天文三年六月、道春と云僧募緣して修造を加ふ【快元記】曰、七度行路近年磨滅、往復之者、廻路を通之處町人發心剃頭此四ヶ年間、如形仕之由申、同下馬橋可然有增、被本願人道春、來當院勸進帳事申問、卽書了、按ずるに、勸進帳の文あり、今是を略す、【域外末社】

△新宮伊摩美耶　大臣山の西麓にあり、寶治元年四月、後鳥羽院の尊靈を勸請し奉り、順德院及護持僧長賢を合祀す【東鑑】曰、四月廿五日、被奉勸請、後鳥羽院御靈於鶴岡乾山麓、是爲奉宥彼怨靈、日來所被建立一宇社壇也、以重尊僧都、補別當職、普川國師新宮講式曰、有靈託構小社於神宮緣邊、有敬信儼三所、於靈岳甲嶽、所謂左胸者順德帝、右胸者長嚴僧正、共爲內秘外現、【神明鏡】曰、後鳥羽院尊成、承久兵亂、隱岐國へ奉流ける、延應元年五月廿二日、崩、顯德院共申ける、四條院御宇也、崩御後鎌倉中喧嘩闘諍しけり、就中五月廿二日、大驛勤も有ければ、彼御怨念にやとて、雪下に、號今宮奉祀法皇順德院と、護持僧長玄法印と御眞體也、上野行山莊神領也、按ずるに、【東鑑】承久三年六月廿五日、合戰の張本人等を、六波羅に渡さる、條に、刑部僧正長賢は結城左衞門尉朝光、預れる由を載せ、又九月十日條に、長賢陸奥國に、配流せられし事見えたり、當社に配祀せしは、則此僧なるべし、新宮講式【神明鏡】等に記せし長賢の文字、異同あり、今【東鑑】に從ふ此時僧重尊を別當職となし、上野國行山莊を以て神領に宛らるに以上證上に注す、貞治の頃は供僧六口あり相承院文書曰、雪下新宮社供僧職事、早爲六口內、可見勤修行法之狀如件、貞治六年二月廿二日、兵衞督法印御房、基氏の華押あり、應安四年三月、本社神主大伴某を當社の神職に補任す大伴氏文書曰、雪下新宮神主職事、所被補任也、早專祭禮、可被致御祈禱精誠之狀、依仰執達如件、應安四年三月八日、八幡宮神主殿、沙彌華押、鎌倉管領、正月廿九日、此社に詣ずるを例とせり【鎌倉年中行事】曰、正月廿九日、雪下今宮へ有御參詣、至德・永享の頃は社務職の者、當社別當を兼帶す【社務職次第】曰、弘賢左衞門督法印、至德四年轉大僧正、雪下新宮別當職兼之、又曰、尊仲中納言法印、雪下新宮等、數ヶ所別當職、自天拜任、永享三年十二月十九、被任社務職、莊嚴院文書曰、門跡一具、諸職注文云々、雪下新宮事、以上、永享三年八月廿四日、權僧正尊運、今は供僧淨國院進退し、毎年二月二十二日神事あり文政四年正月回祿に罹り、十一社後に六本杉と呼ぶ老樹あり高十餘丈年御再建あり、一根にして六に別る、近世昔天狗の栖し所なりと云傳ふ、應永三災に罹り枯槁す、

十年九月社邊に天狗の怪ありし事、【神明鏡】に見えたり曰、九月八日、八幡宮狐鳴、又今宮傍に、天狗大木以家作と云へり、境內に飯綱社あり、新宮勸請以前よりの舊社と云ふ、△諏訪社二　西方馬場町の山上にあるは上の社なり、小別當持、大臣山の東麓にあるを下の社とす、惠光院管す、△山王社　巽方鳥合原にあり、△由比若宮　由比ノ濱大鳥居の東、辻町大町村屬にあり、下宮の原社なり、康平六年八月賴義の勸請せしより治承四年十月、賴朝下宮の地に移せし事は社の總說に見えたり、【東鑑】仁治二年四月由比大鳥居邊の拜殿、逆浪の爲に流失せし由載せたるは四月三日戊刻大地震南風、由比浦大鳥居內拜殿被引潮流失即當社の拜殿なるべし、我覺院管す、△佐介稻荷社　佐介谷にあり扇谷村の屬、建久中賴朝の勸請と云ふ、例祭二月初午、延文の頃は供僧等覺院當社の別當を兼帶す等覺院所藏、延文四年十二月十一日、尊氏の書翰に、凶徒退治之事、殊可被致精誠之狀如件、佐介谷稻荷社別當職、并當社領等事、任光照寺當、三位僧都御房と見ゆ、應永廿五年二月、相承院九世珍譽、當社の別當に補せらる、此頃は社領ありしなり、相承院文書曰、佐介谷稻荷社別當職、并當社領等事、任光照寺殿御補任狀之旨、如元可爲御計之由候也、仍執達如件、應永廿五二月十日、相承院法印御房、兵衞尉、越前守各華押、今は社僧華光院持、

新編相模國風土記稿卷之七十四終

新編相模國風土記稿卷之七十五

村里部　鎌倉郡卷之七

山之內庄　鶴岡六

○鶴岡八幡宮六

○供僧　當職は治承四年十二月、賴朝僧定兼を以て補任するを初とす【東鑑】十二月四日條曰、阿闍梨定兼依召自上總國參上鎌倉、是去安元元年四月廿六日當國流人也、而有知法之聞、當時鎌倉中、無可然碩德之間、仰廣常所被召出也、今日則被補鶴岡供僧、按ずるに、【東鑑】に、當職の僧等の事歷往々見えたり、其僧侶住持の院名、所見あるものは、各院の條に引用し院號詳ならざるは、皆此條に載、養和元年十月、僧禪裔玄信等を、當職に補し、禪裔に免田を宛行はる十月六日、走湯山住侶禪裔、補鶴岡供僧并大般若經衆、給免田二町(在鶴岳西谷)御下文云々、又以玄信大法師、被加同職於最勝經講衆者可從長日役之旨被仰云々、定補若宮長日大般若經供僧職事、大法師禪裔、右此人爲大般若經供僧、長日可令勤行之狀如件、治承五年十月六日、定禪若宮長日最勝講供僧職事、大法師玄信、右此人於最勝講衆、長日之役、可令勤仕之狀、所仰如件、治承五年十月六日、按ずるに、此年七月、養和と改元あり、壽永元年八月、禪裔が給田の課役を、免除せらる、八月五日、鶴岡供僧禪裔捧訴狀云、長日不退御祈禱、更無怠慢之處、於恩賜田畠、準平氏被充催公事、愁訴雜慰云々、仍則停止萬雜公事之由被仰下、召禪裔於御前直賜御下文、曰、下可早停止若宮供僧禪裔在家役并自作麥畠壹町地子事、右件人爲若宮供僧、長日之御祈無懈怠而在御令住房、准於土民懸萬雜事令煩之條、不穩便事也、於自今已後者、云萬雜公事、云垣內畠、可令停止其煩之狀、所仰如件、以下、治承六年八月五日、按ずるに、訴狀中、平氏とあるは、平民を誤寫せしなるべし、文治二年五月、供僧等を營中に召て、藥師經百卷を轉讀せしめらる五月廿八日條、七月供僧行慈をして、備前守行家が追福の爲佛事を修せしむ七月十一日、被訪故備前守行家沒後(五月十三日伏誅)明日依可被修御佛事今夕爲俊兼沙汰被送遣施物僧食等、行慈法橋之許、按ずるに行慈は題武は大に作る學坊と號し、法華堂別當を兼たり、此後導師請僧等に撰ばれし事、多く所見あり文治三年正月八日、營中心經會導師、行慈法橋云々、建久三年四月二日、御臺所御產氣、御加持安樂房、御驗者題學坊、八月九日、御臺所御着帶、御加持宮法眼驗者義慶坊、題學坊等云々、五年正月七日、御所心經會、導師法眼行慈云々、按ずるに、行慈は行慈の謬なり、此下三條同じ、八月三日、於營中被供養繪像毘沙門天、導師法橋行慈、閏八月八日、於營者追福、有副供養佛經請僧法眼行慈、按ずるに、此日彼岸の佛事結願なり、十月廿五日、於勝長壽院、有如法經十種供養、是故鎌田兵衞尉正淸息女、所修也、且爲奉訪故左典廐御菩提、且爲加亡夫追福、一千日之間、於當寺屈淨侶令行如說法華三昧云々、導師大學法眼行慈、六年八月九日、於御臺所御方、爲故稻毛女房、被修佛事、導師行慈法眼十月七日、鶴岡臨時祭、將軍家參宮、有御經供養、導師大學法眼行慈、正治元年三月二日、故將軍四十九日御佛事、導師大學法眼行慈、二年正月八日、營中心經會、鶴岡供僧等參勤之、法眼行慈爲導師、建仁二年八月十八日、鶴岡若宮西廻廊、鳩飛來數刻不避立、仍供僧等怪之、眞智房法橋、大學坊等、修問答講一座、令法樂之、建保元年正月一日、將軍家御參鶴岡、於宮寺被供養法華經、導師大學法眼行慈、按ずるに、此僧建久三年五月一日職掌紀藤太夫狂亂せしを、行慈加持せしことあり、五年十月、奧州征伐の祈禱、其驗ありしを以て賞賜せらる十月十四日、鶴岡別當、並供僧等應召、是奧州追討、無爲之條、偏荅祈禱玄應之由、依被賀仰也、次被施沙金帖絹藍摺等、建久二年正月、今年中每日十二卷の藥師經を讀誦すべき由命あり正月八日條、三月、僧坊回祿に罹れり三月四日條　十二月供僧二十五口菩薩位たるべき由院宣ありし事、莊嚴院舊記に見ゆ　輕曰、右大將家(朝)當社有御建立、皇帝致奏聞申旨者、抑於豆州、大菩薩御影向、御託宣旨、奏聞申、然者可爲廿五菩薩之位由、被申間、仍廿五菩薩中へ、院宣被成所也、又曰、鶴岡八幡宮二十五菩薩、各有參內可奉祈天下安寧、院宣如此悉之所、建久二年十二月十五日、鶴岡宮二十五菩薩中、關白御判、閏十二月、幕府に於て、千卷觀音經を、讀誦せしめらる【東鑑】閏十二月十八日、於幕府被讀誦千卷觀音經、鶴岡並勝長壽院供僧等、奉仕之、被勸酒於彼僧、自令取酌給、三年四月、夫人着帶に依て、供僧等每日平產の祈禱をなすべき由を命ぜらる四月二日今日より以後每日可抽御產平安御祈禱之由、被仰鶴岡供僧云々、五月、白河法皇、四十九日御佛事、百僧供養あり、供僧二十口を加へらる五月八日條　七月、夫人の願に依て、各布施を賜ふ七月廿三日、爲御臺所御願、鶴岡供僧廿五口、口別被施龍蹄一匹並桑絲一匹越布一端、四年三月、法皇御周關、千僧供養の時供僧等其員に加へらる、其中行慈、定豪の二人宿老僧に撰ばれ、各一方の頭となる三月四日、來十三日、法皇御周關也、仍被供養千僧之間、臨當日各可參上之由、被仰寺々、俊兼奉行之云々、此下諸寺の名を註す、若宮其一にあり、又曰、十三日、迎舊院御一廻忌辰、被修御佛事、千僧供養也云々、宿老十人所爲頭也、仍各相具百人云々、一方頭法橋行慈、一方頭法橋宣豪、按ずるに、宣豪は定豪を謬まりしなり、　按ずるに定豪は、辨法橋と號す、此後導師を勤めし事あり建久五年閏八月二日、彼岸初日也、七ケ日之間、可被修御佛事、於御持佛堂有此儀、當日御導師法橋定豪也、八日御佛事結願、今日爲志水冠者追福、有副供養佛經、導師法橋定豪、六年二月十一日、鶴岡八幡宮御神樂也、將軍家御參宮云々、於寶前被供養法華經、辨法橋定豪爲導師、按ずるに、正治元年六月勝長壽院の別當に補せ、六月、供僧等命を奉て雨を祈る六月十八日條　六年正月心經會を勤め、各馬を賜ふ正月十三日條　正治二年閏二月、賴家豆州藍澤原狩獵の時、祈禱を命ぜらる閏二月八日、羽林爲狩獵、渡御伊豆國御進發之後、爲掃部入道奉行、御往還之間、無礙障之樣、可致祈請之由、相觸于鶴岡供僧等、仍群集廻廊、讀誦不斷觀音

經、十六日羽林、自藍澤御歸着路次無爲、依令感御祈禱玄應給、以上絹五十疋、被施鶴岡供僧等、　建仁二年正月、供僧隆宣寶前の經供養に導師を勤む　正月九日、左金吾御參鶴岡、有御經供養導師日光別當眞智房法橋隆宣(當宮供僧一和尙)　隆宣は眞智房と號し、日光山別當職を兼帶せり、此後導師に撰ばれ、或は祈禱を命ぜられし事度々あり　建仁三年十月十三日、於法華經堂、被修故大將軍御追善、導師眞智法橋云々、元久元年正月八日、御所心經會也、導師眞智房法橋云々、二年正月八日、御所心經會、導師眞智房隆宣、承元二年十二月十七日、神宮寺藥師開眼、導師眞智房法橋隆宣、(八幡宮供僧一和尙、兼日光山別當也)三年正月、御所心經會、導師法橋隆宣、五月廿日、於法華堂、爲故梶原景時並一類亡卒等被修佛事、導師眞智房法橋隆宣也、四年十一月廿二日、於御持佛堂、被供養聖德太子御影、眞智房法橋隆宣爲導師、十二月一日辰剋、日蝕不見、法橋隆宣勤御祈、建曆元年十二月十八日、於御持佛堂、被始行觀音講、隆宣法橋讀式、有管絃等、同廿八日、於御持佛堂、將軍家明年依相當太一定分御厄、今日被行御祈等、葉上房律師榮西、定宣法橋隆宣等奉仕之、二年二月廿五日、於御持佛堂、有恒例文殊供養、導師隆宣法橋、建保元年三月十六日、依天變事、於御所被行御祈不動供、隆宣法橋十二月四日、於御持佛堂、被修藥師法、隆宣法橋始行之、按ずるに、此餘建仁二年八月問答講を修して、法樂せし事あり、其文前に註したれば、爰に漏せり、三年五月、賴家旅行に依て祈禱を勤む　五月廿八日、鶴岡供僧等、自去廿六日、勤仕將軍家御旅行御祈禱、仍爲政所沙汰、被下御布施白布三十端八木十裏、按ずるに、此時賴家豆州に狩獵せしなり、　元久二年六月、北條義時宿願に依て供僧等を囑して、大般若經を轉讀せしむ　六月廿九日條　承元元年十二月、實朝の命を奉て供僧廿五人、一日に大般若經一部を轉讀す　十二月一日條　二年三月、政子法服を與ふ　三月二日、尼御臺所、以雜調法服三十具被下鶴岡供僧、民部大夫行光奉行之、六月江島に於て祈雨の法を修し、感應ありしを以て劍衣等を賜はれり　六月十六日、自去月至今、不降滴雨、庶民失耕作術、仍被仰祈雨事於鶴岡供僧等之處群參江島祈請龍穴、十七日廿雨降、祈請感應也、被送遣御劍御衣等於宮寺、　十二月、神宮寺藥師像開眼の時、供僧廿五人を請僧とせらる　十二月七日條　建保元年十月變異に依て祈禱をなす　十月十四日、依去夜變異、可致御祈禱之由、爲廣元朝臣奉行、被仰付鶴岡勝長壽院永福寺等供僧、並陰陽道之輩、云々、按ずるに、前夜雷鳴、且南庭にて狐鳴度々あり、　三年三月、當宮の供僧法華堂の外、佛事に從ふべからざる由、沙汰あり　三月十三日、爲鶴岡供僧之者、不可從此御佛事外之由、有其沙汰云々、　四年正月、持佛堂に始て本尊安置の供養あり、供僧七人請僧に撰ばる　正月廿八日條　貞應元年六月、祈雨の法を修す　六月十四日、廿雨終日不止、日來炎旱及三十餘日、仍鶴岡供僧等、奉祈雨事、當第三日有此雨、法驗揚焉、萬人感嘆、　元仁元年七月、連夜天變出現により國土安穩の祈禱を修行す　七月廿四日條　安貞元年正月、心經會を勤仕す【東鑑】脫漏　正月八日條　嘉禎元年六月、明王院供養の時供僧隆辨・定憲、職衆に撰ばる　廿九日條、按ずるに、隆辨は大納言法印と號す、文曆元年、洛より下向あり、後當職に補せられ、加持祈禱或は導師を命ぜられし事屢なり　嘉禎二年六月廿八日、召大納言阿闍梨隆辨於御所被修如意輪護摩、三年十一月八日、筥根御奉幣、有御經供養、導師大納言律師隆辨、依此事自鎌倉被召具、曆仁元年正月九日二所御進發、左京兆供奉給、御經供養、導師大納言律師隆辨云々、廿八日、將軍家御上洛、(中略)巳刻進發云々、御驗者公覺僧都、隆辨、律師、延應元年五月十二日、將軍家仰大納言僧都隆辨、於久遠壽量院、被令轉讀最勝王經云々、仁治元年正月十七日、於鶴岡宮寺、令百口僧、被行仁王百講、是依彗星出現事也、此外御祈等云々、七壇北斗供、脇壇隆僧都、二年正月一日今日於御所、大納言僧都隆辨、爲將軍御使、參籠筥根山般若峯、轉讀十六會、十月十一日、於御所在和歌御會、前右典厩、隆辨僧都・親行・基剛・基政・光西等參上、寛元元年六月十八日、京都使者參着、去十日午刻、皇子降誕云々、爲此御加持、大納言僧都隆辨、去年上洛爲件勸賞、同廿日、叙法印云々、十月廿一日、大納言法師隆辨、自京都歸參、去六月十日、爲皇子誕生御加持加之、同廿一日、祈今出河入道相國瘧病、忽令屬減氣旁顯効驗之由云々、二年正月一日爲將軍家御願、於久遠壽量院、被修如意輪法大納言法印隆辨、奉仕之云々、四日及子尅、將軍家內々以御使、被仰大納言法印隆辨云、今年御本命宿月曜也、而來十六日月蝕、殊可有御慎之由、天文宿曜兩道所勘申也、今度不出現之樣、可祈請者、隆辨一旦雖申子細重被仰之間、領狀云々、十六日、自朝至戌刻、更無一雲臨月蝕之期、自未申方、片雲漸發、忽覆蹠天、細雨頻降、複未以後、朗月早現、丑尅將軍家以御自筆御賀札被遣御馬御劍等、於隆辨之壇所云々、彼法印自去八日、參籠明王院北斗堂祈請三月十四日、若宮御祈事、武州殊令申行給、今日隆辨法印、依召參御所、以不動呪奉加持、廿七日、若君御不例平癒、依之今日大納言法印隆辨、於二棟御所賜祿、(五衣一領)三十日、今日息災御祈念大納言法印隆辨、參籠根給、先入精進屋、來月三日、可進發之由蒙嚴旨、三七箇日可參籠五月廿九日、爲若君御前御祈、被行十壇炎魔天供云々、一壇大納言僧都、六月四日、炎旱依涉旬、被修十壇水天供云々、　隆辨僧都、七月廿三日、爲將軍家御祈、被修藥師法、大納言法印隆辨奉仕之、十一月三日御臺所、被供養春日大明神御正躰、大納言法印隆辨爲導師、三年二月八日、於鶴岡八幡宮被轉讀大般若經、大納言法印以下奉仕之、六月十四日、爲大納言家御祈、被修六字供、隆辨奉仕、七月十九日、於幕府被修六字供、大納言法印隆辨奉仕之廿四日於武州第、法印隆辨、被修如意輪供、依不例氣也、而勤修當于七箇日、忽令得少減給、八月五日武州不例平減事、併依大納言法印(隆辨)祈精功之由有其沙汰、今日入道大納言家、以御自筆御書、被感仰剩令送御劍給、十五日、武州不例減氣之間、大納言法印隆辨、令結願行法歸本坊仍武州以宮內兵衞尉爲使、被送遣劍并馬卷絹三十疋、又左馬頭入道正義、桑絲二十疋、吳綿百兩同送之、十八日已尅、將軍家俄御不例、邪氣云々、御祈禱事、被仰付大納言法印、(隆辨)日來依武州祈禱事苦窮屈、剩及發病之由、頻雖辭申、仰及再三令領狀、即參籠御所中云々、九月九日、將軍家御不例事、依丹祈玄應可有御減之由、有彼御母儀二品御夢、仍將軍家於病床、到于大納言法印行法壇砌、令二拜給、法印又去月十八日承此御祈事、同廿五日、可有法驗之趣感得靈夢云々、十四日、御不例御減之間、御修法阿闍梨(隆辨)結願退出御所中、依之入道大納言、被遣御馬御劍等於彼雪下本坊、隼人正光重爲御使、被副御自筆御書、其詞曰、三位中將所勞太急之處、母儀有夢之告、即時平癒之上、經時之病患、又以得減畢、法驗重疊言

語之所及、可被行勸賞者、四年九月廿七日左親衛依殊所願、被造立藥師如來像今日令大納言法印隆辨、加持其御衣木此上綱自去年在京之間、爲護持頻就令招請給、一昨廿五日下着云々、十月九日、左親衛依有宿願於里第自今夜、被修如意輪秘法、並被講讀大般若經、大納言法印隆辨兼行兩事、寶治元年四月十四日、御臺所不例之間、大納言法印隆辨祇候、修炎魔天供轉讀大般若經云々、廿八日、秋田城介義景、令造立供養愛染明王像、導師法印隆辨云々、五月九日、爲左親衛御祈禱被始行尊星王護摩、大納言法印隆辨修之六月三日、左親衛被始無爲御祈請、即大納言法印隆辨斷五穀、於殿堂修如意輪秘法、十三日去三日、所被始行之如意輪法結願之間、大納言法印隆辨獻卷數、仍左親衛仰信之餘、染御自筆被遣賀章云、今度合戰之間、關東平安、併御法驗之所致也、按ずるに、三浦若狭前司泰村、追討の祈なり、隆辨此月、別當職に補せらる、

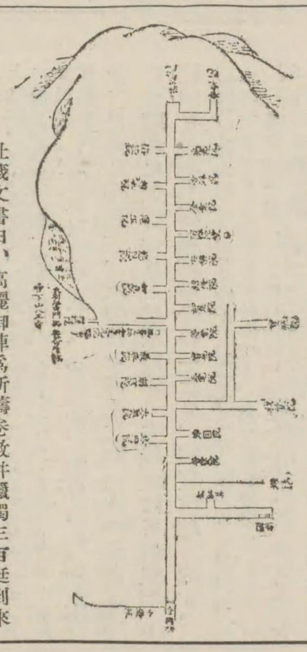
定憲は越後阿闍梨と號す、請僧に撰ばれし事あり　弘長元年二月廿日、於鶴岡八幡宮、被行寛元二年六月、供僧等に祈仁王會云々、請僧鶴岡定憲、

六月二日條　建長二年十一月、供僧の中濫雨の事を命ぜらる

行の輩は改補すべき由、執權相模守時賴陸奥守重時連署して下知す　社藏文書曰、寺社供僧事、於亂行之仁者不可然之間可致改補也、自今以後隨聞及無容隱、可被注申若自他所有其聞者、可爲不忠也者依仰執達如件、建長二年十一月廿八日、若宮別當法印御房、相模守陸奥守各華押、

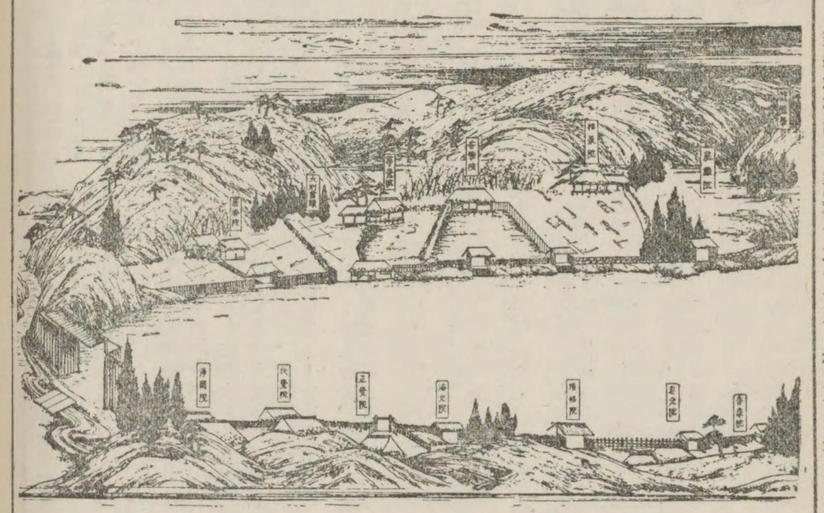
正和四年三月僧房悉く丙丁に罹りし事、社務記錄に見えたり　三月八日條　按ずるに、是より先寛元の頃は當社及勝長壽院・永福寺等の供僧補任の時、當社務及兩寺の別當互に尋問して其德識を撰擧するを例とす、但當宮供僧より、兩寺へ遷補の時は、尋問に及ばざりしとなり、

【社務職次第】寛元三年の記を引て曰、若宮(鶴岡)大御堂(勝長壽院)二階堂(永福寺)此三ヶ所供僧職補任時者、三ヶ所別當方、彼仁躰受法等、無子細哉否由、相互被尋問事、先補大御堂供僧職時者、被尋若宮二階堂時、自兩所受法以下、無相違仁之由被申時、被補之又補二階堂職時者、被尋若宮大御堂自兩所從返事、又補任若宮供僧職時如此但補二階堂供僧後任若宮大御堂之時被尋、又補大御堂職之後任若宮二階堂時、被尋之又任若宮供僧後者、雖居兩職不及是非尋云々、私云、是者若宮職爲本故歟、往昔の二十五坊は、東林・善松・文慧・寂靜・實藏・千南・密乘・佛乘・頓覺・安樂・南禪・慈月・永乘・玉泉・圓乘・悉覺・永嚴・實圓・南藏・蓮華・坐心・華光・智覺・慈恩・如是等にて、各坊號を稱せしを應永二十二年正月、後小松上皇の院宣により院號に改む　【社務職次第】曰、當社供僧院號事自仙洞以院宣被申下二十五箇院號、應永二十二乙未正月改坊號、被成永院號事殆末代之規模頗隨分御興隆歟、按ずるに此時別當尊賢より相承院に下す所の文書今に彼院に藏す曰相承[illegible]右院號者二十五所爲勅免內未來可有相續之狀如件、應永二十二年正月二十五日、別當前大僧正華押、其院々は古より一區をなして、社地の西麓にあり、【東鑑】に雪下北谷と記せしは則此所なり今我覺院所藏に二十五院の古圖あり、縮寫して爰に載す、鎌倉管領成氏の頃迄尙二十五院相續せしが　鎌倉年中行事曰、社家二十五院階臘法弟也、近衆外樣とわけあれども、公界は階老法弟也、社家樣人々御對面のやふだい金襴之御袴素絹をめす也、又繻子御袴をもめす也、社家奉公彥部(法躰)也、(此內位高)箕勾法躰也、此等小法師也、今福俗也、永正の頃より年を追て衰微し、小田原北條氏分國の頃は過半廢院となり　【快元記】天文五年八月、假殿遷宮の時供僧出仕の條曰、於御神殿階下四智讃誦之打鉦、出仕次事二行、淨國院法印僧雅・御殿司香象院堅尊・相承院快元・正覺院迢元・御殿司惠光院尊信・讃頭普賢院尊果・莊嚴院堅榮・華恩院尋惠・等覺院任式部郷重譽云々、又我覺院所藏天正十七年三月、淨國院融尊より我覺院に贈りし文書に寶瓶院江就龍移貴院屋敷之少仕入度之由云々と見えたり、是等に據れば寶瓶院も天正の頃尙存在せり、我覺院は本より古院家の一なれば興廢の沙汰に及ばず、されば天文ょ天正の始迄は都て十一院現存せしなり、天正の末に至りては纔に七院を存す　證下の文書に見へたり、又社の總說に註せし十八年、早川長政片桐直倫等の文書にも七人院家中と載す、其頃北條左衛門大夫氏勝、七院及神主少別當等へ各米二十俵を贈る　社藏文書曰、鶴岡御院家中七ヶ院、并神主少別當、以上九ヶ所也、一ヶ所へ二十俵づつ、合百八十俵米爲飯米進之候、此外かる物共、少も不可有相違候、玉纏衆橫合候者、此方へ可承候、爲其以直判申遣候者也、仍如件、四月四日、鶴岡御院家、神主小別當從玉纏遣候、奉行中氏勝華押、其七院は相承・莊嚴・惠光・淨國・等覺・我覺・香象等なり、今是を古院家と稱す　相承院は永樂七十貫文其餘の六院は各永樂三十八貫三百九十二文を配當す、文祿二年、東照宮の仰により安樂・增福・最勝・正覺海光寺の五院を再興せらる、是を新院家と稱す　各永樂三十貫五百五文を然りしより十二院となれり、鶴岡山と號す、私に雪下山とも號す、眞言宗、京都仁和寺の末に隸し、古新二派に別る　古義九院新義三院　朝鮮の役に祈禱の卷數及蠟燭を豐臣秀吉に捧ぐ　社藏文書曰、高麗御陣爲祈禱卷數并蠟燭三百挺到來之、遠路差越使僧候悅思召候猶山中橘內可申候也、十二月二十八日、鎌倉鶴岡八幡宮院家中、秀吉の朱印、又曰御陣爲御見廻使僧并蠟燭三百挺御進上候、則遂披露候、遠路別而被成御感、以御朱印被仰出候殊御修理相調由、具言上申候尤に被思召候、彌御武運長久之御懇誠肝要候、私え青銅百疋被懸御意候本望存候、委曲御使者へ申入候、恐々謹言、正月二日、鎌倉鶴岡院家中神主中小別當御返報、山中橘內長俊



二十五院古圖

十二院境内圖



華押　此時、東照宮へも蠟燭を上れり　當表就在陣爲音信飛脚殊蠟燭送給候、遠路之芳情悦着候、委曲全阿彌可申候、恐々謹言、陬月晦日、鶴岡御諱壺御印、又曰、御狀拜見本望之至候、仍遠國長陣爲御届從衆中淨國院御越被成候、則披露申候之處に、不大形御覡着被成候、然者御意を以太閤樣御禮被申處に、一段之御仕合に而御朱印被下置候得者、大納言殿も御悦喜に而候、隨而太閤樣江之御進物、蠟燭三百挺、大納言殿蠟燭百五十挺、此分上申候、可御心安候、委細は淨國院へ以一つ書被申候間其元に而可有御披見候、恐々謹言、極月二十九日院家中、神主殿、少別當、全阿彌華押、例年二月十五日、常樂會、四月八日、佛生會十二月八日佛名會、及御代々御正當御忌日の法會各院にて順番に執行せり、○莊嚴院　古義派にて御室御所院室を兼帶し關東五箇寺の一なり、初東林坊と號す、

【御殿司職次第】曰、莊嚴院本者林東坊云々、按ずるに、應永二十二年正月院號に改めしなり、事は前に詳載す、開山行耀寛元三年七月十四日寂　應永中住僧弘俊護摩の卷數を管領足利滿兼及持氏に呈せし事屢あり　所藏文書曰、赤不動護摩御卷數一枝入見參候了、仍執達如件、應永十二年六月二十九日、林東坊、沙彌華押、按ずるに、沙彌は執事上杉氏なり、此餘十四年六月・十二月、十九年六月、二十年七月、二十二年六月等の文書皆卷數を呈せし時の物なり、其文同じければ省けり、慶長十六年十一月、東照宮江城より駿府へ歸御の路次、藤澤御旅館にして住僧賢融謁し奉り、鎌倉三代及北條九代の故事を言上し、且所藏の【保曆間記】を上覽あるべきとの仰を蒙る【駿府記】曰、十一月十八日、路次御放鷹着御藤澤及夜云々、鎌倉莊嚴院出仕依御尋、鎌倉三代將軍北條九代舊規之事、詳言上之保曆間記所持之由申之自保元至曆應治亂粗所記云々、則其書可有御覽之旨被仰、按ずるに、藤澤は高座郡の屬、依て中原御旅館に着御の時、彼書を持參し御前にて披讀し、且鎌倉舊跡の事等、御談話に及ばせらる十九日、御鷹野御着中原、及夜鎌倉莊嚴院、保曆間記持參、於御前讀之、其外鎌倉中舊跡之事、有御雜談云々、寺傳に融は台德院殿の護持僧にて、大猷院殿の御祈禱をも合せられしと云、寛永十一年閏七月十一日卒、按ずるに、中原は大住郡の屬

本光國師日記曰　今月、院家に加へらるべき由、沙汰あり態令啓上候仍鎌倉莊嚴院先門主御法流、執心之仁御座候故、被加召院家、當門主被成印可候、就其極官之儀、傳奏衆被成御相談候へば可被得上意由候間、則被仰越候、可然樣に御取合、賴思召候由、相心得可申入旨恐惶謹言、尙以可爲御氣色次第候間、御取成賴被思召候、此小通圓光寺和尙被仰入候、　寛永の頃祈禱を霜月六日、金地院和尙侍司閣下皆明寺、命ぜられし事、所藏の文書に見ゆ　曰、覺正てんくう御はつほ、判金十枚、御なで物、御ふく一かさね、以上御とし、御むまれつき日の事はそもじ樣、よく御そんじまいらせ候かしく、せうこんいん樣かすがより、又曰一筆申まいらせ候、將軍樣九月十四日よりちと御かいけに御ざなされ候、御やうしふなされ、やがて御きげんもよく、御せんもあかり候まゝ、うちつゞき、御きげんよく候はんと、ぞんじ上候、十月十四日に御さかやきあそばし、御きやうずいなされ候へば、十五日より又御かぜひかせられ候て御ねつきざし候ていまに御ねつのさし引候まゝ、上下きづかひいたし候ゆへ、天しゆいん樣より、正てんくうの御をこなひ、仰せつけさせられ候まゝ、そのもとにて、御じゆみやうちやうをんに、やがて御すきずきと、御ほんぷくなされ候やふに御ゆだんなく、御きれん、下さるべく候、めでたく御ふだ、御あげなさるべく候、御なて物に、御ふく貳つ、まいらせ候、すなはち、めさせられ候、御ふくにて御座候かしく、返々天しゆいん樣より仰つけさせられ候、御きねんにて候まゝ、せつかくせつかく、御ゆだんなく、御きねんなさるべく候、將ぐん樣御きねんを天じゆいん樣より、仰つけさせられ候、めでたく尙々御はつほとして、ばんきん十枚つかはされ候、いそぎいそぎ、御をこなひ下さるべく候、めでたくかしく、十月十九日えどより、標書に、かまくらにてせうこういん樣參、かすがとあり、又曰わざと一筆申まいらせ候、上樣御きねんに、天しゆ院樣より、御しやうでんくうを、をこなひなされたきと、御意なされ候、そもじ樣へ御はつを、判金拾枚、しんぜられ候、よく〳〵、御きれんのしやう、かすが樣より、仰出され候、いかにもいかにも、御せい入なされべく候、めでたくかしく、なをなをめでたき御きねん、御せい入べく候、めでたくかしく、十月十九日、八幡宮しやうこん院樣、人々、ひこより、又曰、上樣御きぶんの御きたふなされ候、御そなへ物、御もたせわざとひきやく給候、すなはち文のとほり、天壽院樣へ、申上まいらせ候、大かたとなく御きげんの御事ども御座候、上樣御きぶんも、この二三日は、御くはいきに御座なされ候まゝ、めでたく御心やすく、をぼしめし候て、いよいよ御きねんに御せい入なされべく候、二十三日より、御をこないはじめられ候よし、申まても御座候はねども、せいぜい御きねん、御じゆみやうの所を、御せいいたしなさるべく候、そこもと早々の御きねん、

あさくをろかに御座候はぬを、ぞんじ候まゝ申候、追書に、こんどのそもじ様への御きねん、仰つけさせられ候御事も、さやうなるを、きゝをよばせられ候て、仰つけさせられ候まゝいよいよ御しんりきふかく御せい入られ、萬事御じゆみやうの所、ひつせいにて御座候、かすが様へもよく申まいらせ候、これのみ申上候御内々の御事に御座候、めでたく二十九日に、御けちくはん候はんまゝ、□□□□ふた御まはりに、こなたよりまいり候はゞ、御ふく御そへ候て、もたせ御こし候、そもじさまへあげまいらせ候、これは天しゆいん様より仰つけさせられ候まゝ天しゆ院様へ、すぐに御ふだどもは御あげ候て、よく御座候、めでたくかしく、十月二十五日、かまくらせうこん院様御そばへひこ、按ずるに、彦女は、大猷院殿の未竹千代君と稱し申せし頃、春日局と共に給仕せしと云、又曰、慈申入候、まづまづ若君様御たんじやうにて公方様御きげん、上下のよろこび、いづかたもをなじ御事にて御座候、そもじ様御そく才に御座候や、いつもいつもえいせう寺にて、御ねん頃の御事、かたじけなく存まいらせ候、さやうに候へば、公方様へこの月に御ねんせつに御座候、とく見まいらせ候はゞ、此月はじめにも申候はんを、何かのいそもじさにて、いまほど見まいらせ候、をどろきて申候、御はつほのために、判金一枚しんじ候まゝ公方様御わづらい出候はぬやうに、よろづ御あくじの御事なきやう、□□□□まうしあげまいらせ候、十二日しやうこん院様云々、返々かなはず、右のとほり、よく御がつてんにて、御そく才の御きねん被成べく本尊不動智證作、臺座を合、長三尺一寸、元は別堂に安ぜしと云、其堂は北條氏建立なりし、社頭の護摩堂なりしを爰に引移らせしが、回祿に罹り今は礎石のみを存す、

【什寶】　△兩界曼荼羅二幅別當尊運の筆なり、裏書に、八正寺尊運とあり、　△七條袈裟一領袈裟の裏書に、仁和寺一品大皇、覺道着用料也、眞因茲濃紅梅御裡也、唐縫は、後陽成院御衣也、眞光院僧都寛海、爲御灌頂阿闍梨、彼召上之剋、賢融へ拜領仕候也、元和五年十一月廿日、鎌倉莊嚴院法印賢融とあり、

△畫卷一軸狩野守信筆、卷末に、此一軸は探幽之畫也、大猷院様御五歳の時御翫に被遊候品、御戯書被遊候由に御座候、先住賢融僧正は台德院様御持僧、引續大猷院様御祈禱被仰付候、右御由緒に付此一軸賢融江拜領被仰付也鎌倉莊嚴院と記す、卷首に六ねん三月十日とあり、此則御戯書なりと云、繪は布袋・大黒・蒲葡・紅梅に椿・野草・猿廻、藻に鯉・鮎、桔梗に鳥朝顔・馬・牛・唐子・桃、葦に鷺等にて何も彩色なり、初より末に至るまで上に二子三子し子五子とあり、これも亦御戯書なりと云ふ、　△古文書二十八通　後白河法皇院宣寫一通別當坊蹟條に註す　管領基氏其文前に引用す、　後小松上皇院宣寫一通　我覺院の條に引用す、　同人制札一通貞治元年十二月とあり　上杉安下知狀一通社の總說に註す、　上杉氏書翰六通一通は前に引用し房守憲方下知狀一通　餘は其文省けり、　僧賢深呈書一通　盛重呈書一通以上二通は社の總說に引用す　別當弘賢讓狀一通　弘範讓狀一通　別當尊運讓狀一通　社務補任狀一通以上四通、別當坊跡の條に引用す、　當職補任狀二通其文省く　上杉修理大夫朝興書翰一通關戸鄕事承候、根本様躰者如何、陽春院一札指添、恒岡に被申付候間、定而其以儀走廻候哉、何様可相尋候、直にも能々被仰尤候、具猶自管野尾張守所可申屆候恐々謹言、九月六日雪下院家中、朝興華押、　太田源五郎氏按ずるに、關戸は武州多摩郡の屬なり、資返翰一通　如芳意来申通候、抑御先師賢榮法師御事代々別而申合候處、御貴所へ御附屬之段尤令得其意候、不替先代、可被抽精誠之由承候、簡要此事候、於氏資毛頭不可存疎略候、當地堅固之儀、御祈念頼入外無他候、委細猶金子新二郎方、可被申候、恐々謹言、十一月九日謹上莊嚴院御報、源氏資華押、標書に太田源五郎源氏資とあり、　菩提院書翰一通　一書□□申候、然者先年勝運下向の時分、預御狀特懇志之驗候、其以來幸便無之故、不能御報候、左様に候得ば貴房先師贈僧上之儀得御意候處、萬々期面上有之間敷由、被仰出候間、則相調使者江渡申候、相違之時候恐々謹言、七月廿一日　僧玄豐僧兼勝書翰一通御門跡御莊嚴院御房、菩提院華押、　末寺、鎌倉莊嚴院極官之儀、被仰下候、致披露從是御返事可申入候、委曲御使者申渡候、可然様に可被申入候、恐々謹言、九月廿七日、菩提院僧正御房、兼勝玄豐、　春日局以下書翰五通其文上に註す　○香象院　古義派なり、初善松坊と號す御殿司職次第　開基を重衍と云、建久二年十一月、頼朝本地供料所を寄附す所藏文書曰、奉寄鶴岡八幡宮寺二十五口重衍法印米相模國村岡鄕内并富塚内、田畠屋敷、合七町伍反者右爲長日不斷本地供料所、寄進之狀如件、建久二年十一月二十二日、頼朝の華押あり、按ずるに、村岡富塚并當郡の屬富塚今戸塚に作る、本尊愛染を置く【寺寶】　△古文書四通　一は頼朝寄進狀其文前に註す一は供僧補任狀曰、鶴岡八幡宮寺供僧職事補任律師重賀右所補任也、建久八年十一月一日、善松坊頼朝の華押あり、一は北條左衛門大夫氏繁の證狀社の總說に引用す一は北條氏より大井豐前守に與へし書曰十一貫三百文、下新開、六十六貫三百八十六文、矢木沼、十二貫三百十七文、沖之鄕之内、已上百貫文、右新田領檢地奉行前より、可請取之、此外七十貫文之同心給、出所重而可被仰出者也、仍如件、天正十四年丙戌七月二十四日、大井豐前守殿、北條氏虎印、此文書傳來之由緣詳ならず、按ずるに下新開、沖之鄕、并武州榛澤郡の屬にて、沖鄕は今沖宿と稱す、なり　○惠光院　古義派なり、初文惠坊と號す御殿司職次第　開基永秀寂年を失ふ、本尊聖觀音智證作臺共長三尺八寸、　○增福院　古義派なり、初寂靜坊と號す執行次第、按ずるに、御殿司職次第には家靜坊と記す、蓋誤なり開基盛慶寶治元年正月九日寂、正安三年五月住僧賢淳、郡内長尾鄕田屋村の供田、未進の事により、地頭加世孫太郎長親と爭論に及びし事ありの總說に引用せり相承院文書に見ゆ、社本尊正觀音　○海光院　新義派なり、初は寶藏坊と號す【御殿司職次第】中古光幢院と改む【執事職次第】曰、寶藏坊號光幢院今者海光院、開基義慶伊與阿闍梨と號す平氏の一族なり、寛喜元年八月二十日卒す、文治四年正月の心經會に、導師を勤む【東鑑】曰、正月八日、心經會也、導師若宮供僧義慶坊、此後導師驗者等に撰ば

れし事屢あり文治四年三月十五日於鶴岡宮道場行大法會、景時宿願、大般若經供養也云々、導師義慶坊阿闍梨(號伊豫若宮供僧一和尚)二十一日梶原平三於御所、經營頗盡美、献盃酒垸飯、二品出御侍上、諸人群集、就中去十五日、供奉人所役畢、又若宮伊豫阿闍梨義慶、依請相具兒童等參入、御酒宴及歌舞、此事去十五日、宿願無爲遂行之間、所申慶也、四月二十三日、於御持佛堂被始法華經講讀、唱導阿闍梨義慶也、建久三年三月十九日迎法皇初七日忌景、於幕府被修御佛事、義慶房阿闍梨爲導師、五月一日、鶴岡宮備供祭巫女職掌等群參、而紀藤太夫、俄以狂亂云々、義慶房・題學房等加持之、八月九日御豪所御產氣云々、驗者義慶房・大學房、四年三月十三日迎舊院御一廻忌辰、被修御佛事、千僧供養也云々、宿老僧十人、所爲頭也、仍各相具百人一方頭、阿闍梨義慶、本尊不動を置く　○正覺院　古義派、初千南坊と號す御殿司職次第執行次開基定曉三位法橋と號す、建仁元年十月幕府蹴鞠の會に、見證に候す【東鑑】日、十月御鞠云々、相模守重頼若宮三位房等、候見證、建永元年正月心經會の導師を勤む正月八日、御所心經會、將軍家出御、以下如例、導師三位法橋定曉、本尊地藏を置長五尺二寸五分、此像は扇谷智岸廢寺の域内、地藏堂の本尊なり、俗にどこも地藏と唱ふ、皆其堂を守る僧、窮困して他所に移り、活計をなさんとす、時に此像、どこもどこもと云る告あり、因て何くも同じ事なるべしとて、居を移さず依て名づくと云ふ、後年彼堂廢して當院に移せり　○我覺院　新義派なり、初密乘坊と號す御殿司開基朝豪大納言僧都と號す、法性寺禪定忠通の末子、職次第卒年を失ふ、按ずるに忠通は應保二年六月出家、長寛二年二月薨ず建武の頃、住僧慶舜、覺胤と云僧の讓を受大藏稻荷社の供僧職を兼帶す所藏文書曰、大藏稻荷供僧事讃岐律師御坊覺胤吹擧申處也彼所領分御布施等、所領之下地、隨田畠員數、於三分一者、慶舜一期之間、可拜領候也、但公方御祈禱等、妨者不忠、其外違亂煩申事候者、可罷蒙稻荷御罰、慶舜之身候也、康曆元年依爲後日狀如件、建武四年二月六日、慶舜華押、康曆元年十二月八幡宮本地供料所、房州岩井不入斗村を管領すべき由足利氏滿、住僧頼印遍照院に下知す安房國岩井領不入斗村事、爲鶴岡八幡宮本地供料所、可有管領之狀如件、康曆元年十二月二十三日、遍照院僧正御房氏滿華押あり、岩井領不入斗村は、平郡の屬、此僧は貞治の頃より當院に住し、所々の別當、供僧職等を兼管せり、莊嚴院文書曰、上野國滿行寺執行、中納言大僧都頼印申、同國淵名庄内華香塚、實相院方事、早任安堵下文、可被沙汰付下地於寺家之狀如件、貞治二年十二月二十九日、上杉民部大輔入道殿、基氏の華押あり、按ずるに、淵名は佐位郡の屬、所藏文書曰、上野國淵名庄内華香塚、實相院方事、任御施行旨、沙汰付下地於中納言大僧都頼印代候畢、仍渡狀如件、貞治三年正月十六日、教阿華押、又曰、中納言法印頼印申、上野國榛名山座主職事、任今月九日御教書之旨可沙汰付頼印代狀如件、慶安四年閏三月二十九日、長尾孫四郎入道殿、沙彌華押、又曰、遍照院僧正坊申、慈恩寺領武藏國太田庄、華積鄉内御廐瀕渡并船事、澁江加賀入道、背上裁致押領太難遁咎、所詮布施主計允、相共莅彼所雖口申不可許容可沙汰渡船渡等於彼代之狀如件、永德三年四月十一日、壹岐彈正大夫入道殿氏滿の華押あり、按ずるに、此頃は慈恩寺を兼帶せしなるべし、花積は埼玉郡の屬、又曰、永福寺別當職事、任地藏院僧正、道快、今月三日讓付之旨可被執務之狀如件、至德二年十二月二十五日、遍照院僧正御房、左兵衛督氏滿の華押あり、又曰、所々供僧職事、鎌倉明王院鎭守、春日供僧職事、一口、同所久遠壽量院供僧職事、同所梅谷、新阿彌陀堂供僧職事、(一期仁弘口)同所日輪寺供僧職事、同所蓮華寺供僧職事、豆州願成就僧供院職事、右六ヶ所職者、任師資相傳之旨、領掌無相違者也、爰相副調度之文契悉令讓與附法嫡弟前大僧都相覺畢、更不可有他人妨仍讓與狀如件、嘉慶二年二月二十八日、　元龜三年三月院主の事によりて爭權僧正頼印華押、論あり、小田原評定衆、山角四郎左衛門康定奉て下知を傳ふ所藏文書曰、雪下我覺院就院主之儀大納言尊良、永谷代戸川善三郎、双方以目安遂糺明畢、然而我覺院尊純讓狀訴論共に無之候、雖然大納言對相承院永谷舍弟也、御兒有入寺、社役勤行有之時者也、先師可任存分旨、載紙面候、然則任彼證文、御兒社役勤行、至于明鏡之砌者、被得公儀坊跡可被相渡旨、依仰狀如件、元龜三年壬申三月二十一日、大納言尊良、評定衆四郎左衛門尉華押、北條氏虎印、天正十七年三月淨國院の域内を裂て當院に附與す寶瓶院え就龍移貴院屋敷え少仕入度之由承之間、北南へ二間西者表之築地を切、東者山之額に指添、上之垣迄、永代進置候、急度屋敷え、仕入可被成候、既樣々造作にて築地を構、竹木を被植立之上於向後如何樣の筋目立出來候由、又は我等屋敷に、所用之儀御座候共、於此儀者、相違申間敷候、依之爲祝儀百疋給候、御隔意之至候、爲後證一札進候者也、仍如件、天正十七年己丑三月二十日、我覺院殿床下淨國院融尊華押、　本尊弘法の像を置く、【寺寶】　△古文書十五通　一は遍智院讓狀曰、遺言遍智院事、口子成賢雖破戒先德身爲先師骨肉之親弟、連後資結緣之血脉、是偏宿運之所令然、非大師冥助哉、依之且爲思師跡、且爲報佛恩、勵隨分之微力、致當院興隆、起立四種之護摩堂、始置三密之勤行建立二宇之經藏、安置八家之口軸、何況代々自鈔嫡々秘蔵、以當院爲密藏、堂舍僧坊寶藏經藏、道具本尊手委註別紙、依爲附法之仁、所讓與道教法眼也、於未來相承者止横非論之儀、以附法渴瓶之要機、可次第讓與者也、縱雖爲親昵之弟子、或未入壇之仁、或不終受法足功之輩、不可讀院務之號、將亦不可及讓與之沙汰後代自狼戾輩、爲院務職、若住他所致寺務若輕本寺、寄權門若蔑予遺旨者、相觸寺家可改定其職、所安置之本尊聖教、雖一尊一卷、輕不可他散之、又以院領立貢、不可宛他所之資緣雖相似狹心、深存寺家之興隆之故也、敢莫存疎略若背此遺狀、存異儀之輩者、何可列遺弟哉次第傳領之仁、尤可存知者也、仍示着之狀如件、寛喜三年九月日、前權僧正判、遍智僧事任御遺言、各可令存知此旨、爭可存等閑哉、若令存異儀之輩者、冥顯三寶可有治罰者也、仍各所加署判也、座主法印權大僧都道禪・權少僧都淨眞・法眼道教・權律師孝賢・權律師圓信・權律師憲深・阿闍梨永福寺藥師堂供僧等代承成行一は執權陸奥守宣時、相模守貞時連署狀譽相模國飯田郡地頭等相論條々、供米收納斗事、右訴陳之趣子細雖多所詮承成則當鄉所當米、毎年百八十石也、以當國本斗令收納之處、正嘉二年以後地頭令減少收納斗之由申之、地頭口爲清左衛門尉滿定之奉行、被定下收納斗之間、供僧所加判形也、非本斗之旨陳之者用當國本斗之由、承成雖申之無實證之上如供僧等三間狀者、地頭歎申之間、被定下收納斗由載之、令符合地頭之申詞畢、但地頭所持斗者、供僧加判形之由地頭雖申之無判形之間、不足信用、爰於引付之座問答之時地頭

□帶延應元年九月十二日御下知畢、如狀者可用御寺斗之由被載之、自餘寺領文用寺家斗之由承成所承伏也、彼斗者被納量寺庫云々、然則以寺庫之斗可收納也、次正嘉以後年々減少分、可被糺返之由、承成雖申於前々斗者兩方所申共以爲胸臆之間就今之相論、被用寺家斗之上者、不及其沙汰焉、納所事、右於彼供米者付送供僧等宿坊之條、爲先規之由、承成所申也、而地頭陳狀不分明之間、於引付座召決之處、付送鎌倉於地頭寄宿之所、令下行寺家使者之旨地頭申之、爰如地頭所進、延應元年御下知者、飯田三郎能信、返給當郷之時、於供米者、止寺庫納以御寺斗、直可下行佛聖供僧并預承仕之由、被載之仍就彼御下知地頭可下行由申之、雖似有子細、付送住坊之條可被尋證人等之由、於引付之坐問答之時、承成、申之處、供僧使者下國之時、爲地頭之芳志、有付送之事云々、可謂承伏歟、但寺家使可取收納斗由、承成雖申之、爲地頭之沙汰、可量渡矣、壇供餅并御節供等事、右彼壇供者、爲供米百八十石內之由於引付之坐、兩方承伏畢而承成則壇供并御節供、地頭對捍之由申之、地頭亦無未進之旨陳之、者早遂結解有未進者、可令究濟焉、以前條々依鎌倉殿仰、下知如件、正安元年十月廿七日、陸奥守平朝臣、相模守平朝臣各一は賴印の書翰其後何條奉押、按ずるに、飯田は當郡の屬、事御坐候哉承候、抑申談申法事、及度々蒙仰候間昨日領狀申候、仍來月三日より可始行候也、敬愛護摩可遊候、來一日下着候樣、急可有御下向候、委細旨播僧被申候、每日領狀申事期參拜候、恐々謹言、十一月廿二日、賴印華押、一は同讓狀□卷法則集、并阿彌陀文殊孔雀經等、秘讃乞戒嘉慶二、授□乘僧都畢、依老病難儀、早速□軍、更不可爲後學之例狀如件、□德元年實雪十七日、前大僧正賴印華押、一は貞雅讓狀讓與、大倉稻荷社供僧職事、卿律師貞譽右所職者自讃岐法印覺胤所相傳也、而貞譽律師、依爲受法灌頂弟子、所令讓與也、更不可有他妨、仍爲後證讓狀如件、永和元年十一月十三日、法印貞雅華押、一は祈禱の事を供僧等に命ぜられし狀なり□所守公神長日祈禱事、殊可被致□誠之狀仍執達如件、永享四年三月八日、供僧中、散位華押、其餘九通は前に引用す、○淨國院　古義派にて、武相豆三州の檀林所なり、初は佛乘坊と號す、開基忠尊大夫律師と號す、山城の人、法性寺忠通の猶子、卒年を失ふ、本尊不動、○相承院　武相豆三州眞言古義派の檀林所なり、初頓覺坊と號す【東鑑】御殿司職次第】開基良喜平氏の一門なり、學頭職次第曰、頓覺坊開山良喜、比叡山西塔住侶、都鄙無隱人也、寺傳に、寛喜三年十月三日卒と云ふ、されど【東鑑】に、貞永元年三月經供養の導師たりし事、見えたれば、寺傳の謬なる事知べし、但學頭職次第に、良喜、建仁元年に補し、治三十一年とあり此年數を推せば、三十一年は則寛喜三年に當れり、是辭職のにはあらず、卒年建久三年七月供僧職に補し所藏文書曰、鶴岡八幡宮寺年にして、供僧職事、權律師良喜、右人爲彼職一口、宜令致天下安全御祈禱之狀如件、以補建久三年七月廿日賴朝の袖判を押す、建仁元年八月學頭職に任ず學頭職次第曰、建仁元八十八、登曉別當、始置學頭被補之、治承元二年四月弟子良傳に、供僧職を讓與す三十一年也、曰、讓渡鶴岳八幡宮寺供僧職事、良傳阿闍梨、右當職者良喜去建久年中、自賜右大將家御下文以來致御祈禱之精誠處也、然間相副御下文、所讓與弟子良傳阿闍梨實也、永代更不可有他人之妨、然者可專天下安全御祈仍讓狀如件、承元二年四月五日、權律師良喜華押、又曰、鶴岡八幡宮寺政所補任供僧職（良喜律師諱與）事、權律師良傳、右人爲彼職宜令勤行恒例不退御祈禱之狀如件、以補、建保三年十一月六日、別當權少僧都法眼和尙位華押、一此後も尙學頭職に在て、祈禱導師等を奉はりしなり【東鑑】曰、建保四年二月一日、日蝕、鶴岡供僧頓覺房良喜勤仕御祈、仍被引遣御馬、波多野次郎朝定爲御使、六年十二月二日、右京兆依靈夢、所令草創給之、大倉新御堂安置甕師如來像、今日被遂供養云々、堂達頓學房良喜（若宮供僧）【東鑑】脫漏曰、嘉祿元年正月十四日、於鶴岡最勝八講被始行、昨日善民部大夫爲奉行、而僧名被注之云々、頓覺坊良喜、【東鑑】曰、寛喜三年五月十七日、於鶴岡十箇日之程、可修問答講之由被定仰、第二日講師頓覺房律師良喜貞永元年三月三日、於宮寺法華經供養導師頓覺房律師良喜、三世幸猷の時、文永七年郡內岡津郷、供米田の事により地頭甲斐三郎左衛門尉爲成と爭論に及び、閏九月・十二月の兩度、執權相模守時宗、左京大夫政村、連署して下知を傳ふ所藏文書曰、鶴岳八幡宮供僧、備前阿闍梨幸猷、地頭甲斐三郎左衛門尉爲成、相論供米田捌町捌段事、右訴陳之趣、子細雖多、所詮右大將家御時以彼田被定供僧給田之間、可宛給下地之由、幸猷雖申之於下地者地頭代々進止之間、今更不及子細、次所當□爲成祖父、太宰少貳爲佐法師、（法名蓮佐）前供僧良傳之時□者、之幸猷之時者、以拾伍石令請畢、仍請所之儀不可變由、爲成雖申之如良傳、寛元二年十月日并幸猷正嘉二年九月日請文者、岡津郷供僧給田、捌町捌段請所事、或付公私煩出來、或背約束有違亂者、如元可致沙汰之由載之、且爲私請所之間、雖被叙用□段本所當者、爲地頭之沙汰、每年可令沙汰與于供僧也、者依鎌倉殿仰、下知如件、文永七年閏九月十日、相模守平朝臣華押、左京權大夫平朝臣華押、又曰、鶴岡八幡宮寺、所當郷地頭甲斐三郎左衛門尉爲成、與供僧備前阿闍梨幸猷、相模國岡津郷地頭甲斐三郎左衛門尉爲成、相論供米田八町八段所當事、右訴陳之趣、子細雖多所詮如今年閏九月六日下知狀者、於八町八段本所當者地頭每年可沙汰與供僧云々、而爲成則畠成相交之間、每年沙汰送本所當之條、所爲無定算也、供僧遂檢見隨作不可收納之由申之、幸猷亦不及遂檢見、任先御下知、爲成可沙汰送之旨陳之者不謂作不、每年沙汰與本所當之條、可爲難治之由、爲成所申非無子細、然者引付供僧使者於作人、於八町八段者、隨作不每年供僧可直納否、被尋爲成之處、爲成領狀畢、早引付幸猷使者於作人、每年自百姓之許、隨作毛可令直納所當次所當口米并員米事、爲成雖申子細、自作人之許、幸猷可直納所當之上者、任先傍例可致沙汰也、者依鎌倉殿仰、下知如件、文永七年十二月三日、相模守平朝臣華押、左京權大夫平朝臣華押、應永九年五月、伊達大膳大夫政宗追討により管領滿兼九世の僧珍譽に祈禱を命ず所藏文書曰、奥州凶徒對治事、今月廿日、所差遣右衛門佐氏憲也、殊可被致祈禱之精誠之狀如件、應永九年五月三日、頓覺坊辨大僧都御房、滿兼の華押あり、此後も屢祈禱を奉はりし事、所藏文書に見えたり曰、一字金輪法事、爲長日祈禱、可被勤行之狀如件、應永十四年七月八日、頓覺坊辨法印御房、滿兼の華押あり、又曰、一字金輪法長日御祈禱卷數一枝、爲當季分入見參候畢、仍執達如件、應永十五年十月十日、頓覺房辨法印御房、沙彌華押、又曰祈禱事、如元無御等閑、被致精誠候者、恐悅候、萬事者憑入申候、恐々謹言、二月廿八日、相承院、憲基華押、又曰、天下安全祈禱事近日殊可致精誠之狀

如件、應永二十六年八月廿三日、承相院辨法印御房、持氏の華押あり、又曰、於鶴岡社頭、五壇、護摩被修中壇卷數給候、目出候、殊可致精誠候、恐々謹言、五月十八日、辨法印御房持氏華押、又曰、於鶴岡五壇護摩降三世被修、乃卷數到來目出候、恐々謹言、十月十九日、辨法印御房持氏華押、又曰、爲尊勝護摩衆可被致祈禱精誠之狀如件、永享五年七月廿日、雪下辨法印御房持氏の華押又此僧佐介谷稻荷社、及武州葛飾郡木下川藥師堂淨光寺等の別當を兼管す佐介谷稻荷社別當職、并當社領等事、任光照寺殿御補任之旨、如元可爲御計之由候也、仍執達如件、應永二十五年二月十日、相承院法印御房、兵衛尉越前守各華押、木下川淨光寺文書曰、下總國葛西庄、上木毛河郷内、藥師堂別當職、同寺領、等事、家定知行內候間、進置候上者曾不可有異變相違之儀何樣御屋形御判送可被申沙汰候、於御祈禱等者、不可有懈怠候也、仍寄進申狀如件、應永三十三年正月十一日、相承院、藤原家定華押、所藏文書曰、補任下總國葛西御厨上木毛河郷內藥師堂(號淨光寺)別當職并寺領等事右任奥津右衛門五郎家定申請之旨、所補任之狀如件、應永三十三年六月十三日、相承院法印御房、安房守華押、按ずるに、木毛河、今木下川と書し武州に屬す二十二年正月、當院號永代相續すべき由、別當尊賢文書を與ふ曰、相承院口珍譽、右院號者二十五所爲勅免內、未來可有相續之狀如件、應永廿二年正月廿五日、別當十世弘俊の時、祈禱を命ぜられし事あり前大僧正華押、

御祈禱事、近日殊可被致精誠之由、所被仰下也、仍執達如件、永享十二年五月三日相承院、右京大夫華押、按ずるに、右京大夫は、細川持之なり、又曰、卷數一合、送給候恰悅候恐々謹言、七月廿日、相承院、清方華押、按ずるに、清方は上杉兵庫頭之なり、此僧武州幡羅郡長井庄、聖天社の別當を兼務す者、亡父時より可進候之由、被申候處、兎角令延引候、背本意存候、於向後者、不可有相違候、親類一人爲身代官、可進候之間、彼是馮入存候、恐々謹言、寶德二八月廿二日、謹上相承院御房中、大江持宗華押、十四世快元は北條氏綱社頭造營の頃、勸勞多し事は、【快元記】又氏綱祈禱を命ぜし事あり所藏文書に詳なり、

曰、御祈念御辛勞候、爲家門分國安泰、彼是賴入候、恐々謹言、三月廿五日、謹上雪下院家中、北條氏綱華押、陣中御祈念之卷數贈給候、目出度大慶此事候、當口河東者、悉以本意候、何樣罷歸候而子細可申談候、大道寺藏人佐、虎口候間先早々申候、恐々謹言、三月七日、謹上相承院、北條氏綱華押、天文十九年六月、三浦郡太田和郷の內、先規の如く當院の所務たるべきの由、北條氏康下知す三浦郡太田和郷、近年龍源被致代官、檢地之上、本增合百十七貫文、此內六十七貫文者、廻御影供之方、可被定候、殘分者相承院可有所務候郷之事者如昔相承院請取、代官職之儀、可被申付者也、仍如件、天文十九庚戌六月十八日、相承院、氏康華押、按ずるに、太田和村は、弘安の頃法華堂領に寄附あり、享德年間に至るまで彼堂領たりし事、法華堂文書に歷々たり、當院彼堂務を兼管するを以て今年氏康かく下知を加へしなり、相承院一跡の事、前々中納言被申合候事、樣躰無抑聞候、大途不及公事儀候間大道寺桑原其段可申付候、仍三浦郡太多和郷、前々相承院抱之地之由候、然に近年龍源軒、被致代官候、龍源死去候之間太多和郷相承院え渡置候、彼郷年貢之事、本務五十餘貫文、

增分六十七貫文□、此內爲廻御影供之方、增分六十七貫文、院家中配當に相定候、殘而五十貫文、相承院可爲所務候彼郷重而附置候上者、可然僧とも被御覽立、只今之中納言に被相副、相承院無退轉樣に、可有御助言候、恐々敬白、六月十八日、金剛王院御同宿中、氏康華押、追書に、【北條役帳】にも、雲下御院家中百十七貫文、三浦太田和と載たり、永祿の頃、足利右兵衛佐義氏が新調の旗を神前にて加持せり

態申遣候、然者今月八日、以吉日被仕立御旗候、依之如前々、於御神前可被爲御祈禱候、抽精誠馳走候者、可爲感悅候、仍兩種遣之候、委細高修理亮可申遣候、恐々謹言、十一月廿三日、相承院、義氏華押、按ずるに、此文書年號支干を記さゞれば、何れの年なる事は、知べ、六年七月北條氏政先代證狀の如く、相違あるべからざる由下知す、

先御判形之筋目、不可有相違者也、仍如件、癸亥七月廿日、相承院、氏政華押、元龜元年八月足利義氏より祈念の事を命ぜり

御祈念之事、右當城古河、在堅固威光增進、萬邦之諸士、忠信走廻之儀、宜依當社之神德之狀如件、永祿十三年八月三日、相承院、義氏華押、按ずるに、此年四月改元あり、天正十四年九月、三浦郡太田和郷先規に任せ、當院の所務たるべきの旨、北條氏直下知す三浦郡太田和郷、百七十貫文之事、先御證文之筋目不可有相違者也、仍狀如件、天正十四年丙戌九月十七日、相承院、氏直華押、御入國の頃、東照宮當院に駐駕あらせられ賴朝以來の古文書等を上覽あり、由緒他に異なるの由、上意ありしと云ふ天明八年四月二十四世密信の讓狀曰、東照宮樣當院え被爲懸御腰、右大將家御下文已下、將軍家其外文書等、被爲御上覽成、御由緒各別之趣、被爲聞召分云々、本尊不動を安ず、【什寶】△彌勒像一軀弘法摩護の灰を以て、練造せし物にて長二寸許、島津豊後守忠久の守護佛なりと云ふ、龕背に應永五年法印某、再興の事を記せり

△維摩像一軀瑪瑙石にて造れり

△聖天像一軀慈覺西土より將來の像

□□□法印俊譽謹言上、推手聖天供、長日御祈禱□進一卷、御下文一卷、長壽寺殿御自筆、御歌一卷、御祈禱相續證文□彼聖天者慈覺大師、御入唐之時、御相傳云々、然後一條院御宇依有不思議奇瑞、號推手聖天(緣起別在之)又延喜御宇天神御始成于荒人神、傾鳳城擬失人民、于時叡山□主法性房尊意、應勅命祈精彼聖天仁、忽止天神御□給、併彼天威力也、其外將門純友已下朝敵討罰、向彼天仁、□誠之故也、(緣起有別)然彼聖天自京都御下向事者、青蓮院坊官□□□御法印奉隨身、犬懸谷仁下着云々、自彼法印方、中納言法印□覩相傳云々、然淨妙寺殿御代、南小路仁被立聖天堂、長日供養被仰付訖、又毎月九日、於殿中仁奉成聖天供云々、被御恩者賜安房國麻寺訖、然依有掠申仁、爲麻寺代、下野國足利庄赤見□內一所拜領訖、雖然彼所者、京都御成敗也依之不應關東之□沙汰、然間年貢逐于年減少、於于今者有名無實也、本尊既關東護持天童也、何無供料御沙汰乎、就中長壽寺殿、依□信仰有御立願事、依之百日毎曉御參詣、然毎日御歌一首□御自筆被遊之、被納御殿仁訖、(右備之)其後無何程被召御代、□子孫御繁昌、併彼聖天御力也、何無御崇敬乎、然者爲赤見代、預一所御計、爲當御代御敬信、重之下預御教書、致長日御祈禱、爲奉祈御

息災、去年十二月、屬小田伊賀守言上之處、就御沙汰可申之旨、被仰下訖、然間申賜賦恐々重言上如件、應永五年三月日

按ずるに、足利庄は足利郡、赤見村は安蘇郡の屬、長壽寺は將軍尊氏、淨妙寺は尊氏の父、讃岐守貞氏なり、按ずるに、法華堂文書に、建武元年八月、一色右馬權助賴行所領、上總國山邊郡森郷を、大藏南小路聖天堂に、寄進せし由見ゆ、曰、寄進、上總國北山邊郡森郷内、藤太夫名田地六反半、畠壹反事、右所領者、爲勳功之賞、賴行所拜領也、然者割分彼田畠、爲現當二世、永代所寄進于相模國鎌倉、大藏南小路聖天堂也者早爲燈油佛請之料足守先例致其沙汰可有祈禱精誠之狀如件

建武元年八月三日、右馬權助源朝臣花押、又按ずるに、應永の後、彼赤見郷を返し付られ、且永享三年、新給の地もあり、事は同五年四月、珍譽が讓狀に詳なり、曰讓與金銅聖天像一躰、(號押手)料所下野國足利庄赤見郷内田畠、同庄八日町在家一宇、並同庄五百部郷内、名草給田壹町等事權少僧都弘俊右任代々相傳之旨相副淨妙寺殿御下文手繼證文并名草給新御寄進狀等、所讓與也、就中彼名草給事者、自鶴岡別當坊御方爲毎月御供料所、去永享三年十月三日、所有御寄進也、然間一日十五日御供等、努々不可有懈怠者也、此外寄進之不知行數箇所在之連々可有申沙汰之狀如件、永享五年四月五日、法印珍譽華押、按ずるに、名草村は足利郡の屬なり、又同郡内に、五十部村あり、是五百部郷の轉訛せしならん、當院に藏する、【聖天靈驗記】に、一條院御宇、左京大夫道雅が立願の事に依て、寄瑞ありしかば、推手の號を得たる由、詳に記したれど、信ずるに足らざる說なれば、爰に省く、但此靈驗記は、元和四年、舊本を書寫せし物といへり、

△賴朝像一軀　文覺作、長一尺六寸、

△裟婆論一軸　光明皇后筆と云ふ、奥書に天平十二年五月一日記とあり、されど墨色料紙、當時の物にあらず、

△法華經一軸　弘法筆と云ふ、是も當時の物とは見えず

△經文一軸　慈覺筆と云ふ、殘闕なり、

△華嚴經一軸　菅相丞筆と云ふ　これも古色にあらず

△仁王經一部　奥書に、此經外題、後醍醐天皇御震翰也、印板道風筆、元德二年十一月一日、奉爲金輪聖王御願圓滿所奉調進一百□□□三十部、東寺寶藏奉納之とあり、今外題は損失す、

△古文書九十三通、綸旨一通　伊豆國三浦庄内壹萬疋田地、爲守時後家尼通盛活計可被知行候、天氣如此、悉之以狀、元弘三年十一月廿二日、右中辨華押、傳來の由緣詳ならず、按ずるに、君澤郡の屬に、三津庄あり、若くは其地にや

足利尊氏書翰一通　天下靜謐祈禱事修不動供、可致精誠之狀如件、文和元年十二月廿三日、少輔律師御房、尊氏花押、

千葉修理大夫兼胤補任狀一通　下總國北條庄大寺郷内、聖禪寺(號釋迦堂)別當職事、任阿部彈正忠胤久申請之旨、所令補任也、早守先例、可被致沙汰之狀如件、應永廿八年六月廿五日、民部卿僧都御房、修理大夫華押、按ずるに、今香取郡の屬に北條庄大寺村あり、

上杉修理大夫持朝書翰一通　長日御祈念、仍歲末之御卷數令拜領候、日出令悅喜候、御懇祈之至、返々所仰候恐々謹言、十二月廿六日、相承院御報、持朝華押

上杉修理大夫定正狀一通　愛名村世田谷局、買得候處承候間、加意見令歸付候、於下地御直務尤候、恐々謹言、十二月廿二日、相承院進之候、定正華押、按ずるに、愛名は愛甲郡の屬、

憲明書翰一通　西村事、無相違沙汰付御代官候畢、日出之候、隨而於此方樣、大切候扇拜領畏入候、委細之旨、御代官可有御披露之間、省略仕候、恐々謹言、五月八日、頓覺坊御同宿御中、憲明華押、

左近將監實次書翰一通　先日就西村事、可進狀之由、被仰出候間申候處、御狀給候間、委細令披露候間、慈悲寺事者、兼而御望所與申、西村には莫太、過上之地候由、其聞候間、兩方可然候由御落居候處、如此御狀候間、未遑行候、先日御狀候如此候へ共、上之御意候上は、是非を難申由候、雖然御心底を不被殘、御申旨其段可令披露候也、若御ためも、じひ寺、まさるべきかと存候、是は内々爲御心得令申候、委細御返事に示給候者、其段可存候、近日期後信候、恐々敬白、正月廿五日、謹上相承院御同宿　今度拜領候者

左近將監實次華押、

上杉右京大夫義憲書翰一通　日田候毎事期後信候間、令省略候、恐々謹言、卯月十日、相承院、義憲華押、追書に、毎事細倉樣之趣、御床敷存候、

千葉次郎直胤書翰一通　御年之御卷數、並一種壹荷送給候、千喜萬悅珍重此事候、如承意之拙夫事、岩城令在城候、彌御祈念奉任候、此等之趣、猶自是可申展候條、不能具候、恐惶敬白、正月十二日、相承院貴報千葉次郎直胤押、

北條彦九郎爲昌返翰一通、北條氏康返翰一通、北條氏政返翰一通、太田十郎氏房返翰一通、北條美濃守氏規返翰一通　以上五通は、祈禱卷數を贈りし時の返翰なり、

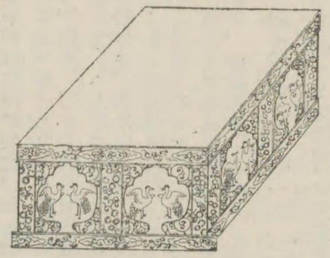
北條泰時、同時房連署狀一通　供僧廢院、蒐華院の條に引用す、

北條時賴入道道崇寄附狀一通、政所下文一通　以上二通は十二所村、廢大慈寺の條に引用す、

兩界供僧補任狀二通、足利伊豫守家時寄附狀一通、久明親王供僧補任狀二通、足利尊氏寄附狀一通、管領氏滿補任狀一通、上杉憲方下知狀二通、上杉朝宗書翰一通、一色持家寄附狀一通　以上十一通は、兩界壇所の條に引用す、北條陸奥守宣時、同相模守貞時連署狀一通、北條相模守師時、同左京權大夫時村連署狀一通、北條相模守凞時下知狀二通、北條相模守守時下知狀一通　以上五通は、社の惣說に引用す、管領基氏補任狀一通　全文、新宮社條に註す、別當弘賢讓狀一通　別當坊廢跡の條に引用す、兵衛尉某、越前守某連署狀一通　佐介稻荷社條に出す、吉良賴康書翰一通　座不冷壇所の條に引用す、當院世々讓狀十四通　其文省く下同　當職補任狀十二通　此餘前に引用の文書は枚擧せず、

○安樂院　古義派なり、初は安樂坊と號す　執行次第開基重慶　安樂坊、平氏の一門なりと云ふ、寂年は失へ、建久二年二月、法華經供養の導師を勤めしより後度々其撰に預れり【東鑑】曰、二月十五日、被始行經供養、導師安樂坊重慶、(當宮供僧一和尙)云々、二月廿一日、畫像阿彌陀三尊一鋪被安置御持佛堂云々、今日有供養儀、導師安樂坊重慶、八月十五日、鶴岡放生會、幕下御參宮、經供養導師安樂坊重慶、三年三月廿六日、第二七日御佛事被修之、導師安樂坊、按ずるに、法皇二七日の御忌景なり、四月二日、御臺所御着帶、御加持安樂坊阿闍梨、建仁三年二月五日、尼御臺所於鶴岡神宮寺、被供養法華經、導師安樂坊、八月廿九日於鶴岡寶前、被供養八萬四千墓泥塔、導師安樂坊重慶(供僧一和尙)十二月一日、爲將軍家御願、於鶴岡上下宮、被行法華八講、講師安樂坊也、元久元年正月五日將軍家去年十月廿五日、任右兵衞佐御始、御參鶴岡八幡宮云

云、供養法華經、安樂坊爲導師、承久三年五月廿六日、於鶴岡、有仁王百講、講師安樂坊法橋重慶、【東鑑】脫漏曰、嘉祿元年正月十四日、於鶴岡最勝八講被始行、昨日善民部大夫爲奉行、而僧名被注之、所謂安樂坊法橋重慶、【東鑑】曰、寛喜三年五月九日、於御所一萬卷心經、(此内一千卷者書寫)被遂供養、導師安樂坊法眼行慈、按ずるに、行慈に作るは、傳寫の誤なり、十七日、於鶴岡、十箇日之程、可修問答講之由、被定仰云々、第一日問者、安樂坊法眼重慶、本尊千手觀音を置く、○等覺院　新義派なり、初南禪坊又悉覺坊と號す【供僧記】【御開殿司職次第】



惣黑漆金蒔繪あり鈕錄は青銅なり、方二尺五寸

山良智　肥前阿闍梨と號す、本三位中將重衡の子、卒年を失ふ、問答講八講等の僧衆に列せし事、【東鑑】同脫漏等に見へたり【東鑑】寛喜三年五月十七日條曰、於鶴岡十箇日之程、可修問答講之由被定仰、第八日講肥前阿闍梨、第九日問肥前阿闍梨、脫漏曰、正月十四日、於鶴岡、最勝八講被始行、僧衆肥前阿闍梨良智、

△大師堂　弘法自作の木像長二尺七寸五分、袈裟衣は、今に高野山より調進す、俗に鏁大師と云ふ、鏁にて膝の屈伸する樣に作れり、故に名く、を安ず、則當院の本尊なり、外に不動智證作、長五尺許、辨天三浦荒次郎義澄が、持佛堂の本尊なりしと云傳ふ、長四寸餘、愛染長六寸、等の像を置、又舍利塔數粒を收む、千光、西土より將來すと云ふ、を安ず、此堂蓮華定院と號し、古は別當坊中にあり、文和元年六月、將軍尊氏當國丸島鄕を以て、院領に寄附す所藏文書寫曰、寄進蓮華定院、相模國丸島鄕、箱王丸名(新開孫四郎跡)事、右爲天下安全武運長久、所寄進之狀如件、觀應三年六月十七日、正二位源朝臣尊氏華押、按ずるに、今年九月改元あり、丸島鄕は大住郡の屬、二年六月土肥兵衛入道、彼鄕を濫妨するにより、嚴密の沙汰を以て、當院雜掌に附與すべきの由、下知あり鶴岡御影堂料所、相模國丸島鄕内、箱王丸名事、土肥兵衛入道致濫妨之間、先度被仰兩使之所、同舍弟甲斐守構拜領之内不及邀行捧自由之條、太以無謂所詮寄附異于他之上者、中村備中權守、相俱在彼所嚴密沙汰付下知於雜掌、可執進請取、此上猶以令懈怠者、可有殊沙汰之狀如件、文和二年六月十七日、成田備前守殿尊氏華押、應永十九年七月、豐筑後守信秋の寄進せし、武州高麗郡廣瀨鄕を當院代官に附與すべき旨下知あり武藏國高麗郡廣瀨鄕内、豐筑後守信秋寄進地事、早任御敎書之旨、可打渡下地於蓮華定院代官之狀、依仰執達如件、應永十九年七月五日　埴谷備前入道殿、沙彌在判、以上引用の三通、本書は失へり、廿七年十二月勅願所の綸旨を賜ふ木板に記して、堂内に掲ぐ、曰、當院事、爲往古勅願所之由、被聞食畢、向後特可被致御祈禱精誠之由、天氣所候也、仍執達如件、應永廿七年十二月十三日、蓮華定院大僧都御房、左中辨俊國、追申長日御祈卷數被返了、背に御院家勅願所事、坊城辨奉綸旨到來、爲差遣之候、恐惶謹言、四月十四日、蓮華定院殿、宣□華押、堂内の禮盤は大永六年、住僧賢助が置所にて、裏書大永六年庚五月日、水丁道具仁寄進、等覺院賢助、大阿闍梨尊重法印、受者六人請取之、按ずるに、水丁はあり圖左に載す、【什寶】△心經一卷灌頂の事なり、弘法筆卷末に、沙門空海とあり、文字極めて細密なり、鼠心經と名く、扇谷村に住る、無言木食大蓮と云ふ僧、文政四年奉納す、△馬玉一顆　△牛玉一顆　按ずるに、文安六年、住有牛玉、と載たるは則是なるべし、此外什寶若干ありし事、寶德元年六月快季が寄進狀曰、當院大師奉寄附、本尊已下三寶院聖敎先師所持本、彼□西院聖敎先師所持、今并弘□聖敎、都合四合、保壽院聖敎先師相承□二□疏釋論御作已下本書三合、悉□聖敎二合聲明書、西方院一合、菩提院□愚僧相傳聲明□隨□三合、累代相承舍利袋二、快守成純相承舍利袋二、(此中有牛玉)大師御筆不動一鋪、國安眞筆大師御影一鋪、西山宮(道覺)御筆兩界萬荼羅二鋪、龜山法皇御本尊也、師資相承曼筆兩界曼荼羅一鋪、願行筆不動一鋪金岳筆不動一鋪、大藏丞筆愛染王一鋪、八祖御影、天神御影一鋪、以上物者悉師資相承也、四面佛具、(滅金金色)鉢一、鏡鉢一雙、是皆愚僧多年依祈請、所感□仍及相傳の注文奉寄附大師者也、文安六年六月廿七日快季、曰、蓮華定院奉相傳注文、御請來佛舍利七粒、不動尊像御筆一幅、大師御影御筆一幅、兩界萬荼羅形二幅、種子兩界龜山院勅筆一幅、右佛舍利并祖師之眞跡者、高祖御座故、被寄附之所也、仍今加修覆令相傳者也、文安六年六月廿八日快季、等に見えたり、後年散失し、或は回祿に罹りて烏有せしならん、○最勝院　古義派なり、初慈月坊と號し、後靜慮坊と改む(供僧記)開山良祐平氏の一門と云ふ卒年を失ふ、正治元年四月住僧行勇供僧次第云、蓋月坊の行勇莊嚴房、初名玄、信周防國人、實は四條殿息子【高僧傳】曰、行勇號退耕、相州酒勾人、或曰、生于洛陽四條藤氏、爲鎌倉八幡供僧、權永福大慈二院、將軍源公夫人、二位平氏尼眞如、從勇受戒禮觀甚渥、按ずるに、酒勾は足柄下郡の屬、賴朝百箇日の佛事に導師を勤む【東鑑】曰、四月廿三日、故將軍百箇日御忌辰也、於御持佛堂、被修佛事云々、導師莊嚴房阿闍梨行勇、此後も導師及戒師請僧等に撰ばれし事度々あり建仁三年十月廿五日、將軍家招請莊嚴坊行勇、令傳受法華經給、近習男女同及此義、元久元年六月一日、爲將軍家御願今日中被造立愛染明王像三十三體即供養之儀、導師莊嚴坊行勇、承元三年十二月十三日、尼御臺所并將軍家、令參法花堂給、有恒例御佛事、莊嚴房行勇、爲御導師、四年七月八日、金吾將軍室、(號辻殿善哉公母也)令落飾給、戒師莊嚴房阿闍梨(始若宮供僧、後壽福寺長老)十一月廿五日、於御持佛堂、有例文殊供養、導師莊嚴房行勇、曆元年六月十八日、於御持佛堂、被供養御臺所御本尊、導師莊嚴房行勇、二年六月廿二日、於御持佛堂、被行聖德太子靈會、莊嚴房以下請僧七人、按ずるに、建保中、壽福寺長老に轉ず本尊水月觀音を置く、

新編相模國風土記稿卷之七十五終

新編相模國風土記稿卷之七十六

村里部　鎌倉郡卷之八

山之内庄　鶴岡七

○鶴岡八幡宮七

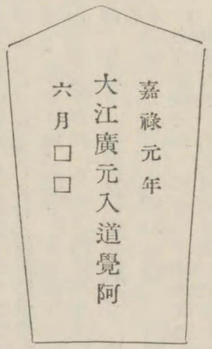
○神主大伴主膳清芳　馬場町に住す、其地の字を鶯谷と呼ぶ、古實朝當社參詣の時此谷にて、鶯の初音を聞しより此名起れりと云ふも、嘉吉三年の物に初主此名見ゆ、先祖中務大輔殿大夫と稱す清元國、初忠文治二年、賴朝參宮の時神職に命ぜらる所藏文書曰、せん日さんろうの時、八まんく、かうぬしの事おはせふくめぬ、又おてまいらする、しきてうといゝ、はまうみ、同清元のさたたるべし、他人のさまたげあるべからざるところ也【文治二年四月日、源朝臣賴朝の華押あり、按ずるに、【鎌倉志】においては追而なり、しきてうを、しきはうと書して式法と注し、いゝは云、はまは濱、うみは海なりと云、又或說を引て、おては御幣なり、みてくらを、おてくらと云なり、いゝとは、飯の字なり、ははんなり、麥の字なり、麥にて菓子を作る事也、まうみはや小衣なり、まはもに通ふ、もはらに通ふ、うは引音なり、布衣をほうゐと云ふ心と同じ、もうみは社人の服なり、即社人の事を云となり、何れの說是なる事を知らず、或云、前の說を是とすべしと見えたり承久元年二月、神主職舊に仍て相違あるべからざる由、政所の執事、信濃守行光・圖書允滿定等、命を傳ふ、所藏文書寫曰、鶴岡八幡宮神職事、更不可相違之狀、依仰執達如件、建保七年二月六日、主殿大夫殿、前信濃守藤原、圖書允清原、各華押、今年四月、承久と改元あり、按ずるに、今年正月、實朝弑せらる、政子柄權を攝す、故にかく繼目の文書を出せしなり、　清元子なくして弟主殿大夫忠茂を養子とし嘉祿元年十一月朔日卒す家系二年二月、上宮神殿の扉、開かざりし時、忠茂子細を言上す【東鑑】脫漏、其文此月上宮條に註す、

將軍賴經より襲職の下文あり所藏文書寫曰、鶴岡八幡新宮若宮神主職事、右任養父忠國朝臣之附屬狀、以散位伴忠茂朝臣、可爲彼職之狀所仰如件、嘉祿二年二月廿六日、賴朝の袖判押す、　建長四年五月、上宮の神戶開かざる時も、忠茂又其由を訟ふ【東鑑】文永二年六月、忠茂其子、宮內少輔經忠に職を讓り七月出家す所藏文書寫曰、出家事所有御免也、早可存其旨之狀、依仰執達如件、文永二年七月三日、若宮神主殿相模守・左京權大夫、各華押、又執權北條相模守時宗・左京大夫政村、連署して經忠に補職の事を傳ふ鶴岡八幡宮若宮神主職事、右任散位伴忠茂、今年六月十六日讓狀、以子息經忠、所被補任彼職也、者早守先例可令其沙汰之狀依仰下知如件、文永二年七月一日、相模守平朝臣・左京權大夫平朝臣、各華押十年六月、經忠其子、治部大夫忠行に讓職し十二月、執權武藏守義政・相模守時宗、連署の補職狀を與ふ鶴岡八幡宮神主職事、右任亡父散位伴經忠、今年六月四日讓狀、以子息忠行、所被補彼職也、者早守先例、可致沙汰之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、文永十年十二月廿二日、武藏守平朝臣、相模守平朝臣、各華押、弘安二年六月、忠行の子、中務大輔忠綱後時綱と改む父の職を襲て十二月補任せらる鶴岡八幡宮神主職事、右任養父散位忠行、今年六月五日讓狀、以忠綱所被補彼職也、者早守先例、可致沙汰之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、弘安二年十二月十三日、相模守平朝臣、華押、　九年九月社頭放火の惡徒を召捕し賞として、越後國加地庄を宛行はる可令早若宮神主伴時綱領地越後國加地庄富塚保內、記大夫新保并屋敷事、右依召取當社火付之賞、所被宛行也、者早守先例、可致沙汰之狀、依仰下知如件、弘安九年九月五日相模守平朝臣、陸奥守平朝臣、各華押、按ずるに、加治庄富塚村・新保村、并蒲原郡の屬、永仁六年十月、從五位上に叙す位記口宣案今に家藏す正安元年十一月、周防左近將監久方等が闕地を、領知に賜ふ所藏文書寫曰、可令早鶴岡八幡宮神主時綱、領知周防左近將監久方・氷室四郎兵衛尉行朝・同志時眞等所領事、右守先例可致沙汰之狀、依仰下知如件、正安元年　延慶十一月一日陸奥守平朝臣、相模守平朝臣、各華押、　三年八月、官途所望により執事時綱仰を傳ふ參內御恩所望事申狀披露之所、便宜之可有御計候、依可達御事書之由、被仰出候之間、書達之候、者可有御存知其旨候恐々謹言、延慶三年八月廿九日、八幡神明主殿、時綱華押、　二年六月、去る延慶三年十一月、回祿の時、社地の東門にて、消防の功ありしを、感ぜらるゝ由、執權相模守熙時、感狀を出せり大船村民所藏文書曰、去延慶三年十一月六日、炎上之時、鶴岡八幡東門、令撲消燼之條、所有御感也、者依仰執達如件、正和二年六月八日、美作權守殿、相模守華押、時綱の子、山城權守國連、其子時國、延元二年七月左馬頭直義、當職安堵の狀を出せり所藏文書寫曰、下華押八幡若宮神主、山城武松丸、右所職任元德三年六月十四日、外題安堵狀、可令致沙汰之狀如件、以下、建武四年七月三日、源朝臣、華押、按ずるに、建武四年は卽延元二年なり此下三通も、皆寫にて、本書は失へり、　曆應二年八月、凶徒追討の祈禱を命ず依凶徒追討事、御祈禱殊可被致精誠之狀、依仰執達如件、曆應二年八月四日、鶴岡八幡宮神主殿、三河守華押、　貞和四年六月、越後國頸城郡、水階福光名の內、惟延の闕地は、元神主の所領たるに依て、再其地を渡さる、若宮神主知行、頸城郡水階福光名內惟延跡事、任本知行之旨、打渡畢、依渡狀如件、貞和四年六月三日、本阿彌、華押、五年十二月、祈禱の賞として福光名の國衙催促を免除あり鶴岡八幡宮神主時國申、越後國福光名、國衙年貢蒙免許、可致御祈禱云々、仍所被免除也、早可被□保司催促之狀依仰執達如件、貞和五年十二月、宇佐美餘一入道殿、僧在判、左衞門尉在判、　文和元年七月、山城權守に任ず、此時將軍尊氏の與へし文書今に藏せり山城權守事、所舉申公家也、早可令存知之旨狀如件、觀應三年七月二十四日、鶴岡八幡宮神主殿、尊氏の華押あり、按ずるに、今年九月改元あり、延文二年六月、尊氏凶徒退治の祈禱を命

凶徒退治祈禱、可令精誠之狀如件、文和六年六月晦日、山城守殿尊氏の華押、按ずるに、文和六年は卽延文二年なり、貞治二年二月、天下安全の祈禱を修すべき旨、鎌倉管領基氏令す天下安全祈禱事、殊可致精誠之狀如件、貞治二年二月三日、鶴岡八幡宮神主殿、基氏華押、十二月、吉良兵部大輔去る文和二年十月、亡父貞家が武内社末社に寄進せし所領、上總國小林郷の年貢を、毎年五石宛運致すべき由を演達す、これ當時時國、彼社の神職を兼し故なり鎌倉八幡武氏宮、寄進之地事、任文和二年十月十五日、父貞家寄進狀之旨、上總國小林郷半分、年貢内毎年五石、可運送鎌倉之由、申付代官訖、可被存其旨之狀如件、貞治二年十二月廿五日、當社神主殿、兵部大輔、華押、按ずるに、小林村は長柄郡の屬、以上三通は皆寫なり、三年八月、又祈禱の命あり天下安全祈禱事、殊可被致精誠之狀如件、貞治三年八月六日、三島明神神主殿、基氏の華押あり、應安四年三月、新宮社の神職に補任せらる所被補任也、早專祭禮、可被致御祈禱精誠之狀、依仰執達如件、應安四年三月八日、八幡宮神主殿、沙彌、華押、按ずるに、畠山滿家入道道端なり、此文書は元本を失へり、蓋兼管せしなり、七年五月、天下安全の祈禱を命ぜらる大船村民所藏文書曰、天下安全御祈禱事、近日殊可致精誠之狀、依仰執達如件、應安七年五月十五日、八幡宮神主殿沙彌、華押、按ずるに、是も道端なり、六月時國卒し、其子主殿助所藏文書には山城守とあり忠淸襲職し、永和四年五月、管領氏滿の命を奉て、天下安全の祈禱を修す所藏文書寫曰、天下安全御祈禱事、近日殊可令致精誠之狀如件、永和四年五月廿六日、鶴岡八幡宮神主殿氏滿の華押あり、永德二年七月、武州橘樹郡、小机保の闕地を、祈禱の料所に宛らる、武藏國小机保、出戸村内、紀五郎、同八郎等跡事、爲祈禱料所、所宛行也、者守先例、可致沙汰之狀如件、永德二年七月六日、山城守殿、氏滿、忠淸、應永元年十一月卒、其子山城守時連職を襲ぎ、二年十二月登營して狩衣二具を賜はる御かり衣目六、御えぼし御はり以下、御かりぎぬ御あこめ、御ひとへ御さしぬき、御下のはかま、御をび、よこめの御あふぎ御くつ、以上これは御所より、御しやうぞくのなかに入られて、をくり給也、應永二年十二月廿日、神主時連、御所へめされ、この御かり衣二具を、遠山彌八郎、六年十一月、武州豐島郡小具郷の内、金曾木三郎の闕地を宛行はる武藏國江戸金曾木三郎跡事、所宛行也、可致天下安全懇祈之狀如件、應永六年十一月十二日、鶴岡八幡宮神主殿、滿兼の華押あり、又曰、武藏國豐島郡小具郷内(江戸金曾木三郎)跡、事、早守御下文之旨、可打渡下地於八幡宮神主狀、依仰執達如件、應永六年十一月十二日、千坂越前入道殿、沙彌華押、按ずるに、沙彌は上杉禪助なり、又曰、武藏國豐島郡小具郷内江戸金曾木三郎跡事、任去月十二日御施行之旨、莅彼所沙汰付下地於八幡宮神主候畢、仍渡狀如件、應永六年十二月二日沙彌、華押、九年十月、末社三島社の神職に補任せらる鶴岡八幡宮末社、三島神主申、當國下海老名郷、領家職事、任去月廿六日御補任狀、幷同日尊行之御奉書等之旨、可沙汰付下地於神主山城守時連之狀如件、應永九年十一月七日、岡豐後守殿、沙彌、華押、十一年八月、三島社神職及社領等兼領の事、相違あるべからざる旨、管領滿兼文書を與ふ鶴岡八幡宮末社、三島大明神神主職、并社領等事、任去應永九年十月廿六日、中務少輔入道禪助補任之旨、不可有相違之狀如件、應永十一年八月十九日、若宮神主山城守殿、滿兼の華押あり、廿三年正月、社頭嚴重に警衛すべき旨、管領持氏下知す鶴岡八幡宮社頭事、嚴密可致警固之狀如件、應永廿三年正月十一日、當社神主殿、持氏の華押、廿四年正月、上杉禪秀の亂により、凶徒退治の祈禱を命ず凶徒退治祈禱事、守先例相觸社司中、近日殊可被致精誠之狀如件、應永廿四年正月十三日、鶴岡八幡宮神主山城守殿、持氏の華押三十二年二月卒す、其子持時は持氏の一字を賜はり十一歲にして襲職し、後山城守に任ず家永享三年四月、大藏稻荷神職を還附せられ、是を兼帶せり大藏稻荷社神主職事、所還附也、者早守先例、可致沙汰之狀如件、正長四年四月廿七日、鶴岡八幡宮神主殿、持氏の華押、按ずるに、正長四年は、卽永享三年なり、今年八月、關東にて始て永享の年號を用ひしこと、【九代後記】に見ゆ、五年五月持氏祈禱の事に依て文書を投ず大船村民所藏文書曰、於當社今月中、若御料致祈禱之條神妙、彌可抽精誠之狀如件、永享五年五月晦日、若宮神主殿、持氏の華押、寶德二年七月、管領成氏祈禱を命ず所藏文書寫曰、祈禱事、守先例相觸社司中、近日殊可被致精誠之狀如件、寶德二年七月十七日、鶴岡八幡宮神主山城守殿、成氏の華押、【鎌倉年中行事】に據に、持氏管領の頃は出陣の時必神主の宅に首途す、又成氏の時年首社參の後、營中にして神主に對面し劍を賜ひ、盃を與ふるを格例とす曰、正月廿日頃、鶴岡(御社參、還御後鶴岡神主山城守參御對面、御劍被下御盃、永安寺殿樣御代には、御陣御發向之時者、先神主方に、有御出、御立之由、先達宿老中有物語也、被下御盃事無之由被申、無前々新儀出來不可然、管領元服の時は、着せし裝束を神主に賜ひ、後社參の時、神主其裝束を着して幣束を捧げ歸營の後劔を呈す、是又格例なり公方樣御元服の事云々、御狩衣は木賊色、御差貫は紫、御袒は紅、御紋は何も桐、此等の御裝束、京都の政所より調進ある也、御祝過て、御裝束悉鶴岡神主を被召下之、一兩日之中被撰吉日、八幡宮え御社參、公方樣御直垂也、神主は被下御裝束を着、捧御幣神馬被進、還御之後、神主參御劍進上、持時在職の頃太田持資入道道灌、卷數及牛玉等を贈りし事あり所藏文書曰、如來札年始之慶賀、不可有際限候、卷數幷牛玉拜領、仍爲祝口扇子嘗城公到着、目出度快悦候、任賀例鳥目二百疋進之候、神前、可有納獻候、恐々謹言、正月廿日、持時、文明十八年八月卒す、神主山城守殿、道灌華押、

其子太郎時信襲職して、山城守に任ず家系永正六年十月古河高基、天下安全の祈禱を命ず所藏文書、天下安全祈禱事、殊可被致精誠之狀如件、永正六年十月十一日、十六年十月、又祈禱の事を八幡宮神主殿、高基の華押、沙汰す祈禱事、近日殊可致精誠之狀如件、永正十六年十月十一日、若宮神主殿、高基の華押、天文二年二月、北條氏綱社頭造營の時、募緣の爲時信を上野邊へ遣はす【快元記】曰、二月九日、神主山城守、伊豆山の我觀房、同宿和泉相連、上野口江氏綱爲使、被差遣了、同廿二日歸倉、即少々奉加有之、九年七月卒せり、其子公時跡を襲ぎ、七月十七日、神主山城他界、猶子太郎公時續之、十六年九月卒す、其子太郎時孝山城と稱し、慶長十七年三月卒す、時孝の子美作時成元和大坂の役に西上し、東照宮より大身鑓一筋を賜ふ近き頃回祿に罹り、身のみを今に藏す、穗長一尺六寸五分、幅一寸强、兩面に梵字一字宛あり、中心二尺六寸五分、銘あれど漫漶す、時成より九代にして今の主膳淸芳に至る以上永系樂百貫文を配當す下社家四人あり、役料を配附す、其內大久保采女は、古文書二通を藏す、一通は天正二年閏十一月、北條左衞門大夫氏繁、上下兩社等へ、神鏡及雲板を寄附せし狀なり、一は彦坂小刑部元正の出せし、鎌倉中の法度書なり、上下兩社の拜殿を預れり、△飯山兩社權現社、宅地の鎭神とす、大江廣元・毛利季光の二靈を祀る、但毛利氏の居宅愛甲郡飯山にありし因にて、此神號ありと云ふ、古は烏合原にありしを嘉吉三年六月、廣元の裔、永井儀左衞門元勝、委に遷座し、小祠を建しと云ふ、祠下に石棺方三尺、あり、內に銅板壹枚銅鏡一面を收む圖左の如し、

背に、今歲癸亥四月十有三日、相州鎌倉郡小林鄕於烏合原今幸有得此□鏡、其子孫之面目何事若之、可謂□□□天□也於是今新卜華地、合祖先廣元之法號、再葬鶴谷尼堂之庭上、鶴岡山供僧淨國院十九世、元運法師敬白、大



江廣元十一代之後胤、永井儀左衞門尉元勝敬白嘉吉三年癸亥六月吉祥日、按ずるに、廣元は六月十日卒す、年七十八鏡裏に文字を鐫たれど、漫滅して讀べからず、按ずるに、季光は廣元の第四子兄親廣嗣なきに因て、家督を襲ぎ、建保四年十二月、左近將監に任じ五年二月藏人大夫に補す、承久元年正月削髮して西阿と號す、評定衆たり、寶治元年六月、三浦泰時と共に自殺す、時に年四十六、

社內に棟札を置く奉勸請、飯山兩社大權現、嘉吉三年癸亥六月如意珠日、永井儀左衞門尉元勝建之とあり、但當時の棟札は、寛保中回祿に罹りし故、後に改書せりと云、天正二年閏十一月、北條左衞門大夫氏繁當社へ神鏡雲板、各一面を寄附せり下社家大久保采女藏文書曰、奉寄附神鏡雲盤七面云々、飯山權現寶前一面、右奉納之旨趣者、於內道場、本尊之祈禱抽精誠、天下安全、可奉祈武運榮盛者也、仍而寄附之狀如件、天正二年甲戌閏霜月五日、左衞門大夫氏繁華押、○少別當大庭元長　馬場町に住す、初代を肥前法橋永契と云ふ、別當圓曉下向の時、扈從して下りし、坊官なりしが、建久二年十一月、當職に補せらる【鎌倉志】に、鶴岡社務職次第を引て曰、當社別當宮圓曉法眼、三井寺より御下向、御供申肥前法橋永契と申坊官也、然間建久二年十一月日、別當圓曉御坊より小別當の官を給り、社內の掃除奉行に定め置るゝ者也、其以後御供方奉行也、別當の被官、坊官の類也、　文和元年六月、凶徒退治の祈禱を修すべき由、將軍尊氏下知す所藏文書曰、凶徒退治祈禱事、近日殊可被致精誠之狀如件、觀應三年六月廿一日、若宮少別當御房、尊氏の華押あり、按ずるに、今年九月文和と改元あり、延文三年四月、由井濱の大鳥居、上棟の時、當職宮能、鳥居の東方に着坐す所藏文書、其文鳥居の條に引用す、應永廿六年七月、管領持氏の命に依て天下安全の祈禱を修せり天下安全祈禱事、近日殊可致精誠之狀如件、應永廿六年七月十九日、八幡宮小別當、持氏の華押、鎌倉管領年首社參の後、營中にて小別當に對面するを例とす【鎌倉年中行事】其文前條に註す、天文二年三月、北條左京大夫氏綱、當社造營により當職、良能を上下總州に遣し里見・原等の諸將に募緣の事を諭さしむ【快元記】曰、三月十四日、自小田原小別當を、兩總州江可被遣由有之、所藏文書曰、就鶴岡勸進之儀、少別當被參候間、以一書申候、定而別當可被申候、恐々謹言、三月十二日、謹上、原孫次郎殿左京大夫氏綱、華押、又一通、同文にして宛所里見太郎殿と書したるあり、共に當時の物なるべし、八年十二月、良能進退の事により、北條氏綱供僧等に文書を與ふ當別當御進退之儀付而、自衆中貴札到來雖古河樣小弓御退治候、其以後者委細速に□存候、尤來春早々御歸海簡要候委細小別當可爲傳聞候、恐々謹言、天文八巳年十二月廿八日、謹上雪下院家中、左京大夫氏綱華押　慶長五年六月、東照宮當社御參詣の時、當職元能を召て、當社草創の由來を尋させられ、其夜は此宅に御止宿あらせらる【關原軍記大成】曰、六月十八日、家康公伏見を御出馬云々、廿八日、藤澤に御止宿是より鎌倉へ立寄らせ給はんとて、繪島にいたらせ給ひ片瀨腰越を經て、稻村崎の道筋又鎌倉星月夜など御覽じて雪下に着せ給ひ又、こゝにて御裝束を改給ひ、八幡宮御拜禮あり、其後別當の坊を召て當社草創の由緒を御尋あるにより別當躊躇して申ていはく、後冷泉院の御宇源頼義勅を蒙りて東夷貞任宗任を征伐の時、此八幡大神に祈願して成功あるにより、新に社頭を建立せらる、又其後源義家、羽州の夷賊武衡家衡を誅して、又戰功をあらはせり、源頼朝卿此神を祈りて、遂に平氏を亡し、天下をたもち給ひたりと申ければ內府公始終を聞せ給ひ、御先祖より尊崇の靈神なれば、此後社頭を後造せらるべしと仰らる、翌朝御發駕の時、元能御東征の御首途を祝し奉りて、陰靡け世は八幡の神の秋、と

口吟ければ御滿悅あり、追て御連歌衆に加へらるべきとの仰を蒙り、やがて召加へられしより、代々相續して元長が父永尙迄は御連衆たりしと云ふ、元能の子周能如雪と號す、元和中、柳營の御會の時時發句に、さゝれ石の巖に種や松の春と申ければ、台德院殿御稱美ありていく八千代まで長き日の影と附させられ、卽御筆を染られて周能に賜りしとて、今に是を秘藏す、古文書二通

曰、廿年前後舊借、同質物田地之事、就御詫言、上意江披露之所に、何も御赦免候由、被仰出候、其分可有御心得候若於此上も、誰人成共、違亂申方候者、重而可被申上候、段御意候、彼田地之事者、只今以御印判、爲新御寄進被進之候御心得肝要候仍如件、天文十六丁未十月十九日、鶴岡少別當駿河守盛昌、華押、又曰、鶴岡御供錢五千疋、富岡美作守、我々手代走廻砌、以田地改而渡進候、然而打向目金五千疋之內、積入候に付而、其樣子承候、既年來落着之上、只今承候事、雖不及分別候、當地御越打向目錢之分、被除五千疋之辻申付候者、可爲新寄進候、依之於御神前、別而爲我々、可被抽御懇祈旨、蒙仰候條、無據貳百疋之分申付進候、每年無相違、可有御所務候、恐々謹言、辰霜月十一日、鶴岡小守政繁華押

を藏す、○社僧　二院あり、四月・八月の神事及正月白旗講、二月常樂會三月正御影供、其餘臨時祈禱等の時、社頭に出仕す、蓋供僧十二院の茶毘所なり、△花光院　扇谷村にあり、龍興山と號す、社頭の內、永一貫三百文を配當す、扇谷村條に詳なり、△松源寺　雪下村にあり、日金山と號す、應永三十三年七月等覺院の住侶本願として、當寺域に印塔を建立す、依て本社別當尊運、此地を永く等覺院に附與す　所藏文書曰、岩井堂日金事可被立印塔之由承候、先以目出度候、然者自御方歲夕、至于三會之曉、帛慧燈於彼地、可覆慈雲於他界給之條、殊以令庶幾候之間、以彼所限永代、奉避渡候了、兼又同心被申方候之旨承候、其段可令存知候也、恐々謹言、應永卅三年七月十七日、等覺院法印御房尊運華押、又【鎌倉志】に、先證文に任せ、當寺成敗相違なき由、古河政氏の子空然より、等覺院へ贈りし文書を載たり　岩井堂日金事、如來院僧正任證文、成敗不可有相違候、恐々謹言、五月九日等覺院へ、空然華押、按するに、此文書、今等覺院に傳へず、社領の內、永壹貫文を配當す、猶詳なる事は雪下村の條にあり、○社人　八員あり、承元元年二月、神人祝部清太國次が坐衆上總國姉前社の住人兼佑を、神人に補せられし事、【東鑑】に見えたり　二月十一日條曰、鶴岡八幡宮神人、祝部清太國次座衆上總國姉前社住人兼佑、被補當社神人也、募神威結纍成群、不可好寄沙汰并無道濫行之由被仰含、圖書允清定奉行之、按するに、姉崎は市原郡の屬、此二人が裔、今詳ならず、又仁治二年五月神人の定額を定められ、濫行を禁止せらる　五月廿九日、所處甲乙人號神人、多令致煩之由、依有其聞、可被置本數之趣、自當坐被相觸宮寺、外記左衞門尉俊平、爲奉行、今各所職を分て是を勤む、△石川掃部信清　社中洒掃の事を掌とる

寛永五年の御條目にも、掃除之事、社中者小別當、并神主石川、如先規可申付之事云々とあり、　河內守源義兼の裔孫にして、中古の祖を掃部元良と云ふ　實は神主大伴美作守時成の次男なり、寛永九年五月十四日死、元良より九代にして、今の信淸に至る社領の內、永二貫九百五十二文を配當す、△坂井宮內　家系に據に、先祖松田三郎有義波多野右馬允義經の次子なり、山城國石淸水の社人、某の家を繼しが建久二年、上宮造營の時、關東に下向し、當職に補せしより子孫連綿して其職を襲ぎしに、宮內時員の時永享の亂に依て武州久良岐郡蒔田村に移住し　當時同村杉山神社、神主を兼帶せし因あればなり、社役等は彼地より參勤す、其頃同村の領主、吉良左京大夫勝國　按ずるに、蒔田村勝國寺傳に吉良左京大夫政忠、彼勝國と改む文龜二年六月卒、蒔田家譜には、政を正に作り、改名の事は所見なし、家士、坂井某の子を養て此家を繼しむ、是より松田を改め、坂井氏を冐せり、寛永中、和泉時貞が時當所に還住すと云ふ、家藏に手鑓一本　長五尺七八寸脇差の刀一腰、扇地紙菊の折枝を畫く、一枚あり、賴朝よりの賜物と云ふ、永錢を社領の內より配當す、△岩瀨一學尙繼御手長・御膳司、兩役を兼帶す　按ずるに、【東鑑】建保四年九月十日條に、鎌倉住人藤井貞（號藤平）可爲鶴岡御膳役之由被仰付とあり、今其子孫詳ならず、先祖藤原範貞は、熱田大宮司政範の次子なり、建久二年、末社熱田明神の神職に補せられ、遂に社人となれりと云ふ、家系は元文中、回祿に烏有し、歷世詳ならず、但元龜年間當職たりし玄蕃より十代にして尙繼に至る、永樂四貫八十五文を配當す、△追川俊藏尙正　御手長役を勤む、平判官康賴の後裔なりと云ふ、古は坂間氏にて坂間大夫を通稱とせり、弘安四年の遷宮記錄に、此名見えたり、天正九年十一月、當社の銀警衛の事に依て北條氏より下知あり　社人石井庄司藏文書曰、一揆罷立事無用候、天文九年庚子、春松院殿如御證文、鶴岡銀可相守旨、被仰出者也、仍如件、辛巳十一月十四日、新大夫坂間大夫、六郎五郎、宗甫奉之、北條氏虎印、其後內膳某　延享三年死の時今の氏に改む、永四貫二十文を配當す、△金子泰亮勝佳　御手長役を勤む、家傳に據に先祖佐伯小大夫昌長は筑前住吉の社司、佐伯昌助の弟なり、故ありて豆州寺家村　按ずるに田方郡の屬、に住す、賴朝配流の頃より禱祀の事を奉り、治承四年當社勸請の初當役に任ぜらる昌長子なくして金子十郎家忠の子、新三郎家眞を養て家を繼しむ、よりて金子氏を冐せり、家眞、角觝石長職に任ぜられ、當國中阪間鄕　按ずるに大住郡の屬、を給田に宛行はる、元曆元年六月給田の課役を免除せられし、賴朝の下文今に藏す　下相模國中板間鄕、可早免除若宮相撲字新三郎家眞給田畠在家等事、田壹町畠壹町在家一

宇、右件給田畠在家免除畢、地頭名主等、不可云煩之狀如件、壽永三年六月三日、頼朝の袖判あり、按ずるに、此年四月改元あり、家眞の子經重は、小大夫と稱す、弘安中の物に此名見えたり　四年十一月廿九日、八幡宮遷宮記曰、次宣命使二人、仁王大夫・小大夫經重云々、經重以後歷世詳ならず、文明十二年二月、小大夫駒房角觝右長職に補す　鶴岡八幡宮寺、補任相撲右長職事、金子駒房、右彼長職事、爲闕職之間、先所定置也、早任先例、可相從社役等候、若無沙汰候、者越度を以違返之儀可有之候、仍狀如件、文明十二年二月十三日、時藤華押、今も例年八月十六日の神事に、相撲行事を勤む、古文四通一は頼朝の下文なり、其文前に註す、一に曰、鶴岡八幡宮相撲職事、伊王國吉、右去二月十五日、□□□者依當社重役、南深澤之內、津村田地之事、兩長御給恩所被下也、殊以神事祭禮、奉公無懈怠、可勤之狀、依仰執達如件、建長二年七月廿五日、相模守・武藏守各華押、按ずるに、深澤・津村井郡內なり、又曰、鶴岡八幡宮、相模右方長貫首、左近次郎守吉、與相撲奉行猿渡九郎三郎盛重（今者死去）子息又三郎盛信相論、武藏國須久毛郷給田畠事、右給田畠等亡父盛重、并盛信、押領之由、爲一番御引付大和右近將監盛政奉行訴申間、雖番訴陳、三問三答、就返渡下地、相互以和與之儀、止沙汰之間、向後□聊違亂不可有之若背此和與狀、於致違亂者、可被申行罪科仍爲後日、和與狀如件、嘉曆元年八月廿日、藤原盛信、華押、按ずるに、須久毛郷今詳ならず、又曰、鶴岡八幡宮寺、相模長守吉、與猿渡九郎三郎盛重（今者死去）子息又三郎盛信相論武藏國須久毛郷給田畠事、右就訴陳狀、欲有其沙汰之處、今年八月廿日、和與訖、如盛信狀者、彼給田畠事、亡父盛重、并盛信、押領之由、爲一番引付訴申之間、雖番訴陳、就返渡下地、相互以和與儀、爲止沙汰之間、向後聊不可有違亂若、背此狀致違亂者、可被申行罪科、□如守吉□者、同前者此上不及異儀、然則任彼狀、可令領掌也、者依鎌倉殿仰、下知如件、嘉曆元年十月十二日、相模守平朝臣・陸奥守平朝臣、各華押、按ずるに、此三通は傳來の故を知らず、但文中守吉と載たるは、歷代の內なるか詳ならず、を藏す、永三貫四十四文の配當あり、△梶田判事頼蔭　雪下村に住す、御手長役を勤む、先祖仁王大夫清時、治承四年京師より下向して當職に補せらる、建長三年、松童、高良等の社修理の時、清時奉行たりし事、社務記錄に見えたり、此後代々仁王大夫を以て通稱とす、弘安四年の遷宮記に仁王大夫と載す是清時の子忠清なり、夫より數代の後、靱負時行　正保四年死、八時始て梶田を氏とせりと云ふ、永壹貫九百十文を配當す、△戸川文平　幣殿を守るを役とす、先祖は戸川大炊亮時實の裔孫にて勘大夫　天正十一年三月二日死　と稱すと云傳ふ、永一貫五百七拾文の配當を受く、又相撲免　八月十六日の神事、角觝の時力士一人を出す故なり、永五百文、焚火免　二月十一日の二度初卯の神事の時篝火を調進す、永貳百文の配當あり、△石井庄司儀昭　火振　二月十一日初卯の日、神事の時此役あり、本番上宮の宿直の兩役を兼帶せり、中古の祖を六郎五郎と稱す、天正九年十一月、北條氏より當社

の銀の事に依て文書を授ず　所藏なり、其文前に註す、六郎五郎より八代にして今の儀昭に至る、永貳貫三百七十五文の配當あり、又火振免と稱し、永百文を所務す、○承仕　二員あり、壽永の頃、既に此職を置し事【東鑑】に見えたり　其文下に註す　天文十六年十月、大道寺駿河守盛昌改て二人の給田を附與す　山口榮存藏文書曰、鶴岡御社人承仕二人、免田貳貫文目之所、自前々雖拘來候、近年所務令相違之由候間、改之申調進之候、仍證文如件、天文十六年丁未十月十九日、承仕二人、駿河守盛昌華押、今二員共上宮宿直を勤む、△山口榮存　家系に據に、先祖榮光は源三位入道頼政の孫にて、駿河守廣綱の子なり、別當圓曉に從て、洛より下向し當職に補す、壽永元年十二月頼朝密に參宮の時、榮光の所置を感じ給田を賜はれり【東鑑】曰、十二月七日、夜深人定之後、武衛御參鶴岡佐々木三郎・和田次郎等之外、無御供人、而於拜殿御念誦、宮寺承仕法師榮光來云、着于君御坐誰人哉早可退去云々、武衛御感之餘、召出御前賜甘繩邊田一町、按ずるに、甘繩は長谷榮光子なくして山口次郎有綱　三浦義明の次子、の第四村の屬、榮光子を養て子とし榮俊と稱す、是より世々山口氏を冐せり、社領の內永七貫二百三十七文を配當す、古文書一通　其文前に註すを藏す、△藤田圓順　先祖重節　藤田重秀と云者の第三子なり、安貞中當職に補し、子孫今に連綿す、社領の內永六貫八百三文及び小供所料、十貫文　年中、十八度の供物を調進す、の配當あり、○伶人　八員あり、其中四家　加茂和蔭・同龍起・同定英・池田良成等なりを本家と稱す、建久二年社頭新造の後、京都より伶人十二人、年毎に參勤せしが後當所に土着すと云ふ、按ずるに、【東鑑】建久五年六月の條に、三善康信入道善信に、伶人の奉行を命ぜられし事見えたり　六月十一日、鶴岡伶人等、可令善信、奉行之旨被仰下、又寶德三年九月、伶人野田九郎と云者の闕地を當社神主に宛行はる　大船村民所藏文書曰、當社伶人野田九郎跡事、任先例所充行也殊可被致天下安全祈壽之狀如件、寶德三年九月五日、鶴岡八幡宮神主殿成氏の華押あり、後年戰爭の頃多離散して、加茂餘三朝末と云者のみ、當所加茂屋敷に住居し、社役を勤む、天正中に至て此家四家　加茂出雲守・同周防守・同惣兵衛・同對馬守、に分る、十九年七月亂橋村邊にて四人の給田、十一貫五百文を宛行はる　加茂健司藏文書曰、拾壹貫五百文、加茂四人此內四百九十八文、亂橋須藤善三郎、貳百廿四文、同所藏福庵三百六文、同所村田伊□助、七百十文、不戸藤左衛門、壹貫八百七十四文、同郷源五郎、貳百文、同郷千壽、四百八十文、同郷五郎右衛門、三百六十六文、同郷內藏助、貳百十貳文、同郷眞藏坊、二貫貳百六十七文、同郷山崎左近、貳百文同郷山本彦七、百六十八文、同郷源四郎、貳百六十六文、同郷八郎左衛門、貳百七十文、同郷山崎左近、三百四十四文、同郷山本四郎左衛門、五百六十貳文、同郷五郎左衛門、田四百卅三文、切方須藤拾三郎、百文、同又次郎、貳貫六文、山崎左近、以上拾壹貫四百九十六文、辛卯七月廿八日、頓阿彌、萩

原・大窪・清田、各華押、明る文祿元年四月、給田之内替地を長谷村にて渡さる社人領長谷御領所渡分、壹貫百文、蒔田源五郎、三百四十四文、山本四郎左衛門、四百四十八文、雪下屋敷上錢、但壹□五十四文、百五十文□□□此外八十文八乙女職掌□□□人より九文づゝ、以上壹貫八百九十壹文、此替地壹貫文、遠山屋敷大給、三百廿壹文、香藏院上成、白井宗左衛門、四百八十文、關□被官彦市、百文、國安主水、以上壹貫貳百文、此内九文過、但上成たるべし、辰四月廿九日、加茂粱、頓阿彌、萩原・上久保、各華押、元和八年日光山、東照宮の御神前にて舞樂興行の時參勤す 今に當時の樂目錄を所藏せり、其後分家して八員となれり、當社神事は勿論、大山寺、豆州三島明神等の神事にも、參勤するを例とす、△加茂將曹和蔭　加茂周防守の裔にて篳篥を役す、社領の内配當、永貳貫七百廿六文なり、△加茂健司龍起　加茂出雲守の裔なり、横笛を役す、配當永貳貫六百九十貳文なり、△加茂文司定英　加茂對馬守の裔なり、篳篥を役す、永貳貫七百十文の配當あり、△池田隼人良成　加茂惣兵衛の裔にして、四代駿河寶曆九年死、の時今の氏に改むと云ふ、鉦鼓の役なり、永貳貫六百八十文を配當す、△加茂伊織兼良　横笛を役す先祖百助正保中より勤むと云ふ、永貳貫七百六十貳文を配當す、△大石丹司勝義　先祖は野本鶴之助と云ふ寛文六年死、四代忠右衛門元祿十四年死、の時大石氏に改む、笙の役なり、永貳貫七百五十四文を配當す、△辻右近兼隆　先代を辻賴母享保三年死、と云ふ、羯鼓を役とす、永貳貫七百文の配當あり、△多修理以時　先代を多隼人延寶六年死、と云ふ、太鼓の役なり永貳貫七百文を配當す、○職掌　八員あり、神樂の事を掌とれり、元治元年十二月賴朝小袖長絹等を賜はりし事所見あり【東鑑】曰、十二月廿八日可被致國土無爲御願之由被申若宮別當法眼坊、加之以小袖長絹、給供僧職掌、邦通奉行之、二年二月、左馬頭能保、參宮して神樂を奏せしめ物を與ふ二月一日、左典厩能保並室家男女御子息、被參鶴岡、被奏神樂、別當供僧及職掌、各有賜物、十二月、夫人政子參宮の時も神樂を奏し、各祿を賜ふ十二月六日、御臺所御參鶴岡有神樂、巫女職掌、面々賜祿、建久二年正月、賴朝神馬を奉納の時當職の輩、引手の下手を役す正月十一日、前右大將家、御參鶴岡神馬三匹引列御前、一疋梶原兵衛尉景高、下手職掌引之、自餘同一疋、千葉二郎師常、三月、若宮假殿、遷宮に依て參勤す三月十三日、入夜若宮假殿遷宮、宮法眼並供僧及巫女職掌等皆參、三年五月當職紀藤大夫、社頭に於て俄に狂亂す四月三十日條曰、丑剋若宮職掌、記藤大夫宅燒亡、不移他所、諸人走集之處家主云是非放火等之疑、偏存天火之由、五月一日條曰、鶴岡宮備供祭、巫女職掌群參、而紀藤大夫、俄以狂亂吐詞云、見小壺桶前、（在町末邊女云々）目來通艶言之處奉鑄神鏡安家中近日欲持參于鶴岡宮之由稱之不許容之間、去廿九日夜、雖令燒彼家、依指合默止畢、去夜取松明出行時、思彼女宅之由、燒自宅云々、則義慶房・題學房等加持之、按ずるに、藤太夫の裔孫詳ならず建仁三年二月實朝　當時千幡と稱す、神馬を奉納あり、當職のもの下手を役す二月四日將軍家御舍弟千幡君、令參鶴岡給、被奉神馬二疋、結城朝光、所光季等引之、下手神人　承元二年十二月、僧善勝以下の輩を當職號職掌等也、十二月十四日、上總國海上郡、久吉郷住人、僧善勝以下之輩、被加鶴岡職掌、圖書允清定奉行之、按ずるに補し海上郡今下總に屬す、又三年六月源近利を補入す六月十九日、源近利被加鶴岡職掌、圖書允清定爲奉行沙汰之、按ずるに、近利等の子孫詳ならず、仁治二年五月職掌惡別當家重科ありて解職せらる五月廿九日、有評定鶴岡職掌、常陸國井住人、惡別當家重、依博奕之科被解神職天文五年八月、假殿遷宮の記【快元記】に職掌十二人とあるは父子出仕せしを以て、定額に增加せしなり、されば九年十月正遷宮の記同上には神樂男等八人と記せり△小池新大夫時中　天文五年八月、外遷宮の記錄【快元記】に御榊注連、職新掌新大夫と見えたり、天正九年北條氏社頭の銀、警衛の事を下知す社人石井司藏文書曰、一撰罷立事無用候、天文九年庚子、春松院殿如御證文、鶴岡銀可相守旨、被仰出者也、仍如件、辛巳十一月十四日、新大夫坂間大夫、六郎五郎、宗甫奉之、北條氏虎朱印、今時中、當職の小頭を勤む、社領の内、配當永五貫四百九拾五文なり、△坂井越後邦高　先祖を時保と云ふ、岩瀨村五社明神の神職たりしに、文治中當職に加へらる、其後子孫戰爭を避て舊地に退住し、文祿中復職すと云ふ、今に五社明神の神職を兼帶せり永壹貫九百六十二文を配當す、△鈴木主馬尙綏　鈴木左近將監重政の裔、左近重安、治承中、此地に下向し、當職に補す、子孫永享中に至り、亂を避て郡内大船村に退住して最藏坊と號し今も彼村に最藏坊と唱ふる古塚あり同村熊野社の神職を兼帶せり今も兼管す、天正十八年、御打入の後、當所に歸住すと云ふ、永貳貫四十文を配當す、△小池民部時一　先祖小池民部大夫久時は、攝州小池村の人なり、治承中下向して當職に補せらる、後年郡内山崎村天神の社家となりしに後舊職に復すと云ふ、永壹貫七百八十四文を配當す、△小坂伊豫方叔　村岡次郎忠賴の裔孫、好通、當郡村岡に住し、仁安年間御靈社の神職となり治承中當職に補せられ、其後子孫元弘の亂に依て村岡へ退住せしが、文祿中舊職に復せりと云ふ、寶永の頃村岡を改て今の氏を冐せり、今に御靈社の神職を兼永壹貫九百七十八文を配當す、△坂井宮内睦芳　先祖松田三郎有義秀郷十二代の孫、建久中上宮勸請の時石清水より下向して當職に補せらる、戰國の頃子孫武州久良岐郡蒔田村に退き、同村杉山明神の祠官となれり、寛永中社

頭再造の後舊職に復すと云ふ、永壹貫九百七十四文を配當す、△吉田壹岐佳春　寶曆年間迄は神官たりしに二年柳田右京（金澤瀨戸明神の社人にて當職を兼ぬ、）の闕に補せらる、永九百貳十七文を配當す、△佐野齋宮　武州金澤瀨戸明神の社人にて當職を兼、先祖は大和勝重寛永十二年死と云ふ永八百文を配當す、○巫女　八員あり、八乙女と稱す（按ずるに、社務記錄康永元年九月十三日條に、八女人とあり又【快元記】には、巫九人或は巫女、乙女十六人など記せり、）文治二年五月、巫女託宣ありし事、【東鑑】に見えたり五月一日、此間大菩薩、詫巫女給曰、有叛逆者、自西廻南、又歸西、猶至南又欲到東、日々夜々奉窺二品之運能祟神與君申行善政者兩三年中、彼輩如水沫可消滅、依之被奉神馬、十二月、夫人政子參宮の時、神樂を奏して祿を賜ふ【東鑑】其文職掌條に註す、建仁三年正月、託宣あり　正月二日、若宮一幡君、御參鶴岳、被行御神樂之處、大菩薩詫巫女給曰、今年中、關東可有事、若君不可繼家督岸上樹其根已枯、不知之而特梢綠、人此餘還宮或は奠供等の時、勤仕せし事所見あり【東鑑】建久二年三月、三年五月等なり、其文略す、△小池米王　先祖を丸山米王と云ふ、寛永中京都より下向して當職に補す、三代米王米王は、代々の通稱なり、八乙女皆然り、の時今の氏に改む社領の內、永八百六十八文を配當す、△山崎守王　祖守王は山崎村天神社の神職なりしが、文祿元年三月、當職に補す、此時宅地を渡されし證狀を藏す（在々に踞、八乙女職掌、鎌倉へ引移に付而改而被下渡事、壹貫六百文屋敷給共に、此內四百四十文、雪下屋敷に渡、貳百十文、ほうかいし平次郎、四百廿四文、小町清左衞門、百十四文、雪下清の彌助、四百廿文小町關內藏助、以上壹貫六百八文、此內八文過は清左衞門に立、辰三月森王殿、頓阿彌、大久保、萩原、各華押、永二貫八百八十文を配當せり、△大澤宮王　大澤左衞門尉信弘の裔にて祖宮王慶長九年死、初當國六所宮に仕へしが、北條氏分國の頃當職に補す其時橫地監物丞吉信より當社神主へ贈りし書翰を藏す熊申仍當國六所宮之宮主に而、先代任御引付、其他江參申、於其元可然樣□廻一役可被仰付候、爲其一筆□恐々謹言、卯月三日、鎌倉神主殿參、橫地監物丞吉信、華押、追而□度、下之若宮之御初尾錢百疋、封を付越申候、可有御請取候、又文祿元年三月、宅地を渡されし證狀あり（在々に踞、八乙女職掌、鎌倉に引移に付而、改而被下渡事、壹貫六百文、屋敷給共に、此內四百四十文、雪下屋敷に渡、貳百十六文、同所清水木工助、貳百四十文、西御門伊左衞門、六百文、比企谷又右衞門四十六文、寶戒寺孫四郎、六十六文、道明寺、孝與三左衞門、以上壹貫六百四文、此內八文過、辰三月十七日、宮王殿、頓阿彌、大窪、萩原、各華押、永貳貫十文を配當す、△大石若王　古より當職を勤めしが、元弘の亂を避藤澤諏訪社地に退き、數代住居し、文祿元年舊職に復す、是も當時宅地を渡されし證狀を藏す（在々に踞、八乙女職掌、鎌倉引移付而改而被下渡分、壹貫六百八文、屋敷給共に、四百四十文、雪下屋敷に渡貳百五十貳文せき善三郎、五百卅文、大きやうし、三百四十文、はんちやう、太左衞門、以上壹貫五百六十四文、此外四十四文伊與殿てまいより田、辰三月十七日、頓阿彌、大窪、萩原、各華押、又寛永中、御祈禱の事を、奉りし時の文書一通を藏す覺、

圓徑四寸八分

くぼう樣、御臺樣、大納言樣、さい將樣、御きねんまいきぬあつはく十貳たん、つかはされ候、御まつり御殿たいへ御きせ候て、よく〳〵御きねん御申上候べし、千代めでたくかしく、酉八月十二日、ゑど御本丸樣より、民部卿、此餘古盃一口を（和田義盛、大磯宿にて、酒宴の時用ひし器なりと云傳ふ、）家藏せり、傳來の緣故を知らず、永貳貫十文を配當す、△富田王部　祖先は蒲冠者範賴の裔にして、攝州富田郷（按ずるに、島上郡の屬、）に住せしが、後關東に下向し、郡內今泉村に土着し、修驗の家を繼しに慶長中、當職に補せられしと云ふ、永貳貫十文を配當す、△小島杉王　古當職を勤め、戰爭の頃、武州金澤、瀨戸明神の社地に退住して、數代の後寛永中舊職に復す、永八百文を配當す、△小坂森王　祖先は治承中、大町村天王の神主、小坂氏より分家し、同社に仕へしが、文祿中當職に補す、永九百十一文を配當す、△黑川松王　祖先は和州吉野黑川村、稻荷の社職なりしが、文祿中、當職に補す、永九百十文を配當す、○神官　七員あり、年中神事奠供等の時所役あり、又月毎に各一夜宛、本社に宿直す、△山本若狹先祖源左衞門時長は、承仕山口了圓の弟なり（文祿二年死す）社領の內一貫文の配當あり、下皆同じ、△富田源司　祖先の事傳へて失ふ、△內田平馬　是も先祖詳ならず、下同じ、△細野東吉　△二宮多門　先祖多門は天正九年死すと云ふ、△追川縫殿助　享保中、御手長役追川氏より分家して當職に補す、△吉田右平太　先祖を藤大夫（天正七年死、）と云ふ、京都吉田町（按ずるに、愛宕郡に吉田村あり、）に住し後下何して當職となれり、○經師神納伊織知寧　扇谷村に住す、先祖は竹溪と云ふ宋人なりしが、實朝の請により宋朝より一切經を渡せし時、經司として來朝し遂に此地に留りて、名を神納越後周玆と改む、其子は神納越後守德榮と稱す、德榮より十一代、越後德印（慶長八年二月廿五日死）の時、天正十六年八月、大道寺駿河守政繁より經師役たるを以て、課役免除の下知あり（所藏文書曰其方事經師

役、被廻來之間、新儀之御公方役以下、不可申付候、勿論公方地出作儀、我々手代之仁申懸候共、爲先一札筋日申分、不可請取之者也、仍如件、天正十六戊子八月十日、經師加納越後入道殿政繁華押、且經師免貳貫文の地、先規に任せ永く相違あるまじき由を下知す鶴岡八幡宮經師免、貳貫文之所、宗眞御指置分、永代不可有相違候、爲後日證文仍如件、天正十六戊子八月十日、經師加納越後入道殿政繁華押【北條役帳】にも二貫文、鎌倉內經師と見えたり、

又政繁の招に依て、小田原に至りし事あり所藏文書曰、態令啓候、細工少用所候間、十日計之□爲見可被成候、此文參著候者、翌日に其方を被立、尤待入候恐々謹言、五月十二日、神尾越後守殿繁華押、政永壹貫百九十八文を配當す、每年四月、八月の神樂に供奉し、七月廿四日、一切經繼立、八月、新古大般若經、工部大乘經等の繼立を定役とせり、○大工棟梁　二人あり、各永七百文を配當す、【東鑑】建長二年五月の條に、當社番匠を召て、社頭修理の事を、命ぜられし由見えたり五月一日、鶴岡上宮、破損修理事、有其沙汰、召宮寺番匠等、重々所被定仰也、○岡崎宇右衛門　先祖を飛驒守と稱す、其子左衛門尉は、慶長九年社頭再造の時棟梁たり、元和七年三月、其子久平に與へし、職業の讓狀、今に藏す鶴岡大えいせきの事、久平壹人に相定申候、たれ成□いらん有間敷候但喜太郎事、同事ねんごろ可有候、但居屋敷もとやしき者喜太郎に出し申候、爲後日一札如件、元和七年辛酉三月五日、岡崎久平殿、左衛門尉、華押、喜太郎は久平の弟なるべし、喜太郎よりの證狀も藏せり、又千葉次郎直胤より、三覺院へ贈りし書簡を藏す、傳來の故を知らず、○岡崎源內　宇右衛門の分家なり、左衛門尉の子、木工左衛門尉を祖とす、

新編相模國風土記稿卷之七十六終

新編相模國風土記稿卷之七十七

村里部　鎌倉郡卷之九

山之內庄　鶴岡八

○鶴岡八幡宮

○別當坊跡　供僧等覺院の後背にあり、地名を八正寺谷八正寺は、境內御影堂の號なり、と唱ふ、別當職を置れしは、治承四年十月、賴朝當社建立の最初にて、伊豆走湯山の僧侶、專光房良暹、年頃師檀の好あるを以て假に當職とせら【東鑑】曰、十月十一日、走湯山住侶、專光坊良暹、依兼日御契約參著、是武衛年來御師檀也、十二日條曰、寅尅點小林郷之北山、構宮廟、被奉遷鶴岳宮於此所、以專光坊、暫爲別當職、按ずるに、【東鑑】養和元年正月一日の條に、前武衛參鶴岳若宮給云々、著御于禮殿、專光房良暹、豫候此所、又壽永元年四月廿四日條に、鶴岡若宮邊、水田三町餘、被停耕作之儀被改池、專光、景義等奉行之、とあれば、良暹職に在る事、三年なりしなり、壽永元年九月始て別當坊を建、宮法眼圓曉を以て其職に補す九月廿三日、武衛相催中納言法眼坊、參鶴岳給、是宮寺別當職、依被申付也、於拜殿有此芳約、廿六日、點鶴岳西麓、被建宮寺別當坊、今日即立柱棟上、大庭平太景義奉行之、武衛監臨給、當坊、度々回祿に罹りし事所見あり　正嘉二年正月十七日丑刻、秋田城介泰盛、甘繩宅失火、南風頻扇云々、若宮寶藏、同別當坊等燒失、按ずるに、甘繩は長谷村の屬、廿二日、若宮御影堂、并雪下別當坊等上棟、社務記錄曰、文永八年十月十二日夜、別當坊等燒失、自火云々、正和四年三月八日子尅、炎上八幡宮上下以下、社務坊、供僧房等無殘【社務職次第】曰、應永廿四年正月十日、當坊御影堂、對屋以下悉燒失了、又曰、廿五戊戌、別當坊被新造、而十月令移給又曰、社務御坊御新造事、永享六年甲寅、又歷世の僧侶は【社務職次第】【東鑑】等に據て爰に錄す、第一世圓曉は宮法眼と號す、壽永元年九月、補任せらる【東鑑】曰、九月廿日、中納言法眼圓曉、號宮法眼、自京都下向、是後三條院御後、輔仁親王御孫、陸奥守源朝臣義家御外孫也、武衛尋彼舊好所請申也、【社務職次第】曰、後三條院第三御子、輔仁親王御孫、行憲法眼子息、行曉法印灌頂弟子、母六條院判官爲義女、按ずるに、補任の事、廿三日條に見えたり、其文前註す、　元曆元年十一月、初て賴朝を當坊に請じて勸盃の事あり十一月六日、於鶴岡八幡宮有神樂、武衛參給、御神樂以後、入御別當坊、依奉請也、別當自京都招請兒童、號總持王、去比下着、是郢曲達者也、以之爲媒介、所勸申盃酒也、垂髮吹橫笛、梶原平次付之又唱歌、畠山次郎歌今樣、武衛入興給及晚令還給、文治五年六月賴朝の命を奉て、塔供養の導師觀性が旅亭に至て旅鬱を慰す六月五日若宮別當法眼、當宮供僧等、被向觀性法橋旅宿、勸

盃酒及延年云々、是依内々仰也、按ずるに、觀性は塔供養の導師として、京師より下向あり、又觀性登營の時參會せり　十一日、中納言法橋參御所、依御招請也云々、若宮別當參會給、終日御談話、建久二年二月、賴朝入來ありて、雪景を賞せらる　二月十七日雪降積地五寸幕下爲覽雪、渡御鶴岡別當坊、佐貫四郎候御笠役、前少將時家供奉、路次有御連歌、別當猷盃酒、三月又來臨あり、神殿再造の事を議せり　三月六日、若宮火災事、幕下殊御歎息給云々、渡御別當坊、被仰四月、一夏の安居を始む　四月十五日、鶴岡宮寺始結安居、含新營間事、三年二月、園城寺三院入堂の爲に上洛す　二月十三日、鶴岳別當法眼圓曉號宮法眼、被上洛、爲園城寺三院入堂云々、幕下、六月下向被遣丁寧錢物、剩爲長途、兵士被相副雜色八人、六月十八日、鶴岡別當法眼、自あり　京都被下着、直參幕下被謁申、五年三月、賴朝を招請して舞曲あり　三月十五日、將軍家渡御于若宮別當坊、是別當法眼、自京都招下垂髮、尤堪鄙律舞曲、可覽其藝之由、被申請之故也、有勸盃等兒童施藝、僧徒及延年、御共壯士等、依仰相交之自然之壯觀也、故此間祈經于今存命、定入興衆之由被　正治二年十月廿六日卒す　十月廿六日、鶴岡仰出頗有御落淚之氣、八幡宮別當、法眼圓曉號宮法眼、入滅、在職中導師に撰ばれ、或は加持祈禱を命ぜられし事度々あり　文治元年正月一日、武衛御參鶴岡宮云々、法華經供養、導師別當法眼尊曉也、按ずるに、尊曉は正治二年、別當職に補任したれば此導師は、圓曉なる事知べし、但傳寫の誤なり、十二月十一日、二品若君、俄以御病惱云々若宮別當法眼、爲御加持被參候、廿八日可被致國土無爲之御祈之由、被申若宮別當法眼坊、二年正月八日、營中有心經會、若宮別當法眼等參行、二月四日、營北山本狐生子、其子入御丁臺、卜基之所推不快凡去年以來頻有怪異、且去比有御夢想、貴僧一人參于御枕上射山事尤可奉重、不然可有慎之由申云々、仍若宮法眼參住修荒神供三年正月一日、二品御參鶴岡宮云々、有御經供養、導師別當法眼也、五年三月三日、鶴岡法會被始行、已尅二品御參宮、別當法眼圓曉、并供僧等着坐、六月九日、御塔供養也、導師法橋觀性、呪願若宮別當法眼圓曉、七月八日、千葉介常胤、獻新調御旗、其長任入道將軍家賴義御旗寸法、一丈二尺二幡也、又有白糸縫物、上方伊勢太神宮、八幡大菩薩云々、下縫鳩二羽、相對云々、是爲奥州追討也云々、此御旗以三浦介義澄爲御使、被遣鶴岡別當坊、於宮寺七箇日可令加持之由被仰、十月廿五日、鶴岡別當法眼被參入、依御請也供僧等應召、是奥州追討無爲之條、偏答祈禱玄應歟之由、依被賀仰也、次被施沙金帖絹藍摺等、建久元年八月十五日、鶴岡放生會也云々、法華經供養、導師別當法眼圓曉、三年七月三日、自今曉御臺所聊御不例、諸人走參、若宮別當被候護身、八月九日御堂所御產氣、御加持、宮法眼、四年三月十三日、迎舊院御一廻忌辰、被修御佛事、千僧供養也云々、武藏守義信爲行事、其儀被定、宿老僧十人、所爲頭也、仍各相具百人云々、一方頭百僧從之、若宮別當法眼、五年十一月十三日、上總介義兼、於鶴岡供養兩界曼荼羅二鋪、導師當宮別當法眼、正治二年五月廿五日、江間殿妾男子平產、爲加持若宮別當、自去夜被坐于大倉亭、　第二世尊曉は宰相阿闍梨と號す、圓曉の弟子　【東鑑】○【社務職次第】及社務記錄に、圓曉舍弟行敎法印、灌頂弟子卜戴、にて濱別當と號す　【社務職次第】社務記錄、正治二年十二月異同あり、補任し日に作る、恐くは非ならん、明る建仁元年二月、始て神拜あり　【東鑑】曰、二月一日、宰相阿闍梨尊曉法眼圓曉弟子、補鶴岡別當、今日始遂神拜、其後參賀于左金吾、大官、二年二月、紀內所行景等を、坊中に招請して饗應す　廿七日、鶴岡別當阿闍梨、招請鞠足等饗應、是依左金吾內々仰如此、被賞翫行景之餘也、及晚可見鞠之由坊主所望之間、各進被懸下、數三百之後退散、三年五月、賴家來臨して蹴鞠あり　五月十八日、將軍家渡御鶴岡別當坊、伯耆少將、右近將監親廣等扈從、有御鞠人數如例、元久元年正月、實朝の命により、伊豆・箱根兩社へ參拜す　正月十八日、鶴岡別當阿闍梨尊曉、爲將軍二年三月、實朝當坊に入來あり家御祈禱、進發二所、　五月職を辭して定三月一日將軍家渡御壽福寺方丈并若宮別當坊、或談法文、或令翫蹴鞠給、曉に讓り　【社務職次第】曰、五月三日、讓社務職於定曉、承元三年九月十五日卒す　【社務職次第】按ずるに、社務記錄に元久、當職の中幕府心經二年九月十五日、入滅と記するは誤なり、會の導師を勤し事あり　建仁元年正月十五日、御所心經會、導師尊曉阿闍梨、左金吾出御如例、事訖導師給御馬御衣等、源右近將監親廣、江左近將監能廣等、取御布施、第三世定曉は、三位法橋と號す、平大納言時忠の一門なりしと云ふ、圓曉の入室にて公胤僧正灌頂の弟子なり　【社務職次第】按するに定曉初千南坊と號す、【東鑑】開山なり、建永元年五月補任し同書七月拜社あり　曰、七月三日、三位法橋定曉、補鶴岡別當、今日始遂神拜、其後參御所賀申之、　建暦元年九月、公曉

賴家の男を伴て上洛す、是公曉が登壇受戒の爲なり　【東鑑】其文下に註す、二年三月、實朝當國三崎の別館に遊ぶ時、定曉兒童を具し來て舞樂の興を催す　三月九日、將軍家渡御三浦三崎御所云々、鶴岡別當當船中有舞樂興等、參儲於　建保元年正月、實朝入來あり　正月四日將軍家、渡御若宮別當雪下本坊、秉燭之程令遲御給、五月和田義盛の亂に、政子及實賴の夫人、當坊に巡る　五月二日、尼御臺所并御臺所等、去營中出北御門、渡御鶴岡別當坊、四年八月、社地に北斗堂を建立し、供養を遂ぐ　八月十九日、鶴岳宮之傍、別當定曉僧都、建立北斗堂、今日遂供養、　五年五月十一日卒す、在職中導師を勤めし事、所見あり　承元元年正月九日、將軍家御臺所御參鶴岡、於上宮有法華經供養、導師別當法橋定曉、建保四年十月廿九日、將軍家爲御願、於鶴岡北斗堂有一切經供養、導師三位僧都定曉、按ずるに、實朝當宮別當に歌詠を贈りし事、【金槐集】に見えたり　曰、鶴岡別當僧都もとに雪の降し朝、よみてつかはす歌、鶴岡あふぎて見れば峯の松、梢遙に雪ぞ積れる、八幡山木高き松にゐる　其年月は所見なけれたつの、羽子白妙に深雪降らし、ど實朝の年齡を以て推せば、定曉在職の時なるべし、第四世公曉は將軍賴家の子にて　【社務職次第】に、三男と載す、按ずるに、大系圖、二は、二、小字善哉以上　【東鑑】左衛門法橋惡別當と號す　【社務職次第】大男とす、小字善哉　【東鑑】系圖には惡禪師と記す　元久二年十二月、尊曉の室に入る　【東鑑】十二月二日

故左金吾將軍若公、(號善哉公)依尼御臺所御計、鶴岡別當宰相阿闍梨尊曉門弟也、西苑渡御彼本坊、侍五人扈從、建永元年六月夫人政子の亭にて着袴の儀あり　六月十六日、左金吾將軍若君、(善哉公)自若宮別當坊、渡御于尼御臺所御亭、有御着袴之儀、將軍家入御彼御方、相州御息等被候陪膳、十月實朝の猶子となる　十月廿日、左金吾將軍家、御息若君、(善哉公)依尼御臺所之仰、爲將軍家御猶子、始入御營中、御乳母夫、三浦平六兵衛尉義村、献御賜物等、建暦元年九月、落飾して公曉と號す　九月十五日、金吾將軍若公、(善哉公)於定曉僧都室落飾給、法名公曉、按ずるに、【東鑑】元久二年の條に據れば、尊曉の門に入、師資の約をなせし如く見ゆれど、建永元年袴着等の事ありて、今年定曉の室にて落飾せし由を記すれば、全く定曉の弟子となりしなり、既に【社務職次第】に、定曉の弟子と記し、又【東鑑】承久元年正月の條には定曉受法の繼で受戒の爲上洛し、園城寺明王院公胤の弟子と見ゆ、廿二日、禪師公、(公曉)爲登壇受戒、相伴定曉僧都、令上洛給、自將軍家、被差遣扈從侍五人門弟となる　是依爲御猶子也、建保五年六月、下向して別當職に補せらる　六月廿日、阿闍梨公曉、自園城寺令下着給、依尼御臺所仰、可被補鶴岡別當闕云々、此一兩年、爲明王院僧正公胤門弟、爲學道所被住寺也、【社務職次第】曰年十八、十月神拜を遂ぐ　【東鑑】曰、十月十一日阿闍梨公曉、補鶴岡別當職之後、始有神拜、又宿願と稱し、上宮西の壇所に一千日の間、參籠を企つ　又依宿願、今日以後一千日可令參籠宮寺給云々【社務職次第】曰、自今夜有宿願子細、上宮四壇所千日可着參籠云々、其間太神宮以下、諸社に奉幣の使を立る由、聞えたり　【東鑑】曰、六年十二月五日、鶴岡別當參籠宮寺、更不退出、被致數箇祈請、都以無除髮之儀人怪之、又白白河左衛門尉義典、爲奉幣于太神宮令進發其外諸社被立使節之由、今日披露于御所中、承久元年正月實朝右大臣の拜賀として參宮あり、退去の時、公曉窺來て是を殺す　正月廿七日、將軍家右大臣爲拜賀、御參鶴岡八幡宮云々、及夜陰神拜事終、漸令退出御之處、當宮別當阿闍梨公曉、窺來依て諸將別當坊を襲ひ、僧于石階之際、取劔奉侵丞相、侶と戰ふ　其後隨兵等、雖馳駕于宮中、武田五郎信光進先登無所警讎敵、或人云、於上宮之砌、別當公曉討父敵之由被名謂云々、就之各襲到于件雪下本坊、彼門弟惡僧等、籠于其內相戰處、長尾新六定景・子息太郎景茂・同次郎胤景等、諍先登、勇士之赴戰場法、以爲美談、遂惡僧敗北、阿闍梨不坐此所給、軍兵空退散、諸人惘然之外無他、公曉は後見の僧が宅に至り、使をして三浦義村に合力の事を示さしむ　爰阿闍梨、持彼御首、被向于後見備中阿闍梨之雪下北谷宅、羞膳間猶不放手於御首云々、被遣使者彌源太兵衛尉(阿闍梨乳母子)於義村、今有將軍之闕、吾專當東關之長、早可廻計議之由被示合、是義村息男駒若丸、依落涙數行、更不及言語、小選先可有光臨于蓬屋、且可献御迎列門弟云、特其好之故歟、義村聞此事、不忘先君恩化之間、兵士之由申之、義村此事を、直に北條義時に告げ、其下知を得て長尾新六定景をして、是を誅せしむ　使者退去之後、發使者件趣告於右京兆云々、無左右可奉誅阿闍梨之由、下知給之間、招聚一族等、凝評定、阿闍梨者太足武臭、非直人也輙不可謀之、頗爲難儀由、各相議之處、義村令撰勇敢之器、差長尾新六定景、於討手、定景遂(雪下合戰後、向義村宅)不能辭退起坐着黑皮威甲、相具雜賀次郎(西國住人、强力者也)以下郎從五人趣于阿闍梨在所備中阿闍梨宅之刻、阿闍梨者義村使遲引之間、登鶴岡後面之峯、擬至于義村宅、仍與定景相逢途中、雜賀次郎忽懷阿闍梨、互誅雌雄處、定景取太刀梟阿闍梨(着素絹衣腹卷之上)首是金吾將軍御息、母賀茂六郎重長、爲朝孫女也、公胤僧正入室、貞曉僧都受法弟子也、定景持彼首歸畢、義村持參京兆御亭、又今夜中可糺阿闍梨群黨之旨、自二位家被仰下、信濃國住人、中野太郎助能、生虜少輔阿闍梨勝圓、具參右京兆御亭、是爲彼受法師也、【社務職次第】公曉時に年二曰、同意供僧・良祐・類信・良弁三人被改替、十なり　【社務職次第】第五世慶幸は三位僧都と號す　【東鑑】【社務職次第】永福寺別當、實慶の弟子なり　【社務職次第】承久元年八月、補任せられ　【東鑑】○按ずるに、社務記錄には、三月一日輔任と載す、二年正月卒す　曰、【東鑑】正月十六日辰尅、鶴岡別當三位僧都慶幸入滅、第六世定豪は、去年八月廿一日補別當世號之一年別當、辨法印と號す、民部少輔源延俊の子にて兼豪入室灌頂の弟子なり　【東鑑】勝長壽院の別當職たりしが、承久二年正月補任し　正月廿一日、辨法印定豪、元勝繼で神拜あり　廿九日、長壽院別當、補鶴岡別當職、後、始神拜于鶴岡、當職の中、導師及祈禱を命ぜられし事あり　承久二年六月十二日、依去年彗星、可有祈禱否事、於關東不出見上者、不可及沙汰歟由、司天瞿雖申之、就左府命如入道前大膳大夫有其定、今日於鶴岡一日中、轉讀三部大般若經、啓白導師別當法印定豪、三年五月廿日、可抽世上無爲懇祈之旨、示付莊嚴房律師并鶴岡別當法印定豪等、廿七日重有祈禱如意寺法印圓意、辨法印定豪等奉仕之、各遣供料三年閏十月、熊野三山檢校職に補せらる　閏十月一日、辨法印定豪、以刑部僧正長賢跡、補熊野三山檢校職、依祈禱賞、關東擧申故也、而自去比輕服蟄居、日數馳過之後、今日謂右京兆賀此事、按ずるに、此後も尙鎌倉に在て、導師加持等を勤し事、【東鑑】に多く所見あれど、爰に省けり、曆仁元年九月廿四日卒す、第七世定雅　本名教雅大藏卿と號す、參議藤原親雅の男にて、定豪入室灌頂の弟子なり　【社務職次第】承久三年九月補任す　【東鑑】曰、九月廿九日、大藏僧都定雅、改教雅、受師範定豪法印之讓、補鶴岡八幡宮寺別當職、今寛喜元年六月、職を褫はる　六月廿五日、左大臣法印定親、日遂神拜、補鶴岡別當職、是師匠定豪僧正、悔還定雅讓之、【社務職次第】曰、依供僧等訴訟、本主定豪悔還社務職云々、在職中導師に撰ばれ、或は護摩を修せし事、所見あり　貞應二年七月廿五日、爲奥州御願、於若宮廻廊、一日百部法華經、被書寫供養、導師當宮別當也、【東鑑】脫漏曰、嘉祿二年八月七日、天變地妖御祈被行之、一字金輪護摩、若宮別當僧正、【東鑑】曰、安貞元年四月廿九日、仍御不例之事、御祈等被始行云々、北斗護摩、(若宮別當僧都)十一月十五日、天變地妖相續、并赤斑瘡流布之間、今日御祈等被行之、馬頭護摩若宮別當、第八世定親は左大臣法印と號す、定豪入室灌頂の弟子にて　【東鑑】土御門內大臣通親の子なり　【社務職次第】寛喜元年六月補任す　【東鑑】其文前に註す、二年二月、幕府に至り、盃酒を献じ

兒童をして舞曲せしむ　二月六日、鶴岡別當法院、參御所奉盃酒、相州參給、駿河前司以下數輩侯坐、爰上綱具參兒童、童中有藝能拔群之者、依仰數度翻廻雪袖、滿坐催其興、將軍家又御感之餘令問其父祖給、法印申云承久兵亂之時、不圖被召加官軍之、勝木七郎則宗子也、被收公所領之間、則宗妻恩從、悉以離散、共身已立山林云々、按ずるに、八日則宗、寶治元年六月、三浦若狹前司泰村が本領を返し下さる、事に座して閉居し　六月十八日、鶴岡別當法印定親籠居、依若狹前司泰村緣坐也、按ずるに、泰村の妻は定親の妹なり、本月五日泰村誅せらる、七月上洛せり　【社務職次第】曰、七月上洛、同宿供僧四人、弁所職上洛、道範・良舞・文永二年七月卒す　【東鑑】曰、七月廿五日、法印定親入圖性・瑱親是也、滅【社務職次第】曰、於京都入滅、在職中修法等の事、多く所見あり　【東鑑】曰、寛喜元年九月十八日、將軍依有御夢想告、被始行御修法、若宮別當法印定親等奉仕之、三年四月十一日、天變御祈、御修法始行之云々、金剛夜叉、若宮別當嘉禎元年二月十五日、於御所南面、被行涅槃經論義、僧衆八人云々、定親僧都、六月廿九日、明王院供養、職衆廿二日、大納言僧都定親、十二月廿二日、被行御祈等云々、金輪內大臣僧都定親、按ずるに、賴經不例に依てなり、仁治二年六月九日、炎旱涉旬之間、鶴岡別當僧都定親、承仰於江島修祈兩法、寛元二年六月四日、炎旱依涉旬、被修十壇水天供云々、定親僧衆の一にあり、九月十五日、後鳥羽院御追福、摺寫法華經、於御持佛堂、被奉讀始之、定親法師奉仕之、三年十二月廿四日、明年正朔日蝕事、有其沙汰、被始御祈等云々、將軍家御祈、北斗護摩、鶴岡別當法務定親、第九世隆辨は、大納言法印如意寺、或は聖福寺と號す、四條大納言隆房の子にて、圓意灌頂の弟子なり　【社務職次第】初供僧たり　【東鑑】寶治元年六月補任し　六月廿七日以大納言法印隆辨、被補鶴岡八幡宮別當職、即被送遣彼御教書於件宿坊、平左衞門尉盛時爲御使、七月別當坊に移住す　七月四日、入夜大納言法印隆辨、移住于鶴岡別當坊、當職事再往雖辭申、重被仰下之間如此、纒で神拜を遂ぐ　十六日、大納言法印、補鶴岡別當職之後、今日始有拜賀、二年九月、蹴鞠の會を催す　九月廿六日、於鶴岡別當法印雪下坊、有鞠會、上鞠無王、山牒子云々、上足落中、十月將軍賴嗣、入來ありて又鞠伎あり　十月六日、將軍家俄入御于鶴岡別當法印雪下坊、被用女房興云々、難波少將追參上、有御鞠會、秉燭之程還御取松明、閏十二月八幡の影像を造立して、當坊の持佛堂に安置せらる　後十二月十日、令造畢大菩薩御影像奉入于宮寺別當坊持佛堂、建長二年二月園城寺再興の事を建議し　二月廿三日、鶴岡別當法印隆辨申、可興隆園城寺由之事、爲清左衞門尉奉行、今日有其沙汰、當寺事關東代々御歸依異他、殊有御助成　九月上洛せり、是園城寺興隆及龍花會等の事に依てなり　九月四日、鶴岡別當法印隆辨上洛、園城寺興隆、并執行龍花會、十二月下向す　十二月五日、相州被遣飛脚於京都、是室家懷孕着帶加持事、可被用若宮別當法印隆辨之處、住寺之間、依被招請也、秋田城介遣使者云々、此事者五月之比、其氣分御之由、雖有女房之說不然來八月可爲必定之旨、法印被申之、果而如指掌、十三日相州室被着姙帶、鶴岡別當法印隆辨加持之、法印去九月以後、住持之處、依此請應所被遣之飛脚、相逢于萱津驛之間、競寸陰今夕走着云々、又被始行御祈等、藥師護摩、秋田城介義景雜掌、如意輪護摩雜掌、奥州、北斗供雜掌相州、以上三壇、法印三人兼修之　三年五月北條時賴の室男子平產の事により懇祈の驗ありしを以て能登國諸橋保を賞賜す　五月十五日、今朝相州以安東五郎太郎爲御使、被遣御書於若宮別當法印隆辨儛、女房產之事、日來可爲今日之由雖被仰、于今無其氣分之間、御存知之旨頗不審云々、獻返報申、今日酉尅可爲必定、不可有御不審、申尅漸御氣分出現云々、酉終尅法印隆弁、參加而奉加持之、則若宮誕生云々、抑此誕生祈禱之事、對相州若宮別當法印、不等閑被示付之、仍於鶴岡八幡宮寶前、從去年正朔、碎丹誠肝膽、夢告有之、同八月令姙可賜之由、被申之上今年二月、侍伊豆國三島社壇而祈禱之間、同十二日寅尅、夢告白髮老翁法印曰、祈念所之懷妊、來五月十五日酉尅、可男子平產也云々、果如旨、奇特可謂歟、廿七日募御祈之賞、以能登國諸橋保、若宮別當法印被避、工藤三郎左衞門尉光泰爲御使相州御書云、今度男子平產、併所致法驗也、就中兼日之仰、一事無相違、不言語之及所云々、按　十一月八幡の御影を坊中ずるに、諸橋は鳳至郡の屬、に勸請す　十一月十五日、以大菩薩之御影、鶴岡之于別當坊、奉入勸請、按ずるに寶治二年閏十二月の條にも、此事見えたり、四年八月宗尊親王不豫の時祈禱の靈驗あり、九月其賞として濃州光瀧鄉を宛行はる、御教書を賜ひ且僧正に補せらるべき由命あり　八月六日、今日又依可有御方違、供奉人々參進云々、欲有御出之處、御惱之間延引、此御不豫事、自去月上旬比、時々令發給、於今者不被聞食御膳、衆人驚騷歎息之外無他事、仍今日御祈療事、於御所及評議云々、召八幡別當法印隆辨於廂御所、城介傳群議之趣於法印之、此君仙洞御鍾愛之一宮也、東關諸人懇望不等閑之間、爲三位中將殿御替御下向、非武家眉目乎、而御惱涉日之間、顯密御祈雖被盡其數、祈療失術、旬日空遷、於諸壇御祈者、今朝皆所被結願也、御入營之初、貴僧被致無爲御禱、今度安全事同可被凝一身之懇丹之旨議定訖、者法印申領狀、七日法印隆辨、於御所中、自初夜始行御不豫、安寧御祈千手法、療腹病、信讀大般若經、廿二日法印隆辨、於祈禱道場、一寢之間、感得靈夢之由、相州被言上于御所小童二人（各着唐裝束、其形如獅子）面赤、衣青、自御所南面唐壇退、將軍又有御夢想、童二人奉追御所、而件兩童聞轉經之聲、忽逃去之由、廿四日御惱事、溫氣悉散、御心神復本太快然、九月七日、御惱御平減之後、有御沐浴之儀云々若宮別當法印、爲加持參候、事終退去、其後有評定、被行御祈之賞、法印隆辨拜領美濃國光瀧鄉、此上可被補僧正云々、御教書云今度御惱事、當祈修中御平癒之條、法驗嚴重之由殊所感思食也、仍被進一村、尤可有御自愛者也、十一月權僧正の除書至る日、去月廿三日、僧事除書到來、法印隆辨補權僧正、三品親王御祈賞之由、有尻付、　五年十月如意寺再建の爲上洛し　十月二日、若宮別當僧正隆辨上洛、爲如意寺興隆也、十二月下着す　十二月廿八日、若宮別當僧正、自京都下着、去十月、爲勸請如意寺鎭守諸社上洛、　六年二月京六波羅の大慈院を附與せらるべきの議あり　二月廿日評定若宮別當僧正、給六波羅大慈院四月當國大庭鄉聖福寺鎭守社を創建す　四月十八日、聖福寺鎭守諸神、神殿上棟云々、是惣關東長久、別爲相州兩賢息々災延命也、仍以彼兄弟兩人之名字、被模寺號云々、去十二日有事始云々、相模國大庭御厨之內、所卜其地也、若宮別當僧正大勸進、按ずるに、大庭は高座郡の屬、寺跡今詳ならず、此君仙洞御鍾愛之一宮

文永二年三月御息所神殿參籠の時饌侍宜き由を奏せられ物を賜ふ三月十三日、御息所御參籠之間御局以下事、致丁寧沙汰之由、召別當僧正有御感、其上賜南庭三砂金十兩銀劍等、縫殿頭師連傳之、十月十九日於御所有連歌御會、若宮別當僧正、相具百種懸物參上、凡日來連々應召、十一月大僧正に轉ず十一月十九日、去八日僧事聞書到着、若宮別當僧正、轉大僧正、是依御祈賞也、以其除書、自御所被遣宮寺、即被相副一首御詠、鎌田次郎左衞門尉行俊爲御使、三年三月和歌の會に依て登營す三月三十日、於御所和歌御會云々、若宮大僧等參候、僧正被獻風流一脚、正四年十一月園城寺長吏に補せらる、當職の中加持祈禱をなし或は導師に撰ばれし事【東鑑】に所見多し寶治二年五月二日、鶴岡別當法印、爲左親衞御祈、去月八日參諏訪社、今夕歸參、建長三年正月八日、相州金銅藥師如來像、八寸被令鑄御產平安之御祈請之爲也、則被遂供養、鶴岡別當法印、爲導師、十七日、於相州御第、而放光佛像被供養、導師鶴岡別當法印、三月九日、相州於御第、被供養法華經形木、鶴岡別當法印爲導師、八月廿四日、將軍家御濱出、供奉人不知其數、先御筥懸也、鶴岡之別當法師隆辨、於御棧敷伺候之間、令加持御矢、四年正月九日、於相州御第、室家御懷姙爲祈禱、被始行藥師護摩、若宮法印奉仕之、六月十九日、祈雨事被仰鶴岡別當法印隆辨、淸左衞門尉滿定、帶其御敎書、爲御使行向彼雪下本坊、仍申領狀、及申尅於八幡宮東廊、始行北斗法、晚天聊陰、廿三日自半更甚雨、凡去十九日、若宮別當奉祈雨法之處、自同廿日、至昨日連日降雨之間、申尅被送御馬御劍、武藤左衞門尉爲御使、七月十日、自初夜甚雨如沃、近國旱魃之間、爲秋田城介奉行、重可抽丹祈之旨、被仰鶴岡別當法印隆辨、即申領狀、於當宮八幡寶前、修諸神供、有管絃等、又於瑞籬之內、手自披講最勝王經、其後無程降雨、四年十月三日、相州室家令齋姙帶給、加持鶴岡別當法印、安東左衞門尉光成爲御使、持向御帶於雪下本坊、十一月九日、於新造御所、被行鎭宅法、鶴岡別當新僧正隆辨奉仕之、五年正月廿八日、相州室家令平產男子給、加持若宮別當僧正隆辨、二月三日、相州新誕、若公名字事、若宮僧正定申之禍壽四月廿六日、相州日來被造立、七佛藥師像、今日有供養之儀、兩息御祈請云々、若宮僧正隆辨爲導師、九月十四日、坂介入道百箇日佛事、於廿繩宅行、導師若宮僧正隆辨、六年三月七日、相州撰能書、廿日來被書寫大般若經、今日於鶴岡宮寺、被遂供養、導師別當僧正、六月廿三日、於鶴岡八幡宮、被行最勝王經講、壇主別當法印隆辨、按ずるに法印と記するは誤なり、十月六日、相州室平產姬君、加持若宮僧正隆辨、康元元年六月七日、今年大雨洪水殆越例年、寒氣又不時暑不信、其物定不長歟、依之仰鶴岡別當僧正隆辨、左大臣法印嚴惠等、所被行天下泰平御祈禱也、七月六日、爲前武州禪室後室禪尼、被供養一切經、導師若宮別當僧正隆辨、八月廿六日御惱增氣之間、若宮別當僧正隆辨、修不動護摩、按ずるに前目條に、將軍家御惱云々とあり、九月一日、將軍家御惱、赤班瘡也、若宮別當僧正、參籠宮寺、致御祈禱、【社務職次第】正嘉元年條曰、三十八、當社金泥大般若經供養、導師社務、【東鑑】正嘉元年七月五日條曰、廿雨下、自去二日、若宮別當僧正、被修雨法、八日以和泉前司行方爲御使、被遣御馬御劍等於若宮別當坊、奉仕祈雨法之後、自五日雨下、文應元年四月廿二日、將軍家御惱之間、及戌刻於御南庭、被修千手法、次始行不斷千手陀羅尼、若宮別當僧正、率八口伴僧奉仕之、九月五日、於御所被修北斗法七箇日、若宮別當僧正奉仕之、十二月廿七日、相州（政村）被頓寫一日經、是息女惱邪氣、依比企判官能員女子靈託、爲賞彼苦患也、入夜有供養之儀、請若宮別當僧正、爲唱導說法、最中、件姬君惱亂、出舌舐脣、動身延足、偏似蛇身之令出現、爲聽聞靈氣來臨之由、僧正令加持之後、惘然而止言、如眠而復本、弘長元年二月廿日、於鶴岡八幡宮、被行仁王會、講師宮寺別當僧正隆辨、六月十六日、奥州禪門違例事、去朔日以後、每日晚景發動如瘧病、仍自同十一日、屈請若宮僧正、令加持之處、來廿二日可及減氣之由、今夜僧正被申之廿二日奥州禪門病惱、今夕平癒、心神復平、廿五日、奥州禪門、被遣馬并南庭王劍等於若宮僧正坊、又室家、生衣二、南庭三、絹三十疋、武州、劍、南庭二等遣之、依所勞平減也、七月三日、於御所被修五尊合行法、若宮別當僧正奉仕之、伴僧八口、是聊依有御惱也、十日五尊御修法鎭願、三年十二月廿九日六波羅大夫將監室着姙帶、若宮僧正加持之、文永二年三月九日、於鶴岡若宮寶前、被行管絃講、別當僧正讀式、閏四月廿五日依殊御願、於御所被始行五大尊合行法、若宮別當僧正奉仕之率伴僧十口、五月三日日中、五大尊合行法被結願、今日爲故武州禪門忌景、於泉谷新造宮佛事、導師若宮僧正隆辨、按ずるに、泉谷は扇谷村の屬、六月三日、故秋田城介義景、十三年之佛事也、於無量壽院、自朔日至今日、或十種供養、或一切經供養也、而今迎正日、供養多寶塔一基、導師若宮別當僧正隆辨、三年正月十二日、變慧御祈、金剛童子法、大僧正隆辨、若宮大僧正、率伴僧八口奉仕之、廿六日御惱事、當于御修法結願之日、可有御減氣之由、大阿闍梨申入之、六月一日、依爲鬼宿曜御修法結願御惱聊御平驗、阿闍梨兼日申狀符合之由及口遊、弘安六年八月十五日卒す、第十世賴助は亮法印、又佐々目僧正と號す、北條經時の子にて守海入室灌頂の弟子なり、弘安六年八月廿四日補任す以上【社務職次第】八年權僧正に任じ十年二月正僧正に轉じ、正應三年大僧正に補せらる社務記錄永仁四年二月廿八日卒す、在職中弘安十年十一月二階堂信濃入道行一が、經依養の導師を勤む【社務職次第】日、十一月廿一日、二階堂信濃入道行一、有一切經供養事、導師社務請僧百口、第十一世政助も亮法印と號す、北條宗政の子賴助入室灌頂の弟子なり、永仁四年二月廿七日補任し嘉元元年六月二日卒す以上【社務職次第】第十二世道瑜は二條殿又如意寺と號す、普光園院關白良實の息男にして隆辨入室御室戶道慶灌頂の弟子なり、嘉元元年六月十八日補任す【社務職次第】○【回國雜記】日、抑當社別當祖師隆辨僧正、經歷年久し、其階弟道瑜准后、號をば大如意寺といひ、兩代彼職に補侍りき云々、延慶二年六月十八日讓職、七月二日卒す【社務職次第】第十三世道珍は堀川僧正と號し又南瀧院と云ふ、鷹司關白基忠の息男にて南瀧院靜珍入室灌頂の弟子、延慶二年六月十八日補任し正和二年八月十二日卒す【社務職次第】第十四世房海は刑部卿僧正と號す從二位宗敎の子房源入室圓兼灌頂の弟子なり、正和二年九月一日補任し三年八月大僧正に任ず、五年八月三日卒す【社務職次第】第十五世信忠は勸

修寺大僧正と號す、九條攝政忠家の三男勸修寺勝信入室灌頂の弟子なり、正和五年八月十三日補任し元亨二年十月十九日卒す【社務職次第】按ずるに、常樂記に卒日を十八日とす、第十六世顯辨は月輪院と號す、北條越後守顯時の子隆辨入室實相院靜譽灌頂の弟子なり、元亨二年十月廿八日補任し元德三年四月廿三日卒す【社務職次第】第十七世有助は佐々目大僧正と號す、北條兼時の子社務記錄には、伊具八郎兼義の子と記す賴助入室灌頂の弟子にて元德三年四月廿六日補任し、元弘三年五月廿二日北條高時と同く自盡す五月廿二日、世上大亂之間、於入道相模守高時亭自害了、五十七、兒三人、善玉丸・寶珠丸・光玉丸、田世一人、靑侍十餘人自殺、以上【社務職次第】第十八世覺助は後嵯峨帝第三の皇子【皇胤紹運圖】には、第十の皇子とす、二品親王聖護院宮なり、元弘三年九月四日補任あり、此時は下向なくして僧覺伊を以て代官とす、十二月十一日、下着あり在職四年なり【社務職次第】第十九世賴仲は寶蓮院と號す、仁木次郎師義の子賴助入室地藏院親玄灌頂の弟子なり、延元二年正月五日補任以上職次第【社務職次第】文和四年十二月二日卒す【社務職次第】在職中祈禱の事社藏文書に見えたり曰、轉任并天下靜謐事承畢彌可被致祈禱精誠之狀如件、曆應元年十二月廿三日若宮別當僧正御房、直義の華押あり、第二十世弘賢は左衛門督法印西南院と號す、加子七郎の子賴仲入室灌頂の弟子なり文和四年四月補任し康安二年五月權僧正應安三年正に進む【社務職次第】永德元年二月將軍義滿松岡八幡宮社務職及下野國鷄足寺別當職に補任す社藏文書曰、松岡八幡宮社務職、下野國足利庄、鷄足寺別當職等事、任先例可被執務之狀如件、永德元年六月五日、若宮別當僧正御房義滿の華押あり、至德四年六月大僧正に轉ず【社務職次第】在職中所々の別當職を兼管せり關東護持奉行、走湯山別當月輪寺、松岡八幡宮・大門寺・勝無量寺・鍛阿寺・赤御堂・鷄足寺・大岩寺・越後國國付寺・安房國淸澄寺・箱根山平泉寺・雪下新宮・熊野堂・柳營六天宮、此數箇所別當職兼之、應永五年六月社務を尊賢に讓與し莊嚴院文書曰、鶴岡八幡宮別當職事、右職者故大僧正、依護持勤勞、去建武年中、令拜補訖、而弘賢去貞和四年五月四日、任故大僧正讓狀之旨、去文和四年卯月十一日被下安堵御敎書畢、其後去永德元年六月五日、可□門華相續職由、被下御敎書訖而過懸齡、句鳩杖暮年間、以當職所讓與寶幢院大宮僧都尊賢也、任彼讓狀旨、可被申賜安堵也、仍讓狀如件、應永五年戊寅六月十四日、前大僧正弘賢華押相承院文書曰、讓與松岡八幡宮當職事、中納言禪師賢圓、右職者爲御祈禱賞令拜補之間、相副御下文以下證文等、所令讓與中納言禪師賢圓□也、付法流令相續知行之、不可傳他流可下賜未安堵、仍爲後證、讓狀之如件　應永十七年五月二日、前大僧正弘賢華押此月四日卒せり【社務職次第】第二十一世尊賢は全仁親王の子寶幢院宮又常盤中宮と號す大覺寺寶尊親王入室灌頂の弟子なり、明德元年五月下向あり【社務職次第】應永五年六月弘賢の讓を請　莊嚴院文書、十七年六月十三日補任、應永廿三年六月四日寂【社務職次第】第廿二世快尊は寶性院と號す、上杉右衞門佐氏憲入道禪秀の子、弘賢の受法寶幢院宮灌頂の弟子なり、應永廿三年八月補任し廿四年正月十日足利滿隆・同持仲・禪秀以下別當坊に籠り自害の時小袋坂にて卒す年廿五【社務職次第】鎌倉大草紙曰、正月十日禪秀子息、寶性院快尊法印の雪の下御坊に籠り、滿隆御所、同持仲、右衞門佐禪秀、俗名氏憲、子息伊豫守憲方、其弟五郎憲春、寶性院快尊僧都、武藏守永代、兵庫助氏春を初として悉自害して失にけり、第廿三世尊運は一位法眼と號す、上杉式部大輔朝廣の子、松浦中納言豐光の猶子にて寶幢院宮尊賢入室受法の弟子なり、應永廿四年正月廿日補任し三十二年二月權大僧都、正長三年權僧正に補す以上【社務職次第】在職中所々別當職を兼たり同書曰、走湯山別當、并松岡八幡宮・六天宮・柳營・西明寺等別當永享三年八月所職を尊仲に讓與し莊嚴院文書曰門跡一具、諸職注文、鶴岡八幡宮寺事、讓狀在別紙走湯山事、松岡八幡宮事、雪下新宮事、足利庄鍛阿寺、并赤御堂事、付八幡、大門寺、付上稻荷事、武州小萱寺事、以上永享三年八月廿四日、權僧正尊運、廿六日卒す【社務職次第】第廿四世尊仲は中納言法印と號す、一色五郎入道道慶の子弘賢人室尊賢灌頂の弟子なり、永享三年十二月十九日補任し【社務職次第】十一年十一月誅さる、是管領持氏の與黨たるに依てなり【東亂記】曰、十一月若宮社務尊仲も、被生捕けるを、是は張本の讒人なれば、尋仰らるゝ事もあるべしとて、京都へ上せけるが、終に被誅とかや、【鎌倉九代後記】に海道邊にて、生捕ると記す、第廿五世弘尊は神守院と號す、管領持氏の子【社務職次第】補任の年代詳ならず　莊嚴院文書曰、鶴岡八幡宮別當職事、如元可有執務候也、四月二日、神守院、某華押、第廿六世を定尊と云ふ【社務職次第】に載る所こゝに止りたれば此後の世代詳ならず、按ずるに寶德二年十月管領成氏の文書社藏享德年間の年中行事【鎌倉年中行事】曰正月八日、若宮社務御加持に被參、其時は御加持申て、軈てまかり歸らる、御酒無之、出仕は別て有之、其時御馬御劔進上、又拜領、御盃の御式題有之、御門送御緣にて御劔御馬、以御使被遣之、御使に太刀馬、又小袖等以使被饋、其使にも出太刀也、次自社家出世、被參大御門、神願を懸被申、正月十二日、勝長壽院の御門主樣、殿中〳〵御出、被開大御門云々、御門主同心性院、若宮社務出仕の時も、公方樣御直垂、御荷用之躰も直垂、御使にまかり出時も同前也、僧萬里が【梅花無盡藏】曰、關東雪下殿御扇贄、又號若宮殿、蓋靑蓮下之門迹也、若宮八幡社在雪下也、余未東遊以前、通記室需之、扇面有南陽菊水也、詩云、不知何品冠群英、文明倭菊猶傳雪下名、風送餘香入雨水、至今斟者悉長生、文明十一年二月俊朝の補任狀相承院藏等に據れば文明の頃迄は當職相續せしなり、其後の記載未所見なし、但文明後

は關東も次第に爭戰の區となりたれば、永正の頃より當職斷絶に及びしならん、○若宮御影堂跡　舊趾今詳ならず、蓋別當坊の域内にありしなり【社務職次第】に別當坊御影堂と記す其文下に見えたり　按ずるに【東鑑】に寶治二年閏十二月八幡の影像を別當坊の持佛堂に安ぜし事見え日、後十二月十日、令造畢大菩薩御影像奉入于宮寺別當坊持佛堂、又建長三年十一月の條に、御影を坊中に勸請すと載たれば十一月十五日、以大菩薩之御影、別に堂宇を造て安置せしは建長三年なるべし、正嘉二年正月の條に御影堂上棟の事を記せり、是は此月十七日、別當坊回祿に罹りし時共に烏有せしなり正月廿二日、若宮御影堂并雪下別當坊等上棟二月落成す二月八日、若宮御影、御正體遷御、弘安三年十一月本社炎上の時神躰を此堂に遷坐す【社務職次第】曰、十一月十四日、上下宮炎上、御正躰奉渡別當坊御影堂畢貞和四年六月堂宇新造あり社務記錄曰、六月十五日、於新造御影堂、恒例管絃講執行之、其日則奉入御影了、萬秋樂奏之、見聞之上下成群了、應永廿一年四月後小松上皇勅願寺とせられ、八正寺の號を賜へり【社務職次第】曰、社務御影堂、被成勅願寺、被號八正寺事、應永廿一年四月十三日、院宣在之、○八正寺院宣案、當寺爲御祈願所、殊可奉禱獨國家安寧聖祚無疆、者院宣如此悉之以狀、應永廿一年四月十三日、八正寺持僧中、參議御判、吉田宰相、十月供養の儀を行ふ八正寺供養事、應永廿一年十月十日、庭儀廿四年正萬茶羅供舞樂大阿闍梨社務、請僧廿口、月回祿に罹る正月十日別當坊、御影堂、對屋以下、悉燒失了此後廢せし年代詳ならず、○供僧廢院　往古二十五院中の坊舍次第に廢絶せしものを摘抄して爰に編錄す、△普賢院　淨國院の南隣にあり往古二十五院圖、下同、初永乘坊と號す、天文中は當院尙現存せり【快元記】五年八月廿八日、假殿遷宮出仕の條に、尊果普賢院讃頭と記す、廢せし年代詳ならず下皆同、△寶光院　正覺院の北隣にあり初玉泉坊と號す、△寶瓶院　寶光院の背にあり。初圓乘坊と號す、天正中は當院尙存せし事所見あり等覺院藏天正十七年三月の文書に、寶瓶院江就罷移云々と載す、△如是院　海光院の邊にあり初悉覺坊と號す、△紹隆院　如是院の北隣にあり、初永嚴坊と號す、△金乘院　增福院の邊にあり、初實圓坊と號す、△吉祥院　金乘院の北隣なり、初南藏坊と號す、△蓮華院　相承院の南隣にあり、初蓮華坊と號す、開基を勝圓と云ふ御殿司職次第安貞二年三月圓が給田、伊豆山の課役等を停止すべき旨、執權北條武藏守泰時同相模守時房下知す相承院文書曰、若宮供僧、少輔阿闍梨勝圓訴申、伊豆山林木引役事、重申狀遣之、如預所季基請文者、依地頭命、注出德田數許也、支配事不知子細云々、注加供僧給田之條、頗無其謂、而又地頭切

懸給田、押取賃之條、其新儀也、懼可返與賃馬也、雖自今以後、可停止如此課役之狀、依御執達如件、安貞二年三月九日、武藏守各華押、

尻三郎殿、

相模守各華押、

△朝宗院　最勝院の南隣にあり、初坐心坊と號す、住僧審範論衆讀師等に撰ばれし事、【東鑑】に見えたり嘉禎元年二月十五日、於御所南面、被行涅槃經論義、僧衆八人、審範已講、寛元二年五月廿九日、爲若君御前御祈、被修十壇炎魔天供云々、一壇辨僧都審範、建長六年六月三日、故城介入道願智、周關期云々、於相州御亭、被始行法華八講之衆審範、廿三日、於鶴岡八幡宮、被行最勝王經講云々、講師辨法印審範、弘長元年二月廿日、於鶴岡八幡宮、被行仁王會云々、讀師辨法印審範、(當者學頭)九月三日、辨法印審範、長病已危急、是依爲對審範、碩學、殊所被賞翫也、而今日申一尅、相州禪室爲最後御對面、入御彼雪下北谷宿坊云々、審範於持佛堂奉謂、顯密事理之法問、重々雖令問答給、及酉尅欲令歸給之刻、禪室重被仰云、最初行根之願、返々有憑云々、於宗門雖開大悟給、尙以鑽行攝之緣給、賢慮尤難量者歟、四日申尅、法印權大僧都審範入滅、年七十三、熱田大宮司散位季範曾孫法橋明季眞弟子、顯密長舜法眼門弟、最勝講講聽三會已講、密示道禪僧正受法、公緣僧正灌頂弟子、貞永元年、鶴岡八幡宮供僧、入夜女房帥局審範臨終正念之由、申相州禪室之處、爲哀傷之中御悅之由被感仰、

△大通院　朝宗院の南隣にあり、初花光坊と號し後明圓坊と改む、開基を尊念と云ふ執行次第住僧慈曉導師請僧に撰ばれし事あり【東鑑】曰、弘長元年二月廿日、於鶴岡八幡宮、被行仁王會云々、請僧鶴岡慈曉、文永二年三月十一日、於鶴岡上宮、有法華經供養、權少僧都慈曉導師、

△花園院　大通院の南隣にあり、初智覺坊と號す或は智光坊と記す、蓋傳寫の誤なり、天文中當院尙存せし事【快元記】に見えたり五年八月廿八日、假殿遷宮出仕の記に、花恩院尋惠と載す、

△慈恩院　蓮華院の南隣にあり、△如意院　慈恩院の南隣にあり、

新編相模國風土記稿卷之七十七終

新編相模國風土記稿卷之七十八

村里部　鎌倉郡卷之十

山之內庄　山之內村一

○山之內村（也末廼字知牟良）　江戸より行程十二里小坂郷に屬す、往古首藤刑部承義通莊園として此地に居住す、是より山內を家號とす、其男瀧口刑部承俊通父に繼ぎ、平治の亂義朝に從て討死す　按ずるに、【鎌倉志】には俊通始て山內に居宅す、故に山內を家號とす、云々と記して父子の事跡を訛れり　俊通が男瀧口刑部承經俊、治承四年賴朝の招に應ぜざりしかば十月此地の莊園を召放さる　【東鑑】曰、治承四年七月十日庚申、藤九郎盛長申云、從嚴令之趣先相模國內進奉之輩多之、而波多野右馬允義常、山內首藤、瀧口三郎經俊等者、曾以不應恩喚、剩吐條々過言、云々十月廿三日壬寅、瀧口三郎經俊、召放山內庄、被召預實平、此外石橋合戰餘黨、雖數輩及刑法之儀、十之一歟云々、【源平盛衰記】治承四年、賴朝廻文を以て軍勢催促の條に曰山內の須藤刑部承俊通が孫、瀧口俊綱が子に瀧口三郎利氏、同四郎利宗、兄弟二人に相觸たり、折節一所に、雙六打て居たり、烏帽子に手綱うたせて、筒手に取り、御使にも憚らず、弟の四郎に向て云けるは、是聞給へ、人の至て貧に成ぬれば、有ぬ心も付給ひけり、佐殿の當時の寸法を以て、平家の世を取んとし給はん事は、いさい富士の峯と、丈競べ猫の額の物を、鼠の窺ふ譬にや、身もなき人に同意せんと、え申さじ、恐れ怖しとぞ、嘲りける、按に利氏は、經俊と同人なり、又知家事兼道（傳記所見なし）と云者此地に住す、其第宅は正暦中の造立なりとぞ是年此第を大藏郷に移して館舍を造營あり　今此郷名を失す、按ずるに今の雪之下村の屬大藏村の舊名なるべし、【東鑑】曰、治承四年十月九日戊子、爲大庭平太景義奉行被始御亭作事、但依難致合期沙汰、暫點知家事兼道山內宅被移建立之、此屋正暦年中建立之後、未遇回祿之災、晴明朝臣、押鎭宅符之故也、十五日甲午、武衛始入御鎌倉御亭、此間爲景義奉行、所令修理也、猶委くは雪之下村の條合せ見るべし、　是年十二月賴朝の招に因て新田大炊助上西、鎌府に參りしかど入事を許されず、須臾此地に滯留あり　治承四年十二月廿二日庚子、新田大炊助入道上西、依召參上、而無左右不可入鎌倉中之旨、被仰遣之間、逗留山內邊、是招聚軍士等、引籠上野國寺尾舘之由風聞、仰藤九郎盛長、被召之訖、　文治四年所々の莊園地頭領家の事院宣あり、所置せらるゝ時當所は八條院の　【紹運要略】曰、八條院暲子、鳥羽院女御母、美福門院、二條院御母代、保元二年五月十一日、御出家廿一歳、應保元年、院號廿五歳、建暦元年六月廿六日失給、七十五歳、　所務として沙汰せらる、【東鑑】文治四年六月四日の條に曰、八條院領云々、相模國山內庄云々、以上件庄領、年貢或先々注進、或本文書紛失、平家時分、令致自由沙汰事も候や、又不知庄大小增進事も候き、子細庄家、皆存知歟、委搜可令計沙汰、益頭庄事も、彼邊同事と思食て被仰能保朝臣候き、時政地頭にて、他人沙汰不可入之樣に聞召しかば、言上不及沙汰、如此事只、可計沙汰之由、可被仰也、建久三年三月此地に於て百箇日の溫室を催し、往返の諸人土民等浴する事を許さる（建久三年三月廿日壬辰、於山內、有百箇日溫室、往返諸人、幷土民等可浴之由、被立札於路頭、是又爲法皇御追福也、）建仁二年十二月賴家鷹場として當所巡覽あり　十二月十九日の條に曰、將軍家爲覽鷹場、令出山內庄給云々、　建保四年五月實朝當所巡覽あり（建保四年五月廿四日丙子、將軍家令歷覽山內邊給、）不期間諸人追跡參云々、　元仁元年十二月疫癘流布するにより、鎌府四境の鬼氣祭を行はる、此地即北境たり（元仁元年十二月廿六日、此間疫癘流布、武州殊令驚給處被行四角四境鬼氣祭可對治之由、陰陽權助國道申云、）謂四境者、東、六浦、南、小壺、西、稻村、北、山內云々、　曆仁元年十二月北條左近大夫經時人々を俱して此地に狩す（曆仁元年十二月十二日癸丑、大雪降曙之後、北條左親衛、相具若狹守以下人々、逍遙山內邊、雉兎多獲之、）民戸八十七、東西十町餘、南北八町餘（東、雪之下村、西、豪村、南、扇谷村、北、大船村、）今御料所及び圓覺・淨智・東慶三寺の寺領たり、往還一條、村の中央を貫く（幅三間餘）

○高札場　村南路傍にあり　○小名　△尾頭ヶ谷（【鎌倉志】には、尾藤に作り、昔尾藤左近將監景綱此に居すとあり、【東鑑】によるに景綱は、北條泰時の家令にて、天福二年八月廿二日死すと云、又圓覺寺所藏の古文書に、尾藤を稱する人名、兩三個所見あり、又極樂寺村所藏、延文五年の文書にも、尾藤谷とあり、又圓覺寺塔頭、日佛庵所藏古文書二通、共に鼻頭に作る、）　△瓜ヶ谷

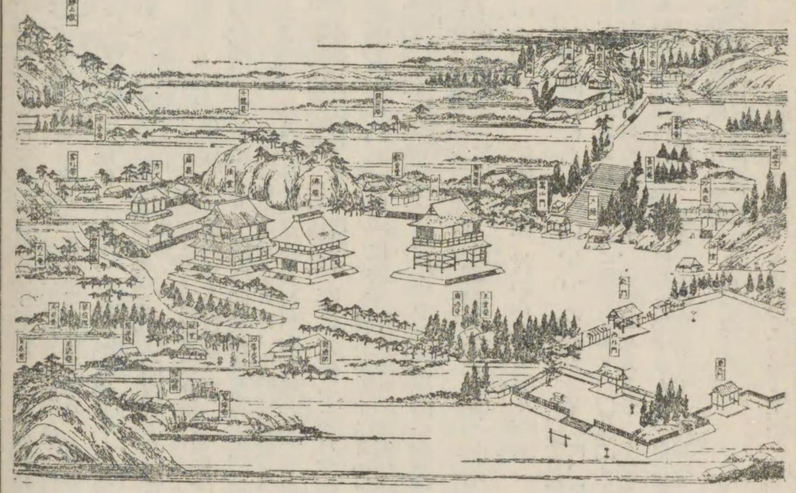
○川　東南の方、建長寺の境內より出て西方に流る（幅九尺）

○十王堂橋　往還に架す（長二間許）鎌倉十橋の一なり（【鎌倉志】に云、圓覺寺の前を西へ行ば、藥師堂あり、其前の橋を名づく藥師堂の前に、此頃迄十王堂在しが、今亡たり鎌倉十橋の一なりと記す、今の所在、志に云處と合す、）

○牛頭天王社　村の鎭守なり、例祭六月十四日、神主鈴木主馬持（雪之下村に在住す）　△末社　稻荷　○白山社　村民持下同、○稻荷社　○天王旅所　村西にあり、山崎天王の旅所なり、六月十四日此に到り當村の天王と同じく村內を巡る、

○建長寺　巨福山と號す、臨濟宗、鎌倉五山の第一たり、開山は道隆（【元亨釋書】曰、釋道隆宋國西蜀涪江人也、姓冉氏年十三薙髮於成都大慈寺、遊學講肆、弄而理峽棹入浙見範無準、沖癡絕簡北磵、諸大老、皆無所契、浙屆陽山、依無明性禪師、以淳祐六年、乘商舶着宰府、本朝寬元四年丙子也、乃入都場寓泉涌寺之來化院、又杖錫赴相陽、時了心、蹤龜谷山、隆掛錫於席下、副元帥平時賴、聞隆之來化、延居常樂寺軍務之暇、命駕問道、平師乃啓巨福之基趾、構大禪苑、請隆開山說法、東關學徒、奔湊佇聽居十三年、遷平安場之建仁、寬元上皇、聞隆道譽、召見宮中、經三歲、返建長、徒屬中有流言者因此爲甲州之行、甲之居、猶洛之數、又遷相、主龜谷山、六群之徒、謗吻未合、再成甲行、又遷壽福、弘安元年孟夏、歸于福山、秋七月示微疾、至二十四日書偈辭衆而寂、府奏乞諡賜大覺禪師、本朝禪師之號始于隆也、）開基は北條相模守時賴なり、抑時賴深く禪風を崇信し、僧辨圓（字圓爾と云字をもて世に稱せらる、）弘安三年十月

建長寺境内圖



十六日寂す、後諡を賜て聖一國師と云ふ、故に建長元年師をかたらひて當山に寺域を闢く【東福紀年錄】曰、建長元年己酉、平元帥時頼闢巨福山、剏建長寺、圓爾遣僧十員、行叢林禮【東鑑】建長五年、當寺供養の條曰、去建長三年十一月八日、有事始云々、五年十一月成功に至り、將軍家の祈願所として供養を遂ぐ、即導師は道隆なり建長五年十一月廿五日、建長寺供養也、已造畢之間、今展梵席、願文草、前大内記茂範朝臣、清書相州、導師宋朝僧、道隆禪師云云、【保暦間記】曰建長五年十一月廿五日、時頼相州巨福山に建長寺を造立して、將軍家の御願として遂供養畢、丈六の地藏應行を本尊とし左右に同き小像千體各惠心作と傳へ、又【大友興廢記】には、さゆうと云者の作なりと記せど、未詳ならず、を安ず【東鑑】曰、以丈六地藏菩薩、爲中尊、又安置同像千體、相州殊、令凝精誠給云々、　抑此地は古昔刑罪場にして地獄ヶ谷と字し、地藏の小堂今猶境内にあり、あり、故に舊に因て是を本尊とすと云當寺碑文曰、癸丑規模稍備、先是欲大殿立三尊、公曰、此地昔幽谷也、嘗爲刑場、誤犯國憲者、殞首於此多矣、庸知又非爲陰獄耶、先有地藏菩薩祠於此、亦有意也今毋他設、宜即以是爲本尊、於是爲其像而作丹崖翠嶽之狀以擬佉羅陀山、安處其中、復作小像千數、擁衛兩傍云々、　又本尊の頂事に同像一軀を收む、濟田地藏と稱す名義及び傳來の事、【鎌倉志】に見えたり、下地藏堂の條に詳載す、時に當時此地巨福呂と稱するをもて山號となし、

年號を取て寺に名づけ、若干の田地を附して資用に充つ當寺碑文曰、山以鄉名、寺以年號、請師爲開山第一祖乃悉常樂之產、於此復增置若干所、爲常住營業云々、正嘉二年三月前武藏守泰時が後室禪尼、先に卒して今年三周に當るに因、當寺にて一切經を供養す、隆導師たり【東鑑】曰、正嘉二年三月廿日、今日相當前武州禪室御後室、第三年遠忌、於建長寺、被供養一切經、導師道隆禪師也、相州禪室、相州、武州、下結緣人々、滿堂上、已弘安元年七月隆か歿後、住持職を闕が故に十二月相模守時宗、入宋の僧徒に書を投じて後住選擧の事を託す圓覺寺藏文書曰、時宗留意宗乘、積有年序、建營梵苑、安止緇流、但時宗每懷樹、有其根、水有其源、是以欲請宋朝名勝、助行此道、煩詮英二兄、莫憚鯨波險阻、誘引後傑禪伯、歸來本國、爲望而已、不宣、弘安元年戊寅十二月廿三日、時宗和南、是に因二年六月宋の詮藏主禪師、英典座禪師、時宗和南、

祖元佛光禪師と號す、事蹟は圓覺寺の條に載す、來朝し八月鎌府に入る、時宗師弟の禮を執り、延て當寺の現住たらしむ　圓覺寺藏文書曰、建長寺事、爲住持可被興行大法狀、依仰執達如件、弘安二年八月廿日、無學和尚、相模守華押、此文書即時宗が自筆と傳ふ、【元亨釋書】祖元傳曰、己卯之年吾建長虛席、副元帥平時宗具疏幣航海聘名宿明牧以元、充遐招、環溪授佛鑑法衣、五月、離太白、六月晦日、着太宰府、即弘安二年也、八月到相陽、平帥執弟子禮、邀入福山、待遇日渥、延慶元年十二月相模守貞時入道崇演が申請に因、勅して定額寺と

經親が奉書、圓覺寺に藏す、同せらるゝ旨前權中納言經親、院宣を傳へ寺と一紙なり、彼寺の條に引用す、併見べし即官符を下され勅額を賜ふ當寺碑文曰、寺之建自圓成越五十六載、平公孫名貞時、繼掌國事、後爲沙門、名崇演、奏賜勅額、定爲今額云々、按ずるに、此時の官符、蚤く失して、傳へざれども、大方圓覺寺に賜ふ所と同かるべし、併見て其旨趣を悟るべし、應安の始大覺・佛光兩禪師の門徒確執發り、當寺と圓覺寺と互に衆徒往來して開山忌の諷經を修ぜしも、此頃廢絕に及ばんとせしかば遂に公裁ありて、細川武藏守頼之和平の事を沙汰す圓覺寺藏文書に據る、細川頼之が公文二通あり圓覺寺の條に引用せり、委しき事は彼條併せ見べし然れども猶止ずして愈倍增し、六年五月既に當寺に於て大覺の門徒等黨を結び、放火の企ありしが蚤く發覺に及び、六月嚴密に糺明あるべき旨細川武藏守頼之奉はりて上杉兵部少輔能憲入道々誣の許に御教書を下し、事書一通を達す【花營三代記】應安六年の條曰、大覺禪師門徒等惡行事書一通遣之、此趣不日糺明張本、可有嚴密沙汰之狀、仍仰執達如件、應安六年六月十二日、上杉兵部少輔入道殿、武藏守、事書曰、大覺禪師門徒事、乍爲寺院止住之僧、違背官家檀方之命、去五月三八兩日、於建長寺、猥卒數百之徒黨、既及放火之結構云々惡行狼藉之至、綺絕常篇者乎、所詮急速糺明張本、可被注進名字也且糺落居之程、先於彼門徒者、云大小諸刹之住持、云都鄙五山之兩班、所被停止也、以此趣嚴密、相觸于寺家、宜有禁過之沙汰矣、　十月布施彈正大夫入道昌椿、奉はりて鎌倉五山住持職の補任は舊に因て京都

より沙汰せられ、其他は已後鎌府の進退たるべき旨及び住持兩班、改替の年紀等を定めらるゝ由、下知あり關東五山事、應安六十九布施彈正大夫入道奉行、於住持職者自京都被定下之條、不及子細、其外細々事、向後可爲關東御沙汰也、且規式條々、守暦應、康永、御事書、五山一同、不可有改動、寺家違犯之儀者、嚴密可有誡沙汰矣、次住院年紀以下事、住持者經歷三年兩班者、可送二節之由、先度被仰訖、若其期未滿及退居改替者、須被止名字也、但重病令現在者、非此限宜有御注進子細矣、　至德三年八月京鎌倉五山の座位を定めらる時に當寺と天龍寺は第一位たり彼寺の條に引用す、併せ見るべし、當寺は其傳を失へり、應永廿一年十二月廿八日の夜、門前の民家より火發せしが、其餘燼飛て塔上に落ち忽焔熾になり、堂宇寮舍は更なり、佛具雜物に至るまで一時灰燼となる、管領持氏爰に出馬し、自防禦の下知を加ふ【鎌倉九代記】曰、應永廿一年十二月廿八日酉尅、建長寺門前の在家より失火し、やがて燒鎭りけるが、僅なる細煙ひとつ遙に七八町を隔てゝ飛去、建長寺の塔の五重の上に落かゝる初の程は燈籠の火の如くにて、消もせず燃もせで見けるが、漸々大に燃はびこり、黑烟天を掠て燒上る、折節靑嵐はげしく吹渡、曾烟四方に覆ひければ本堂・祖師堂・方丈・衣鉢閣・鐘樓・輪藏・祭舍・浴室・鎭主土地堂・山門・脇門・廊下・惣門に至るまで同時に燃立て、一宇も殘らず灰燼となる、佛具・經論・資財・雜物は運べき暇なし、僧・喝食・維那・侍者辛じて逃出たり、左馬頭殿は、人數五百計にて門前に御馬を立られ、下知を加へらる、永正十二年二月當寺及び圓覺・東慶の三寺、諸公役免除ある旨北條左京大夫氏綱、書を授じて令す圓覺寺藏文書其文は彼寺の條に引用す、併見るべし、天文四年九月北條氏綱の祈願として敵上杉修理大夫朝興が兵退散の爲、鶴岡の社前にて當寺と圓覺寺の僧侶、大般若經を眞讀す【快元記】曰、天文四年九月廿三日、於鶴岡、敵退散爲祈禱、建長・圓覺兩寺僧達十餘人、大般若眞讀、於當社、黑衣之僧達、祈禱前代未聞、是始也云々、廿七日迄被讀了　九年八月暴風大に起りて惣門轉倒に及ぶ、塔頭正統庵・寶泉庵・向上庵等滅却せり天文九年八月十一日、戊刻大風、武相之間、草木悉損了、建長寺惣門倒、正統庵滅却、寶泉庵・向上庵倒畢云々、十一年四月北條左京大夫氏康先規の如く三寺諸公役免除の旨を沙汰す、天正十二年十月板部岡江雪齋北條氏直の下知を承て、又此事を沙汰す　各圓覺寺所藏文書、其文は永正の度に同じ、彼寺の條併せ見るべし、十八年正月北條氏直兵粮の事に因、掟書を出せり所藏文書曰、掟、寺中兵粮、被指置儀、可被停止候、玉繩成共、小田原成共、如惣並、來廿五日を限而可被入置候、僧衆當意之堪忍分計者無相違事、對寺中寄於事在右、狼藉非分於申懸族者、記交名、可有披露、可處嚴科事、右定所如件庚寅正月廿一日、建長寺虎朱印あり、四月豐臣太閤小田原發向の時、軍勢狼藉禁止の制札を附與す當寺所藏、鎌倉建長寺　八月豐臣太閤寺領安堵、並に諸役免除の朱印を授與す曰、寺領安堵任當知行之旨、被仰付訖、如本帳面、全可令寺納

候、國並檢地之上、出分共に可有領知候、并門前屋鋪等、可致進退候、國役之儀令免除候也、天正十八八月廿二日、秀吉朱印、鎌倉建長寺並末寺十九年十一月寺領九十五貫九百文、寄附せさせ給ふ旨、御判物を下さる曰、寄進建長寺、鎌倉內、六十三貫六百文、小町村三十二貫二百四十文、十二所內、右如先規令寄附訖、彌守此旨、佛法相續不可有怠慢之狀、如件、天正十九辛卯十一月日正二位源朝臣御華押、每年七月十五日、梶原施餓鬼と云へるを修行すと云、按ずるに、其緣故悉しく【鎌倉志】に見えたれど信をとるに足らず【門前町三十七戶あり、△佛殿　祈禱の牌を揭ぐ宸筆とのみ傳へて時世詳ならず、建長五年十一月造營成功の時北條時賴梁牌の銘を記す左に、今上皇帝千佛垂手扶持諸天至心擁護長保南山壽、久爲北闕尊同胡越於一家、通車書於萬國、正五位下行相模守平朝臣時賴敬書、右に伏願三品親王、征夷大將軍、干戈偃恩、海晏河淸、五穀豐登、萬民康樂、法輪常轉、佛日增輝建長五年癸丑十一月五日、住持傳法宋沙門道隆、今の佛殿は久能山御宮拜殿、更に再造せられし時其舊殿を賜ふと云、或は崇源院殿御靈屋の拜殿を賜はりしなりと云、其製尋常の寺院に異なり、唐戶彫物の彩色今は皆剝落せり、殿內土地堂中央に太常元、左に掌簿判官、右に感應使者を安ず、其餘韋駄天聖德太子の像あり、祖師堂に達磨、百丈、開山開基の像を置く、△方丈　龍王殿と號す、書院を聽松軒と名づく、其庭に池あり蘸碧池と稱す、池邊に老松あり靈松と云ふ、名義は【元亨釋書】隆が傳中に見えたり曰、寢室之後有池、池側有松、其樹條、直一日斜偃向室、衆僧怪之、隆曰、偉服之人居松上與我語、我問住何處、對曰、山之左鶴岡也、語已不見以其人居之故、松偃耳、諸徒曰、鶴岡者八幡大神之祠所也、恐神來此耳、自此其徒、欄楯其樹名曰靈松、今或は影向の松とも呼べり、又庭中に銅碑あり、元祿五年五月一場武助忠重が建る所なり于時元祿五壬申年五月吉辰、爲先考古峯道劍居士、武州江府住、一場氏武助藤原忠重、所建と彫せり、【寺寶】△東照宮御書一通御文言曰、當表就在陣、爲音信、使僧並蠟燭送賜候、遠路之芳情祝着候、委曲全阿彌可申候、恐々謹言、極月晦日、建長寺家康壺御印あり　△觀音小像一軀開山作、　△九條袈裟二領　△七條袈裟二領　△念珠二連　△直綴三領　△座具二張以上五種共に開山の遺物、　△金剛經一卷開山筆下同、　△牓一幅　△朱衣達磨畫像一幅　△法華經一部紺紙金泥日蓮筆、每卷繼ぎめ及び全部の卷尾に、金泥にて足利持氏の華押を記す、　△開山自讃畫一幅曰、拙而無比與它佛祖結正眼、是非海中闊步、棍百千遭、劔戰林裏橫身、好一片膽、引得朗然居士於霎拳上能定乾坤負累闌溪老人向巨禍山倒乘舴艋相同運出自家珍、一々且非從外產、辛未季春、住持建長禪寺、宋蘭溪道隆、奉爲朗然居士、書于觀瀾閣、【鎌倉志】に朗然居士の像とあるは訛なり、開山隆居士の爲に自讃せし物なり、　△觀音畫像三十二幅啓書記筆　△涅槃像二幅一は兆殿司筆一は詳ならず　△羅漢畫像八幅兆殿司筆　△十

六羅漢畫像一幅顏輝筆下同、　△釋迦畫像一幅　△並蓮畫一幅　△白衣觀音畫像一幅思恭筆、　△十六善神畫像一幅筆者詳ならず、唐筆とのみ傳ふ、下同じ、　△牡丹畫一幅　△三幅對畫中佛三尊、思恭筆、左右猿猴、牧溪筆、此中軸は金別品にて今圓覺寺に藏する、牧溪筆の水月觀音の畫幅、則此中軸なりと云、何の頃彼所藏となりしや、詳ならず、　△袈裟一領黃紗　△尼師壇一張黃紗　△拂子一柄以上三種開山所持の物と云　△開山遺牙一箇玉塔中に收む　△同肖像一幅　△同墨蹟二幅一は鹽田安樂寺より觀音贊を請はれし時の返翰なり、曰、先日觀音贊、雖蒙仰候、行道々上、至今告記候事、恐入候、又觀音聖像、左右有韋陀龍像、侍衞雖未拜其聖相、但依所示之語讃呈、慈威定慧、物に露恩、逆順縱橫、塵々普應、提萬有而不提於邪途、導群情而令持步正國、信韋陀護法、運莫測之洪機、龍像森嚴邁利生之大聖、世界有盡、我願無窮、鑒察賢愚如大圓鏡妙用、非唯觀世音、平公日奉復、鹽田安樂寺方丈道隆、一は法語を以て衆を試るの書なり、是は浴室に預るものなれば、其文書は浴室の條に記す、　△僧空山袈裟一領生絹　△同尼師壇一張緞子　△僧錦江肖像一幅中孝の讃あり　△不動二童子像三軀峯照月彫造、栂尾明慧供養と云ふ、　已上十種は中古散失して水府家臣額田久兵衞信道が、所藏なりしを延寶六年七月源光國卿當寺に收められしと云ふ、卿の書牘所藏にあり曰、與頑室和尙書、源光國、未接道容、渴望日久、伏惟寶坊淸淨法候萬福、就告家臣額田久兵衞信道、世藏大覺禪師法衣墨蹟等、是宜在貴寺者、故今附介喜捨、永以鎭山門、其物件錄別幅、收納惟幸、延寶六年七月廿四日、室が復書に曰、復水戸相公書、建長頑室玄靡、如賜示敎、雖未奉芝顏、唇惠鳳箋、薰沐拜誦、就審臺閣鈞安、尊候佳勝、伏承、大家之良臣、額田氏信道、累世所秘在之大覺祖之法衣墨蹟等、所錄別幅之件々、永令鎭護吾山門、不堪戰慄感荷之至、誠惟四百年後、如逢蘭溪再世之春、閣下、非仁德之溫、爭蒙如斯之餘庇乎、噫時哉有數圭復無措、佗時趨于貴府、速伸忱謝、皇恐端肅不悉、　△碑文一卷二十八世、聞悟の作、其文は藝文部に錄せり、碑石今はなし、【鎌倉志】にも、今絕たりとあれば、貞享已前蚤く亡失せしなり、　△當寺指圖一鋪標紙に元弘元年爲東福寺造立圖焉、大工越後とあり、朱印を二所に押す　△同古繪圖一鋪延寶六年、水戸光圀卿の寄附せられし物と云ふ　△鈴一握永正丙寅編制福山公用霖阿建寶置之と銘あり　△圓鑑一面西來庵昭堂中にあり事は文條に詳載す、　△古文書四通　一は寺領安堵の御朱印なり御文言前に註記せり、一は豐臣太閤の出せし禁制書なり、一は北條氏直の出せし掟書なり文言前に註記す、一は足利尊氏より長壽寺へ與ふる書なり其文長壽寺の條に出せり、△法塔　山門と佛殿の間にあり常に法式を修する所なりと云ふ、是は近く文化年中肇て造立ありしなり、△僧堂　大徹堂の額を揚ぐ宋子曇筆　△浴室　總門內東の方にあり開山道隆法語を以て衆を誡めしこと寺寶開山墨蹟の內に見えたり曰、凡遇浴日堂爲不可喧鬨、世境知客在浴、院中高□彼時浴主、禁約以耆蕉之名令渠息其鬨鬧知客猶增忿怒却以飮毒藥爲名揚、其家醜浴主、況有不正之事、何因鬨諍、始出斯言、飮毒之時、便申公界是知客之正理、因事方言、此乃世境之咎、且從輕罰油三斤確志浴主、前公界、人前、以服藥爲名、此亦强說道理、其過甚重、從輕罰油五斤、如不伏理、二俱出寺道隆の華押あり、　△鐘樓　山門東にあり、建長七年二月北條時賴巨鐘を鑄造して掛く、開山道隆是が銘を作る曰、巨福山建長興國禪寺鐘銘、南閻浮提、各以音聲、長爲佛事、東州勝地、聊蒐穢莽、剏此道場、天人影向、龍象和光、雲歛霏開兮、樓觀百尺、嵐敷翠招兮、勢壓諸方、事旣前定、法亦恢張、圍範洪鐘、結千人之緣會、宏撞高架、鎭四海之安康、脫自一模、重而難揚、圓成大器、鳴則非常、蒲牢讒吼、星斗晦藏、群峯答響、心境俱亡、扣之大者其聲遠徹、扣之小者、其應雖量、東迎素月西送夕陽、昏寂未醒、攬之則寤、宴安猶恣、警之而莊、破塵勞之大夢、息物類之顚狂、妙覺々空、根塵消殞、返聞々盡、本性全彰、共證圓通三昧、永臻檀施千祥、因此善利、上祝親王、民豐歲稔、地久天長、建長七年乙卯二月廿一日、本寺大檀那、相模守平朝臣時賴、謹勸千人同成大器、建長禪寺住持宋沙門道隆謹題、御勸進監寺僧琳、長、大工、大和權守物部重光、　△東外門　海東法窟の額を揭ぐ崇禎元年十一月竹西書とあり、竹西は朝鮮の人なり、崇禎元は本朝の寬永五年に當れり、　△西外門　天下禪林の額を揭ぐ筆者年代共に前に同じ、總門巨福山の額を揚ぐ筆者詳ならず、【鎌倉志】に、或は寧一山と云ひ又趙子昇と云と記せり、今按ずるに、恐らくは圓覺寺と同時に賜ひし勅筆なるも識べからず、又土人傳へて、巨の字下一畫の上に點を加ふ時の人賞して、此點百貫の價を添ふと云しより是を百貫點と美稱すと云ふ、　△山門　樓上に十六羅漢を安ず按ずるに、中古八體を失ふ、後補造して今は全く具足せり、【鎌倉志】にいつの時か、紛失して今八體ありと記せしに據れば、貞享の後補造せしと識らる、貞享已前蚤く紛失し、建長興國禪寺の額を揭ぐ宋僧、子曇が筆と傳ふれど訛なり　總門の額と同じく是も勅筆なり、　應永廿一年十二月廿八日の夜燒亡に及び事は前條に、委しく注記せり、永享七年十月更に再造の事始あり當寺大工河內內匠助藏文書曰、建長寺山門、御事始御祝事、絹一重、御劍一腰、御馬一匹、御工角々分、御劍一腰、一引頭、御劍一腰、二引頭、御劍一腰、三引頭、御劍一腰、四引頭、御劍一腰、長役酒肴料、拾貫文、以上、永享七年十月十六日、御奉行所　△觀音堂　佛殿の左にあり、圓通閣の額を揭ぐ宋子曇筆　△地藏堂　南外門の並にあり、往昔當山の寺域刑罪場たりし頃は其域內に在て一宇の寺院たり、卽佉羅陀山心平寺と號せり、今猶此山寺號を存せり後廢寺となりて此小堂のみ纔に存せしを建長元年北條時賴其地を闢て當寺を剏するに及び、爰に移して更に建立あり【鎌倉大日記】に、建長元年小袋坂地藏堂建立とある、是なり【鎌倉志】に、俗說を擧て時賴執權たりし時按ずるに時賴は寬元四年閏四月廿歲にし

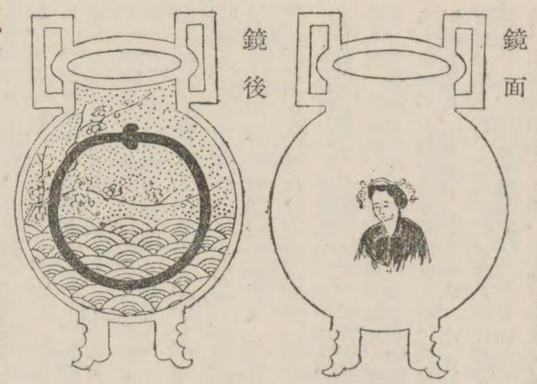
て執權となれり、濟田某と云へる犯罪者あり、刑に處せらるゝに及び其太刀折て切事能はず、是彼が髻中に地藏の靈像在が故なり、卽執て見れば像背に刀痕を帶たり、奇異として彼が罪を赦す、此に於て彼者其小像を此本尊の肚中に收む、故に後人傳へて是を濟田地藏と稱す、後當寺剏建の時佛殿本尊の頂中に移し收むと記せり、實虛詳ならず　按ずるに、鍛冶ヶ谷村に齋田左衞門の宅跡と云ふありて土人の傳に左衞門は賴朝近侍の士にて或時人を害せし罪に據て死刑に處せられんとせしに、平常信ぜし一寸八分の地藏の小像、其身代りに立ち、彼は存命せり、今此靈佛は建長寺中にありと云へり、本文に記せし【鎌倉志】の說とは時代殊に違へり、未何れか是非を決せず、

△阿彌陀堂　△杉谷辨天社　鎭守社と稱す、塔頭玉雲庵の持、△四方中央鎭神社　五神各社なり東、八幡、西、子神、南、第六天、北、熊野、中央、五大尊、各其所に鎭座す、　△淺間社　△龜倉稻荷社　△摩利支天社　△勝上嶽　北方の山頂を唱ふ、下に開山座禪窟あり、窟中に地藏の石像を安す、又側に一遍の座禪窟あり、△嵩山　開山塔の後山を云、西土五嶽中の一に擬して名づけしなり、山頂を兜率巔と稱す、△金龍水　西門の前小流の傍にあり、△不老水　勝上嶽の左にあり、已上二水は卽鎌倉五名水の其二なり、△大覺池　後山中にあり、或は龜池とも云ふ、五尺許の龜水底に住すと云へり、△仙人澤　不老水の側にあり、幽閑の地なり、往古異人の住ける所と云ふ、△普門橋　境內の小流に架す、△華嚴塔跡　勝上嶽へ至る路傍にあり元亨三年十月故北條貞時入道崇演應長元年十月廿六日卒最勝園寺と號す、が十三回忌追福の爲建立せしと云ふ【鎌倉志】に華嚴塔供養の疏あり、其略に云、鎌倉縣山內居住、菩薩戒弟子尼圓成、爲故夫主最勝園寺一十三回忌建之、元亨三年孟冬於茲日、慶懺圓覺壽福兩山和尙、安座點眼佛事、三寶弟子菩薩戒尼圓成疏云々、後廢せし時代詳ならず、△觀瀾閣蹟　座禪窟の前にあり、△天津橋跡　所在詳ならず應安元年新造ありしなり【日工集】曰、應安元年戊申七月五日、早赴建長石室入院之會、時天津橋新成、觀者如市云々、二年五月僧義堂現住石室及び正統庵主無礙に偈を作りて橋の左右に揭んことを告ぐ　二年五月廿日、赴建長正統庵忌齋告主人無礙住持石室、曰、天津橋、新成、但恨、有境無人、人境兼備、非兩和尙而誰乎、請攀一覽亭例、作偈揭于橋左右、千歲喜話也、云々、六年四月僧妙霖橋頌を作りて、序を義堂に請ふ　應安六年四月十七日、妙霖書記、出天津橋頌卷二帙、以石室和尙命、余作序、余固辭以疾、霖懇求不已、置頌帙去云々、按ずるに今は其蹤跡をとゞめざれども、【梅花無盡藏】に、文明十八年十月僧萬里當寺に入て、橋邊を緩步せし事を記せし文辭、並に橋に題する詩詞に因りて推考するに、是後山の崖頭に架せし物にて最幽閑の勝境たりしと識らる【梅花無盡藏】曰、文明十八年小春、二十有八日庚子、間靜之刻、入巨福山建長禪寺懋天津之橋禰、窺靈樹之碑文、歷觀正統天源向上實際傳燈寺數十院、攀華嚴之塔、扣易安禪翁於龍花院、翁赴上方之前默不能面、留言于謙僧、探所開之靈地、抹過山門之左邊、入嵩山而面、拜開山西來院大覺師祖圓鑑之塔、庭柏森然、于今無恙、卸笠於嵩山下華光庵余就枕一覺之中、作天津橋詩曰、左擎古塔右殘碑、霓樣天津橫澗崖、老樹藏鵑冬不度、都無驚起一聲詩

【祖塔】○西來庵　是開山塔頭にして佛殿の東嵩山の下にあり、古は本州吉田郷內布施村　今本郡中に吉田町あり又其地の小名に布施の稱呼あり、是古懷島郷內辻　此郷名今も高座郡の所屬の遺名なり、懷島郷內辻たり、辻の名考る所なし、糟屋庄沼部郷內稻荷田　今大住郡糟屋庄に沼目村と唱ふる是なり、又村內に稻荷荷前の字あり、是稻荷田の遺名歟　等總て三所を庵頭とす　長祿二年の制札に據る其證は下に註記す、康正二年十二月某入道、懷島郷の領地に軍卒の濫妨及び伐木禁止の制札を出せり　曰、禁制、□於相州懷島村之內、西來庵領、諸軍勢甲乙人等、致濫妨狼藉、并伐取山林竹木事、堅所被停止也、若有違犯之輩者、可處罪科之狀、如件、康正二年十二月日、沙彌華押、長祿二年八月大和前司三所の庵領に一の制札を出す　曰、禁制、建長寺西來庵領、相州吉郷田內、布施村事、相州懷島郷內辻之事、相州糟屋庄沼郷內稻荷田之事、右軍勢甲乙人等、不可致濫妨狼藉、若有違犯之輩者可被處罪科者也、長祿二年八月日、大和前司、華押、　△昭堂　開山自作の像を置く　舊は達磨の像をも置し、といへど、今はなし、側に柱杖あり、開山渡來の時持用せし物なり、故に渡海の柱杖と云へり、圓鑑の額を揭ぐ　開山筆、堂內に開山所持の鏡一面　厨子に收む、高三寸五分横三寸、を收む、是を圓鑑と號す、其形鼎の如し、面に觀音の像を顯す此事【元亨釋書】にも見ゆ　曰、隆有所持鏡、沒後其徒收之、或夢其鏡、留隆儀貞、告徒乞見、髣髴似觀自在像、諸徒傳看異之、平帥聞之請入府疑其唵曖、令工磨治、其鏡初幽隱、經一磨鮮明巖好、大悲之相皆悉備足、平帥悔謝、作禮後寧一山爲記、日件錄に曰、西來庵に、大覺禪師の國鑑あり、親のあたりこれを拜すれば、鏡中に觀音の半身の像あり、手に芭蕉の扇を持、正く視れば朦々として眇に見れば、儼然たりと、又宗牧が【東國紀行】に建長寺御影堂の鏡の面くもりたるに、十一面の尊容さだかに、をがませられたりとかけり、十一面にはあらず、抑此鏡は宗英と云へる僧入宋し、彼土に得て歸朝せしが某年隆が甲州へ赴くに及び是を贈れり、隆沒して數年の後漸々觀音の容相彰はる、北條時宗奇瑞を感じ、乞取て是を秘藏し、卽像を造て其肚中に收め、鹿山の山門樓中に安す　嘉元三年、寧一山が、國鑑の讚序曰、圓覺寺比丘宗英、得此鏡於宋國、持歸經三年、後大覺、退壽福、往甲州以鏡送獻之、經一旬餘、忽然鏡面垢生、其後漸々現大士慈容、法光寺殿平時宗聞之、收藏禮事之、二年後造本寺觀音像乃藏腹中云々、又永和元年、僧德雋が、圓鑑紀實曰、曩焉有比丘宗英者、之宋得鏡、形肖博山、持之而歸、後三載、大覺祖師、遭乎流言而有甲州之行、英將其鏡獻之於師、以備顧鑑師旋于相之巨山未幾逝矣神足德溫收鄉之鏡、本部太守平公時宗、追慕師而不可見、晨夜憂想罔怠、一夕師夢、師告平公曰死也者人之大常也、何故哀之劇吾之徒德

溫有鏡、吾平生愛之也、欲見老僧、看此鏡足矣、覺而召溫、索其鏡覽之、如雲霧中有人而昏、命工磨之、乃觀音大士之妙相悉備、闔府僚屬乃至遐邇州縣、來禮者幢々不絕、毋不歎異平公感此奇瑞、以其鏡秘之、躬以奉圓覺寺山門之閣、云々、

然るに應安七年十一月廿三日鹿山の上副寺寮より火發し忽延燒して山門を燬に至る、時に當山の僧守嚴、奇夢の告により僧守高をかたらふ、高即灰燼中に入、觀音像の傷損せしを見とめ、其像腹を搜て此鏡を得たり【日工集】曰、德儁が、圓鑑紀實曰、應安甲寅十一月廿三日、將夜圓覺寺倏、遭畢方之祟、亘山以其比隣、衆咸駭而愴惶、老而疲者、攀陟而望之、壯而健者、匍匐而救之、夜造過半、炎上稍息有守嚴者、篤行之僧也、嗟彼廣居罹此災矣、咸々乎念之、坐久而假寐空中有聲曰、汝知之否、祖師現形之鏡、藏于寶雲閣、千手大悲之腹中矣、嚴也恍惚應之曰、非也我聞之於師、其置正觀音腹也、若曰在于千手則謬也、遽焉夢覺乃、呼同舍者語之、翌日嚴將守高者、訪鹿阜於灰燼中、而歸將過利濟菴之門傍、木像仆地手足摧折、不見其首往來者圍之爭觀曰火發庫堂其焰光及大殿之北阿、而後燬于山門、人得延燎之有隙、上閣救聖像、茫々焉從其高擔、放落之故梵相致傷損、守嚴以手搜像腹、鏗然有聲、取而視之鏡也、使若有人誘之、然高也懼人喧逐濫隨、故潛袖之速行、將到亘山尙以爲遲輙就路側出之、以拜觀其鏡、瑩如也、聖像見于鏡心、略有唵曖之色、擁其像如一翳生于晴虛焉云々、按ずるに、【日工集】は前當時の記なり、圓鑑紀實は永和元年記する所にて、卽應安甲寅の翌年なれば共に證とするに足れり、然れども其云所浮屠の妄說に近くして、信據とし難き所あり、是より永く此所に安じ、舊く圓鑑の額あるを以て、此鏡銘とせし物なり、其圖の如し、【什寶】



△大覺禪師書　△古文書四通、一は沙彌道貞書翰曰、就懷島之內、當庵領事、御門中之尊宿樣、以連署委曲示預候、存其旨候、何樣豆州へ令申依御返事、可及御左右候、根本存知事候之間、不可存疎略候、恐々敬白、六月廿二日　謹上西來庵眞侍禪師、沙彌道貞華押、一は康正二年の制札、一は長祿二年の制札（已上二通は、前に引用す、）一は文寵書翰曰、靈山寺事、如以前異見可申由以評議承候也、然者道寸□樞機候處丈也、被申候然者、土貢分計、可致庵納由、可申候此由衆中へ御心得所仰候、恐々敬白、三月廿四日、臥富西來庵侍眞禪師、文寵華押、　△開山塔　昭堂の後嵩山のにあり側に佛光圓覺寺開山なり、故に事跡は彼寺の條に注記す、の塔あり、弘安九年遷化ありて遺骸を此所に堙め、侍眞寮を改造して塔院とし正續庵と號す、禪林僧傳に載する、塔銘追補の文曰、衆國灰塵子建長寺山之麓、建塔院曰正續、勅諡佛光塔曰常照云々、鹿山略記曰、按正續院古在建長寺中、云々、延慶三年正月當寺門前地の內を當庵承事分、及び小番分の用途に宛つ　圓覺寺藏文書寫曰、建長寺門前地事、合廿四坪、法圓跡、右此地者宛給正續庵、承事分之狀、如件、延慶三年正月十四日、直歲華押、又曰、建長寺門前地事、合十二坪、西得跡、右此地者、宛給正續庵、小番分之狀、如件、延慶三年四月十四日、直歲華押、　其後眞壁女子常州椎火鄕宮山村の內にて院領を寄附するに因、元亨四年平光泰具書九通を讓與す　曰、渡進正續院領、常陸國椎火鄕內、宮山田地屋敷、具書等事一通、本宮道一讓渡女子狀、（延慶二年五月十八日在御外題）一通同女子於福、（元應三年正月六日在證判）一通、□□□（元亨元年）三通御公事用途請取二通得分物沽券女御下知狀、（四月七日）注狀一通寄進狀以上九通、右渡進之狀如件、元亨四年十一月十日、平光泰華押、正中二年十二月、北條相模守高時、修理大夫貞顯、彼地寄附の御敎書を下せり　圓覺寺藏文書曰、奉寄建長寺正續院、常陸國椎火鄕宮山村內、田地壹町七段、屋敷二ヶ所事、右任眞壁女子平氏寄進狀、可致沙汰之旨、依仰奉寄狀、如件、正中二年十二月廿五日、相模守平朝臣華押、修理權大夫平朝臣華押、　嘉曆三年十二月僧審省、武州埼西郡成田鄕の內にて院領を寄附あり、圓覺寺藏文書寫曰、奉寄進建長寺正續院、武藏國埼西郡成田鄕內、西谷田六段事右田者成田六郎入道女子田也、就手頃證文並沽券狀等、相副安堵御下文、永代所奉寄進先師塔頭正續院也、不可有他妨、仍爲後日、證文狀如件、嘉曆三年十二月廿一日、僧審省華押、元弘三年七月院領安堵の綸旨を下し賜へり、曰、正續院領當知行地、不可有相違、者天氣如此、仍執達如件、元弘三年七月十二日、夢窓上人御房、式部少輔華押、　建武元年八月足利直義、本郡山內庄信濃村の地を寄附あり曰、正續院領、相模國山內庄、秋庭鄕內信濃村事、自左馬頭殿、當院御寄附者、建武元年八月廿九日也、云々、　二年塔を圓覺寺に建て、勅して舍利殿を開山塔頭とせらるゝに及び、當院をも彼山內に移さるゝは、已上の事實、委しく圓覺寺開山塔正續院の條に載す、併せ見るべし　△禪堂　大徹堂宋子曇筆の額を揭ぐ、△首座寮　曇華軒と號す、雲水の僧髮に投宿して示敎を受く、△食堂　△鐘樓　鐘は扇谷海藏寺の物にて彼寺大檀那上杉彈正少弼氏定人道常纖が勸進なり、卽應永二十二年十一月鑄造の銘あり曰、相州扇谷山海藏寺常住、鑄鐘勸進聖正南上座大檀那常繼、應永念二年十一月念二日、後當庵に收めし年代事實今詳ならず　△外門　嵩山の額佛光筆、を揭ぐ、△中門　西來庵の額雲幽筆、あり、△舍利樹　昭堂の前にある、混柏を名づく、弘安元年七月開山隆が滅後荼毘するに及び、五彩の舍利を得たり、樹葉に觸るゝ所の煙、氣皆舍利となる、衆徒樹下を索て多く是を得しと云【元亨釋書】隆が傳曰、弘安元年七月、示微疾、至廿四日、書偈辭衆而寂、闍維得五色舍利、其煙觸樹葉、纍然皆綴舍利門人自遠方至者、歷數十日到葬所、搜索林木、多得舍利、

故に此樹の稱呼となれるなり、【塔頭】　○正宗庵　六世道然の塔所なり【高僧傳】曰、釋道然、自號葦航、不記姓氏、信州人也、天賦俊逸機辨縱横、稟大覺禪師記莂、渉遊諸方、弘安辛巳佛光禪師、住建長、延然爲第一座、出歴住諸刹、及佛光迂閬覺、繼董巨福、寺衆奉承、英俊來集、主管漸久、退休正宗庵、臨終說偈、曰空華亂墜、八十三年、卽今依舊、葦航道然、時正安三年十二月六日也、勅諡大興禪師、以寵章之、　○玉雲庵　十世一寧が塔所なり【元享釋書】曰釋一寧號一山、宋之台州胡氏之子也、幼投郡之鴻福寺、融無等席下、不久去聽律于應眞、學台于延慶・永仁六年、我商舶、達明境、初辛巳之夏、元國樓船偵我西鄙、神靈戮力風波破蕩、元主秦心不止奇謀百計以我鄉浮居諭寧、藩撫寧逼不得已駕舶、着太宰府、正安元年也、副元帥平貞時、激怒編管豆州、或稱寧道譽、副元帥、重祖道此冬、延主巨福之席、尋移圓覺淨智、正和二年夏、圓規庵化龍山、初建治上皇、聞寧德望、屢欲召見、於是勅元帥府、促寧赴上都、秋入寺上皇幸山問道、春遇隆渥、文保元年十月寢疾、廿五日書、抑寧在世中、壽塔を鹿山中に建てつ偈奄然化、年七十一、るが、嘉元中北條貞時入道崇演命じて委に移し、庵を設て今の號を負す【禪林僧傳】曰、會曇西澗謝鹿山事、府命令師襯之、兩山一矩、衆望翼如也、已而辭建長、獨正圓覺席、又四歲、偶以昏鹿疾退居壽藏、府帖再領建長、病癈荐擘退休保養、府命以鹿峯壽塔、其他狹隘移于巨福、右掖杉谷、菴成名玉雲、蓋癡絶祖、其塔菴號玉山、頑極考雲西、並取扁焉不忘本也、文保元年十月寧南禪寺に在て歿後、後宇多上皇勅して龜山帝廟塔の側に塔を建させ給ふ、弟子等追慕して當庵を師の塔所とす曰、文保元年秋、恙瘵彌留、十月益革太上皇幸寺、跗龜山廟塔、時々問族、廿四曉、手染遺表、獻廟塔、又書偈化、壽七十一、太上皇、得表蒼皇幸寢室、趺座儼然、宛如生也、君臣嗟悼、太上皇便賜宸奎、贈國師之號、又宣僕射源有房公時門下侍郎、作文祭之、勅龜廟側剏一塔、書法雨額賜之、門弟子分塔于玉雲、　○天源庵　十三世紹明の塔所なり【高僧傳】曰、釋紹明號南浦、藤姓駿州安部縣人、幼事本州建穗寺、淨辨法師、學敎十五芟染、受戒盤桓數載、棄去參建長蘭溪禪師、正元間入中華、徧問諸刹、時虛堂愚和尚、主淨慈、門庭、高峻非宿學、莫敢闖其牆、明往拜謁、咸淳三年秋、辭堂東歸、當本朝永和四年也、謁蘭溪禪師、知藏鑰於建長、七年庚午冬、出世筑州興德、九年壬申、迂太宰府之崇福寺、住職三十餘年、關西嚮風門庭日盛、嘉元三年秋、奉詔入京師、伏見太上皇、召對宮掖、問答稱旨、敕主萬壽寺、帝又以東山故跡、興造嘉元禪刹、延明爲第一祖、德治二年、副元帥平貞時、聘赴相州、留正觀寺、請就署所演法、復敷奏、董建長興國禪寺、翌歲太上皇降于詔存問、思禮優至、明建長入寺之夕、小參有日、今年臘月廿九日、來無所來、明年臘月廿九日、去無所去、大衆驚訝英諡其意、明年延慶戊申臘月廿九日、忽示微疾至二更書偈逝、閱世七十有四獲舍利無算、事聞上皇哀臨不輟、敕諡圓通大應國師、重敕建寺西京、額曰龍翔、樹塔於寺之後巖、扵曰普光、庵曰祥雲、弟子在建長、崇福者、各奉舍利、建塔建長普光の額後宇多帝宸筆と云之塔、曰天源、崇福之塔、曰瑞雲云々、を扁す、明の像を置く庵中經藏あり、一切經を收む、門に雲關の額を揭ぐ、僧大燈が投機の舊跡にて透過雲關無舊路と頌せしは此所なりと云ふ、○正統庵　古は淨智寺中にありしを後當山に移せり、十四世顯日の塔所なり【高僧傳】曰、釋顯日號高峯、後嵯峨帝の子母藤氏、仁治二年、謫于城西離宮、年甫十六、從聖一國師、落髮披緇、納滿分戒行業純眞、元庵和尚、來自宋住建長、日往掛塔、菴命湯藥因謁府內諸老皆以高賓待之後入下野那須山、誅茅隱棲有檀越、欲爲日建精藍日乃許之、富者以金帛、施貧者以力巧、施殿堂門廊不日而成、卽東山雲巖寺是也、時佛光禪師、住巨福山、一翁豪公素與日善馳書招之令見佛光正安二年、師年六十董相之淨明、嘉元癸卯住乾明山萬壽寺、三年乙巳移淨智、正和甲申、主建長歷兩歲、歸東山、五年丙辰十月廿日中夜書偈坐化報齡七十有六、窆之東山塔于淨智、扁正統、(後移建長)勅諡佛國應供、正統庵の額を揭ぐ曼珠院良恕親王筆　○龍峯院　十五世德儉が塔所なり【元享釋書】曰、釋德儉、相州人也、始其母、棄鎌倉縣之路傍、或收育福山之側、消長與群兒入寺、虞游大覺見之器許、乃就家乞之、納爲弟子、又入宋地周游吳越、永仁三年、府帖領本郡長勝寺、次移東勝・淨明・禪興・建仁・建長、元應二年五月十九日化、年七十六、病中賜號佛燈國師、高僧傳曰、元應二年五月十九日、書偈曰、七十六年、不生不死、雲散長空、月行萬里、擲筆而化、門弟遵遺命、就于牧護庵、闍維乃分靈骨、樹塔相之龍峯上皇親灑宸筆、特賜佛燈國師無相之塔、　○向上庵　十七世、源が建る所なり、【高僧傳】曰、釋世源字太古、不詳姓氏、常州人、初參元庵和尚、永仁年中、開法光福、尋移萬壽建長、後構向上庵於福山中、屛居養老、元享元年九月二十五日、奄然終於住庵、春秋八十有九、勅諡國一禪師、　○回春庵　王二十世、德王が創建なり【高僧傳】曰、釋德璇字玉山、不記姓氏、信州人也、自少侍大覺禪師參禪不弛、遂有所發明、而受印記、嘗應奧州檀越之請、住幽谷山、爲第一世、倘敞緇白翕然歸風、後住建長、同門昆弟、歡忻助化海衆日多、晚創回春庵、以養老期、旣臨滅度、說偈化、壽齡八十、建武元年十月十八日也、賜諡佛覺禪師、庵の後山に地藏あり、中古已後土中に湮埋すと云ふ是を原田地藏と稱せり、名義の傳あれども信じ難ければ贅せず、○禪居庵　門外にあり、下同、二十二世、正澄が建る所なり【高僧傳】曰、釋正澄號清拙、元之福州連劉氏子、家世業儒、嘉曆二年正月入平安城、副元帥平高時、遣專使迎請、住建長、後信州太守源貞宗、欽澄道貌、就受戒法、執弟子禮、剏開善寺於本州伊賀良縣、迎澄爲開山第一世、住二載、自持柱杖、徑歸東山禪居庵、曆應二年正月十七日寂、世齡六十六、火洛東山西南之岡、五色設利不可勝計、緇白爭取、灰土共、盡塔子建仁、建長之禪居庵、賜諡大鑑禪師、　△髮長明神社　淸拙の老母師を慕ひ、宋より渡りしに師に謁せず、怨て死す、是を神に祀れるなりと云ふ、△摩利支天堂、○千龍庵　舊は雲澤庵と號せり、二十三世楚俊が剏建する所なり【高僧傳】曰、釋楚俊字明極、元明州慶元府、黃氏子、後抵相州、平帥高時、請住建長、住時二載、退請雲澤庵、不幾應府帖、再住建長、建武三年九月二十七日寂、門人併爪髮、分藏於雲澤、世壽七十五、　○妙高庵　二十八世、閑悟を開祖とす背山と號す、肥前の人石菴に嗣法し某年八月二日寂す、○雲外庵　三十世、妙環が建る所なり【高僧傳】曰、釋妙環號樞翁、自雲巖寺、遷建長寺、剏雲外庵以圖終焉、文和三年二月十八日化、世壽八十二、　○同契庵　三十一世禪鑑が構へし庵なり【高僧傳】曰、釋禪鑑字象外、肥前州人嗣法桃溪悟公、後遷建長、晚構同契庵

山中、解印而休、文和四年仲冬十八日化、有偈曰、上無攀仰、下絶己躬、若又有生可度不妨隨處露蹤、及火浴眼根不壞、且涌舍利若干粒、府下道俗歎未曾有、朝廷勅諡妙覺禪師、

○寶珠庵　開祖は三十五世、素安なり【高僧傳】曰、釋素安號了堂、不考姓氏、筑之博多人、至年十三、禮同原本公於筑之保寧、披削禀具參訊久之、一日辭原去、遊相州、謁西澗曇和尚于圓覺、後應諸山之選歷遷東勝・壽福・建長、三大刹、晚構寶珠庵、以退靖、延文五年十月廿日逝、閱世六十有九、荼毘數珠不壞、現設利數百粒、塔于本庵、牓曰如意、賜諡本覺禪師、

庵中に啓書記が舊跡あり、貧樂齋と號す、應安元年八月太神宮領、下野國築田御厨の地當庵に寄せらる所藏文書曰、太神宮領、下野國築田御厨□縣鄉事、地頭職者、可爲建長寺寶珠庵領、之由、被成將軍家御寄進狀、云々、神稅事、每年三拾貫貫之條、雖爲先例、依有子細拾貫、每年可有直納于本家之旨所令契約也、更不可有異變之儀、若有對押事者、非此限矣、仍爲永代之狀如件、應安元年八月三日、本家太神宮、權禰宜正當神主永房華押、

永和四年十二月入道道維下總國の內にて庵領寄附の事あり曰、下總國□鄉神半分事、存爲天長地久國家安穩殊瑞泉寺殿御菩提並先師本覺禪師、燈油料將又亡父、崇中禪門追善、相副彼新相傳證文、永代所令寄附于當庵也、若爲道維之遺跡、所違亂之罪者、可爲不孝之者也、仍寄附之狀、如件、永和四年十二月五日、道維華押、

五年本州の內にて釋祖欽、庵領の地寄進あり曰、奉寄進建長寺寶珠庵、相模國柳田鄉、新日吉敷地內、稻子田畠地、并在家浦濱事、右所者比丘尼祖欽所領也、然爲尙妙彌尼菩提、相副次第手繼證文等、所寄進寶珠庵也、若有違亂罪者、可被處罪科者也、仍寄進狀、如件、永和五年己未四月十三日、比丘尼祖欽華押、

此他庵領の地ありし事、所藏應永中の文書其文は下に註記すに見えたり、【什寶】

△古文書十三通　一は應永十二年十二月長尾左衛門尉憲忠が添狀曰、建長寺寶珠庵雜掌申□廣木鄉秋山村、中澤四郎掠□由□任被仰下之旨相觸之候之處、代官氏重捧請文候、謹令進覽之候、此旨可有御披露候、恐惶謹言、應永十二年十二月廿五日、進上御奉行所、左衛門尉憲忠、

一は應永二十七年六月長尾左衛門尉憲明が下知狀曰、建長寺寶珠庵雜掌申、上野國奈久留見村、參分貳方內瀧安名事、任去月廿六日御奉書之旨、退發知伊豆守違亂、可令全寺家所務之由候也、仍執達如件、退永廿七年六月八日、神谷掃部助殿、瀨下隼人佐殿、

一は天文十六年十月大道寺駿河守盛昌が法憲明華押、今扇谷村に廢跡あり、泉寺當時福山の附屬なり、敷地の寄附狀曰、法泉寺敷地之事、雖細少候百匹之分、寄進申候、從屋形貳百匹之分、被進之候、合三百匹之所、申調如此候、恐々敬白、天文十六丁未十月十三日、寶珠庵侍司、大道寺華押、

一は同十七年八月大道寺盛昌が法泉寺敷地改替の事を沙汰せし書翰曰、法泉寺之爲敷地、去年彼所自公方、貳百匹之分被進候、自拙者百匹之分、寄進申候、然間彼所をば武田殿、依被申子細、自屋形被渡候也、就其泉之谷彼末寺候條、御所望候由承候間、爲替地三百匹之分渡置申候、其上百匹貳百匹之分も、寺中へ被入候、者御年貢目大事候間、上成をば可出之候、猶源六可申入候間、不能詳候、恐々敬白、八月廿一日、法珠庵御侍者中、大道寺盛昌華押、

一は同十八年五月法泉寺再興に因て泉ヶ谷山林伐木の制札曰、制札、右鎌倉法泉寺再興に付、泉谷山新林竹木之事、於自今以後切取有之者、注交名、可有披露者也、仍如件、天文十八年五月廿四日、寶珠庵、

一は正平七年北朝文和元年正月足利尊氏が筑州保寧寺に出せし制札、一は延文六年奧州會津如法寺開山德盛が遺誡案、一は永祿十一年二月保寧寺宗俊が梅洲庵古塔頭の一なり、今は廢せり、雲江への書翰、一は天正九年十月北條氏より東漸院所在詳ならず に出せし修理免の證狀、一は長谷寺寶治中より相續次第の交名已上五通、傳來の旨趣詳ならず、且當庵に與からざる物ゆへ、其文は爰に贅せず此餘三通は既に前に注記せり、

○廣德庵　三十八世印元が構へし所なり【高僧傳】曰、釋印元號古先、世姓藤氏薩州人也、嘉曆二年、拙住建長、延文三年、源連師、叛長壽寺於鎌倉、招元、又建長之西、構廣德菴、命其徒、守之、云々、應安七年正月二十四日寂、世壽八十、宋景濂碑銘を作る事は、長壽寺の條に記せり、

○華藏院　開祖を伯英と云俊、諱德某年八月十二日寂す、當山六十世なり、

○寶泉菴　六十三世存圓が塔所なり【高僧傳】曰、釋存圓字天鑑、隨侍無礙謙禪師于圓覺、永德三年秋八月受府帖住相之淨智、後遷圓覺延長逝、賜諡佛果禪師、

嘉慶二年存圓及衆僧連判の正應永八年四月十一日寂、統派門下諸末寺の規約狀を藏せり曰、正統派門下、諸末寺住持職事、如公方法、不滿二夏、不可退、號住侍在佗處、不可閑却本寺、右於違犯之罪、不可行名字、勝榮寺領、佐波鄉庄主事、於本庵以評議、擇器用可差定、於每年土貢、可爲半分當住、半分修造者也、結解者於本庵、可遂之、嘉慶戊辰二年正月廿三日、法顯・周應・存圓・昌旅、各華押あり、

○龍源庵　古は傳燈庵と云へり、廢絶の後正統庵中の龍源軒を移して改建せしと云、傳燈庵は當山世代中子臺が塔所なりといへり、

○長好院　舊は拙誠庵と號せり、織田三五郎長好を葬せし後今の院號に改めしと云、卽長好が塔あり、さて此餘他所に在て塔頭に屬するもの二十餘院あり、舊くは雲光庵・通玄庵・正受庵・都史庵・傳芳庵・梅峯庵・大智庵・大統庵・梅洲庵・金龍庵・廣嚴庵・龍淵庵・正本庵・華光庵・龍興庵・長生庵・大雄庵・瑞林庵・建初庵・傳衣庵・正法院・金剛院・吉祥庵・一溪庵・岱雲庵・實際庵・竹林庵・正濟庵・東宗庵・壽昌院等總て三十宇、塔頭として當山中に在しとぞ、蚤く廢して今は舊蹟も詳ならず、【鎌倉志】にも廢院たる由、見えたれば貞享已前既に廢亡せしこと識るべし、

新編相模國風土記稿卷之七十八終

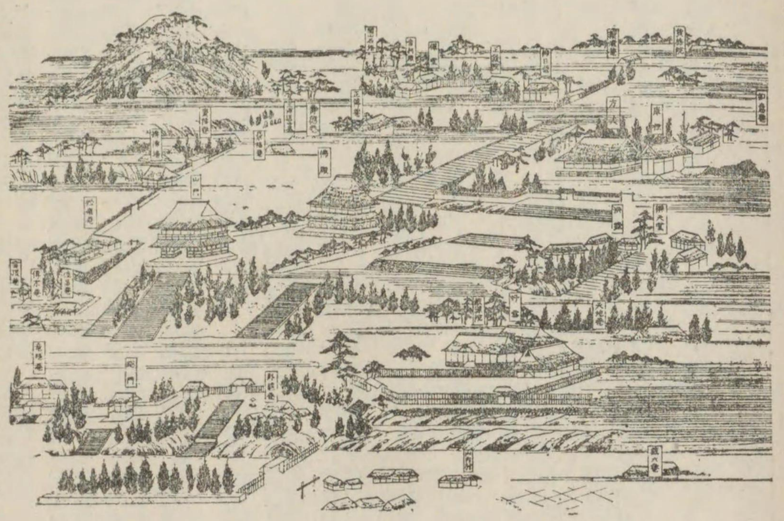
新編相模國風土記稿卷之七十九

村里部　鎌倉郡卷之十一

山之内庄　山之内村二　圓覺寺上

○圓覺寺　瑞鹿山と號す、臨濟宗、鎌倉五山第二の梵刹なり、弘安五年の草創にして開山は祖元佛光禪師と號す【元亨釋書】曰、釋祖元、宋國慶元府人、高曾皆衣冠、母陳氏、夢一沙門抱嬰兒與之乃娠、母思煩苛欲壞胎、一夕又夢、白衣婦人告曰、汝所孕者佳丈夫也、好自保育、其詞懇至、母雖夢中、而左右侍女又聞此言、寶慶二年三月十八日生時白光照室、至試周之日、父母列儒釋墳籍、及百玩好作具、見兒自爲、兒微笑而取佛書、十三襄父、乃勵志投杭之南屏山、禮堂頭北磵簡薙髮、當年受具、十四趨雙徑拜佛鑑、一見許參堂、迨于十七誓不出雲堂、鑑遷化謁月石溪於靈隱、觀物初主大慈、元與觀有世系又兄事南山、思講舊義、往而依之、發意持淨者二歲、江湖高其趣操、一時蹕井樓打水、奉動轆轤、忽然得無礙機用、於是乎、向佛鑑所示狗子無佛性話、及香嚴擊竹頌、又無餘蘊矣、始識得佛鑑妙手之深密、時年三十六、翌年里人萍鄉宰羅季莊、以東湖白雲菴延元、元編蒲而居經七歲、母亡、歸靈隱擧退耕席下、居第二座、太傳賈似道聞元道譽、割于台之眞如、開堂演法、藝香酬佛鑑之法乳、居七歲、明年歸四明天童一環溪請歸第一座、己卯之年、五建長虛席、勸元帥平時宗、具疏幣航海聘名宿、明牧以元充遐扣、環溪授佛鑑法衣、五月離太白六月着太宰府、乃弘安二年也、八月到相陽、平帥執弟子禮、邀入福山、待遇日渥、五年冬圓覺寺成、命元爲開山第一祖、開堂之日、群鹿臨筵、元爲吉徵、卽名山以瑞鹿云々、元謂徒曰、我初不欲來此土、而有些子因緣、故至焉、我在宋禪定中、嘗見神人、峨冠偉服、手執圭、兒挺特、告曰、願和尙降我國、如是者數矣、我不省何事然每神人至、先一金龍來入袖中、亦有群鴿子、或東白之者、或飛啄之態、或上予膝上、亦不測由、及入此國、一時有人語曰、當境有明神、曰八幡大菩薩、威靈甚新、師已樓斯界、盍詣祠燒香一遭、予因此至八幡宮、視殿梁上、有數箇木鴿子、問之對者曰、此神之使鳥耳、故偶焉、予卽知定中之峨冠此神也、老僧到此不偶然耳、汝等造老僧陋質、膝上安鴿子及金龍、辨在季秋、照曰、何事、元笑而不答、月末示疾、九月三日、親書遺書、別太守及語方、亡慮數通、晚以偈示衆、置筆而逝、年六十一臘四十九、謚佛光禪師、開基は北條相模守時宗なり、抑時宗佛法崇敬の志厚く弘安元年僧道隆を請て開山とし、更に伽藍を起立せしと欲し一日隆を俱して其地を覓む、こゝに到る時隆が示すにより共に鑊を下すこと三たび地を卜して歸る【高僧傳】曰、弘安元年孟夏、隆再旋、建長、平師欲別營精藍、隆爲開山一日相偕出於郊外、隆指一處曰、此地宜建梵刹、(圓覺故基)將鑱鋤地三下、平帥亦隨鋤三下、揷莖草而歸、是より時宗役夫を促し、自己も勇を助て地を穿つ、忽一石櫃を掘得たり、中に圓覺經を收む鹿山略記曰、古記云、相州大守平時宗、佛法信敬之篤、將折建一伽藍、拓山般土、朝與役徒均勞、忽爾獲一石櫃、中秘梵書一帙、披而閱則

圓覺寺境内圖



圓覺修多羅了義也、云々、同二年時宗工匠を撰て宋國に遣し、徑山諸堂の製を見せしめ是に擬して當寺を造す、同五年成功に至り祖元を招請して開祖とす曰、弘安二年時宗渡工匠於大宋國、令學徑山諸堂規模、仮于本朝、以造立圓覺寺、弘安五年壬午造畢也、其美麗可觀矣、同年臘月八日、平公拜誦佛光禪師、爲剏業第一祖云々、【元亨釋書】曰、五年冬圓覺寺成、命元爲開山第一祖云々、開堂の日白鹿群がり來たり衆と共に法を聽く、見る者擧て驚歎す、元是を吉徵とし瑞鹿をもて山號とす曰、開堂之日群鹿臨筵、元爲吉徵卽名山爲瑞鹿云々、鹿山略記曰、開堂之日白鹿群臨、隨衆聽法、是以名瑞鹿云々、伽藍開基、又記云、開堂之日、群鹿臨筵、一衆歎異、因以號瑞鹿山云々、寺を圓覺と名づくる事は肇此地を開く時、圓覺經を掘獲し奇瑞に因れり【鎌倉物語】云、此寺を開き給ふ時、地を引時、石の辛櫃を掘出せし間、披て見れば圓覺經あり、さてこそ圓覺寺とは、付られしとなり云々、後越前國山本庄をもて寺領とす按ずるに、此事傳へなくして、據所なきに似たれど、所藏建武元年の文書中に最初の寺領として、知行已に數十年を經るに據る、六年七月時宗當寺を幕府の祈願所とし、尾張上總二國の内若干地を資用に充られん事を申請ふ所藏文書曰、請被以圓覺寺爲御願寄附尾張國富田庄并富吉、加納上總國、畔蒜南庄内、龜山鄕、供給寺用狀右玆寺者爲鎭護國家紹隆佛法究華麗所草創也、地是神仙勝域水石饒奇隣亦建長仁祠鐘梵和韵、飛閣透逸、擘山叢以碁布矣、層軒延袤、出雲霓以綺錯焉、丈六廬舍那金容赫奕乎中央、十二菩薩衆、白毫照耀乎左右、孰與西天之莊嚴、宛然震旦之儀度爰龍象鱗集

香花羅列、宣揚南宗之玄機、恢弘東漸之法水、晝夜四時之座禪、朝暮兩般之諷經、送寒送暑、不愆不忘、凡厥日月所照、車書所通丹祈周遍、鉅天耶重而雲嶽春微、霜林秋葉、縱支山資豈全石鉢、不若廻長久之淵重遙斷當無數之塵却、虔訪先例分捨私物、宛給功德、古今之間、蹤跡居多、就中近存建長之前修、蓋達欵誠於上聞、請施恩恤、必垂允容、以件精舍爲御願寺、禪寄田園永備寺領、輪如雲之祖、助喰霞之供、然則善苗不粃、普灑法雨於九州、禪枝成林、鎭傳梵風於億載、寰宇艾安、幕府菩臣時宗、誠恐頓首謹言、弘安六年七月日、相模守平朝臣時宗狀、

同月十六日執權駿河守業時御教書を下す　曰、圓覺寺事、爲將軍家御祈禱所、任相模國司申請、所被寄進尾張國富田庄、并富吉、加納上總國畔蒜、南庄內、龜山郷也、者依仰下知如件、弘安六年七月十六日、駿河守平朝臣業時華押、

時宗書を添て當寺に附與せり　曰、以圓覺禪寺、申成將軍家御祈禱所候、仍御教書進之、食輪已轉、法輪常轉、必及龍�span之期、感悅之至、不知所謝、委細期面拜、恐惶謹言、七月十八日、圓覺禪寺方丈侍者時宗七年三月閏月の齋料として米百石を寄す　曰、圓覺寺齋寺、潤月米百石、可沙汰進之由、被仰下候也、仍執達如件、弘安七年三月廿六日、得重公文所、頼綱奉、時宗の袖判あり、九月栄園の地を寄附あり　曰、圓覺寺知事、申栄園事、以正觀寺上畠除正觀寺、并小福禮中、山上散在小畠等、可用當料栄園之由候也、仍執達如件、弘安七年九月九日、寺奉行御中、　頼綱華押、眞性華押、業生華押、九年正月上野國北玉村の地をもて佛事用途の料に充つ　曰、上野國北玉村事、以彼村公私之所出、所彼宛御墓堂御佛事用途也、早爲沙汰人、可致進濟[illegible]田由候也、仍執達如件、弘安九年正月廿三日、散位華押、左衛門尉華押、正應二年五月下總國毛成・草毛二村の地を神四郎入道了義寺領に寄附す　按ずるに、此時の寄附狀を傳へざれど、今所藏する、延慶元年の文書中に見えたるをもて爰に記す、○六年六月貞時尾州篠木庄の地を造營料に宛行ふ　所藏文書寫曰、尾張國篠木事、當寺造營[illegible]爲扶所寺家可致其沙汰之狀如件、正應六年六月廿五日、貞時華押あり、

永仁二年正月貞時家禁制の條目を定む　所藏文書曰、禁制條々事、僧衆不帶兎丁事、禪律僧侶夜行他宿事、若有急用之時者、爲長老之計可差副人也、比丘尼并女人入僧寺事、但許二季、彼岸中日、二月十五日・四月八日・七月盂蘭盆兩日、此外於禪興寺者、每月廿二日、於圓覺寺者、每月初四日可入也、四月八日、花堂結構事、戒臘碑結構事、僧侶横行諸方採花事、僧衆去所不分明出門事、延壽堂僧衆出行事、僧侶着日本衣事、僧徒入尼寺事、四節往來他寺作禮事、僧衆遠行之時送迎事、右條々於違犯之輩者、不論老少、可令出寺也、若於有子細者、可揚申其名之狀如件、永仁二年二月日、貞時華押、

其後貞時父時宗が芳志を繼ぎ、巨鐘を鑄造して永く法器に備へんと時の住僧西澗と議し彼が教に仕せ、江島辨財天に祈請しけるに不慮の示現を蒙り、宿龍池の水底を搜りて金銅一塊を得しかば感激に堪ず、遂に此銅をもて鑄鐘の功を竣ふ、是故に江島より石像蛇形の辨財天を洪鐘の眞體として鐘樓の傍に勸請し、洪鐘大辨功德天と號す時に正安三年八月なり　略緣起曰、貞時公芳躅を繼ぎ、政道を行ひ、專父の業を墮さず、華

鐘を鑄て當寺に寄、法器に備んとして、關八州の鳥氏に命じて、是を造らしむるに、兩度までにして成らず、其頃當寺第六世西澗和尚は、宋朝の人にして、當代の宗匠なりしかば、貞時此事を尋問給ふに、答て曰、公の孝心純精なり、然れども大器を成、豈人力のみにして及ばんや、深く佛神の加護を祈給はんには如ずと、貞時此言を信じて、當國の鎭守、江島に參籠し給ふこと、凡七日に滿する夜、靈夢を蒙り、直ちに龍池に趣給ふに、波底に大なる金銅の形、龍頭の如くなる物を得給ひて、信心肝に銘じ、是を持しめ御亭に歸り給ひて、西澗和尚に件の靈驗を告給ふに、和尚の云く、龍天公の大願心を感じて、授給ふ靈物なり、何ぞ世上にあらゆる銅滓ならんや、速に工に命じて巨鐘となし、當寺に喜捨し給はゞ、孝心成するのみならず、神慮にも協ひ、況や又人天鬼神を感ぜしめ、無明煩惱の夢を醒し、王侯より下萬民に至るまで、現當の利益を蒙る時は、舜日と佛日と共に輝、堯風と禪風と同扇を、國家晏清ならん、然れども信を衆人に募り、緣を勸ば尚可ならんと、貞時感激して、乃一千五百人を化緣し、功を全して正安三年八月十七日巳時、大鐘始て樓に懸り、洪音宇宙に發せり、殊に龍天の授られし靈銅を以て、鑄給ふ洪鐘なれば、江島より弘法大師の彫刻し給へる、石像蛇形の辨財天を勸請し奉り、如法に供養し、永く當寺に安置し、洪鐘の眞躰となし、洪鐘大辨功德天と崇奉り畢ぬ云々、

嘉元元年貞時又寺家の法制を定む　所藏文書曰、圓覺寺制符條々、僧衆事、不可過二百人、粥飯事、臨時打給一向可停止之、寺中點心事、不可過一種、寺參時晨從輩儲事、可停止之、小僧喝食入寺事、自今以後一向可停止之、但擅那免許非禁制之限、僧徒出門女人入寺事、固可守先日法、若違犯者可追放之、行者人等帶刀事、固可禁制之、若有犯者、可追出之、右所定如件、四年九月貞時先に寄附せし栄園の地を收め當庄の內吉田郷にて其替地を寄附す　曰、山內庄吉田郷內、田壹町在家事、爲正觀寺前替、所寄進也、守先例可有其沙汰[illegible]嘉元四年九月廿七日、圓覺寺長老沙彌華押後又其地を收て舊地に復す　曰、正覺寺前地事、爲吉田郷內田在家替、可令致沙汰給、恐々謹言、七月廿七日、圓覺寺長老、崇演華押、

德治二年五月貞時當寺毎月四日大齋の結番を定め、其交名を記して下知す　曰、圓覺寺毎月四日大齊結番事、一番長崎左衛門尉・長崎木工左衛門尉・周防前司・鳥田民部大夫入道・安東四郎右衛門入道・足立源左衛門入道・諏訪六郎左衛門尉・合田四郎左衛門尉、二番工藤次郎右衛門尉・粟飯原左衛門尉・葛山左衛門尉・大瀨三郎左衛門尉・本間太郎左衛門尉、三番大藏五郎入道・長崎宮內左衛門尉・越中局・大森右衛門入道・廣澤彈正左衛門尉・大瀨次郎左衛門尉・葛山六郎兵衛尉・岡村五郎左衛門尉、四番伊具左衛門入道・小笠原孫次郎・佐介殿・高崎三郎左衛門入道・土肥三郎左衛門尉・下山刑部左衛門入道・鹽飽三郎兵衛尉・佐野左衛門入道、五番武田伊豆守・萬年馬入道・武田七郎五郎・澁谷十郎入道・粟飯原後家・亘理四郎左衛門尉・但馬新左衛門尉・齋藤圖書左衛門尉、六番工藤三郎右衛門尉・桑原新左衛門尉・諏岐局・澁谷六郎左衛門尉・荻野源內左衛門入道・淺羽三郎左衛門尉・蛭河四郎左衛門尉・千田木工左衛門尉・七番安東左衛門尉・工藤右近將監・佐分越前守・南條中務丞・小笠原四郎・曾我次郎左衛門尉・工藤左近將監・千竈六郎、八番諏訪左衛門尉・鹽飽右近入道主殿頭・諏訪三郎左衛門尉・安保五郎兵衛入道・五大院太郎右衛門尉・本間

五郎左衛門尉・岡田十郎、九番尾藤左衛門尉・長崎四郎左衛門尉・神四郎入道・澁河次郎左衛門入道・安東平内右衛門入道・工藤次郎右衛門尉・内島四郎左衛門尉・諸岡民部五郎、十番長崎左衛門尉・尾藤六郎左衛門尉・長崎後家・權醫博士・狩野介・尾張權守・矢野民部大夫・粟飯右衛門四郎、十一番南條左衛門尉・岡村太郎右衛門尉・尾藤五郎左衛門尉・武藤後家・中三中務入道・佐藤宮内左衛門尉・萬年新馬允・矢田四郎左衛門尉、十二番工藤右衛門入道・五大院左衛門入道・出雲守・妙鑒房・武田彌五郎・諏訪兵衛尉・内島後家・水原圖書允、右守結番次第無懈怠可致沙汰之狀如件、德治二年五月日、貞時袖判あり、　延慶元年九月西園寺前右大臣公衡が執申により伏見上皇宸筆の扁額を下し賜ふべき由沙汰せらる　曰、圓覺寺額事、申入持明院殿之處、即被染宸筆之由被仰下候也謹言、九月廿九日、西園寺公衡華押あり、因て十一月越後守貞顯此事を鎌倉に申下す　曰、圓覺寺額事、任被仰下之旨、可令申入仙洞給由、内々任申西園寺殿候處、悉被下宸筆候、子細定長崎三郎左衛門入道、令言上候歟、以此旨可有洩御披露候恐惶謹言、十一月七日、進上尾藤左衛門尉殿、十二月勅して定額とせらるゝ旨前權中納言經親院宣を傳へ　曰、建長・圓覺兩寺可爲定額寺事、即被宣下候畢、官符二通被召遣候由、可被申關東之旨、院御氣色所候也、仍言上如件、經親誠恐頓首謹言、十二月廿二日、參伊豆守殿、經親上、　即官符を下され、伏見上皇宸筆の扁額を下し賜ふ　曰、太政官府相模國司應以當國大圓覺禪寺爲定額寺事、右太政官今日下治部省符偈、得沙門崇演今月日奏狀偈、玆伽藍者、先父正五位下行相模守平朝臣時宗、弘安聖曆大淵獻歲、殊凝棘信專所草創也、鏤檻文椀之鮮妍也、宛然香苑闕之奇麗、金奏玉相之照耀也、執與白毫水之嚴飭、於是不朽不退偈四禪三昧之妙行、于晨于夕致天長地久之祈禱、料知王法籍佛法而□盛、佛法籍王法而紹興者乎、早以私寺專爲定額、憶厥先蹤、不可談論、且率由願成就寺之往躅、所寄進大圓覺寺之仁祠也、任彼貞應之佳謨、將賜官符勤勅願而已、何況恭振宸毫、幸下題額、誠是希代之嘉謨也、豈非萬葉之美談哉昔陳室高祖帝之操聖翰也、垂字點大莊嚴寺之露、今本朝太上皇之染天筆也、耀稱謂於大圓覺寺之月、在今思古彼既瓊焉、抑崇演倩顧、至愚之庸材、早謝衆務之繁機、雖歸佛陀之眞乘、猶慕社稷安全、奉君之道報國基之謂也、凡當國者、奉進將軍家所爲御願寺也、然寺高達鶴唳於九霄、宜飛鳳詔於千里、望請天恩□准先例被賜官符、以件寺爲定額寺、將擔護國家、令與隆教法、然則金輪運造、永仰栗陸之日、寶算德久、鎭伴華封之年、者右大臣宣、奉勅依請、者省宜承知、依宣行之、者國宜承知、符到奉行、修理宮城使、從四位上行右中辨、藤原朝臣華押、修理東大寺大佛長官、正五位□行左大吏、小槻宿禰華押、延慶元年十二月廿二日、□　正中二年二月沙彌蓮淨尾州中島郡の采地をもて、寺領に寄附す　曰、奉寄進圓覺寺、尾張國中島郡南條三宅鄉内國分、溝口兩村田畠等事、右件兩所田畠者、蓮淨爲先祖開發之領主、代々知行、無相違、而以熱田社奉號、本家上分進濟之外、無他役之地也、然間爲後世菩提現世安穩、爲副彼田畠所當之注文永所奉寄附圓覺寺也、爲後日龜鏡寄進之狀如件、正中二年二月十五日、沙彌蓮淨華押、　嘉曆二年十月北條相模守高時、寺家の法令數條沙汰す　曰、圓覺寺制符、佛法修行事、任本願之素意、方丈可被執行之、於世事者、可有談合于寺家行事、是則先人之遺命也、後昆宜服膺焉、寺官事、於兩班頭維那者、行事伺案内可請定、其外者方丈僧侶行事相共加掛塔事、談合寺家行事可入法器之仁也、大小者舊事、請定之後一回未滿者、不可載名字於床曆也、僧衆事、不可過二伯佰拾人、小僧喝食事、不可過五人諸堂并職者布施事、佛殿・僧堂・舍利殿・輪藏・御影堂・司庫子此外可停止之粥飯事、大者舊之外、止請物可着僧堂將又臨時打給一向可停止也、寺中點心事、不可過一種、寺領事、給主連々迂替、庄務之煩費、濟物之闕乏、職而由斯、向後任舊例、都聞并行事可致沙汰也、住侶出寺事、隨其輕重可有沙汰、以片言不可斷獄、亦於出寺之時者、可被談合行事也、行者等帶刀事、固可禁制、且件輩動致諍論、剩及忍傷、僧中沙汰弛案故歟、早行家行事可令進止也、僧侶夜行他宿事、若有急用者、爲長老之計可差副伴僧也、比丘尼并女人入僧寺事、彼岸中日、二月十五日、四月八日、孟蘭盆、兩日、每月四日・九日・廿六日、此外可禁制也、僧衆去所不分明出門事、延壽堂僧出門事、僧徒入尼寺事、僧衆遠行時送迎事、條々可停止、於違犯之輩者不論老少可令出院也、右所定如件、　元弘三年八月當寺領尾州富田庄の地を收られ、中納言三位局に賜ふ旨綸旨を下さる　村内大工金藏書藏文書曰、當寺領尾張國富田庄事、被召返所被下中納言三位局也、綸旨□可被存知者天氣如此、仍執達如件、元弘三年八月十六日、皇太后宮權大進華押、建武元年正月尾州篠木庄の内石丸保野口村國衙所務の地當寺請所として領知すべき旨下知せらる　所藏文書寫曰、尾張國篠木庄内、石丸保野口村、國衙所務事、爲請所圓覺寺領知、更不可相違、御年貢者任員數、無懈怠可被致、其沙汰之由、國宣所候也、仍執達如件、建武元年正月三十日、圓覺寺僧侶御中、散位光延袖判あり、　此頃當寺領、越前國山本庄の地を湯淺次郎左衛門尉宗顯押領せしかば、官に申請しに二月綸旨國綸旨曰、當寺領越前國山本庄、如元知行宣を下し給ひて永く安堵せしめられ、不可有相違、者天氣如此、仍執達如件、建武元年二月廿六日、左衛門權佐華押、國宣曰、圓覺寺領當國山本庄、寺家如元可知行由事、任綸旨可被仰下之由、國宣所候也、仍執達如件、二月廿八日、謹上、越前國御目代殿、左衛門尉行明、已上二通共に本書は失ひ寫なり、　三月彼國の守護、新田左馬權頭義貞に決斷所の牒書を下さる　曰、雜訴決斷所、牒越前國守護、圓覺寺雜掌契智申、寺領當國山本庄、湯淺次郎左衛門尉宗顯押領事引申狀具書、右止彼押領、可沙汰付雜掌於庄家、者り牒、建武元年三月二十四日、左大史小槻宿禰、左少辨藤原朝臣各華押、　七月尾州篠木庄の内、石丸保野口村の地請所として當寺の所務たる旨彼地に國宣を下さる　曰、尾張國篠木庄、石丸保野口村、國衙所務事、爲請所地圓覺寺可令領知之由、國宣如此、□□可令存知給被仰候也、仍執達如件、建武元年七月一日、謹言、　又同國富田篠木兩庄中分の儀を止め、年貢は領家に收むべき旨綸旨を下さる　綸旨曰、當寺領尾張國富田篠木兩庄事、早止中分之儀、守濟例可濟領家年貢、者天氣如此、仍執達如件、圓覺寺長老禪室、是も寫にして、然も奉行人の名、并に年月日を脫す、按ずるに、後に引用する牒書に據に、是建武元年七月十一日なる事灼然たり、　此事に因りて十一月彼國衙に決斷所の牒書を施行し　牒書曰、雜訴決斷所、牒尾張國衙、圓覺寺雜掌申、當國富田篠木兩庄事、牒任今年七月十一日綸旨、止中分之儀、守濟例可濟領家年貢之由、可令下知者以牒、建武元年十一月十八日、從一位源朝臣、參議右大辨

藤原朝臣、左中辨藤原朝臣、左衞門權少尉平朝臣、前常陸介藤原朝臣、各華押、國宣を行はる　曰、圓覺寺雜掌申、當國富田篠木兩郷事、決斷所牒如此、早任今月十八日牒之旨、可令下知給之由、國宣所候也、仍執達如件、建武元年十一月廿二日、尾張國御目代殿、奉はり人名を脱す、是は本書にあらず、の三年九月元弘以來所務の寺領元の如くたるべき旨、尊氏證狀を與ふ、曰、元弘以來被收公當寺領并當知行地事、如元不可有相違之狀如件、建武三年九月十五日、圓覺寺長老尊氏華押、延元元年七月又直義より尾張・越前・上總・下總・上野・出羽等の國々にて寺領安堵の證狀を授與あり　曰、當寺領尾張國篠木庄、富田庄、國分・溝口兩村、越前國山本庄、泉・船津兩郷、武藏國江戸郷内、前島、上總國畔蒜南庄内、龜山郷、下總國大須賀保内、毛成・草毛兩村、上野國玉村、御厨内、北玉村郷、出羽國北寒河江庄、五箇郷、(吉田・堀口・三曹司兩所、窪目)地頭職事、任去々年十一月八日官符關東安堵等、可令知行給之狀如件、建武四年七月十日、謹上圓覺寺長老左馬頭華押、曆應三年二月直義寺家の法式を定む　曰、圓覺寺規式條々、可令停止主賓不和之儀事、近來或號一揆、或稱門徒、成黨結徒、及寺家違亂之由有其聞、甚不可然、俗家猶戒之、況於釋門哉、向後云住持云大衆、若有所存者、先於寺中可令和睦、欝陶不休者、觸訴官方可仰藏斷、無左右有嗷々之儀者、糺決張本嚴密可被處其科也焉、僧衆事、不顧本願之素意、不量寺領之多少、連々加增之條無其謂、於當寺者可爲三百人也、但當時見住分雖用捨、迄自然減少之期、一向可令停止、掛塔定數治定之後、赴軍以下闕分非制之限、職人事、以公儀可令撰補之、一廻未滿之仁不可載名字於床曆、將又暖寮已下經營、堅可令停止之、若有違犯之儀者、須令出院也焉、寺領庄務事、住持寺營加談議、撰補康直之器用、無指過失者、住持雖遷替、輙不可令改補之、若亦有非法之儀者、且經寺家藏斷且守官家成敗、不可許諸寺之共住矣、塔頭事、所望出來者、帶關東注進、可令參訴京都、不帶御敎書者、兼不可及土木之沙汰凡諸塔頭爲本寺及違亂之由有其聞、專背物儀歟、每事可致合躰、若無其儀者、可處科條焉、不可入武具於寺中事、近日隱置皮具足於寮舍之由、普以風聞、若然者縱雖爲巷說先差遣官方使者、加點檢其實露顯者、子細同前矣、行者人等狼藉事、寄事於寺中警固、猥帶弓箭兵仗、縱寺家權勢、張行非法、忽諸衆僧之由有其聞、慥可加嚴制、若違犯者、爲處罪科、宜召渡官方焉、右所定如件、曆應三年二月日、左兵衞督源朝臣華押、五年三月又法式追加の條を令す　曰、圓覺寺規式條々追加分、新命長、老參隨僧衆、(付行者下部等)事、彼是不可過二十人、於之分者、不謂僧衆之多少、先可免許掛塔、但相加件人數之後者、至有限僧員可相待減少期之子細相問先事書焉、沙彌喝食事、之衆僧之外、一寺分不可過廿人、子細同前西堂大書舊事、不論人數之增減、可免參暇之條同前、次座位事、於西堂者、見諸山之施行、宜守彼狀、其外五山者舊、會合之時者、首座者可爲都寺座上、書記者可爲監寺座上、是則爲紹隆佛法、所重頭首勞功也焉、僧衆行儀事、近年諸寺之法則、後庭之上、或號緣者之在所、構居宅於寺外、致晝夜之經典、或於寺中、企利錢借上之計略由、有其聞、佛法衰微之基、不可不誡、縱雖爲風聞之說、住持大衆相共、可被禁過、若猶有違犯之闕者、直仰官家、可加嚴制也矣、寺領庄務事、亘細載本事書、宜守其法、但雲水僧侶、累年之所務不可然、仍可爲一任參箇年、凡於延俣者、須依其仁之廉否、將又見任都聞都官、不可知、行寺領爲亂決諸給主之濟否也焉、次寺家沙汰事、不論大小事、於方丈可加談議、無住持之承諾者、敢不可令施行、且於評定人數者、宜爲住持之精撰也矣、右守度々制法、不可有違犯儀狀如件、曆應五年三月日、左兵衞督源朝臣華押、

觀應二年三月今川五郎範國、駿州葉梨庄の内を寺領として寄附あり　曰、寄進圓覺寺、駿河國葉梨庄内、上郷、(除崇壽寺領)同中郷等、地頭職事、右件郷等、永代所令寄附之狀如件、觀應二年三月廿日、庄彌心省華押、五月尊氏證狀を副ふ　曰、奉寄圓覺寺、駿河國葉梨庄内上郷、(除崇壽寺領)同中郷等、地頭職事、右任今河五郎法師、(法名心省)申請之旨、所寄進也、守先例可致沙汰之狀如件、觀應二年五月九日、正二位源朝臣華押、文和三年九月先に定置所の禪刹の法制固守るべき旨、基氏令條を示す　曰、大小禪刹規式條々(文略)奥書云、右大小禪院、曆應以來、被定置規式之所、法則尚以陵遲之條、甚不可然、於向後者、堅守度々制法等、不可有違犯儀之狀如件、文和三年九月廿二日、左馬頭源朝臣華押、十一月尊氏書を下して寺務の事を沙汰す　曰、鎌倉圓覺寺所務事、開山塔主、及門徒、并諸塔主、西堂、耆舊、加評議、住持可被計然者也、此外他寺僧、不可有其綺之狀如件、文和三年十一月廿日、當寺正續院主、尊氏華押あり、其後、後光嚴帝宸筆、佛殿の扁額を賜ふ、春屋書を添て當寺に傳ふ　曰、貴寺佛殿寶額、□勅筆降賜候、誠山門千歲恩澤、叢林萬方光輝候哉、珍重々々、恐惶謹言、正月廿五日、拜覆、圓覺寺方丈禪□妙葩華押、遂啓候、御祝鞍馬等料五千匹、天奏萬里小路中納言殿御方、傳達候畢、重恐惶謹言、康安元年僧義堂當寺に在て諸僧と梅字二十四首の唱和あり　【日工集】曰、康永年辛丑、在圓覺、與臨大照諸公、唱和梅字二十四首、所謂關東詩戰是也、按ずるに、原文康永に作るは、傳寫の誤なり、辛丑と記するかうへ、集中の年序、康安なること必せり、貞治元年義堂當寺記室に在り、見住大喜の請に任せ、景南の二字を室の扁額に書す　曰、貞治元年壬寅夏余在圓覺、承大喜命、居于記室新扁景南二字室之北軒、嘗有扁曰耕穉、蓋軒前舊種秋花也則廢矣、【空華集】曰、圓覺記室寮北軒、扁曰耕秋、壬寅夏忝職于玆、有感而作、十二月駿州下島郷の内大屋勘解由左衞門尉が闕地を當寺領に寄附あり　所藏文書曰、駿河國下島郷内、大屋勘解由左衞門尉跡事、守御寄附狀之旨、渡付彼下地於圓覺寺雜掌、可被執達請取之由所候也、仍執達如件、貞治元年十二月二十一日、伊達入道殿道儀華押、宗久華押、二年閏正月尼性昭が追福の爲、今川範國入道心省が請に任せ、駿州下島郷の郷司職を當寺に寄附ある旨、將軍義詮證狀を寄す　曰、駿河國下島郷、郷司方事、任今河入道心省申請之旨、爲尼性昭追善、所令寄附也、早爲圓覺寺領、守先例可被致沙汰之狀如件、貞治二年閏正月十七日、當寺領長老、權大納言華押、二月今川上總介範氏、下地を雜掌法實に渡すべき旨由比左衞門尉光行に書を授じて令す　曰、駿河國下島郷郷司職事、守御寄進狀之旨、渡付下地於圓覺於雜掌法實都寺、可執達請取狀、使節更不可有緩怠之狀如件、貞治二年二月十六日、由比左衞門尉光行渡狀を出す　曰、駿河國下島郷、郷司職殿前上總介華押、即由比光行渡狀を出す　曰、駿河國下島郷、郷司職事、任二月十六日御敎書之旨、沙汰付下地於圓覺寺、法實都寺、申候畢、仍渡狀如件、貞治二年二月十八日、光行華押、

五月後光嚴帝勅して開山佛光に、圓滿常照國師並に佛國に應供廣濟國師の諡號を賜ふ、此時の勅書及び兩國師號勅筆の書、天龍の春屋、書を添て當寺に贈る曰、進上勅筆兩國師號勅書、附四條大納言殿御書、貞治二年五月三日、妙葩拜白、と記して、勅書等今見る所なれば、佛光佛國二國師とする者、猥なるに似たれど、【高僧傳】妙葩傳中に、貞治初、後光嚴屢召聞法要受衣盂處禮甚篤、賜國師之號、葩奏曰、先師夢窓、道契三朝、特賜徽號、然而佛光、佛國、二祖、未蒙此號、願諡二師、恩莫大焉、某何敢當之、上善其事重諡佛光曰圓滿常照、賜佛國曰應供廣濟焉云々、と見えたる照應すれば是に從ふ、又佛光の傳には光嚴皇帝賜圓滿常照國師云々、と見へたり、光嚴と云ひ、後光嚴と云ひふ合せず、按ず　三年正月管領基氏書を下して寺務等の事舊例を守り、緩怠あるべからざる旨を令す曰、圓覺寺寺務等事、背曆應康永事書、悉亂規式之由有其間、甚不可然、縱雖爲住持未補侍者評定衆各相談之可專修造安衆、以下更不可有緩怠之狀如件、貞治三年正月廿九日、當寺評定衆中、左兵衛督押因て是月先規の法式嚴密に守るべき旨、寺家評定衆連署の令狀を出せり曰、圓覺寺規式條々云々、奥書曰、以前條々固守此式、可致嚴密沙汰候雖爲後々司人不可亂彼法則、仍爲後證評定衆、各所加連署之狀如件、正續院主・祖岳・法舟・祖照・景仙・道矩・桂蕚・維邦・祖松・都寺・法初・都管圭照・首座省紹安養・法清・各華押あり、貞治三年正月日、　六年八月今川範國入道心省、駿州下島鄉の地頭職を當寺に寄附す曰、寄進圓覺寺、駿河國下島鄉地頭職事、右爲七世父母追善、七年三月其事に因心省同國目代の許に下知狀を出し曰、駿河國下島鄉地頭職事、以故御所御判、寄附申圓覺寺處也、當給人大喜安藝入道、伊達入道等跡事、打渡下地於寺家雜掌、可執達請取之狀如件、貞治七年三月十六日、當國目代嚴、沙彌華押、其旨正續院の許に書簡を投じて示す曰、駿州へ罷越候者、下島鄉地頭分事、如令申候可致沙汰之由存居候、此病氣にさへられ候て延引候間、無刀仰目代、渡進寺家雜掌候也、爲其如意候哉、此內大喜安藝入道、知行分日錄進之候、伊達入道分は、未進候、追可取進候也、但それ候はずとも、寺家知行候者、不可有子細候樣存候、心省死跡、於今者心安存候、思ふ事なくまち候べく候、恐惶敬白、三月十六日、正保院侍司、心省華押、　應安二年義堂新に房室を營み石屏と稱す【日工集】曰、應安二年己酉三月於圓覺經始一房、乃扁石屏、有軒曰宿鳳、須手種梧栖時、內府賜觀音并朝陽對月三幀而慶新成、蓋余爲投老而所謀也、【空華集】曰己酉夏、遷居石屏屋成竺心、東谷二公拉諸友來賀、次東谷韻謝之、盧公舊隱數間房、有石如屏蘇半荒旋拓矮窓延月色、擬穿隣壁借燈光、洞庭圖畫何須愛、川顯歌詞也是常、二老往來多逸興、妨作戲更逢場、　不是年九月暴風發て諸屋を壞る己酉歲九月二日夜大風破屋、明日及午及止、余時在圓覺石屏、作三偈、兼簡堂中首座東谷一笑、同三年九月再暴風の爲に房室破壞に至る應安三年庚戌九月二十日、大風俄作人畜驚散、鎌倉諸谷無一不破壞推折者二十三日、余步往石屏爲俯屋也、謂諸子姪曰、圓覺風損余室爲最、嗟乎去年九月三日被飄蕩、今年又甚奈何々々天災

也、雖聖人有弗逃之者、又吾室、上漏下濕、無一乾者、梧桐則無悉可喜也、龍山墨蹟雪樵義堂說、開山處贊觀音、僕、亦無悉或喜矣、因語諸同脚曰、屋子破損在々、皆是吾無以爲愛、惟經卷佛像墨寶損者、是爲大憂、今則無悉矣、　五年二月入道仍海故將軍義詮の爲、武州丸子保平間鄉の采地半を裂て當寺に寄附す所藏文書曰、寄進圓覺興聖禪寺、武藏國丸子保、平間鄉內、知行分半分事、右志者且爲奉訪寶簽院殿御菩提、且資仍海現當、至未來際、所令寄附也、應安五年二月十五日、仍狀如件、仍海華押、七年十一月二十三日上副寺寮より火發して、堂宇煨燼となる、時に副寺僧自火中に身を投じて死す、其他死亡人居多なり【花營三代記】曰、應安七年十一月二十三日戊戌、圓覺寺回祿、自上副寺出之、仍副寺帶衣鉢、飛入火中死、同契庵僧□□正續院僧六人、續燈之僧十三人、已下寺中、上下燒死人數、不可勝計云々、【日工集】曰、應安七年甲寅十一月二十三日、臨夜忽報當山內猛焰亘天、少頃人告圓覺寺失火、余從諸子枝步衝人往山內、道路陝隘、人馬如雲不能達圓覺、遂到禪貞方丈、則黃梅大享、及快恬、二兄亦來、廼知長老大法、潛出匿山崎寶積、二公左右捉余手、引過寶積、與大法相見、懇言再住之意、大法固不欲再住諸納推住侍、上舉而歸寺矣、假以大瑞寮爲方丈、蓋審其天之起處、則上副寺其日與露柴者論價、罵辱柴主男、臨夜柴主潛入寺、投炬於柴屋、而遁去、副寺知之悔不及矣、乃急過大仙庵、告上事云、與諸眷決別、直入佛殿、禮佛三拜而投烈焰堆中矣、　二十四日義堂管領氏滿の邸に到りて謁見し、舊年天龍寺回祿の例により田地を寄て修造を助けられん事を乞ふ、氏滿許諾す二十四日參府、々君出迎茶話、余白曰先年天龍煨燼之后、尊氏將軍打歸于田地以助修造、圓覺回祿、今府君欒其例卽可也、府君肯之、二十八日氏滿當寺に來りて親巡し、見住大法に謁し、田地寄附の事を命ず二十八日、府君入圓覺、而見燼迹假方丈、慰問住持大法、次正續、黃梅、因約當捨田地也永和元年二月氏滿駿河國佐野鄉を以て當山に寄附す八年二月十七日、大高刑部少輔、自鎌倉來、告公議以佐野鄉捨入于圓覺寺、先の契約に因てなり是乃府君預所約、七月當寺造營の諸材運送の路次、海陸爲伽藍再興也、煩なく輸致すべき旨、氏滿下知せしむ所藏文書曰、圓覺寺造營材木等運送事、河海陸關渡無煩可勘過、若有違亂之在所者、就寺家注進狀、可有罪科沙汰之狀、依仰執達如件、應安八年七月五日、當寺長老、　二年閏七月將軍義滿、越後國加治庄の內寺領として寄附あり曰、越後國加地庄內、佐々木備前々司時秀法師跡事、任御寄進狀并御奉書之旨、可被沙汰付圓覺寺雜掌之狀如件、永和二年閏七月十日、長尾彈正左衞門尉殿、散位華押、　八月造營の奉行人等山內に會して速成の功を議す、時に義堂三年を期として十州管內棟別錢及び鎌倉中諸課役を以て充られんには、其功速ならんと云ふ、奉行人等是を可とす【日工集】曰、八月五日、辨齋邀請圓覺、造營奉行官人上杉刑部等諸公、因議寺門營功、余曰凡今時化緣最難、又官家命國中大名助緣亦難成、恐來十月佛殿立柱、而一兩年不終功、則柱爲風雨殘朽不如不立柱也、若夫官家創法、限三年以十州管內、關稅棟別、及鎌倉中諸課役等、充之暫停它寺社土木事、則雖不十成其功略畢、不然則必難成矣、諸奉行、僉曰可矣、

又曰、寺家田地分爲二日常住、曰造營、各二十二日義堂上別施行則內無互用之辜、外免嫌疑之誚、杉刑部大輔憲春及び兵部少輔能憲の許に到りて此事を議し、猶氏滿の第に進て寺門再興の爲、前件の事を說く、氏滿許諾す、是日肇て工を命ず二十日、早冒泥步屐入刑部宅、會議圓覺造興并棟別之事、次入管領兵部第、面議同前、次入府與君相見、面稟圓覺再興棟別關稅鎌倉中課役等事、府君諾之、是日圓覺命工初試佛殿材木晦日奉行二人當山に來たり十州河・甲斐・相模・武模・安房・上總・下總・常陸・上野・下野の十州なり、按ずるに、駿棟別錢十文を造營の要脚に宛らるゝの公文を授與す【日工集】曰、八月晦日、圓覺奉行壹岐彈正至矣、田棟別十州公文、余乃謁府致謝、徑圓覺、方文集評定衆者告公文事、衆皆合爪而謝曰、是和尙の力也、九月其國々の守護地頭等に將軍の下知を傳ふ所藏文書曰、上野國棟別錢貢拾文事、所被付圓覺寺造營要脚也、早相副守護使於大勸進雜掌、不論寺社本所領、不除地頭堀內、平均可被致其沙汰、且寄絳於左右、不可致狼藉之狀依仰執達如件、永和二年九月二十四日、刑部大輔入道殿、沙彌華押、此餘上總・安房・下野等の下知狀寫あり、其他の文書傳は十月細川武藏守頼之、京師より碩材を送りて柱梁の料に宛つ、最奇世の良材人目を驚せり【空華集】送宗輔童行歸武陵詩序曰、璃鹿松提煆於甲寅、後三年丙辰冬、有信心檀越武州大守、自京師裝鉅舶送碩材、助吾大殿之役、其材梁若柱、擧美木、百圍、文理縝緻、觀者成市曰天下奇材也、二十八日常州小河郷の地を造營料に充らるゝ旨、奉行依田某公文を授與あり【日工集】曰、十月二十八日奉行依田、出造營料所公文、廼常州小河郷也、余往圓覺會評定衆於都閣寮、而示公文、衆咸喜曰寺其再興矣、二十九日佛殿柱立の儀あり、氏滿も上杉能憲及び奉行人等を俱して爰に會す二十九日圓覺佛殿立柱、府君管領奉行等入山、證明立柱儀畢、本寺及諸山見住長老、就于方丈、而點心并打齋、十一月常州小河郷の地、明年より三年を限造營料に充らるゝ旨、沙汰せらる文書寫曰、常陸國小河郷事、自明年以三ヶ年所被指置圓覺寺造營料所也、有談合寺家并造營奉行、可被其沙汰之狀、依仰執達如件、永和二年十一月二十四日、報恩寺長老、沙彌華押、十二月鎌倉中、間別錢明後年より三年を限、造營の要脚に充らゝ旨、下知せらる曰、鎌倉中、間別錢一文事、被寄圓覺寺造營要脚也、自明後年、三ヶ年宛取之、嚴密可被致其沙汰之狀、依仰執達如件、永和二年十二月九日、報恩寺長老、沙彌華押、三年十二月現在僧契充が申請により、諸國寺領の地永く諸役を免除し、更に勅施せらるゝ旨官符宣を下し賜ふ曰、左辨官下圓覺禪寺、應因准傍例、免除造伊勢大神宮、役夫工米日食米、御禊大嘗會御卽位以下、勅役院役并都鄙寺社所役、國中段米棟別、津々關々賃料、官家俗家臨時公俸等、永爲當寺領尾張國篠木庄富田庄、國分・溝口兩村、駿河國淺服庄內、東郷、并瀨奈春吉、鎌田春吉、高松春吉、下島郷、佐野郷、武藏國江戸郷內、前島村、丸子保內、平間郷半分、上總國畔蒜南庄內、龜山郷、下總國大須賀保內毛成、草毛兩村、常陸國小河郷、上野國玉村御厨內、北玉村郷、田羽國北寒河江庄內、五箇郷、吉田、堀口、三曹司、西所、窪目、越前國山本庄兩郷、泉、船津、越後國加地庄等、地頭職并門前屋地事、右得彼寺住持沙門契充、去八月日奏狀備、營寺者佛光禪師之開基、名德繼踵、聖朝護持之巨刹、勤修積功額揭飛龍、宸翰恭降從天上、山號瑞鹿、法場自秀于相陽、佛法之繁榮、眞宗之□盛精禱功著、嘉會運亭、諸寺諸山之紹隆、宛同如來在世之昔日、禪院敎院之興復、專在君臣合體之今時、因茲當寺常住之資貯、彌爲成大福田、元來管領之庄園、悉要作勅施入永停止伊勢太神宮、役夫工米、并勅事國役、諸社神人國司守護使、入勘官使檢非違使院宮諸司、甲乙人亂入、關東鎭西早打役等、先訖、爰依有所相漏、動非無其煩、望請時蒙天恩、回准先例永被免除上件所役等之由、下賜不易之宣旨、將備萬代之證鏡、然者梵衆珍慶自倍增金輪之威光、綸徒歡呼更奉祝寶祚之長久、者權大納言藤原朝臣忠光宣、奉勅依請、者同下知彼國々既畢、寺宜承知、依宣行之、永和三年十二月十一日、大史小槻宿禰華押、中辨藤原朝臣華押、四年十一月佛殿再興なる【日工集】曰、四年戊午十一月十八日、往圓覽、巡視土木、則佛殿落成、觀者歎美之、康曆元年十二月十八日義堂氏滿の邸に到り、既に佛殿の再造功を竣ふと云へども、未成の堂宇猶數處あり、故に課役等の事、更に今年より重て公據あらん事を乞ふ、氏滿許諾す五年己未、十二月十八日、余入府、出圓覺日子、而呈君、且言圓覺土木諸宇十餘處、獨佛殿功畢未成者尙有十箇處、只願檀越著意著一吏管寺事、則無事不成、關稅最急不可放過今年重下公據則幸甚、府君諾之、二年六月氏滿下知して箱根山葦河宿の關務、三ヶ年を限、造營の要脚に附す所藏文書曰、圓覺寺造營要脚關所事、爲大森高山關務半分替所寄附也、早於箱根山葦河宿邊、構在所限年紀三ヶ年、嚴密可被致其沙汰之狀如件、康曆二年六月日當寺長老、左兵衞督華押、

因て上杉安房守憲方入道道合、此事を布施主計允某に沙汰す曰、圓覺寺造宮料、箱根山葦河關所事、任御寄進狀之旨、莅彼所沙汰付寺家代官可令關務也、不可有緩怠之狀、依仰執達如件、康曆二年六月八日、布施主計允殿、沙彌華押、永德元年十一月彗星現するにより氏滿祈念の旨を命ず市谷月桂寺所藏文書曰、依彗星出現、近日殊可被致祈禱之精誠之狀如件、永德元年十一月、十二月斯波左衞門月三日、圓覺寺大衆中、氏滿の華押あり、佐義將嚴密に寺家の法式を沙汰す所藏文書曰、諸山條々法式云々奧書云、右條々以康永貞治規式、重所有其沙汰也、固守此法不可違犯之狀、依仰執達如件、永德元年十二月十二日、左衞門佐華押、二年八月將軍義滿の命として、常州小河郷の內を寺領に寄附あるべき旨、斯波義將上杉道合に書を寄て沙汰す曰、常陸國南郡內小河、常陸前司跡事、永代可有御寄附圓覺寺并正續院候歟之由、被成進御書候、無相違之樣可有申御沙汰候哉、恐々謹言、八月四日、謹上、上杉安房入道殿、左衞門佐義將華押、十二月氏滿寄附狀を出せり曰、寄進圓覺寺、常陸國南郡小河郷內益戶、常陸介篤政法師(法名觀政)跡事、右爲天下安全武運長久、所寄附之狀如件、永德二年十二月二十三日、左兵衞督源朝臣華押、至德元年十二月氏滿上杉藏人憲英が請に因、常州眞壁郡中根村の地寄附の證狀を出す曰、寄進圓覺寺、常陸國眞壁郡、竹來郷內中根村事、右任上杉左近藏人憲英申請、所寄附之狀如件、至德元年十二月二十日、左是僧法初が志願に據れり、卽二年二月法初寄附狀を寄す所藏文書寫曰、寄進圓覺寺、常陸國眞壁郡、竹來郷內中根村事、右村者申成

上御判法越禪門、鏡明禪尼、爲追善所奉寄附之狀如件、至德二年二月三日、法初華押、按するに、法初は貞治三年の文書、寺家評定衆連署の列に、都寺と記し、應安八年の物には、都聞と記す、當時も評定衆列たるべし、卽上杉憲英が親族の僧となれるならん、故に憲英法初の爲に去年此事を、公に執せしと識らる、

三年八月京鎌倉五山の座位を定られ、氏滿其旨を令し所藏文書曰、都鄙五山座位事、京都御事書如此早守彼狀、可被致其沙汰之狀如件、至德三年八月三日、圓覺寺長老、左兵衞督華押、

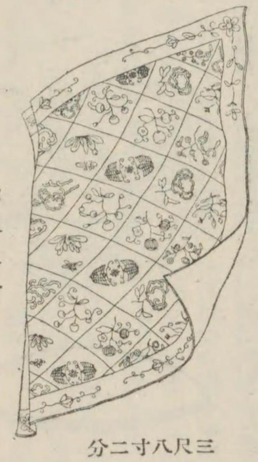
卽將軍家の事書を傳ふ、時に當寺と相國寺は第二位たり事書曰、五山座位次第事、至德三七十、五山之上南禪寺、五山第一建長寺天龍寺、第二圓覺寺相國寺、第三壽福寺建仁寺、第四淨智寺東福寺、第五淨妙寺萬壽寺、右南禪寺者爲勅願皇居之間、可爲五山之上者也、仍長老者舊三位者、可爲天龍建長上、至自餘五山者、隨京都鎌倉之所在、相互可爲賓主禮矣、後尾州富田庄の內、國分・溝口兩村の寺領を轉じ、上總國堀代・上鄕・大崎三所の地を假に其代地とす所藏文書曰、圓覺寺領尾張國富田庄、當知行分、與上總國堀代上鄕大崎三ケ鄕相轉事、自寺家堅御所望之間、當年一所務之事、先申完了、自他無相違之旨、後々事者追而可申談候安堵事同前候哉、此段先度兩使御僧、御上洛之時申候、乍去自寺家給連署、御契約之狀候間、自是捧請文候、可得御意候、恐々謹言、六月十九日、岡屋安藝入道殿沙彌道元華押、其後、後小松帝宸筆の扁額を下し賜ふ綸旨曰、圓覺寺所被下勅額也、宜專佛法之紹隆、奉禱聖祚之安寧、者天氣如此、仍執達如件、三月二十二日、當寺住持、右中辨兼顯、應永八年二月麝攸の災に罹る鹿山略記云、應永八年二月晦日、羅濟攸、當時諸老、或勸府君或募衆諸伽藍復舊云々、十三年六月造營要脚として、箱根山水飲關所賃料を當寺に寄らる所藏文書曰、箱根山水飲關所之事、任被仰下之旨、渡付圓覺寺雜掌候畢、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、應永十三年六月十六日、進上御奉行所、左衞門尉憲清華押、閏六月又其他を收め、豆州府中の關所を替所として寄らるゝ旨、滿兼下知あり下知狀曰、伊豆國府中關所事、爲箱根山水飲關所替、圓覺寺法堂造營之間、所寄附也、早守事書之旨、全關務急速、可被終其功之狀如件、應永十三年閏六月十五日、當寺長老、滿兼華押、十四年十一月六日又失火して諸堂悉く燒亡す【鎌倉九代記】曰、應永十四年十一月六日、巳尅、圓覺寺塔中より火もえ出て、魔風頻に吹まよひ、佛殿・鐘樓・經藏、すべて同時に燒あがり、山門・拜堂に至る迄、一時の程に灰燼となれり、左兵衞佐殿は、門前に馬を扣へられて、回祿の災に、世をあやふみ玉ふ、十五年九月管領より造營の料として武相二州の材木、採用すべき旨令せらる所藏文書曰、圓覺寺造營用木事、不除武藏相模兩國寺社領、可然材木、任先例可被採用、此下蠹食して失す、唯末に應永十五年九月二日の九字のみを存せり、二十一年五月造營要脚として、一ケ年を限、鎌倉中酒壺別錢を寄せらる所藏文書寫曰、鎌倉中酒壺別錢二十匹之事、任官符宣并御□□旨、半分勸落之、至他在所者一圖充取之□圓覺寺造營要脚、一ケ年所寄附也、嚴密收納之、可被修々造功之狀如件、應永二十一年五月二十五日、名華押共に脫す、二十五年五月持氏當寺領、上總國畔蒜庄龜山鄕に制札を出せり曰、禁制、圓覺寺領、上總國畔蒜庄內龜山鄕事、右軍勢甲乙人等、不可致濫妨狼藉、若有違犯之輩者、可處罪科狀如件、應永二十五年五月六日、持氏袖判あり、二十六年十二月上總・下總・武藏・上野・常陸・出羽等の內、地頭職并門前屋地所務の事、相傳の旨に任せ全知行すべきの旨持氏證狀を授與す曰、當寺領、當下總國印西條內外、同國大須賀保內、毛成・草毛兩村、上總國畔蒜庄內、龜山鄕并沼田寺、同國土氣郡堀代鄕駒込・赤茨兩村、同國一宮庄內南上鄕、同國望東郡金田保內大崎村、武藏國江戸前島內森木村、同國丸子保內平間鄕半分、上野國玉村御厨內北玉村、常陸國眞壁郡內□□出羽國北寒河江庄吉田・堀口・三曹司・兩所・窪目等地頭職、并門前地事、任□□永仁嘉曆建武二年官符同五年八月二十三日□□等、寺家知行不可有相違之狀如件、應永二十六年十二月十七日、圓覺寺、持氏華押、二十八年十一月十二日又火發して燒失す、【鎌倉九代記】曰應永二十八年十一月十二日圓覺寺炎上す、正長元年十二月寺領の所々伊勢神宮、役夫工米以下役の事造營の際減少せしむる旨、持氏の下知あり所藏文書曰、圓覺寺領所々外宮內宮、役夫工米以下役等事、已前就勸落雖被成佰貫文寺家造營最中之上者、如元可爲陸拾貫文分由、所被仰出也、仍執達如件、正長元年十二月二十九日、當寺雜掌、前備中守華押文安五年五月更に寺家の令條を定む曰、兩班日數事、雖可爲四節自寺家被申之上者可爲五十日、侍者事可爲三十日、不動禪客、任燒香侍者事、於向後者可令停止之、不動燒香侍者、任職主事、子細同前、御擧以下官方吹擧等事、被停止之上者、東堂並西堂、吹擧不可用之、依寺功登庸事、於官錢者雖被免之、至日限者不可背彼規、右條々堅可被守此法、敢不可有違犯之條如件、文安五年五月二十四日、九年五月事書數條をして法度を令す曰、事書條々、文安九年五十、寺領所々遠近百姓等、依官方契約、於寺家不法、若强有契約輩者、被注申名字、者可有殊沙汰焉、寺家門前官家者居住、可有停止事、寺中俗方夜宿事、諸庄園給主、納未進事者雖年紀未滿、可被改易事矣、寺領所々百姓等未進事者、殊可有罪科事焉、於寺領分、名主職□□取之、彼下地可被付別人事、諸庄園主職事、不可有許容、官方并東堂及西堂、吹噓且撰器用、雖寺功以評議可被定之焉、於寺中帶兵具、有致寢藉輩者、於其身者召出之、可有殊沙汰、至寮坊主者可被出院之、寺官等固可致糺明之、若於令隱密者、可爲同罪也矣、東西兩班、井小名字事、兼日被定法訖、也至御擧以前、兩班遂日數、可改定之御擧外者、數不可用之焉、已永正十二年天文十一年の兩度、當寺及び建長東慶の三寺、諸公役免除ある旨、北條氏より書を投じて令す曰、鎌倉三ケ年行堂、諸公事免畢、若自今以後、申懸者有之者、注交名可申上者也、仍如件、永正十二年二月十日、能音・能印・能善・能泉・隆正・能眞・能濟・能春・能恩、氏綱袖判あり、又天文十一年四月、氏康が出す所の文、全く前に同じければ略す永祿六年十二月二十七日又回祿の災あり、是より諸堂廢亡する事年あり鹿山略記曰、永祿六歲殘臘二十七冥、遭于卑方之祟以降、歷六十二霜法堂前草深一丈、素掩淚、天正十二年三寺諸公役先規の如、免除ある旨北條氏直の下知を承て板部岡江雪齋、書を下して令す所藏文書曰、鎌倉三ケ寺行堂、諸公事免畢、若自今以後、申懸者有之者、記交名可申上者也、仍如件、天正十二年甲申十月二十六日、能源・能信・了俊・能松・能盛・了昌・揚拙、江雪奉之、十八年八月御入國の後寺領

安堵並に諸役免除の御朱印を賜ひ、十九年十一月當村及極樂寺村の内にて先規の如寺領を賜ふ旨、御書を下さる　曰、寄進圓覺寺、相模國小坂郡鎌倉内、百拾三貫二百十文、山内、三十壹貫六百二十文、極樂寺内、右如先規令寄附訖、彌守此旨、佛法相續、不可有怠慢之狀如件、天正十九年辛卯十一月日、正二位源朝臣華押、　元和三年二月、寛永十三年十一月の兩度先規に任せ、寺領の御朱印を賜ひ、寛文十年十二月當寺領の内紺屋役先規の如く國役免許せしめらる　曰、鎌倉圓覺寺領内紺屋役事、先規國役御免許之上者、今以不可有相違之條、紺屋六人者可除之者也、寛文十年庚戌年十二月十二日甲斐・山城・内膳・但馬・大和・美濃各印あり、　○佛殿大光明寶殿の宸筆、の額を掲ぐ、其下に又額あり、表面に祈禱、裏面に修正共に窓筆、夢の文字を記せり、尋常は表面を顯し、毎歲正月五箇日の間は裡面を顯すと云ふ　後光嚴帝

永和二年再興ありて十月二十九日肇て柱を建る時、見住此山梁に銘を記す　曰、皇圖益固、猶逾億萬斯年、民士清平、廣統三千刹海、本寺大檀那、左中將、征夷大將軍源朝臣義滿敬立、佛域新開、儼靈山法筵日、祖庭深密榮少林華木春、永和二年丙辰、十月念九日庚辰、當代住持嗣祖沙門、此山妙在謹題、永祿中回祿の後、荒廢に及びしを寛永二年再建すと云ふ、本尊寶冠釋迦　金座像、長八尺許、佛首は西土の佛工、鄕殿作と云、〔日工集〕日、永德二年壬戌、五月七日、寶筐院忌、府君入寺、（洛の等持寺を謂ふ）點心寵、君日、圓覺佛像如何、曰、中尊寶冠釋迦、先代時造、世謂圓覺釋迦目上千貫、謂金玉之飾也、左右十二大士、依圓覺經說、曰、其說如何、曰、蓋十二菩薩文殊普賢等、各回祿の爲に佛躰は燒亡し、佛首のみ存在せしを養嚴院の方卒去の後　卒年傳はらず、寺傳に東照宮の侍女なりといふ、養嚴院の章疑難問答也、事、飯島村光長寺の條に小傳あり、併せ見るべし、其遺財を頒ち賜ふにより修補する所なり　〔寵山略記〕曰、寛永二年再營建寶殿、于時君夫人養嚴院殿、以逝去之遺財、領賜于佛工、彫刻丈六金像、佛宇、并尊像重新輪奐、今所安置之本尊卽是、而像之面相者、古之燼餘、則唐作工卿所新也云々、脇に梵天・帝釋の二體を安ず　各立像長六尺共に卿殿作、殿内左に祖師堂右に土地堂あり　曰、祖師堂在殿裡之左方、安達磨百丈臨濟及開山四軀之木像、又置前住之牌、土地堂在殿内右方、安伽藍神、及安置足利家以來代々之神牌云々、　堂内洪鐘を掛く、殿鐘と號す　○方丈　正觀音の木像を安ず、舊は明鏡堂の本尊たりしを彼堂破壞の後こゝに移すと云ふ、毎月十八日大衆懺法あり、額を掲ぐ　張卽之筆跡、是は東福寺の額を模寫せしものと云ふ、書院を平等軒と號す、〔寺寶〕　△東照宮尊影一幅　△同御書一通　△後醍醐帝綸旨二通　△後小松帝綸旨一通　△青蓮院二品親王眞筆一通　△太政官符一通　△左辨官下す、寺領地の國宣旨一通　△同寺領の國々に下す、國宣旨九通　△太政官正續院に下す、牒書一通　△左辨官正續院に下す、國宣旨一通

△同院領の國々に下す、國宣旨四通、△西國寺右府公衡、墨跡一幅、△西洞院黃門經親、墨跡一幅、△開山眞跡四幅、△無準和尙、墨跡一幅、△大興禪師、墨跡一幅、△寧一山墨跡一幅、△南院國師跡墨一幅、△普明國師墨跡一幅、△中山和尙墨跡一幅、△澤庵和尙墨跡、△紹果和尙墨跡、△北條時宗墨跡二幅、△五百羅漢畫像五十幅　宋人張思恭筆、内十七幅兆殿司一幅は狩野榮川院典信筆、　△涅槃畫像一幅　△阿彌陀畫像一幅惠心筆、　△智吉祥釋迦畫像一幅宋人陸信忠筆　△跋陀婆羅畫像一幅　△水月觀音畫像一幅牧溪筆、按ずるに、是は元建長寺所藏、三幅對の其一なりとぞ、今左右の二幅、彼寺に現存せり、此軸何の頃より、當寺に傳へけん、詳ならず　△羅漢畫像二幅　△十六善神畫像一幅　△鍾馗畫像一幅山田道安筆、　△維摩畫像一幅添足筆、大德寺啄玄、贊語を題す、　△達磨畫像一幅狩野安信筆　△鷲鳥畫二幅雲谷筆、　△臨濟禪師肖像一幅無準贊語を題す、　△佛鑑禪師肖像一幅天龍寺永璵、贊語を題す、　△開山自畫自讚像一幅贊語の末に、弘安七年九月三日、無學書于得月樓とあり、　△豐干禪師肖像一幅　△普賢觀經一帖慈惠大師の筆紺紙金泥、　△大般若經二部毎卷所々に、開板寄附の名稱を刻す、又卷末ごとに、文安五稔戊辰秋之孟、堂司正瑞謹誌之とあり、是は修理せし時の奥書なるべしと云ふ、　△舍利講式一卷世尊寺行能筆　△佛牙舍利記一本傳宗庵大藏、歸源庵六湛、舊本を校正し、其他諸書を參考し、考證となるべき物、悉く抄出す、　△勅會法華八講役付書一卷　白雲庵開山、東明が書記する所なり、造營要木採用の國名、佛日庵にて經供養の時の役付、奉行導師請僧公卿上殿等の姓名、布施進物の員數等を記せり、年代を記せざれども、文中元亨二年を斥て、去年とあるによれば三年の物なるべし、　△堆朱香合一合世に鎌倉ぐりと唱へて、珍

舍利包服紗

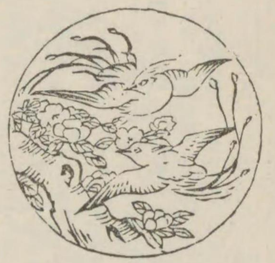


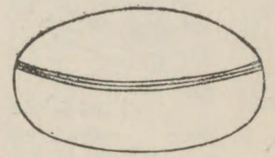
六尺八分

三尺八寸二分

堆朱香合

堆黑香合





寄とす、徑八寸二分許、△堆鳥香盆一枚　△香爐臺一脚寛政五年松平越中守定信相豆巡檢の時當山に入て、寶物展閲の饗謝に、納る所なりと云ふ、△堆黑香合一合椿花尾長鳥の花を刻す　△青磁花瓶一對　△兵粮袋二箇　△名僧詩板一枚京都五山の名僧十八人、詩を題して此所の風景を稱美す、卽其詩を鐫たるなり、△青磁香爐一口　△文書目錄二卷一は貞治二年の奥書あり一は正和四年の奥書に元應二年元亨四年等の書添あり、△新文書渡目錄一卷正平七年の奥書あり、△新文書渡目錄一卷應永七年の奥書あり　△正續院文書目錄一卷永和二年の奥書に、至德四年の書添あり、△佛日庵公物目錄一卷貞治二年の奥書あり、△伽藍圖一鋪時宗が創建せし時の圖なり、故に時宗の華押あり、△往古尾張國領分圖一鋪　△烏石眞書卷物一卷　△古文書百七十三通一は天正十九年寺領安堵の御判物、一は元和三年寺領の御朱印、一は弘安六年北條時宗が寺領寄附の申文、一は同時、寺領の御敎書、一は同時、北條時宗が添狀、二は同年、寺用米並諸用途、割付の定、一は同年寺領尾州富田庄の地、引渡下知狀、一は同七年、閏月分齋料米授與の證狀、一は同年、菜園の地、寄附の下知狀、一は同年、寺用年中の定書、一は同九年、上州北玉村の地寄附の下知狀、一は永仁二年、北條貞時が出せし掟書、一は同三年、塔頭佛日菴領の事に因り、光綱が書翰二は同年、尾州篠木庄、年貢米の進濟狀、一は同五年、北條貞時業時連署の下知狀、一は乾元二年、北條貞時が出せし、再度の掟書、二は菜園替地の證狀、一は嘉元四年、正續院領丹州成松保の地、潮音院が寄附狀の案一は同年、北條貞時が前條、潮音院寄附地の證狀、一は德治二年、貞時が定る處、大齊結番の交名、一は延慶元年、越後守貞顯が書翰、一は同年、西洞院經親、奉書の添簡、一は同年、北條師時、宗宣連署の下知狀、一は正和中、丹州成松保正續院領、安堵の證狀、一は文保二年、北條高時が寺領の寄附狀、一は正中二年、沙彌蓮淨が寺領の寄狀、一は同年、北條高時、同貞顯、連署正續院領、寄附の下知狀、一は嘉曆二年、北條高時が定る法度の條目、一は同三年、僧審省が田園の寄附狀一は元弘二年、正續院領寄附下文の添狀、一は正慶二年、沙彌道貞が山內瓜ヶ谷の地避渡狀、一は建武元年正續院末寺、長福寺領の渡狀、一は同年、尾州の國衙に下す決斷所の牒狀、二は同二年、正續院領の寄附狀、一は同三年、正續院領の地濫妨禁止の制狀、一は同年足利尊氏が寺領安堵の下文、一は同四年、足利直義が寺領安堵の證狀、一は同年、細川阿波守和氏が奉書、一は同五年、正續院領の地奸訴の事あるにより裁許せらるゝの狀、一は曆應元年、大藏卿雅仲が奉書、一は同年、民部少輔宗顯が請文、一は同時宗顯が尾州の守護、中條秀長請文の添狀、一は同二年、前條の事に因り足利尊氏が沙汰文、一は同三年、足利直義が示す法度の條目、一は武州長福寺領に出せし同四年の制札、一は同五年、足利直義が令す、條目の追加、一は貞和元年、正續院領安堵の證狀、一は正續院領、嘉元寄附狀案、貞和三年書添の狀、一は同五年、長福寺祖廣が正續院領の寄附狀、一は同年、尾州篠木庄の事に因り、柳原左少辨敎光が奉書、一は觀應二年、今川心省が寺領の寄附狀、一は同時足利尊氏が證狀、一は同年、正續院領の事に因り足利直義の下知狀、一は同年、正續院領愛甲郡厚木鄕の渡狀、一は同年、僧審省が田園の寄附狀出せし足利直義の制札、三は同三年、白井彈正忠行胤・齊藤雅樂四郎入道・新左衞門尉某等が正續院領の渡狀、一は文和三年、諸禪院に出せし足利基氏の條目、一は同年、寺務の事に依て足利尊氏が下文、一は同四年、尾州富田庄の寺領、土岐部少輔賴世、押領の聞えあるに依り足利義詮の下知狀、一は延文五年、尾州富田庄の寺領の事に因り、細川相模守が奉書、一は同六年、下總國毛成・草毛二村の地頭に出せし、平某が下知狀、一は貞治元年、駿州下島鄕の內寺領寄附の沙汰文、一は同年、足利基氏が上總國庄吉鄕の地舍利殿に寄附の下知狀、一は同二年、足利義詮が寺領寄附の證狀、一は同時、今川上總介範氏が下知狀、一は同時、由比左衞門尉光行が渡狀、一は同年、當寺職人等、法令に背により足利基氏嚴密に制禁を令する下知狀、一は同年、普明國師が勅筆勅書の添狀、一は同年、足利基氏が出せし正續院領殺生禁斷の制書、一は同三年、上杉憲顯入道道昌が領地上州の內、舍利殿長燈料の寄附狀、一は同年、

寺務の事に因り基氏が下知狀、一は同年、寺家評定衆連署の條目、一は同年、基氏が正續院領の寄附狀、一は同時、左近將監某が奉りの下知狀、一は同六年、今川心省が駿州下島鄕地頭職の寄附狀、一は同七年、下島鄕地頭職、寄進の事に因り今川心省が駿州目代への下知狀、一は同時、今川心省が書簡、一は應安二年、塔頭佛日菴領の事に依り沙彌某が奉はりの下知狀、一は同時、結城中務入道が下知狀、一は同年、建長開山忌諷經の事に因り細川武藏守賴之が奉書、一は同三年、今川心省が寺領永代寄附の證狀、一は同年圓覺、建長兩門徒の確執、和平を沙汰する細川賴之の奉書、一は同五年、沙彌仍海が寺領の寄附狀、一は同六年、寺領尾州富田庄の事に因り細川賴之が奉書、二は同八年、布施彈正大夫入道昌椿が奉書、一は永和元年、細川武藏守賴之が奉書、一は同二年、衆僧連署、正續院入牌料足の寄附狀、一は同年、足利家より越後國の內にて寺領寄附あるにより散位某が下知狀、一は同年、造營要脚として上州棟別錢を宛らるゝ旨、布施彈正入道昌椿が奉書、一は同年、尾州篠木庄の事に因り細川賴之が奉書、一は同年今川心省が書翰、一は同三年、常州棟別錢の事に因り沙彌某が奉書、一は同年、寺家用途の品々運送の事に因り今川心省が沙汰文、一は同年、細川賴之の官符宣の旨に任せ寺領羽州の內五ケ鄕、諸役免除の奉書、一は同四年、沙彌某官符宣の旨に任せ越後國寺領の地諸役免除の下知狀、一は康曆元年、佛日庵造營料要脚の事に依り上杉道合が下知狀、一は同二年管領氏滿當寺造營料の寄附狀、一は同時、上杉道合が奉書、一は永德元年、諸山の法度を示す、斯波義將が奉書、一は同二年、常州南郡の內寺領として氏滿寄附あるに因り上杉道合に遣る、斯波義將が書翰、一は同時、氏滿が寺領の寄附狀、一は同三年、衆僧連署舍利殿法式の定、二は同年、常州南郡の寄附地、先主押領の聞えあるに因り氏滿の下知狀、一は至德元年、正續院領の國々官符を下さるゝに因り上杉道合に投ずる斯波義將が奉書、一は同年、寺領駿州佐野鄕の地押領の聞えあるに依り上杉道合が奉書、一は同年、大僧都法印某が越前國山本庄の寺領地靑蓮院門主寄附狀の添簡、一は同時、靑蓮院親王の書翰、一は同年、管領氏滿が寺領の寄附狀、一は同二年、駿州佐野鄕の寺領地土肥三河入道が渡狀、一は都鄙五山の座位を定らるゝ京都將軍家の事書、一は同時、管領氏滿が下知狀、一は嘉慶二年、越前國山本庄寺領地の事に因り雅樂助景氏が請文、一は同年、尾州富田庄、寺領地の事に依り斯波義將が奉書、一は應永三年足利義詮が正續院領の寄附狀、一は同六年、遠江守信廣が押書、一は同十二年、佛日庵領の事に因り當庵雜掌淨眞が出せし目安、一は同十三年、管領滿兼が造營料の寄附狀、一は同十五年、造營料、伐木の免許狀、一は同十六年、上杉憲定入道長基が正續院領の寄附狀、一は同時、憲定が家司等連署の下知狀、一は同時、長尾左衞門尉憲淸が渡狀、一は同十七年、駿州の案主兵部丞高朝が下島鄕寺領地の預狀一は同廿四年、常州信太庄の地、正續院に寄附する旨上杉憲基の書翰、一は同廿五年、寺領上總國龜山鄕に出せし持氏の制札、一は同廿六年、持氏が出せる所々寺領地安堵の證狀、一は同廿九年、正續院造營材木運送の下知狀、一は正長元年、前備中守滿康が奉書、一は同二年、正續院領の內人夫の事に依り奉行人連署の下知狀、一は永享六年、前備中守滿康が書翰、一は同十年、正續院領所々、亂妨制禁の下知狀、一は文安五年、更に示す處規式の條目、一は同九年、寺家法令の事書、一は康正二年、上總國の內正續院領に出せし制札、三は北條氏綱・同氏康・同氏直等が出せし鎌倉三ケ寺行堂諸公事の免狀、一は永祿中、北條氏康が書翰、一は天正十八年、寺領安堵の豐太閤が朱印、一は同時山中橘內長俊が書翰、一は同十九年、片桐市正・早川主馬首連名の書翰、一は同年、高力河內守淸長が書翰、一は文祿元年、豐太閤の書狀、一は寬文十年、紺屋役國役免許の證狀、一は日野中納言奉書の添狀（年代詳ならず下同）一は正續院領の事に因り管領氏滿に投ずる、將軍義滿の狀、一は普明國師の書翰、一は正續院に寄する高資の書翰、二は北條貞時の書翰、一は沙彌道貞の書翰、一は今川心省の書翰、一は五山座位の事に因り佛智國師の書翰、一は管領持氏が法衣及び法華經を開山塔に納る添狀、一は斯波義將が書翰、一は法華八講用途の品書、一は永享六年、京都萬壽寺に出せし中原師貞が寺領の渡狀（當寺傳來の旨趣、詳ならず、下同）八は武州金陸寺に出せし足利家の文書、△古文書寫百十四通（頗を省きて、今爰に贅せず、）○經堂　僧堂を兼ぬ、元祿中松平佐渡守新に造立す、法輪寶藏と號す、大藏經を收む、選佛場（無準筆跡）の額あり、是禪堂の額なり【鹿山略記に云、兼僧堂也、元祿十二年、江府松平佐渡守、法名永固院道基鶴翁居士、捨家資若干、相攸寶殿乾重新法輪寶藏兼選佛場、且寄納大藏經全函也、】是も東福寺の額を摹せしなりと云ふ、○浴室　元祿中木下金龍尼再造す（曰、元祿五年江府木下氏後室、圓戊院金龍尼大姉、啓舊跡再造之、）額あり（張卽筆跡）是も東福寺の額を

模寫すと云ふ、○鐘樓　佛殿の左、山上にあり、北條貞時正安三年八月、巨鐘を鑄造して掛る所なり、事は首條に詳載す　曰、相模州瑞鹿山圓覺興聖禪寺鐘銘、鶴岡之北、富士之東、有大圓覺、爲釋氏宮、恢廓賢聖、蹴踏象龍、範圍天地、棄簫全功、鎔金去鑛、燬煉頑銅、成大法器、啓廸昏蒙、長鯨吼月、幽谷傳空、法王號令、神天景從、祐民贊國、植德旌忠、停酸息苦、超越樊籠、高輝佛日、普扇皇風、浩々蕩々、聲震寰中、正安三年辛丑八月初七日、本寺大檀那、從四位上行相模守平朝臣貞時勸緣同成大器、此月十七日巳時、大鐘昇樓、洪音發虛、謹具名目于后、喜捨助緣善信共、壹千五百人、本寺僧衆二百五十員・大耆舊・慧寧・覺眼・宗證・道範・宗英・頭首・覺泉・覺俊・師侃・玄挺・崇喜・道生・性仙・知事聰因・智足・可瑊・至牧・文順・元安・祖安・西堂德燕・自聰・德義德詮・源清・志遠・當寺住持・宋西澗和尚子曇・當寺住持・傳法宋沙門子曇謹銘、勸進書舊僧宋證、奉行兵部丞橘朝臣邦博、兵庫允源朝臣仲範大工大和權守物部國光掌財監守僧至源、道慶皇帝萬歲、重臣千秋風調雨順、國泰民安、　往古は此傍に辨財天の石像を安ぜしが今は正續院舍利殿の內に移す、○堂司寮、○火屋　往古は地藏千躰を安ぜしと云ふ、今は失せり、額あり同歸と記す夢窓筆、　○外門　今廢して舊跡を存す、妙莊嚴域佛光筆、の額ありしと云へど今は亡す　○總門　瑞鹿山後光嚴帝宸筆の額を揭ぐ、○山門　圓覺興聖禪寺大字三行、花園帝宸筆、の額を揭ぐ、閣を圓通閣と云ふ、十一面觀音を安ず、中古廢亡せしを寛政已前再造せしと云ふ【鎌倉志】に山門は今亡て、礎石のみあり、云云と記すに因ば、此頃既に廢亡せしなり、　○山王社　境內の鎭守佛日庵の前にあり、○白鷺池　惣門の左右にあり、寺傳に開山佛光來朝の時八幡の神靈白鷺と化して鄕導し此池中に止る、故に此稱ありと云ふ、○妙香池　正續院門外にあり、○六國見　北方にある高山の頂上を云、安房・上總・下總・武藏・相模・伊豆の六國見ゆる故に名づく、○虎頭岩　妙香池の傍にあり、形虎首に似たるが故唱呼とす、○鹿岩崛　佛日庵の前にあり是も形を以て號すと云ふ、○般若水　通用門の內にあり、○桃隱橋　方丈と妙香池の際に、在しと云ふ、今は亡ぜり、○偃松橋　白鷺池にあり、石橋なり、○獨木橋、○般若松　般若水の上にあり、○南對松　北對松　惣門の左右に對す、○明鏡堂跡　佛殿の東森の內にあり、こゝに井あり、明鏡の井と唱ふ今猶額を存す、明鏡の二字を記せり僧曇芳筆　○法堂跡、佛殿と方丈の際に礎石を殘せり、直指堂と號す、說法所なり、今佛殿に合せり、

新編相模國風土記稿卷之七十九　之終

新編相模國風土記稿卷之八十

村里部　鎌倉郡卷之十二

山之內庄　山之內村三　圓覺寺下

【祖塔】　○正續院　萬年山と號す、始は舍利殿附屬の寮にして祥勝院と稱す【日工集】曰、圓覺正續院、本名祥勝院以安佛牙舍利、取八吉祥六殊勝之義云云、【鹿山略記】曰、祥勝者、北條貞時造立す、建武二年後古昔舍利殿附之寮也云々、醍醐帝特に勅して此所を開山塔とせられ、綸旨を下し賜ふ曰、以圓覺寺舍利殿、可爲開山塔頭之旨、天氣所候也、仍執達如件、七月十一日、夢窓和尚、左中將具光、按ずるに、此綸旨年代詳ならず、寺傳及び【鎌倉志】には光嚴帝の賜ふ所と云、又當院所藏佛牙舍利記には、元弘三年七月八日賜ふ所とす、是を合考するに、互に疑ふ所あり、抑光嚴帝は元弘二年卽位あり、三年五月、尊氏に攻られ、京師を沒落し遂に帝位を退けらる、此に於て、是年六月、後醍醐帝伯州より歸洛ありて皇位に復せられしなり、然るを其翌月にあたりて、光嚴帝より綸旨を賜ふと云、甚怪むべし、當院所藏佛牙舍利記ひとり元弘三年とするもの、他に明證なくして、信用し難く、又寺傳光嚴帝の綸旨と定るも、信據なければ取難し此他元弘三年七月十二日の綸旨を藏せり、是をも傳て光嚴帝の賜ふ處と云、是も後醍醐帝復位の後なれば、光嚴帝と云傳ふるもの訛れり、是によれば、前の綸旨も是と同く、元後醍醐帝なるを、全く誤り傳しなり、今推考して、建武二年とする塔の追補文に、建武二年乙亥、遷至本山圓覺寺舍利殿、云々とあるにより、抑正續院は舊福山に在て開山の侍眞寮たり、遷化の後塔院とす、故に此時共にこゝに移され、是より專今の院號を唱ふ【禪林僧傳】に載する塔銘追補の文に曰、衆函灰燼于建長寺山之麓、建塔院曰正續、勅諡曰佛光、塔曰常照云々、【鹿山略記】曰、按正續院、古在建長寺中、開山侍眞寮也後來移于此、合舍利殿矣移于此之後、改祥勝以正續爲稱呼也按ずるに、正續院を此に移せし年代詳ならず、然るを今建武二年と定むるは、前に註記せし、塔銘追補の文、及び太寺所藏、正中二年の古文書に、正しく建長寺正續院と載せ、又建武二年九月の古文書に、佛光禪師塔頭と見えたるを合考すれば、必此間の事にして、開山塔を移されしと同時たる事、必然たれば、是年とは定めしなり、　九月沙彌存孝、常陸國玉作鄕の內にして永く寺領を寄附す本寺所藏文書曰、奉寄進、常陸國玉作鄕內、田地三町事、右彼田地者、永代所奉寄進、先師供□禪塔頭正續院也仍寄進狀如件、建武二年九月日、沙彌存孝、華押、三年五月斯波家長當院領本郡山內庄信濃村の地、亂妨有まじき旨制禁の書を投ず曰、山內庄秋庭鄕內信濃村事、以左馬頭殿御判、寄附正續院之上者甲乙人等、不可致濫妨狼藉若有違犯之輩者、可被行重科之狀如件、建武三年五月九日、華押、按ずるに、此地は當院建長寺中に在し時、直義が寄附せし所なり貞和元年十一月山內庄信濃村の地、當院領安堵之

旨足利直義證狀を授ず　曰、相模國山內庄、秋庭郷內信濃村事者、建武元年令寄附當庵之處、爲名越長福寺領之條、弘安七年安堵狀、分明之間、聊雖有其沙汰、被相轉他所之條、强不可有執心之由、別當法印□仙□狀訖、仍所被宛行其替於本寺也、於彼村者、爲庵領尙知行不可有相違之狀如件、貞和元年十一月九日、正續院塔主禪師、左兵衛督華押、　五年三月僧祖廣先師清溪の爲、武州恩田御厨田島郷の內長福廢寺塔頭領の地を當院に寄す　曰、寄進武藏國津田郷內、長福寺前住、浩溪寺和尙塔所田畠之事、右之所者、恩田御厨田島郷內、田壹町一段、在家一宇者、雖爲長福寺之塔頭領依無守塔小□彼所荒廢畢、佛光禪師之遺戒、清溪和尙位牌、在正寺院祖堂、然者其小□祖廣、爲訪老師之菩提、相副次第之手繼證文而、限永代奉寄付當院之處實也、不可有他違亂妨仍爲後日寄進狀如件、貞和五巳丑三月十五日、祖廣華押、

觀應二年足利家の沙汰として當國毛利庄厚木郷にして寄附の地あり　曰、渡、圓覺寺正續院領、相模國毛利庄厚木郷半分事、右任去月廿二日、御教書之旨、沙汰付下地寺家雜掌歸法候訖、仍渡狀如件、觀應二年八月八日、佐竹和泉前司代、左衛門尉宗連華押、左衛門尉光上、華押、十一月直義禁制の書を授與す　曰、禁制、正續院領、相模國厚木事、右軍勢并甲乙人等、不可致濫妨狼藉、若有違犯輩者、可處罪科之狀如件、觀應二年十一月廿三日、直義袖判あり、　貞治二年八月厚木郷の地、殺生禁斷たる旨基氏證狀を寄す　曰、正續院領相模國厚木郷殺生禁斷事、近隣輩背先例、於寺領河、致狼藉□太不可然、所詮隨注申交名、可處重科之狀、如件、貞治二年八月十七日、三年十二月基氏又豆州多呂郷の地を當院に寄附あり　曰、奉寄正續院、伊豆國多呂郷事、右爲當院領、所令寄附也、者守先例、可被致沙汰之狀、如件、貞治三年十二月十六日、左兵衛督源朝臣、華押、又曰、伊豆國多呂郷事、任御寄附狀旨、可被沙汰付下地於正續院雜掌之狀依仰執達如件、貞治三年十二月廿三日、高坂兵部大輔殿、左近將監華押、　永和三年正月建長寺の現住中山法衣坐具直裰綿襯等を開山塔に收む　曰、奉上正續院印塔、法衣一頂、牡丹文紗香色地青色、行坐具一條、青地金紗、直裰一領、黃練貫、綿襯一領、白練絹、已上四件、收在織物袱子裏、永和三年戊午正月八日、正續院主九峯和尙、法顯華押、　至德元年七月太政官に勅せられ、豆州多留郷、本州厚木郷、武州秋葉村、總州莊吉郷の地、永く當院の所領として諸役免除ある旨牒書を下し賜ふ　曰、太政官牒正續院、應因准傍例、免除造伊勢太神宮、役夫工米日食米、造內裏御禊大嘗會以下、勅役院役、并都鄙寺社所役、及國中殿米、關々渡々賃料、凡恒例臨時公役等、永爲當院領、伊豆國多留郷、相模國厚木郷半分、并同國秋葉村、上總國庄吉郷等事、右得彼院住持比丘存圓、去五月日奏狀、倆謹啓案內、當院者佛光圓滿常照國師塔頭也、白足青眼之淨侶、開正法、藏洞雲海月之禪心、了眞如理、祝延皇圖億載、禱爾武運無疆、然間爲挑佛龕之惠燈、爲轉僧寶之食輪、庄園寄附寺院資緣也、宜賜諸役勅免之鳳綸、爲轉而備萬代之證據之龜鑑、望請洪恩枉垂允容、然則奉祈寶祚延長、彌增金輪威輝、不耐懇歎屛營之至者、正二位行權大納言、藤原朝臣嗣房宣、奉勅依請、者同下知國々既畢、院宜承知、依宣行之、牒到准狀、故牒、至德元年七月五日、從四位下行權右中辨、藤原朝臣、俯理東大寺佛長官、

從四位下行左大史、兼播磨介小槻華押、又曰、圓覺寺正續院領、東國所々事、所被成官符也、任彼趣可被停止諸役之狀、依仰執達如件、至德元年七月十二日、上相安房入道殿、左衛門佐、華押、　應永三年十二月義滿常州小鶴莊の地を當院に寄附す　曰、寄附圓覺寺正續院、常陸國小鶴庄事、右所寄附當院、之狀如件、應永三年十二月廿七日、入道准三宮、前太政大臣華押、　十六年閏三月豆州多留郷、國衙職の地を院領として寄附あり　曰、寄進圓覺寺正續院伊豆國多留郷、國衙職事、右爲當院領、所寄附之狀如件、應永十六年閏三月九日、沙彌長基、華押、又曰、伊豆國多留郷國衙職事、早任御寄進狀之旨、可被沙汰付下地於圓覺寺正續院雜掌之由候也、仍執達如件、應永十六年閏三月九日、長尾四郎左衛門尉殿、左衛門尉、華押、左近將監、華押、又曰、伊豆國多留郷國衙職事、今月九日任御書下之旨、所沙汰付下地於圓覺寺正續院雜掌候也、仍渡狀如件、應永十六年閏三月十六日、左衛門尉憲淸、華押、廿四年三月山內安房守憲基、志願ありて常州信太庄の內にして寄附地あり　曰、常陸國信太庄內久野郷、坂本犬菊丸跡事、自去年十月三日、同六日、同十二月十八日、同廿二日、至于去正月五日、同九日、同十日、御方并御敵等、打死爲菩提、所奉寄進也、年々能々御弔候者、畏入候、以此旨可有御披露候、恐惶敬白、應永廿四年三月三日、圓覺寺正續院、衣鉢侍者禪師、憲基華押、　永享十年民部丞某所々院領の地、亂妨有まじき旨禁制の書を授ず　曰、禁制、圓覺寺正續院領、相州厚木郷、秋庭郷、總州庄吉郷、常州久野郷、上州鼓岡、豆州田呂郷等事、右軍勢并甲乙人等、苅取作毛、不可致亂妨狼藉、若有違犯族者、可被處罪科之狀依仰下知如件、永享十年九月六日、民部丞、華押、文安三年十月村內瓜谷にて七百文の所、本年貢當院所務たるべき旨黃梅院妙訓證狀を寄す　黃梅院所藏文書曰、正續院領、山內瓜谷口山上地事、年貢漆百文所也、依移造目足寺候而、本年貢之分給置候、若末代於居住之徒而、無沙汰候者、名越花谷、目足寺之舊敷地を可被取□□、仍而爲後證所書進之狀如件、文安三年丙寅十月二日、正續院侍衣禪師、黃梅塔主妙訓華押、　永祿中當院修造の時、請に因て大平寺客殿を移すべき旨北條氏康下知狀を授ず　本寺所藏文書曰、大平寺客殿、正續院被引則可有建立由、尤承屆候、猶大道寺可申入由、可得貴意候、恐惶敬白、十一月廿五日、圓覺寺衣鉢閣下、氏康華押、　大道寺駿河守盛昌二貫文地を寄附す　曰、正續院寄進之事、合貳貫文、右大破之由御佗言候間、天寧寺分、貳貫四百文之內、先年未歲、以御印判、半分御寄進候、殘る半分壹貫二百文、只今爲自分寄進申候、并目足寺分、先年□□只今八百文、合貳貫文、爲代官分、被下候內と引替令寄附候、爲後日一筆如件、四月三日、正續院參、駿河守盛昌華押、　九年六月敷地二貫文の所先蹤の如くたる旨大道寺資親、證書を授與す　佛日庵所藏文書曰、相任先證文、敷地貳貫文所進置者也、自今以後、不可有橫合所、爲後日一筆如件、永祿九年丙寅六月晦日、正續院、大道寺華押、

△舍利殿　中央須彌壇は西土の佳木を以て製造せり、最近代の製ならず、木理のさま古色を存す　寺傳に、義朝が靈屋を移せしなりと云へど、信じ難し、佛牙の舍利一個長一

寸二水晶の塔に收む、左右に觀音・地藏二軀を安す、舍利と共に船來せしと云【鹿山略記】曰、殿内安一厨子、藏宋國船來佛牙舍利、厨子前左右、安地藏、觀音二軀、木像立身長三尺、舍利同時渡來之品云、佛舍利傳來神變記曰、其塔形、摹倣于南都興福寺靈寶金鼓圖樣金龍握珠蟮繞雲柱、載金銅圖器、在獅子背上、圖器張水晶、設一重隔子、以安二顆設利、別造厨子爲塔外函、厨子塗以酒金有四扉、裏畫四天王像、更洞貫水精、張厨子内、以漆封固、此舍利傳來の濫觴は、建保四年六月宋人陳和卿鎌府に來たりて右府實朝に謁せんと請ふ【東鑑】曰、建保四年六月八日、陳和卿參着、是造東大寺佛宋人也、彼寺供養之日、右大將家結緣給之次、可被遂對面之由、頻以雖被命、和卿曰、貴客者多令斷人命給之間、罪業惟重、奉値遇有其憚云々、仍遂不謁申、而於當將軍家者、爲拜恩顏、企參上之由申之、而即被點筑後左衛門尉朝重之宅、爲和卿旅宿、先令廣元朝臣問子細、かくて營中に召登せて、謁を許されしに和卿禮拜して幕下の前生は育王山の道宣律師たりと云十五日、召和卿於御所有御對面、和卿三反奉拜、頗涕泣、將軍家、憚其禮給之處、和卿申云、貴客者、昔爲宋朝育王山長老、于時吾列門弟云々、當院所藏佛牙舍利記に載する、鎌倉舊記の文に曰、六月十五日、和卿を御所に召し、初て御對面あり、陳和卿、實朝卿を三度禮拜し奉る、將軍恠しく思召、其故をとはせ給へば、幕下の前生は、唐南山の宣律師にておはします、我前生は、其時の門弟にて候しと申せば、實朝卿さもあらんずるぞ思ひ當りし事ありとて、陳和卿を御信仰あり、樣々饗し給ひけり是より先、建曆元年六月實朝奇夢を感ぜし事あり、

擧く今日の話に合す故に深く是を信ず【東鑑】建保四年六月十五日の條曰、此事去建曆元年六月三日丑尅、將軍家御寢之際、高僧一人入御夢中、奉告此趣而御夢想事、敢以不出御詞之處、乃六箇年忽以符合于和卿申狀、仍御信仰之外無他事云々、佛牙舍利記云、于此日本相州鎌倉都督、右府將軍源實朝、夢渡大宋國、到一寺則長老陞座說法、實朝向僧問此寺號、答曰能仁寺又問長老名答曰道宣律師、入滅年久、何得現在、答曰聖者生死無差別、今有律師再誕、汝知之乎、答曰不知、僧曰日本鎌倉實朝將軍也、又問左邊侍者是誰、僧云鎌倉良眞僧都、實朝夢覺成奇異想處、良眞夢此趣、壽福寺開山千光和尙亦夢是、三夢依相同、實朝信之云々、是よりして渡宋の志念を發し、和卿に命じて船を造らしめ、陪從の徒を定む【東鑑】曰、十一月廿四日、將軍家爲拜先生御住所育王山給、可令渡御唐之由、依思食立、可修造唐船之由、仰宋人和卿、又扈從人、被定六十餘輩朝光奉行之、相州、武州類以雖被諫申之、不能御許容、及造船沙汰云々、五年四月造船成により、由比浦に泛て試んとするに動かず、是不祥の兆なりとして渡宋の事止む建保五年四月十七日、宋人和卿、造畢唐船、今日召數百輩匹夫於諸御家人、擬浮彼船於由比浦、卽有御出、右京兆監臨給、信濃守行光、爲今日行事、隨和卿之訓說、諸人盡筋力而曳之、自午尅至申尅、然而此所之爲體、唐船非可出入之海浦之間、不能浮出、仍還御、彼船徒朽損于砂頭云々、當院所藏佛牙舍利記曰、實朝自悟南山之後身、深希拜彼靈跡、仍廢世務、思之在玆、固懷渡宋之志、便命工造船諸官、僚聚謀作船底不動之工、船成卽致秡禊之祭、推欲泛海、船不動以爲不祥而止云々、猶宿志を果んが爲、使節を宋國能仁寺に遣はし佛牙の舍利を請んとす古本佛牙舍利記云、爾來希拜曉璦所獻、道宣律師之牙舍利、乃作大船積美木金銀貨財等、渡十二人於大宋國云々是年五月使价の輩、遠く波濤を越て宋國能仁寺に到り使の旨趣を傳ふ、寺僧再三拒むと云へども遂に許諾して彼佛舍利を授與す曰、到京師能仁寺、則衆皆問曰、因何到此哉、使者竊說夢由、是來獻此美木金銀貨財願一年可借賜佛牙、明年復積美木金銀貨財來獻、應返謝舍利、一衆議而以借與云々、當院所藏佛牙舍利記に載する、鎌倉舊記の文に曰、十二人の使節を、大宋國に遣はされける、其輩には、葛山願成、雪の下の良眞等なり、此者共去る建保五年五月上旬、金銀貨財材木をはじめ、さまざまの器を用意して、鎌倉を打て、萬里の波濤を凌ぎ、大宋國に渡り着、京師能仁寺に詣ひ立、八重の寶朝卿の夢中の事どもを相通じ、寺院修造の爲に、材木を施入し、金銀を寺僧等に多く施しければ、衆僧等大に喜集り、如何なる報告をせんすると、衆議樣々にして極らず、十二人の者共、能仁寺の和尙に告げるは、我日本は繁榮の國にして、貨財乏しからず、況將軍是を欲し給はず、深く願ば、捷疾鬼が奪ひたる、釋尊の牙舍利當寺に坐ます由、僅一年が程、借與へ給へかし、本國日本に歸て、將軍に瞻禮を致さしめ、勝緣を結ばしめば、將軍の歡喜、何事か是に過べきと、樣々詞を盡しけり、和尙聞給ひ、此佛舍利は當寺第一の靈寶にて、帝の勅封有、外國に出さん事、思ひよらずとの給ひしかども、願成良眞、深く是を懇望し、我々に借し與へ給はゞ深く納て曾て人に知す事有べからず、日本の將軍は、仁義を守り、深く三寶に歸し給へば、一禮の後、速に返謝し給はんに何の疑か有べきと、强ちに望申けり、和尙衆僧を集め、種々に相議せられしが、終に止む事を得ずして、佛牙の舍利を使者に授く云々、使者是を持して歸朝す、路次京を過るに當て順德帝叡聞あり、是を鳳闕に召れ遂に留て還し給はず使者力及ばずして鎌倉に報ず、右府聞て安からず思ひ憤激に堪ずして上洛せんと議す、時に安達藤九郎盛長頻に是を諫爭し、請て一人京師に到り、再三右府が愁訴の旨を奏し、遂に請得て歸り參る當院所藏、佛牙舍利記曰、道經京師、皇帝有旨留之、安内道場、保護供養、過半年餘、使者等空歸關東、言上事來由、右府及數度、奉使者終不合叡慮、實朝大怒曰、天氣不憐我渡宋之意、還抑留舍利、遺恨之次第也、外國有其例、起百萬兵、奪一人僧、理猶必然、況是佛身舍利也、豈可比量、不如我只一人上洛遂瞻禮、安達藤九郎盛長、年垂八十、白髮滿頭、已雖老蒙、聞實朝怒、思事可惡、扶杖參謁沈諫實朝止之、眞忠臣之儀也、躬自請使節、實朝許之、不日裝束、已及發行曰、今度逆旅、偏爲老翁浮沈、不思再生還、海道供奉者二千餘騎、遂達京師、不入旅邸、直詣内裡、奏聞實朝之愁訴、皇帝猶不聽、盛長跪庭上大怒、高聲叫曰、走上宸殿必致自害、官僚相喚皆各奏聞、皇帝不悅、作勅封出舍利盛長又奏、老翁於關東、悉聞良眞僧都願成等語、舍利尊容一見卽知舍利尊容而後、面賜勅封爲幸、又有旨曰、然者疑勅封耶又奏云、勅封雖可恐、使節之義尋常如此、不賜一見、敢無奉持、宜議曰其理然也、盛長本無官、賜一官許昇殿、而封舍利授之、盛長歡喜頭繫舍利、速出内裡、不還旅館、卽日直赴關東云々頓て使を立て報じければ、右府歡び躬ら半途に迎へ

持して鎌倉に入、勝長壽院に安じ、後大慈寺に遷して毎歳十月十五日法會を行ふ 古本佛牙舍利記曰、乃立飛脚報實朝、實朝甚歡出館待小田原、奉載舍利於神輿、皈鎌倉、便建寺名大慈、安舍利、毎歳以十月十有五日爲會云々、當院所藏佛牙舍利記曰、先以使者報關東、實朝大喜、豫擇道路、布荒薦、供奉數萬、新飾衣裳、實朝徒步跣足、行待小田原之舘、盛長已到捧舍利献實朝、實朝受之、渤涙悲泣、燒香禮拜、便載小輿、實朝躬身舁肩、遠歸鎌倉、伶人前後奏樂、姣童左右擎旌蓋、萬人奉幣帛雲集、十方献香華雨散、時又有瑞相、紅雲一道出鶴岡廟、擁舍利輿、皆道神靈來迎、南海波上、峨冠者數百連現、合掌良久沒、是龍王出現歟、觀者驚歎、實朝愈流感涙、遂到鎌倉、安勝長壽院、特建大慈寺遷之、毎年十月十五日、有舍利會云々、按ずるに、二書共に、此時大慈寺を剏建すとせしは訛なり、【東鑑】建暦二年四月の條に曰、爲將軍家御願、大倉卿卜一勝地、令經始一寺、今日午尅立柱上棟也、是爲被報君恩父德云々、又建保三年七月の條に曰、今日大藏大慈寺供養也と見ゆ、然る時は建暦二年の創建にして、建保五年に先だつ事六年なり、されど此時大慈寺中、新に舍利殿を造立せしなり、しか訛りしにやあらん、舍利渡來の事迹、詣記に載する處一ならず、或は建永中、用淨・明惠の二僧、入宋して携來たると云ひ、【神明鏡】曰、建永年中、用淨僧正、明惠上人、唐遣使として道宣律師在世の時、感得有し、佛牙の御舍利、所望の爲に渡しけり、唐帝より申給て皈朝あり、實朝大臣は道宣の再誕也、さて鎌倉の乾、正續院被置云々、或は開山佛光持して來朝せしとも云ひ 【鎌倉九代記】曰、祖元本朝に來り給ふ時、此佛牙御舍利を袈裟に包て渡され、圓覺寺の寶物たり云々、或は僧千光、實朝の命を承、渡宋して取來たるとも云へり 【日工集】曰、應安三年庚戌二月二十六日、過于芳庭、庭出示萬年正續化疏、因說舍利緣記、建仁開山千光、與實朝大臣殿、世々互爲師檀香火緣、千光受大臣殿命、渡來取佛牙舍利而來、建仁開山塔有記、今皆據所詳ならざれば信用し難し、後正續院佛牙卽是也、北條貞時、特に寶殿を營み大慈寺より此に遷す 佛牙舍利記曰 圓覺寺建舍利殿、遷大慈寺舍利、以壽國家安寧云々、當院所藏佛牙舍利記に曰、圓覺寺妙場、鎌倉戊亥方也、鎮此舍利、永代爲鎌倉守護之靈祠也、便於圓覺寺、特剏舍利殿、以遷大慈寺佛牙此也云々、 其後花園後醍醐の兩皇是を進獻すべしと勅命ありしが、鎌府の鎭護たる由を以て勅に應ぜず、却て叡感ありて其事止む 當院所藏佛牙舍利記曰、萩原天皇、後醍醐天皇兩度有勅命雖被召、爲鎌倉鎭守之靈物故、終無進献、勅命兩有度叡感止文和元年尊氏こゝに詣して瞻禮す 曰、觀應三年壬辰四月十八日、征夷將軍入山瞻禮佛牙舍利也、按ずるに、是年九月文和と改元あり、貞治元年十一月基氏來たりて禮拜し、十二月上總國二宮莊の內莊吉郷の地を寄附し法燈の料に充る 【空華集】曰、壬寅冬至、源府君入、正續院、禮佛牙舍利、仍捨田无燈云々、本寺所藏文書云、寄進圓覺牙舍利殿、上總國二宮左內庄吉郷、御愛局跡事、右爲彼局追善所寄附也、者守先例可致沙汰之狀如件、貞治元年十二月廿二日、左兵衛督源朝臣華押、三年正月上杉憲顯入道道昌上州八幡庄の內にして、舍利殿長燈料のため寄附の地あり

曰、奉寄圓覺寺正續院、上野國八幡庄鼓岡村內、池鯰禪尼給分內半分事、右爲舍利殿長燈料武州小泉郷內田畠之替奉寄之狀如件、貞治三年正月廿三日、沙彌道昌、華押、 六年四月氏滿寶殿に詣ず、時に寶塔を開き机上に安じて諸人に拜せしむ 【日工集】曰、四月十五日、府君忍恙入圓覺、余亦句餘患咳、然應君僉隨赴、祀聖轉藏、就于正續院、而點心、點心龍開寶塔、出佛牙舍利、置寶机上、炷香道俗頂禮畢、封卽如元、時正續院主、天澤和尙、蓋府君一代一度開封、頂戴畢如前鎖封、而卽之大宋國京師能仁寺舍利也、 永和五年正月僧義堂來たりて舍利を禮拜す 五年巳未、餘年五十五、時在報息云々、十八日、赴正續院、燒香禮佛牙舍利、與院主相見賀歳云々、 應永三年四月義持請て舍利を迎へんとす、氏滿是を惜めども力及ず、遂に京師に送る 【鎌倉九代記】云、四月に京都の將軍家、御吏を鎌倉に下され、圓覺寺佛牙の御舍利を都に上せ奉るべき由仰せ遣されたり云々、氏滿深く惜み給ひて、仰に委ぬまじき由返答あるべきに議定せしかども、此一箇の佛舍利に依て、京鎌倉不和に成なば、天下亂逆の根となり、人民の惱たるべき旨諫申されしによりて、左兵衛督殿は力及ばず京都に送り上せらる、應仁擾亂の際賊手に隨て所在を失す、後年不慮の靈驗ありて當所に復す 【葫蘆文集】曰、應仁之亂、佛牙入賊手不知所在、傳聞前年圓覺寺有靈異事、一日有物降自天、視之則舍利也、東人至此者言之、將信然乎、不信然乎、京師鎌倉兄弟之國也、得之、失之、楚人弓耳、況復舍利云々、

△祖師堂　舍利殿內左方にあり 【鹿山略記】曰、安瑞濟禪師像、舊は桂昌の額を揭ぐ 義滿筆、今は失す、

△土地堂　舍利殿內右方にあり 【鹿山略記】曰、安伽藍神、及十六善神之牌秋葉像、土地堂、蓋謂安伽藍神之所云々、舊は普現の額を揭ぐ 義滿筆、今は失せり堂の右邊辨財天の石像を安ず 瑪瑙石にて弘法の刻する所、長一尺三寸許にして蛇形なり往古北條貞時洪鐘の眞體として、 江島より移し來なりて本寺鐘樓の傍に安ぜし靈佛たり 【鹿山略記】曰、鐘樓在佛殿左之山上、傍有辨天堂、古記云、洪鐘之本尊、蛇形辨財天石像、長一尺三寸、弘法大師彫刻也、貞時自江島移來秘在尙越文明十二年、距今歳、毎歷六十一年之星數、三年之間開帳辨天像云々、猶委しくは前に注記せり、 後年當院舍利殿內に移す、今は猥に拜瞻する事を許さず、

△開山塔　舍利殿の後に在額を揭ぐ、常照と記す 持氏筆、又伏見上皇宸筆の額あり、勅諡佛光禪師と書し給ふ、開山佛光の木像椅子上に安ず、左右膝邊に鳩と龍とを置く、曩時佛光宋國に在て禪定の際感得せし事あるに因れり 【元亨釋書】元謂徒曰、我初不欲來此土、而有些子因緣故至焉、我在宋禪定中、嘗見神人、峨冠偉服手執圭、貌挺特告曰願和尙降我國如是者數矣、我不省何事、然毎神人至先一金龍來入袖中、亦有群鴿子、或青白之者、或飛喙之態、或上予膝上、亦不測由及入此國、一時有人語曰、當境有明神曰八幡大菩薩威靈甚新、師已棲斯界、盍詣祠燒香一遭、予因此至八幡宮、視殿梁上、有數箇木鴿子、問之對者曰、此神之使鳥耳、故偶屬、予卽知定中之峨冠此神也、老僧到此不偶然耳、汝等造老僧陋質、膝上安鴿子及金龍、以應往年之識、又夢吾又夢先師證法徑山法堂上我俱衆預聽、忽座前西北隅、蠟燭爆火落拜席

東南角、共光甚熾、照耀四方老僧夢中、成一頌曰、百丈當年捲起時、今朝歎地自騰輝火星迸出新羅外、不在東風著意吹、覺後無所測、及來此國太守一日、寄與達磨像、老僧讀其賛、先師手澤也、末句曰　不在東風著意吹、初省先夢耳云々、

後背の山上に墓あり、墳上一箇石を置のみ　佛光建長寺に在て寂し後丘に埋葬せしを、建武二年、此に遷せし事は、前に注記せし、塔銘追補の文に詳なり、　△客殿　右宿龍の額を掲ぐ、今は亡ず　鹿苑院義滿筆本紙今庫中に藏す　殿内祠堂を合す　元は舍利殿の傍に在しと云　△禪堂　正法眼堂と號す、額を掲ぐ　天龍の僧桂洲筆、　△學寮　一擊齋と號す、　△鐘樓　門内左傍にあり、鐘は長壽寺の物にて應永四年の銘あり　曰、相州路寶龜山長壽禪寺鐘銘康應元年、僧堂既成、尙闕鐘魚、爰有寶銅鐘者其直三萬錢、而今募緣市之懸於堂前、以爲永遠法器、應永丁丑仲春日幹緣比丘等、禪住持比丘等、海知事比丘心乘、　何れの頃何の故ありて當山に移せしにや【鎌倉志】に據れば貞享の頃は本寺山門跡にありしなり、彼山門再興の後又こゝに移せしなるべし、△山門　今は荒廢して平門を建、萬年山の額を掲ぐ　尊氏筆と云傳ふ、舊は萬年山正續院大覺寺殿の筆と云傳ふの六大字を扁せしが山門廢して額を失すと云、又閣上に吉祥閣持氏筆、の額を掲げしが今失へり、△三級峯　開山塔の後山を云ふ、△坐禪窟　前所山上にあり、開祖座禪せし所と云、天文廿二年閏正月此窟を當院に附せらるゝ旨大道寺源六奉書を傳ふ　佛日庵所藏文書曰、正續院續燈菴之境に候、開山坐禪岩藏之事、附正續院畢、後日不可有違亂狀如件、天文廿二年癸丑閏正月十九日　△宿龍池　三級峯の下に在、開祖來朝の時龍現して船を守護し來りて此に止る、故に此稱ありと云ふ、△大權水　舍利殿の傍にあり供水の料とす【塔頭】○黃梅院　傳衣山と號す、徑山傳來の法衣當院の什寶にあり、傳衣と號す事は什寶の條に詳に載す、　故に山號とすと云、夢窓疎石、元德中本坊住職の際當所侍眞寮たり　今の客殿是なりと云ふ後石の塔所とす、故に石を以て開祖と稱せり　夢窓は觀應二年九月晦日寂す、　開基は尊氏の近臣饗庭命鶴丸なり、尊氏の命を持して剏し【鹿山略記】曰、開基檀那、饗庭命鶴丸、法號霜基昌皈禪定門、等持源君之近臣也、相傳早世、按ずるに、剏建の年代を傳へざれど所藏文和三年の文書に據れば、僧宏遠塔主として修造す　所藏文和三年の文書に據れば是年の事ならんか、　年の文書に據る文和三年三月饗庭命鶴丸、常州の内にて院領を寄附す　所藏文書曰、夢窓正覺國師塔頭、圓覺寺黃梅院事、將軍家御在鎌倉之時、可令興行之由、檀那命鶴殿、被申成御教書之間、宏遠首座、爲塔主所修造也、隨而命鶴殿、被申寄常陸國結城村・色好村・椿村三箇所、丁、彼三箇村土貢内半分者、充當院支緣、半分者爲檀那受用分、永代塔主無怠慢、可被沙汰遣之、凡當院興行、依彼願力、令成就之間、爭無報謝之儀乎、

若背此旨者、爲門徒計、可改易塔主者也、爲後證、門徒之議如斯、文和三年甲午三月日、妙葩華押、宏遠華押、志玄華押、是年十月基氏當院修造のため、常州にて棟別錢を沙汰す　曰、圓覺寺黃梅庵修造事、宛取常陸國棟別拾文錢貨可被修營作功之狀如件、文和三年十月廿六日、庵主、左馬頭華押、十一月尊氏の下文あり　曰、圓覺寺黃梅庵修造事、宛取常陸國棟別拾文錢貨、可被修營作功之由關東御教書一見訖、可存其旨之狀如件、文和三年十一月十二日、菴主、尊氏華押あり、貞治元年春義詮本州北深澤庄の地を寄附す　【日工集】曰、貞治元年壬寅春遷主于下總安國寺、幕府捨田歸黃梅、且召余遷歸相州謝田三月爲黃梅田地代方外、謁武州行幕府取公文、卽相州北深澤庄、令復歸於本院也、黃梅捨田卽余所勸也、七年二月義詮の遺骨を當院に收らる　所藏文書曰、寶篋院殿御遺骨一分事、就往年之由緒、所被奉納當寺也、宣被致不朽之勤行之狀、依仰執達如件、貞治七年二月廿九日、黃梅院長老、右馬頭華押、　應安五年九月武州黑河鄕の地、仁仁局が申請に任せ寄附せらるゝ旨奉書あり　曰、奉寄圓覺寺黃梅院・武藏國小山田庄黑河鄕半分事右任御仁仁局申請、寄附之狀、依仰執達如件、應安五年九月十一日、沙彌華押、又曰、武藏國小山田庄黑河、鄕半分事、任寄進狀、可被沙汰付下地、於圓覺寺黃梅院雜掌之狀、依仰執達如件、應安五年九月十一日、安房入道殿、沙彌華押、七年十一月火災に罹り【空華集】曰、應安七年歲次甲寅、冬十一月二十三日、寺羅欝攸之厄、則堙亦燼矣、永和四年新に卵塔亭を建て【日工集】曰、四年戊午五月十八日、黃梅院建卵塔亭、某年五月尊氏追福の爲、本州小坪鄕の地を僧双普請、所藏文書曰、黃梅院領、相模國小坪鄕事、爲等持院殿御追善寄進昌皎地上者、一同被渡付義滿寄附あり　所藏文書曰、黃梅院領、相模國小坪鄕事、爲等持院殿御追善寄進昌皎地上者、一同被渡付寺家之樣、可有御沙汰候也、謹言　五月三日、左馬頭殿、義滿華押、　康曆元年新に寢室を設く【日工集】曰、五年巳未六月一日、黃梅新二年堂宇再造成建正寢、按ずるに、是年康曆と改元あり、二年堂宇再造成る【空華集】曰、永和初元、余承官差任、起廢事勞土木者五歲、康曆庚申春大殿既成、　嘉慶元年三月當院領、武州黑河鄕の地かねて高倉中務大輔、所務たる旨訴訟に及びし時猶當院領たる旨氏滿證狀を授與あり　所藏文書曰、高倉中務大輔申、武藏國小山田保内黑河鄕半分事、任仁々局書狀之旨、可預御裁許之由申之處、圓覺寺黃梅院雜掌等、帶同局寄進狀、并去應安五年九月十一日安堵狀、當知行無相違之由、就支申沙汰訖、者於高倉訴訟者、所被弁置也、可被存知其旨之狀如件、至德四年三月十五日、黃梅院、氏滿華押あり、按ずるに、是年嘉慶と改元あり、　應永四年七月氏滿武州埼西及び足立郡の内にして又寄附の地あり　曰、寄進黃梅院、武藏國埼西郡、葛濱鄕内、久下五郎左衛門尉、并同國足立郡殖竹鄕地頭職内、同郡河田鄕領家職内、同郡淵江鄕石塚村等、同足立大炊助跡事、右爲相模國鎌倉郡小坪殘半分替、所令寄附也者早守先例可致沙汰之狀如件、應永四年七月廿日、左兵衛督源朝臣華押、十一月又武州賀美、兒玉二部の内にて寄附の地あり　曰、寄進圓覺寺黃梅院、武藏國賀美郡、兒玉郡内、荒蒔豊後入道跡事、右爲相模國小坪鄕之替不足分、所寄附之狀如件、應永四年十一月廿日、左兵衛督源朝臣華押、　寶德二年四月開山夢窓百年忌の法會を行ふ、是年秋改て佛統國

師の號を贈り賜ふ旨後花園帝宸翰を下し給ふ【鎌倉大草紙】曰、寶德二年卯月晦日、夢窓國師百年忌に當り、圓覺寺黃梅院にて大法事あり、京都・甲州・武州・信州の國師開基の寺より、禪僧鎌倉に集り、又京都より、勅使有て佛統國師と改、贈號あり、所藏宸翰曰、勅嬾桂高風傳餘芳於日域、曹溪衆派湛勝流於龍門、實非絕倫之俊英、爭擧列祖之綱記、夢窓正覺心宗普濟玄、猷國師無準之嫡孫、佛國之眞子、奉叡旨於三代、馳徽號於五朝此土釋迦濁世、彌勒朕受法衣而慕道化、染宸翰而加褒章、特諡曰佛統國師、寶德二年八月廿七日、時に雲居庵の現住添狀あり所藏文書曰、開山國師一百年忌、贈號勅文同本二紙、今上皇帝宸翰、親書一本、三會塔前揭之、一本頒降貴院、能可秘重者也、八月廿又二日早晨有勅命、召三會守塔、前南禪笠雲諱等連、捧法衣并法鉢、入相府授之、同午刻參內、侍便殿奉授衣盂大法號、稱曰圓智大相國、法名道禎、同二十有七日、勅使捧國師號勅文、詣三會院、大衆就列、伶人奏樂、唱藥師如來寶號、祝延聖壽九月三十日、先就于雲居庵、諷經拈香、前南禪藍田和尙、大覺之五世後就于三會院諷經陞座、前南禪景南和尙、聖一之四世、種々法事、不及枚擧、寶德二年庚午九月晦日、黃梅堂上古敎大和尙、侍九雲居守塔比丘、前天龍東洋允澎謹書、舊は別院の如くにて輪番たり後年塔頭に屬すと云、△客殿　黃梅院の額を掛く後光嚴帝宸筆往古は開山の侍眞寮たりしと云ふ、【寺寶】△傳衣一領西土經山寺傳來の物にて、僧無準より佛光に傳ふ、夫より建長寺正統庵の開祖佛國に傳へ、後當院開祖夢窓傳讓すと云△後花園帝宸翰一通寶德二年の物なり、前に注記す、△僧允澎添狀一通同時の物なり前に注記す、△夢窓國師勅牌一枚後花園帝宸筆△夢窓國師眞筆一幅△同眞蹟四幅一は法無定相と書し、一は逢緣卽宗夢窓書とあり二幅對なり、又一は萬般存此道と書し、一は一味△同肖信前緣と書し、朱印を壓す、是も二幅對なり、像一幅畫人傳はらず自讚の語あり△同三十三年、佛事註文一軸永德三年九月晦日、佛事の次第及び引出物、施物等の員數を詳記す、卷尾曰、右佛事方註文所記如件、永德三年十月一日、納所昌久華押、△華嚴塔勸進錢納下帳一本末に明德元年庚午十月納所中了華押とあり、△黃梅院造營書付一通末に應永三十年癸卯二月十五日修造納所昌猷、奉行乾春とあり、△文書目錄二卷一は末に、右舊目錄者、應安元年九月廿九日、院主周信所集也、而今以文書有增減、重所改書也、永和四年戊午八月初吉、再住院主周信華押、又此間文書の目を載せ、末に康曆元年己未十一月九日、周信新添、永德三年癸亥十月九日誌之、黃梅守塔比丘周己華押とあり、一は末に應永三十二年六月晦日、侍眞中趣華押とあり、△年中下行書一通末に永享七年五月廿八日と書し、請僧の交名あり、△三會院遺誡一軸開祖夢窓の遺誡にして、三會院は卽天龍寺開山塔の稱なり、卷尾に右此十數段、三會院遺誡也、心岩西堂自寫之、將欲鎭于黃梅院、故爲證云、永德癸亥仲冬十二日、雲居妙葩と書し、華押印章を壓す、又數條を擧げ末に右此遺訓先師入滅之先四日、自書之以收三會院、心岩同寫、欲鎭于黃梅院、故加證判者也、永德癸亥十一月十二日、雲居比丘妙葩と書し、華押印章を壓す、△黃梅院應永古圖一枚圖畫の躰、最古色の物なり、圖下に僧妙薫が一見の證書あり、曰此黃梅院圖、京師御前、及諸尊門下宿一見了、應永三十年三月八日、妙薫華押、△華嚴塔古圖一枚寺傳に曰當院所藏に、塔修造の事により、義詮が下文、及び執事義持が、添狀あるを以て、考ふれば、其比の物にして、圖の中央、御判とあるは、義詮の華押、圖下在判と書せしは、必義持の華押なるべしと云ふ、さも有べし、△同勸緣小偈二通一は至德四年、僧義堂が述作せが識す所、共に前に注記せり、△古文書六十六通內十五通は、本一は文に注記せり、一は建武四年建長寺門前屋地を正續院承仕、小番に宛行ふ證狀、一は文和二年小野助俊が出せる、御方の局が領所の渡狀、一は康安二年當院預り小坪鄕の田畑割付書、一は貞治二年斯波義將の書翰、一は同三年武州黑河鄕の地、仁々局に與ふる左近將監某が奉書、二は同時の渡狀、一は應安五年淨妙寺に下す敷地の御敎書、一は永德二年永和二年依田左近大夫入道元信が書翰、一は永德二年總州の內預地の御敎書、一は同年天龍寺妙葩等持寺周信等連署の條目、一は同三年雲居庵領を當院にきする妙葩が連署狀、二は應永四年院領の御敎書、一は同時千坂越前守某が院領の渡狀、一は同九年衆僧連署の條目、一は同年定る所勸進、評定衆の交名、一は同十年僧徒連署、塔婆奉加錢の議定書、△一は十一年院領の事に因り奉行人連名の奉書、一は同廿九年奉加錢替錢の員數書、二は同三十年奉加錢の納狀、一は同三十五年上杉憲實が武州勝福寺門前諸公事の免許狀、二は正長元年院領の事に因り奉行人連署の沙汰文、一は永享十一年開祖百年忌、奉加錢の納狀、一は同時僧周操が添狀、一は同十二年院領の事に因り奉行人連名の沙汰文、一は同時長尾左衞門景仲が渡狀の添簡、一は同時長尾景仲が波志江掃部助、田中島修理亮に授ずる狀、一は景仲が院領の渡狀、一は文安三年正續院に送る、當院主少訓が狀、二は享德四年の制札、一は同六年管領成氏の出せる、所々院領鄕村の目、一は同時成氏が院領安堵の證書、一は康正三年の制札、三は長祿二年の制札、一は管領義氏が書翰年代詳ならず、下同じ、一は山崎寶積寺の事に因り長尾但馬守に送る、僧某が書翰、一は長尾修理亮忠景が書翰、一は雲居庵主の書簡、一は同時僧某が添簡、一は僧梵相が書簡、一は僧周操が書簡、一は祈禱の事を示す某が書簡、三は僧等連が書簡、△開山塔　最勝輪の額を扁す後小松帝宸筆開山の木像を安ず傍に舍利殿あり、昔華嚴塔に收し所の舍利なりと云ふ△僧堂　常圓と號す、今は廢せり下同じ、△浮香閣二階の號なり、△書院　一枝と號す、△齋堂　淡味と稱す、△華陽軒　寮舍の號なり、△惣門　傳衣山の額